

公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（19）

東九州自動車道建設（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間）に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

てん じん だん い せき  
**天 神 段 遺 跡 4**

（曾於郡大崎町）

旧石器時代～縄文時代草創期編

第1分冊

2018年3月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（平成 23 年撮影）





第2文化層 接合資料





第3文化層 接合資料



## 序 文

この報告書は、東九州自動車道（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間）の建設に伴って、平成19年度から平成25年度にかけて実施した大崎町に所在する天神段遺跡の発掘調査の記録です。

天神段遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期・前期・晚期、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が大量に発見され、縄文時代前期以降についてはすでに報告書として刊行したところです。中でも、中世の土坑墓から出土した陶磁器や滑石製石鍋などの資料は、平成28年に県の有形文化財＜考古資料＞に指定されるなど、その成果が注目されています。

本報告書では、旧石器時代の調査成果を報告しています。中でも、特筆すべきは、細石刃の製作過程や製作技法等が分かる接合資料が、数多く確認されたことです。これらの細石刃文化期の接合資料をはじめとする調査成果は、当時の生活がうかがえる貴重な資料であり、今後の調査・研究に大きな役割を果たすものと思われます。

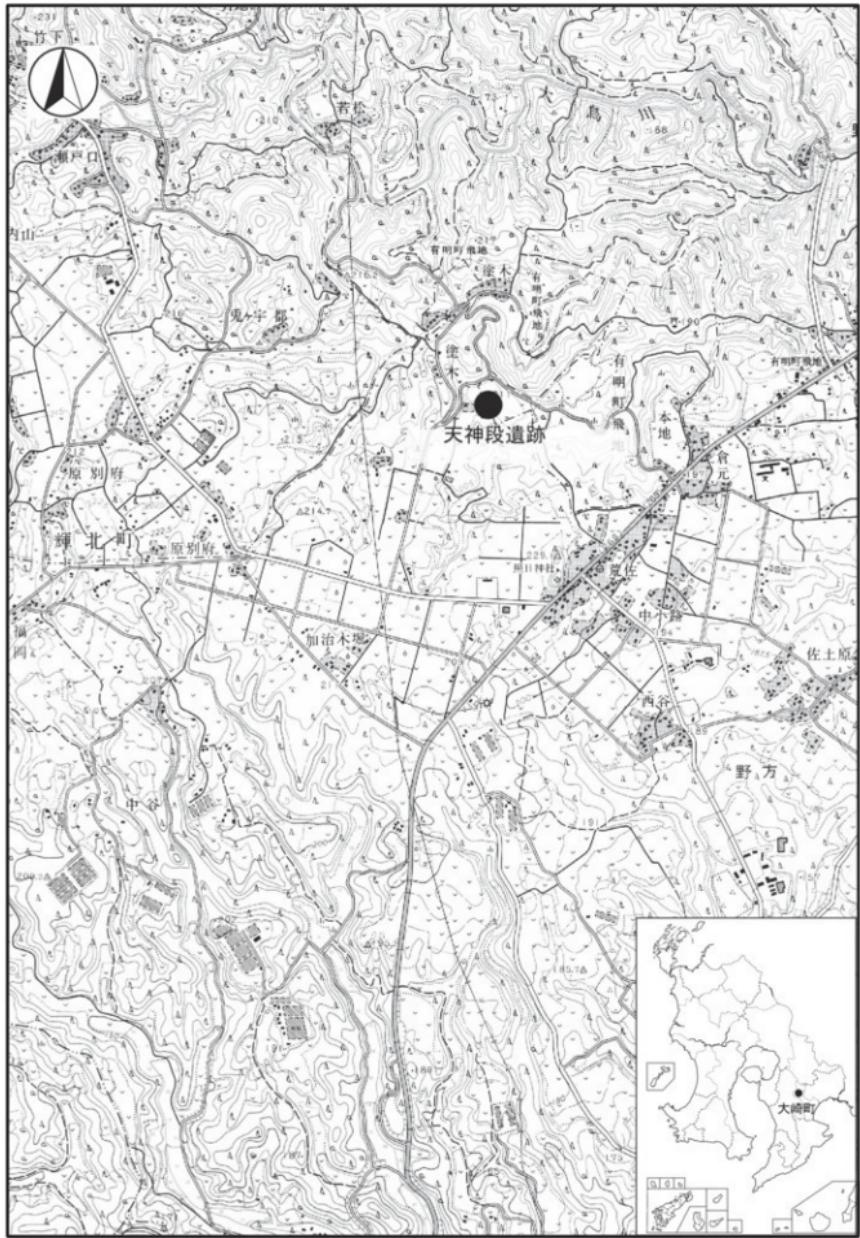
本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただき、文化財保護の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の作業にあたり、御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、大崎町教育委員会及び志布志市教育委員会等の各関係機関、並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業、整理作業に従事された方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター  
センター長 前迫亮一

## 報 告 書 抄 錄



天神段遺跡位置図 ( $S = 1/25,000$ )

## 例 言

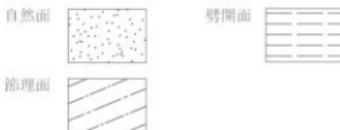
- 1 本編は、東九州自動車道建設（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間）に伴う天神段遺跡発掘調査報告書「天神段遺跡4」旧石器時代～縄文時代草創期編である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町野方と及び志布志市有明町に所在する。
- 3 発掘調査事業は、平成19年度から平成24年度までは、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）が実施した。平成25年度からは、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し、県教委の監理のもと公益財團法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が実施している。
- (1) 発掘調査事業のうち本調査は、平成24年度までは県埋文センターが、平成25年度は埋文調査センターが実施し、すべての本調査を終了した。
- (2) 発掘調査事業のうち整理・報告書作成業は平成22年度から平成24年度までは県埋文センターが、平成25年度からは、埋文調査センターが県教委の監理のもとに実施し、平成26年度に「天神段遺跡1」弥生時代～近世編を、平成27年度に「天神段遺跡2」縄文時代前期～晩期編を刊行した。
- 平成28年度の本報告書に係る整理・報告書作成業は、株式会社九州文化財研究所に業務を委託し、松下建生の管理・監督のもと実施した。
- (3) 平成29年度には本編とともに「天神段遺跡3 縄文時代早期編」が刊行される計画である。
- 4 掲載遺構及び遺物には通し番号を付し、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 5 遺物注記等で用いた遺跡記号は、「T J」である。
- 6 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 7 本編で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 本編で使用した方位は、すべて磁北である。
- 9 本調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真的撮影は、ふじた航空写真。（有）スカイサークル九州、九州航空株式会社に委託した。
- 10 遺構配図図・遺物出土状況図等の作成は、眞造が整理作業員の協力を得て行った。
- 11 本編に係る出土石器の実測・トレースは、株式会社バスク及び株式会社九州文化財研究所に委託した。  
また、接合資料の実測・トレースは、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、県埋文センターの吉岡康弘が行った。
- 13 本編に係る自然科学分析の黒曜石产地推定は有限会社遺物材料研究所に、年代測定は株式会社 パレオ・ラボに委託した。
- 14 本編の執筆は次のように分担した。

第I～III章	松下、倉元
第IV章	
第1節	眞造
第2節	眞造
第3節	眞造
第4節	眞造
第V章	倉元
第VI章	眞造

- 15 本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県埋文センターで保管し、展示・活用を図ることにしている。

## 凡 例

- 1 本編に掲載してある遺構位置図・遺物出土状況図等の1グリッド(1マス)は10 m四方であり、各図には縮尺を示した。
- 2 本編掲載の遺構・遺物の縮尺は、以下のとおりである。ただし、遺物の大きさによってはこの限りではない。挿図中に示した縮尺を参考とされたい。
- 3 遺物実測図中には集中部等の区分としてラインを記した。スケールは各図の末尾あるいは実測横に示した。
- 4 遺物観察表中の括弧書きのものは残長である。
- 5 本遺跡中の石材分類は、次頁のとおりである。  
なお、各分類の写真を図版1に示したので、参考にされたい。
- 6 石器実測図の自然面等の表記は、下記の通りである。



## 石材分類表

石材分類	特徴		ドット色
真岩 A	黒～赤黒色。硬質で緻密。わずかに筋理面が残るものがあるが、不純物をほとんど含まない。母岩は拳大の円錐と想定される。やや珪質分が強いものや、泥質なものもある。		
真岩 B	灰青～灰緑色。硬質で緻密。不純物をほとんど含まない。母岩は拳大程の円錐と想定される。珪質分が強いものや、泥質なものもある。石質は真岩 A と類似している。		
真岩 C	赤茶～褐色。石材の中央部に向けるグラデーション状の色調を呈するものもある。硬質で緻密。やや泥質のものや、中央部ほど石質が強いものが散見される。硬質なものは、真岩 A・B と質は類似する。また、外表皮がやや黒色を帯びるものもある。		
真岩 D	ア 白色～灰白色。珪質分が多い点は真岩 D アと類似するが、軟質で比重が軽い。泥質のものを含む。 イ 白～灰白色。珪質分が多く硬質で、穂状の筋理構造が明瞭なもの。 ウ 白～灰白色。珪質分が多く硬質で、穂状の筋理構造が入るものもある。母岩はやや大ぶりの亜角錐と想定される。		水色
真岩 E	径3mmほどの白色の斑紋がみられるもの。色調は真岩 A と真岩 C にみられる。		
真岩 F	外表皮は乳白色で、内部は暗灰～灰青色。白色の筋理が斑状に多くみられる。母岩は角錐状と推定される。宮ノ上遺跡や鞍曲遺跡で多用されている石材。		
真岩 G	穂状の流理構造がみられるもの。色調は真岩 A・B・C のいずれの種類もみられる。流紋岩と呼称されることの多い石材である。		
真岩 H	灰白～黃白色。凝灰質真岩と称されるもの。石質が粗く、粒子がやや目立つものや、比較的硬質なものがある。		
真岩 I	明黄褐色。石質は粗く、密度も低く軽い。風化面は光沢があるが、気泡状の空隙が目立つ。		
玉髓 A	赤褐色あるいは明黄褐色で硬質。筋理面に結晶構造が残存するものは含まない。ほとんどの不純物を含まず。硬質かつ良質で光沢をもつ。メノワ、鉄石英を含む。		橙
玉髓 B	灰白・乳白色。不純物をほとんど含まず、硬質。筋状あるいは斑状に黒～灰色の色調を含むものもある。		
玉髓 C	灰白・乳白・赤白色。結晶構造が明瞭で、不均質。筋理面には石英が発達する。		
水晶 A	劈開構造が明瞭であり、透明あるいは半透明で良質。ガラス状である。		緑
水晶 B	半透明あるいは白色。結晶構造や劈開面が明瞭であり、粗い。		
砂岩 A	細粒砂岩。硬質。小型の扁平な円錐素材のものも含まれる。		
砂岩 B	石英質の構造がみられる。		赤
砂岩 C	弱い熱変成により、筋状の貫入構造がみられるもの。		
砂岩 D	粒子が明瞭で、粗いもの。		
黒曜石 A	黒色でほとんど光を透過せず、透明感がないもの。わずかに不純物を含む。		
黒曜石 B	粒径の小さい不純物が均一に入る。黒色～灰色で穂状の構造を有するものもある。		
黒曜石 C	粒径のやや大きい不純物がまばらに入る。黒色～灰色を基本とし、わずかにアメ色を帯びるものもある。		
黒曜石 D	不純物を少量あるいはほとんど含まず、透明度が高い。アメ色～黒色を呈する。		
黒曜石 E	不純物をほとんど含まず、良質。黒色でガラス質の光沢を有する。		
黒曜石 F	ア 不純物をほとんど含まず、良質。青灰色を呈し、透明度は低い。 イ 不純物をほとんど含まず、良質。青灰色を呈し、黒曜石 F A よりやや黒みが強い。		灰
黒曜石 G	不純物をほとんど含まず、良質。乳白～灰色を呈し、やや透明感がある。		
黒曜石 H	白色の不純物を含むが、良質なガラス質。やや青緑がかかった発色を呈するものもある。内層敷 UT を含む。		
黒曜石 I	上記の分類に当てはまらず、判別が困難なもの。		
凝灰岩	気泡を多く含み、密度が低く軽い。軟質。		
チャート	黒灰・灰・青灰色。油脂光沢があり、黒色・灰色・白色の筋が入る。		
安山岩	明褐色を主体に色調は様々である。緻密なものや多孔質のものがあり、共通して斑晶が目立つ。		白抜き
ホルンフェルス	黒灰～青灰色。やや粒子の粗く、筋理が発達し層状に剥落するもの。		
粘板岩	灰～青灰色。層状構造をなし、薄く剥落する。		

# 総目次

## 【第1分冊】

巻頭図版  
序文  
報告書抄録  
遺跡位置図  
例言・凡例  
目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過  
第1節 調査に至るまでの経緯  
第2節 発掘調査の経過  
第3節 整理・報告書作成作業  
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境  
第1節 地理的環境  
第2節 歴史的環境  
第Ⅲ章 調査の方法と層序  
第1節 発掘調査の方法  
第2節 層序

## 第IV章 発掘調査の成果

第1節 調査成果の概要  
第2節 第1文化層（ナイフ形石器文化期1）  
第3節 第2文化層（ナイフ形石器文化期2）  
第4節 第3文化層（エリア1～7）

## 【第2分冊】

第4節 第3文化層（エリア8～26・その他）  
第V章 自然科学分析  
第1節 概要  
第2節 放射性炭素年代測定  
第3節 黒曜石の石材産地同定  
第VI章 総括  
第1節 遺構  
第2節 遺物  
写真図版

# 第1分冊目次

巻頭図版1  
巻頭図版2  
巻頭図版3  
序文  
報告書抄録  
遺跡位置図  
例言・凡例  
石材分類表  
目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過..... 1  
第1節 調査に至るまでの経緯..... 1  
第2節 発掘調査の経過..... 1  
第3節 整理・報告書作成作業..... 1  
  1 作業内容..... 1  
  2 作業体制..... 1  
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境..... 4  
  1 地理的環境..... 4  
  2 歴史的環境..... 4  
第Ⅲ章 調査の方法と層序..... 10  
  1 発掘調査の方法..... 10

1 発掘現場での調査方法.....	10
2 整理作業の方法.....	10
第2節 層序.....	10
第IV章 発掘調査の成果.....	23
第1節 調査成果の概要.....	23
1 文化層の概要.....	23
2 遺構の概要.....	23
3 遺物の概要.....	23
4 接合資料の表記.....	23
第2節 第1文化層（ナイフ形石器文化期1）	24
1 概要.....	24
2 遺構.....	24
3 遺物.....	24
第3節 第2文化層（ナイフ形石器文化期2）	24
1 概要.....	24
2 遺構.....	24
3 遺物.....	31
第4節 第3文化層（エリア1～7）	129
1 概要.....	129
2 遺構.....	129
3 遺物.....	132

# 挿図目次

第1図 年度別調査範囲図.....	3	第4図 グリッド配置図及びM層上面地形図.....	9
第2図 周辺遺跡位置図.....	7	第5図 土壘断面図1.....	12
第3図 天神段遺跡周辺の地質.....	8	第6図 土壘断面図2.....	13

第7図	土層断面図3	14
第8図	土層断面図4	15
第9図	土層断面図5	16
第10図	土層断面図6	17
第11図	土層断面図7	18
第12図	土層断面図8	19
第13図	土層断面図9	20
第14図	土層断面図10	21
第15図	土層断面図11	22
第16図	第1文化層構造配置図	25
第17図	1号縦群及び焼化物集中域(第1文化層)	26
第18図	第1文化層遺物出土状況	27
第19図	第1文化層出土石器	28
第20図	第2文化層縦群配置図	29
第21図	第2文化層エリア位置図	30
第22図	2号～7号縦群	32
第23図	8号縦群・出土石器	33
第24図	9号～11号縦群	34
第25図	エリア1遺物・接合資料出土状況・接合資料	35
第26図	エリア1関連出土遺物	36
第27図	エリア2遺物出土状況	37
第28図	エリア2接合資料出土状況1・接合資料1	38
第29図	エリア2接合資料出土状況2・接合資料2	39
第30図	エリア2関連出土遺物	40
第31図	エリア3遺物出土状況	41
第32図	エリア3接合資料出土状況・接合資料・関連出土遺物1	42
第33図	エリア3関連出土遺物2	43
第34図	エリア3関連出土遺物3	44
第35図	エリア4接合資料出土状況・接合資料1・関連出土遺物	45
第36図	エリア4接合資料2	46
第37図	エリア5遺物出土状況	47
第38図	エリア5接合資料出土状況1・接合資料1	48
第39図	エリア5接合資料出土状況2・接合資料2	49
第40図	エリア5接合資料出土状況3・接合資料3	50
第41図	エリア5接合資料4	51
第42図	エリア5接合資料出土状況4・接合資料5	52
第43図	エリア5関連出土遺物	53
第44図	エリア6遺物出土状況	54
第45図	エリア6接合資料1	55
第46図	エリア6接合資料出土状況1・接合資料2	56
第47図	エリア6接合資料出土状況2・接合資料3	57
第48図	エリア6接合資料4	58
第49図	エリア6接合資料出土状況3・接合資料5	59
第50図	エリア6接合資料出土状況4・接合資料6・関連出土遺物	60
第51図	エリア7遺物出土状況・関連出土遺物	61
第52図	エリア8遺物・接合資料出土状況・接合資料	62
第53図	エリア8関連出土遺物1	63
第54図	エリア8関連出土遺物2	64
第55図	エリア9遺物出土状況・関連出土遺物	65
第56図	エリア10遺物出土状況1・接合資料出土状況1・接合資料1	66
第57図	エリア10接合資料出土状況2・接合資料2	67
第58図	エリア10接合資料出土状況3・接合資料3	68
第59図	エリア10遺物出土状況2・関連出土遺物1	69
第60図	エリア10関連出土遺物2	70
第61図	エリア10遺物出土状況3・関連出土遺物3	71
第62図	エリア10関連出土遺物4	72
第63図	エリア10遺物出土状況4	73
第64図	エリア10関連出土遺物5	74
第65図	エリア10関連出土遺物6	75
第66図	エリア10関連出土遺物7	76
第67図	エリア11遺物出土状況1・接合資料出土状況1・接合資料1	77
第68図	エリア11接合資料出土状況2・接合資料2	79
第69図	エリア11接合資料出土状況3・接合資料3	80
第70図	エリア11接合資料出土状況4・接合資料4	81
第71図	エリア11接合資料出土状況5・接合資料5	82
第72図	エリア11遺物出土状況2・関連出土遺物1	83
第73図	エリア11関連出土遺物2	84
第74図	エリア11遺物出土状況3・関連出土遺物3	85
第75図	エリア11関連出土遺物4	86
第76図	エリア11関連出土遺物5	87
第77図	エリア11遺物出土状況4・関連出土遺物6	88
第78図	エリア11関連出土遺物7	89
第79図	エリア11関連出土遺物8	90
第80図	エリア11関連出土遺物9	91
第81図	エリア12遺物出土状況・関連出土遺物1	92
第82図	エリア12関連出土遺物2	93
第83図	エリア13遺物出土状況	94
第84図	エリア13接合資料出土状況・接合資料	95
第85図	エリア13関連出土遺物1	96
第86図	エリア13関連出土遺物2	97
第87図	エリア13関連出土遺物3	98
第88図	エリア14遺物出土状況・関連出土遺物	99
第89図	エリア1接合資料出土状況・接合資料1	100
第90図	エリア14接合資料2	101
第91図	エリア15遺物出土状況・関連出土遺物	102
第92図	エリア16遺物出土状況・関連出土遺物1	103
第93図	エリア16関連出土遺物2	104
第94図	エリア17遺物出土状況・関連出土遺物1	105
第95図	エリア17関連出土遺物2	106
第96図	エリア18・19遺物出土状況・関連出土遺物	107
第97図	エリア20遺物出土状況	108
第98図	エリア20接合資料出土状況1・接合資料1	109
第99図	エリア20接合資料出土状況2・接合資料2	110
第100図	エリア20関連出土遺物1	111
第101図	エリア20関連出土遺物2	112
第102図	エリア20関連出土遺物3	113
第103図	その他の接合資料1	115
第104図	その他の接合資料2	116
第105図	その他の接合資料3	117
第106図	その他の接合資料4・石器	118
第107図	12号縦群	129
第108図	第3文化層縦群配置図	130
第109図	第3文化層エリア位置図	131
第110図	縫石刃核分類図(スケール不同)	132
第111図	エリア1遺物出土状況	133
第112図	エリア1接合資料出土状況1・接合資料1	134

第113回	エリア1 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)	135
第114回	エリア1 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)	136
第115回	エリア1 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)	137
第116回	エリア1 接合資料出土状況(5)・接合資料(5)	138
第117回	エリア1 接合資料出土状況(6)・接合資料(6)	139
第118回	エリア1 接合資料出土状況(7)・接合資料(7)	140
第119回	エリア1 間連出土遺物(1)	141
第120回	エリア1 間連出土遺物(2)	142
第121回	エリア1 間連出土遺物(3)	143
第122回	エリア1 間連出土遺物(4)	144
第123回	エリア2 遺物出土状況	144
第124回	エリア2 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)	145
第125回	エリア2 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)	146
第126回	エリア2 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)	147
第127回	エリア2 間連出土遺物(1)	148
第128回	エリア2 間連出土遺物(2)	149
第129回	エリア3 遺物出土状況	150
第130回	エリア3 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)	151
第131回	エリア3 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)	152
第132回	エリア3 接合資料(3)	153
第133回	エリア3 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)	154
第134回	エリア3 接合資料出土状況(4)・接合資料(5)	155
第135回	エリア3 接合資料(6)	156
第136回	エリア3 間連出土遺物(1)	157
第137回	エリア3 間連出土遺物(2)	158
第138回	エリア3 間連出土遺物(3)	159
第139回	エリア3 間連出土遺物(4)	160
第140回	エリア4 遺物出土状況	161
第141回	エリア4 接合資料(1)	162
第142回	エリア4 接合資料出土状況(1)・接合資料(2)	163
第143回	エリア4 接合資料出土状況(2)・接合資料(3)	164
第144回	エリア4 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)	165
第145回	エリア4 接合資料出土状況(4)・接合資料(5)	166
第146回	エリア4 接合資料出土状況(5)・接合資料(6)	167
第147回	エリア4 接合資料出土状況(6)・接合資料(7)	168
第148回	エリア4 接合資料出土状況(7)・接合資料(8)	169
第149回	エリア4 接合資料出土状況(8)・接合資料(9)	170
第150回	エリア4 接合資料出土状況(9)・接合資料(10)	171
第151回	エリア4 間連出土遺物(1)	172
第152回	エリア4 間連出土遺物(2)	173
第153回	エリア4 間連出土遺物(3)	174
第154回	エリア5 遺物出土状況	175
第155回	エリア5 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)	176
第156回	エリア5 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)	177
第157回	エリア5 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)	178
第158回	エリア5 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)	179
第159回	エリア5 間連出土遺物(1)	180
第160回	エリア5 間連出土遺物(2)	181
第161回	エリア5 間連出土遺物(3)	182
第162回	エリア6 遺物出土状況(1)・接合資料出土状況(1)・接合資料(1)	183
第163回	エリア6 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)	184
第164回	エリア6 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)	185
第165回	エリア6 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)	186
第166回	エリア6 接合資料出土状況(5)・接合資料(5)	187
第167回	エリア6 遺物出土状況(2)・間連出土遺物(1)	188
第168回	エリア6 間連出土遺物(2)	189
第169回	エリア6 間連出土遺物(3)	190
第170回	エリア6 遺物出土状況(3)・間連出土遺物(4)	191
第171回	エリア6 間連出土遺物(5)	192
第172回	エリア7 遺物出土状況(1)	193
第173回	エリア7 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)	194
第174回	エリア7 接合資料(2)	195
第175回	エリア7 接合資料出土状況(2)・接合資料(3)	196
第176回	エリア7 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)	197
第177回	エリア7 接合資料(5)	198
第178回	エリア7 接合資料出土状況(4)・接合資料(6)	199
第179回	エリア7 接合資料出土状況(5)・接合資料(7)	200
第180回	エリア7 接合資料出土状況(6)・接合資料(8)	201
第181回	エリア7 接合資料出土状況(7)・接合資料(9)	202
第182回	エリア7 接合資料出土状況(8)・接合資料(10)	203
第183回	エリア7 接合資料出土状況(9)・接合資料(11)	204
第184回	エリア7 接合資料出土状況(10)・接合資料(12)	205
第185回	エリア7 遺物出土状況(2)・間連出土遺物(1)	207
第186回	エリア7 間連出土遺物(2)	208
第187回	エリア7 間連出土遺物(3)	209
第188回	エリア7 遺物出土状況(3)・間連出土遺物(4)	210
第189回	エリア7 間連出土遺物(5)	211
第190回	エリア7 間連出土遺物(6)	212
第191回	エリア7 遺物出土状況(4)・間連出土遺物(7)	213
第192回	エリア7 間連出土遺物(8)	214

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	天神段遺跡の基本土層	11
第3表	第1文化層出土石器観察表	28
第4表	第2文化層出土接合資料観察表(1)	119
第5表	第2文化層出土接合資料観察表(2)	120
第6表	第2文化層出土接合資料観察表(3)	121
第7表	第2文化層出土石器観察表(1)	122
第8表	第2文化層出土石器観察表(2)	123
第9表	第2文化層出土石器観察表(3)	124
第10表	第2文化層出土石器観察表(4)	125
第11表	第2文化層出土石器観察表(5)	126
第12表	第2文化層出土石器観察表(6)	127
第13表	第2文化層出土石器観察表(7)	128

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

県教委は文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課(以下「文化財課」という。)に照会した。

この照会に伴い文化財課は、平成11・12年に志布志IC～末吉財部IC区間の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、事業地内に50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、県埋蔵文センターの4者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討される中で、遺跡の緻密な把握が求められることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査を実施した。

その後、日本道路公団民営化(現在の西日本高速道路株式会社)の閣議決定がなされ、新直轄方式に基づく道路建設に係る確認書・協定書が締結された。ただし、曾於弥五郎ICまでは、日本道路公団からの受託事業、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となつた。

さらに、国土交通省は、平成25年度から東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT間)の建設工事をさらに推進する意向を示し、発掘調査期間の短縮を要請してきた。そこで、この状況に対応するため県は関係機関で協議を重ね、職員確保や予算運用が柔軟にでき、発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財團の設置を決定し、平成25年4月に公益財團法人鹿児島県文化振興財團に埋蔵文化財調査センターが設置された。そして、文化財課は国事業に関する業務を埋蔵文センターへ委託し、埋蔵文化財調査センターが県埋蔵文センターから業務を引き継ぎ、調査を実施することとなつた。

## 第2節 発掘調査の経過

天神段遺跡の主な発掘調査の経過は、以下のとおりである。

- 1 分布調査：平成11年1月
- 2 詳細分布調査：平成13年7月

3 試掘調査：平成13年12月

4 確認調査：平成19年5月～7月

5 本調査：平成19年12月～平成25年10月

本調査は平成19年度から平成24年度までは県埋蔵文センターが実施し、平成25年度は埋蔵文センターが実施した。平成19年度から平成25年度まで実施してきた年度毎の調査範囲については、第1図に示した。

なお、試掘調査・確認調査・本調査の詳細に及びその調査体制については、平成27年2月に刊行した「天神段遺跡1 弥生時代～近世編」を参照していただきたい。

## 第3節 整理・報告書作成作業

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成22年度から平成24年度は県埋蔵文センター東九州整理作業所で実施した。また、埋蔵文センターが設置された平成25年度から平成27年度までは埋蔵文センター第一整理作業所で、平成28年度は埋蔵文センター第一整理作業所及び第二整理作業所で、平成29年度は埋蔵文センター第二整理作業所で実施している。

### 1 作業内容

遺構については、発掘調査時に作成した実測図と遺構台帳との照合や遺構・時代ごとに実測図の仕分けを行った。その後、遺構配置図の作成、各遺構図のトレース・レイアウトを行い、報告書掲載用の写真を選別した。併せて遺構計測表と遺構内出土遺物の観察表を作成した。

石器については、仕分け・分類を行った後に実測・トレース・観察表作成を行い、報告書に掲載する挿図を作成した。また、報告書掲載用写真撮影後に図版を作成した。なお、接合番号は、接合作業が一定程度進んだ段階で番号を付与し、接合台帳を作成した。各接合資料の剥離順の表記については、その剥離順位を記号化して台帳に記載した。

原稿執筆については、遺構・遺物の整理作業と併行して随時行った。

### 2 作業体制

旧石器時代の石器実測については、平成22年度から民間業者へ委託するなどして実施してきた。しかし、旧石器時代に属する遺物の接合作業や出土分布図作成のためのデータベース作成等本格的な作業は平成27年度からである。このため、作業体制については平成27年度以降について記載する。平成22年度から平成26年度における作

業体制は、平成27年2月に刊行した「天神段遺跡1 弥生時代～近世編」を参照いただきたい。

平成27年度からの作業体制は、以下のとおりである。

#### 【平成27年度】

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 公益財団法人 鹿児島県文化振興財團  
埋蔵文化財調査センター

センター長 堂 込秀人

作成企画 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢  
〃 調査課長 八木澤一郎

作成担当 〃 調査第二係長 寺原 徹  
〃 文化財専門員 長野真一

〃 〃 倉元良文

〃 〃 松下建生  
〃 文化財調査員 深川祐子  
(4月～6月)

事務担当 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢  
〃 主査 荒瀬勝己

整理作業指導 独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所研究員 芝 康次郎

#### 【平成28年度】

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 公益財団法人 鹿児島県文化振興財團  
埋蔵文化財調査センター

センター長 堂 込秀人

作成企画 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢  
〃 調査課長 八木澤一郎

作成担当 〃 調査第三係長 岩澤和徳  
〃 文化財専門員 松下建生

事務担当 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢  
〃 主査 荒瀬勝己

支援業務受託者 株式会社九州文化財研究所

整理作業指導 国立大学法人熊本大学  
文学部教授 小畑弘己  
岡山大学名誉教授 稲田孝司

#### 【平成29年度】

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 公益財団法人 鹿児島県文化振興財團  
埋蔵文化財調査センター

センター長 前追亮一

作成企画 〃 総務課長兼総務係長 中村伸一郎

〃 調査課長 中原一成  
〃 調査第二係長 岩澤和徳

作成担当 〃 文化財専門員 立神倫史  
〃 〃 真邊 彩

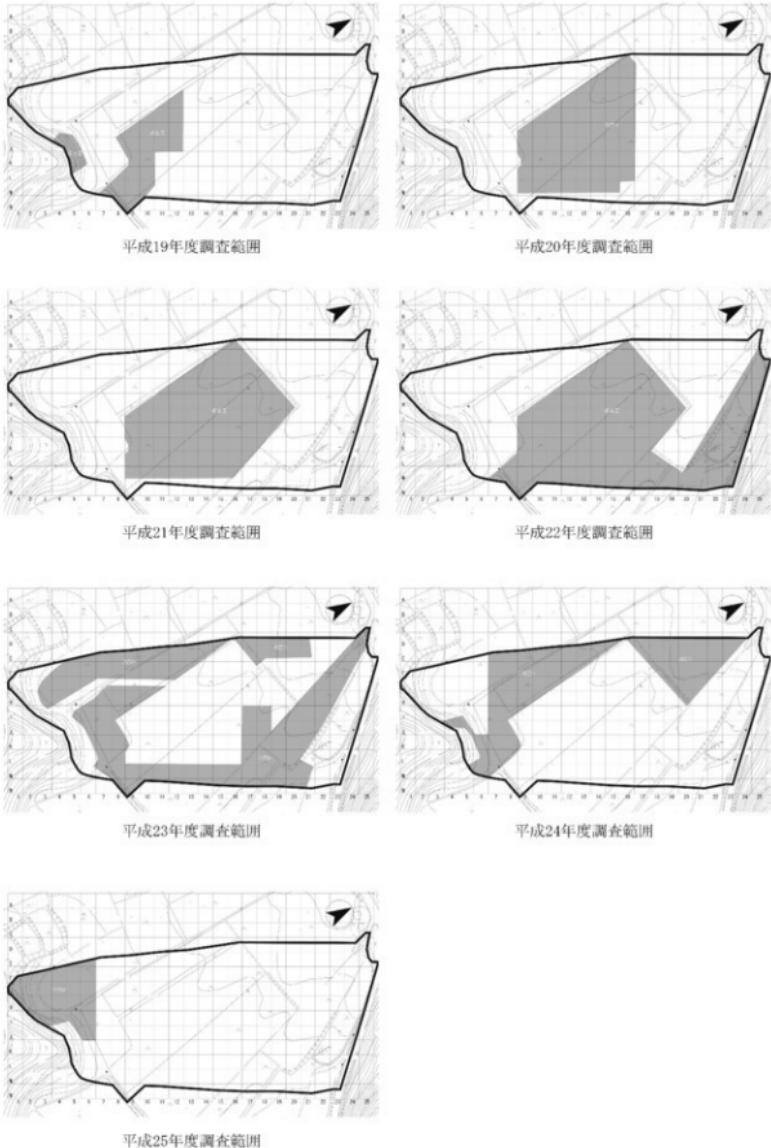
〃 〃 倉元良文  
〃 文化材調査員 大坪啓子

〃 〃 森えりこ  
整理作業指導 国立大学法人広島大学  
総合博物館教授 藤野次史

なお、報告書作成指導委員会等は、下記の通りに実施した。

報告書作成指導委員会 平成29年11月15日実施  
中原一成調査課長ほか4名

報告書作成検討委員会 平成29年11月21日実施  
前追亮一センター長ほか7名



第1図 年度別調査範囲図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

天神段遺跡の大半は、曾於郡大崎町野方に所在する。大崎町は鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央東側に位置し、東西に約8km、南北に約18km、総面積は100.82km<sup>2</sup>である。東は志布志市、西は鹿屋市、南は肝属郡東串良町、北は曾於市と接し、南東は志布志湾に面している。

大隅半島の地形は九州山地の延長をなす南北に延びる東西の山地と、その間の丘陵や台地及び低地などの低地帯から形成されている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で南北に延びる鶴塚山地（南阿那山地ともいう。）である。主峰は宮崎県内の鶴塚山（1,119m）で、中生層の地質からなっている。

西侧の山地は、北部の霧島火山の分脈から清奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大鷲柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

大隅半島の中央部に位置する大崎町の地形は、高隈山地や鶴塚山地などを水源とし、志布志湾に注ぐ茅田川（上流は大島川に分岐）、田原川、持留川の町を代表する三つの比較的大きな河川とその支流によって、火碎流や火山灰等の堆積物が堆積後から現在に至るまで開拓され形成されている。

大崎町は、内陸部に位置する野方地区と志布志湾に面した大崎地区が南北に連続する瓢箪状を呈する。野方地区は標高150m～200mの丘陵や台地が多く、北端部は谷間が多くて起伏が激しい。大崎地区は、海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形となっていて。海岸線は砂丘が形成される所もある。このような地形を利用して野方地区では主に畑作が、大崎地区では主に稲作が行われている。

地質は高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日本南縫群を基盤とし、南北に延びる東西の山地の間にある丘陵、台地及び低地帯は、洪積世の姶良カルデラ、阿多カルデラ、鬼界カルデラ等の火山活動によって堆積した火碎流や火山灰（シラス、アカホヤ火山灰、池田降下輕石等）及びその腐植土である。低地帯の一部では、泥炭層が見られるところもある。

遺跡が所在する野方地区は、標高約200mのシラス台地を茅田川の支流である大島川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は畜産や畑作地

として利用されており、天神段遺跡はこの台地の縁辺部に位置している。遺跡の周辺には野方前段遺跡、宮ノ本遺跡、加治木堀遺跡などがあり、縄文時代以降の遺構・遺物が確認されているが、本遺跡のように旧石器時代の遺構・遺物の確認されている遺跡は少ない。本遺跡は、古墳時代を除く旧石器時代から近世までの遺構・遺物が確認されている。のことからも本遺跡周辺は、人々が生活を営むには非常に適した環境であったことがうかがえる。

### 第2節 歴史的環境

天神段遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、茅田川、大島川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。

海岸部の横瀬古墳や神領古墳群などは有名であるが、内陸部に分布している遺跡の詳細については不明であった。しかし、近年、大隅グリーンロードや東九州自動車道等の建設に伴う大規模な発掘調査によって、次第に様相が明らかになりつつある。

本編では各時代の主な遺跡を紹介するが、詳細については各遺跡の報告書を参照していただきたい。

ただし、平成28年度末で報告書が刊行されていない遺跡については遺跡名の後に（未）と記すこととする。

#### 旧石器時代

現在のところ、天神段遺跡が所在する野方地区をはじめ大崎町内において、天神段遺跡のような既知の旧石器時代の遺跡は少ない。しかし、近年の東九州自動車道建設に関連した発掘調査により町の内陸部において旧石器時代の遺跡が増えつつある。

天神段遺跡以外の旧石器時代の遺跡として、二子塚A遺跡、永吉天神段遺跡（未）、荒園遺跡（未）、宮脇遺跡（未）などが挙げられる。二子塚A遺跡では薩摩火山灰層の下層から黒曜石等のフレークが確認されている。永吉天神段遺跡では、鍥石器・黒曜石剥片・ナイフ形石器が出土している。荒園遺跡では、鍥石核や鍥石刃が出土している。宮脇遺跡では、鍥石核・ナイフ形石器・三棱尖頭器・スクレイバー等の石器が出土している。

#### 縄文時代

大崎町では、縄文時代に係る遺跡の発掘調査が増えつつある。早期の遺跡としては、早期の土器型式の多くが確認された天神段遺跡、集石と石板式土器・下剥峯式土器等が出土した野方前段遺跡、集石と吉田式土器・桑ノ

丸式土器等を確認した二子塚A遺跡、石坂式土器と石鐵等が出土した金丸城跡、集石・土坑と撫糸文・山形押型文等の土器が出土した下堀遺跡、堅穴住居跡や集石、土坑と下剥峯式土器が多く出土した平良上C遺跡、などが挙げられる。

前期～中期の遺跡としては、天神段遺跡、立山B遺跡、京の塚遺跡（末）などが挙げられるが、遺跡数はさほど多くない。

後期の遺跡としては、加治木塚遺跡、京の塚遺跡（末）、下堀遺跡、細山田段遺跡などが挙げられる。

晩期では、天神段遺跡、立山B遺跡、細山田段遺跡、京の塚遺跡（末）、永吉天神段遺跡などが挙げられる。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、砂丘後背地に立地し堅穴住居跡や柱穴や入来式土器・山ノ口式土器等が確認された沢目遺跡が有名である。このほかに天神段遺跡、円形大型住居跡や掘立柱建物跡が検出された下堀遺跡、土器つまりが検出された麦田下遺跡、永吉天神段遺跡、荒園遺跡などが挙げられる。

### 古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、高塚古墳の南限域にあたり、南九州では数少ない前方後円墳を含む古墳群がみられ、畿内との関連を窺わせる。町内の古墳のはとんどが大崎地区に所在し、遺跡の所在する野方地区には数基しかない。鹿児島県内第2の規模で墳丘から円筒埴輪片等が確認された横斬古墳、前方後円墳4基・円墳9基・地下式横穴墓で構成される神領古墳群のほか瓶限古墳群、田中古墳群、後追古墳群、鷺塚地下式横穴墓、下堀遺跡などが挙げられる。

### 古代

古代も詳細な報告がなされている遺跡数は少ない。下堀遺跡では、土器や土坑が確認されている。天神段遺跡では、掘立柱建物跡が検出された。加治木掘遺跡、椿山遺跡、野方前段遺跡からは、古代から中世にかけての溝状遺構や古道跡が検出された。

### 中世

中世の遺跡のほとんどが、山城である。大崎城跡・胡摩ヶ城跡・野御城跡・童相城跡・金丸城跡・桙谷城跡・遠見ヶ丘など山城が町内各地に造られているが、詳細な報告がなされている遺跡数は少ない。金丸城跡では溝状遺構・土坑が検出され、青磁・白磁・東播系須恵器等が出土している。このほか、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓等と青白磁等が確認された天神段遺跡、溝状遺構や竪坑跡が検出されて下堀遺跡、永吉天神段遺跡などが挙げられる。

### 近世

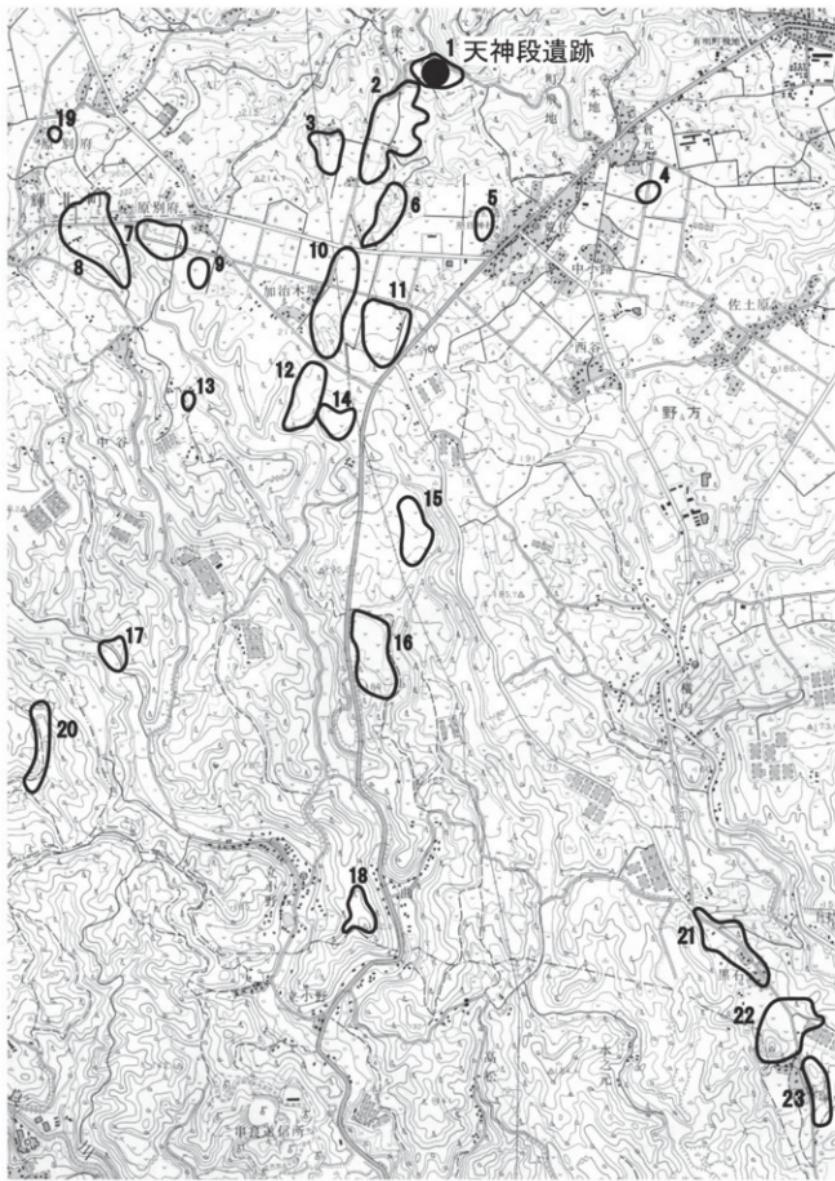
近世も詳細な報告がなされている遺跡数は少ない。遺跡としては、天神段遺跡、京の塚遺跡、永吉天神段遺跡、金丸城跡などが挙げられる。金丸城跡では、掘立柱建物跡・焼土を作り土坑や肥前系染付・薩摩焼等が確認されている。

### （参考・引用文献）

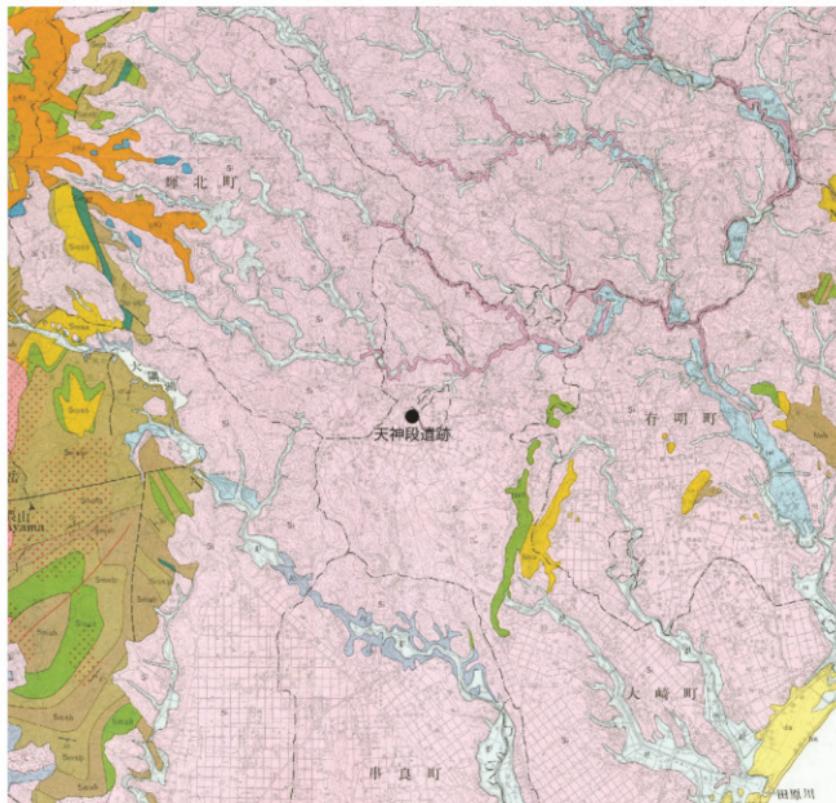
- 牧仁郷断二 1951 「大崎町史」
- 大崎町 1975 「大崎町史（明治百年）」
- 大崎町教育委員会 2001 「立山B遺跡」  
　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会 2005 「金丸城跡」  
　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会 2005 「下堀遺跡・細山田段遺跡」  
　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 大崎町教育委員会 2014 「麦田下遺跡」  
　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「二子塚A遺跡」  
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 「加治木塚遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」  
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」  
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）
- 鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015 「天神段遺跡1」  
　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016 「天神段遺跡2」  
　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種類	時代	地形	遺物等	備考
1	468 62	天神段	鹿児島県曾於郡大崎町野方天神段	散布地	旧石器	台地	ナイフ形石器、台形石器、細石刃、細石刃核、チップ、フレイク、ハンマー	本報告書（旧石器時代～縄文時代草創期編） ※弥生時代～近世編はH27年2月報告書刊行※縄文時代前期～後期編はH28年3月報告書刊行※縄文時代中期編はH30年3月報告書刊行
2	468 63	野方前段	鹿児島県曾於郡大崎町野方前段	散布地	縄文、古墳	台地	塞ノ神式、黒川式、吉ヶ崎式、土師器	A地点はH22年3月、B地点はH24年3月報告書刊行
3	468 64	内ヶ追	鹿児島県曾於郡大崎町野方内ヶ追	散布地	古墳	台地	成川式	H9年農政分布
4	468 45	倉元	鹿児島県曾於郡大崎町野方倉元	散布地		台地	土器片	H3年農政分布
5	468 14	荒佐野	鹿児島県曾於郡大崎町野方荒佐野	散布地	弥生(中)	台地	土器片、磨製石斧	
6	468 91	宮ノ本	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	弥生	台地		H22年報告書刊行
7	468 108	亀形	鹿児島県曾於郡大崎町野方2622-1外	散布地	弥生	台地	土器	H12年農政分布
8	468 107	岩井場	鹿児島県曾於郡大崎町野方2572-2外	散布地	古墳	台地	土器	H12年農政分布
9	468 10	原別府	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	縄文(後)	台地	土器片、打製石斧	
10	468 7	加治木堀	鹿児島県曾於郡大崎町野方加治木堀	散布地	縄文、弥生、中世	台地	土器片、山ノ口式、鉄鏃	H22年3月報告書刊行
11	468 109	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方3179-5	散布地	弥生	台地	岩崎式、吉ヶ崎式	H22年報告書刊行
12	468 118	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方椿山	散布地	古墳	台地		
13	468 54	岩井場段	鹿児島県曾於郡大崎町野方中段	散布地	縄文、弥生	台地		H8年農政分布
14	468 65	瀬ノ堀A	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀・椿山・又合流	散布地	縄文、古墳	台地	蔽石、土器片、成川式	H9年農政分布
15	468 66	瀬ノ堀B	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地		台地		H9年農政分布
16	468 39	二松	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	散布地	弥生、歴史	台地		
17	468 139	柿木段	鹿児島県曾於郡大崎町立小野柿木段	散布地	縄文、古代、中世	低地	入佐式、石斧、土師器、須恵器、鐵族	H22年3月、H24年3月報告書刊行
18	468 43	遠見ヶ丘	鹿児島県曾於郡大崎町野方立小野	散布地	中世	台地		
19	203 247	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市輝北町下百引東原別府	散布地	縄文時代前期・後期	台地	春日式、岩崎式、草野式、蔽石、夜白式	S56年分布調査
20	203 151	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地	古代			H19年分布調査
21	468 6	二子塚A	鹿児島県曾於郡大崎町野方二子塚	散布地	縄文、弥生、古墳	台地	フレイク、吉田式、石板式、入佐式、成川式、土師器	H17年3月報告書刊行
22	468 4	二子塚B	鹿児島県曾於郡大崎町持留・野方二子塚	散布地	縄文、弥生	台地	指宿式、市来式、打製石斧	
23	468 22	二子塚C	鹿児島県曾於郡大崎町持留二子塚	散布地	弥生時代中期、後期	台地		



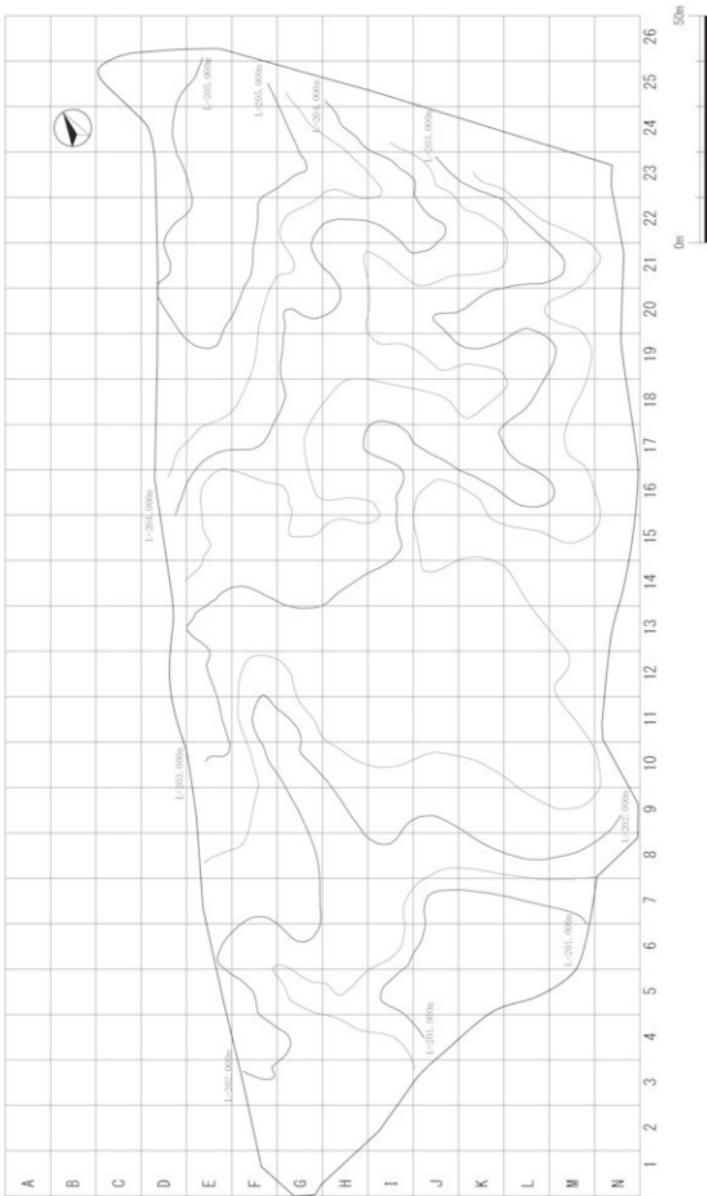
第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)



地質図凡例

m	シルト質 Mud	Si レクス…流成岩質角礁岩有機物石炭質(未固結化) Skerate-Rhythmic pumice tuff (unconsolidated)	Sh 真珠母質・同層物互層 Nacreous and shale rich alternation
g	礫質 Gravelly	St 流成岩質テラサイト質角礁岩 Skerate-Rhythmic pumice tuff	Sgt 緑色岩層 Green rocks
bu	砂 Sand	Sst 砂岩と珪藻質砂岩の交替層 Sandstone and sandstone rich alternation	Stnct エラプト質砂岩 Shaped conglomerate
th	砂 Sand	Nsh 砂岩と珪藻質砂岩の交替層 Sandstone and sandstone rich alternation	Lm 地層 Lava
sd	砂、泥、シルト Sand, gravel, silt	Nat 砂岩・頁岩互層 Alternation of sandstone and shale	
lt	成岩した貫入岩有機物角礁岩(溶結凝灰岩) Rhythmic pumice tuff (welded tuff)	Serr 硅酸ガリウム質角礁岩 Sandstone and sandstone rich alternation	
dt	ダイオイド質角石凝灰岩(溶結凝灰岩) Dacitic pumice tuff (welded tuff)	Smag 砂岩・頁岩互層 Alternation of sandstone and shale	

第3図 天神段遺跡周辺の地質



第4図 グリッド配置図及び地盤上面地形図

## 第Ⅲ章 調査の方法と層序

### 第1節 発掘調査の方法

#### 1 発掘現場での調査方法

天神段遺跡の発掘調査は、平成19年度から平成25年度まで7年にわたり実施した。このうち、旧石器時代に係る調査は、平成21年度から平成25年度の5年間行った。

発掘調査は、センターライン上の「STA76+60」と「STA76+80」の延長線を基準に、10m間隔に、南側から北側に向かって1, 2, 3・・・、西側から東側に向かってA, B, C・・・とグリッド（調査区割り）を設定し開始した。

このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行った。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、測量座標はN-1区の左下を原点(0, 0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

IX層～XII層の調査は縄石刃等の小型の石器が出土する層であるため、薩摩火山灰層を重機で除去後、2m×2mのマス目を設定し、千鳥掘方式で遺物の有無を確認しながら、捻り鎌を用いて人力で慎重に掘り下げた。掘削を行っていない箇所の下層も縄文時代早期等の遺物の出土状況から掘り下げを行なう必要の可否について調査担当者が検討を行なながら調査を進めた。遺物及びその広がりが確認できないと判断した箇所については、重機で下位層の上面まで土を除去した。

X層以下の調査では比較的大きな遺物が出土する傾向だったため、鍛鎌や山鋸を用いて人力で掘り下げを行った。調査はX層上面（シラス上面）まで掘り下げを行い終了した。これはX層が無遺物層で、南九州本土では厚く堆積していることがこれまでの発掘調査や火山に関する研究等で周知されている。そのため、必然的に掘削深度が深くなり、安全面や調査の効率化を図るという観点から、このシラス上面で調査を終了した。

また、縄群を検出した際は、移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行った。また、その認定については縄の出土状態、地形等を基に調査担当者で検討を行った。

遺物の取り上げは、基本的にトータルステーションを用いて取り上げを行った。

#### 2 整理作業の方法

出土石器の器種認定の必要性から、一部の石器の水洗いを発掘調査現場で行ってきた。その後、遺物選別や注記、実測遺物の選定、実測委託関連業務、接合作業等の業務は、平成24年度までは県埋文センターで実施した。埋文調査センター設立による業務移管に伴い、平成25年度か

ら平成27年度は埋文調査センター第一整理作業所で実施した。平成28年度の縄文時代早期に係る整理作業は同第一整理作業所で、旧石器時代に係る整理作業は同第二整理作業所で実施した。平成29年度は埋文調査センター第二整理作業所で行った。

報告書作成にあたっては、個々の石器の検討を基本に、石器の出土分布状況やそれらの集中分布域の把握、器種別分布の把握及び検討を加え、遺跡形成の構造解明を目指に進めた。石材分布・各年度の整理の方法及び内容は、以下の通りである。なお、石器の実測等の業務については可能な限り民間業者へ委託するなどして、整理作業の迅速化を図った。

平成23年度に第1回目の石器実測委託業務として、平成21年度と22年度の発掘調査分265点の業務を民間業者に委託した。

平成26年度は平成23年～平成25年度発掘調査分の遺物を対象に整理作業を行い、遺物の選別及び器種認定、実測遺物の抽出、実測委託遺物の抽出、実測委託遺物への注記、縄石刃の実測及びトレース、非実測遺物の接合作業に関わる注記等を実施した。また、発掘調査で認識していた遺物集中箇所及びエリアの認定作業を目的とした作業を推し進めることとなった。特に、集中部に関しては、複数の集中部が近接して位置する広域な範囲が確認され、この範囲をエリアと仮称して接合作業の効率化を図った。

平成27年度は、器種分類、エリア認定、接合作業を中心に行なうと共に970点の遺物実測を民間業者に委託した。なお、接合作業については、遺物集中箇所の接合から開始し、そして、隣接する遺物集中箇所との接合と、その接合範囲を拡大しながら進めた。併せて、母岩別分類作業を繰り返し、接合作業の効率化を図った。

平成28年度は、平成27年度までに分類を終了した接合資料の実測委託を含め、整理業務一式を民間業者に委託した。

平成29年度は、これまで行ってきた作業を基にトレース図修正や遺構・遺物のレイアウト、出土遺物の観察表作成、原稿執筆、編集作業を行った。また、接合資料60点の実測・トレースを民間業者へ委託し、作業の迅速化を図った。

### 第2節 層序

天神段遺跡の基本層序は隣接する野方前段遺跡B地点（県埋文センター2012）と同じで、包含層や遺構や遺物の年代を把握する手がかりの1つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

- I層：表土（旧耕作土）である。
- II層：P 2（安永ボラ、1779年の桜島起源の噴出物）が点在する層である。
- III層：黒色系の色調を持つ層である。色調の違いで3層に分層した。
- III a層：黒色土で、中世～近世の遺物包含層である。
- III b層：暗茶褐色土で、弥生時代～古代の遺物包含層である。
- III c層：オリーブ褐色土で、III b層と同じく、弥生～古代の遺物包含層である。
- IV層：黄褐色バミス（P 7、約5,000年？前の桜島起源の噴出物）を含む層で、色調の違いで2層に分層した。
- IV a層：茶褐色土で、P 7の腐植土層である。縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である。
- IV b層：黄褐色土で、P 7を含む層である。縄文時代前期～晩期の遺物包含層である。
- V層：アカホヤ火山灰関連の層である。色調の違いで3層に分層した。
- V a層：褐色を呈するアカホヤ火山灰の腐植土層で、縄文時代前期～中期の遺物包含層である。
- V b層：赤褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。縄文時代前期・中期の遺物包含層である。
- V c層：アカホヤ火山灰一次の軽石（約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物）層である。無遺物層である。
- VI層：明黄褐色土で、縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。
- VII層：黒褐色土で、縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。P12やP13（いずれも桜島起源の噴出物）を含む層である。
- VIII層：薩摩火山灰層（P14、約12,800年前の桜島起源の噴出物）である。無遺物層である。
- IX層：黒褐色粘質土である。縄文時代草創期及び細石刃文化期の遺物包含層である。
- X層：茶褐色弱粘質土である。IX層と同じく細石刃文化期の遺物包含層である。
- XI層：黒褐色粘質土で、IX層よりも粘質が弱い。ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
- XII層：茶褐色硬質土で、P16（桜島起源の噴出物で、詳細な年代は不詳）と呼ばれるバミスを含む層である。XI層と同じく、ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
- XIII層：暗茶褐色硬質土で、P16を含む層である。
- XIV層：黄茶褐色硬質土で、P17（約26,000年前の桜島起源の噴出物）と呼ばれるバミスを含む層である。
- XV層：暗黃褐色土で、縄群を検出した。遺物は少量の剥

片等が出土し、ナイフ形石器文化期の包含層と考えられる。

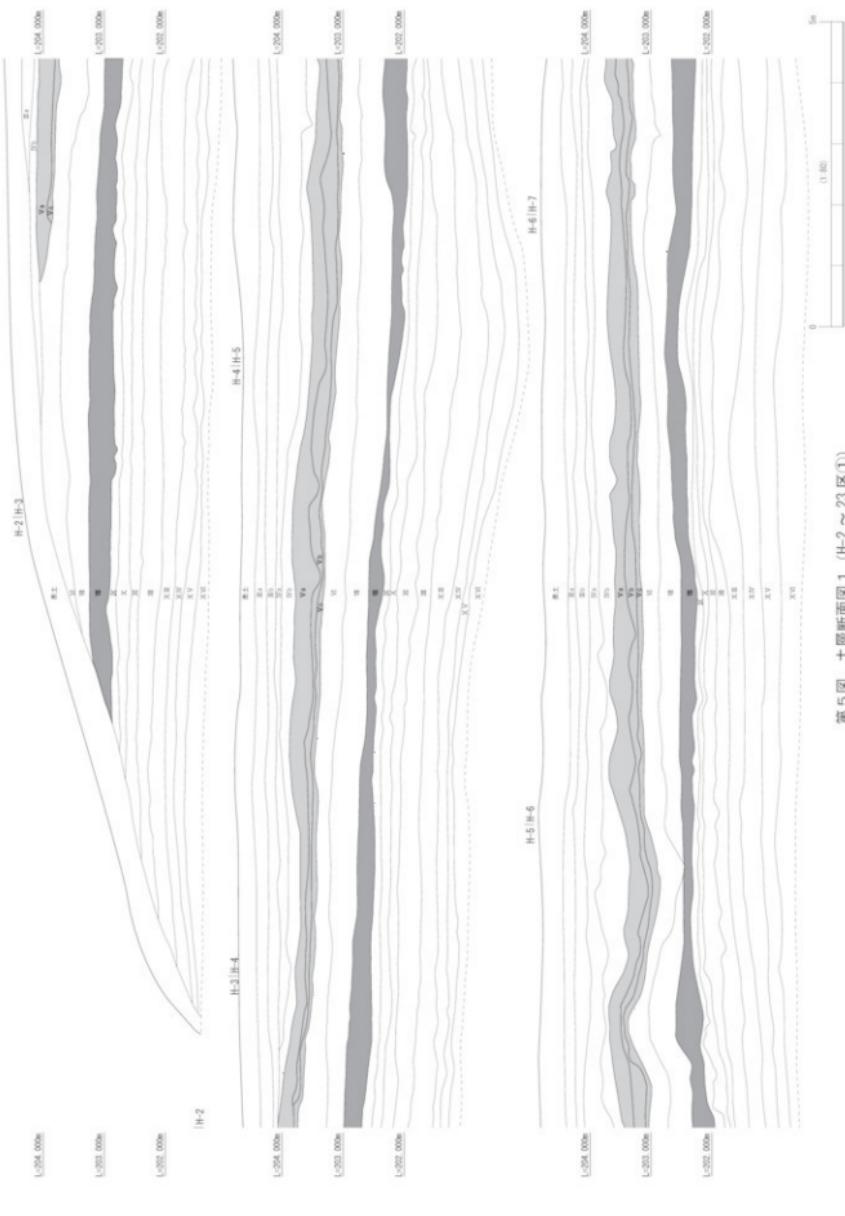
XVI層：明黄白色砂質土である。

XVII層：黄白色砂質土で、この層からA T（シラス）と呼ばれる約29,000年前の姶良カルデラ起源の火山灰層となる。

第2表 天神段遺跡の基本土層

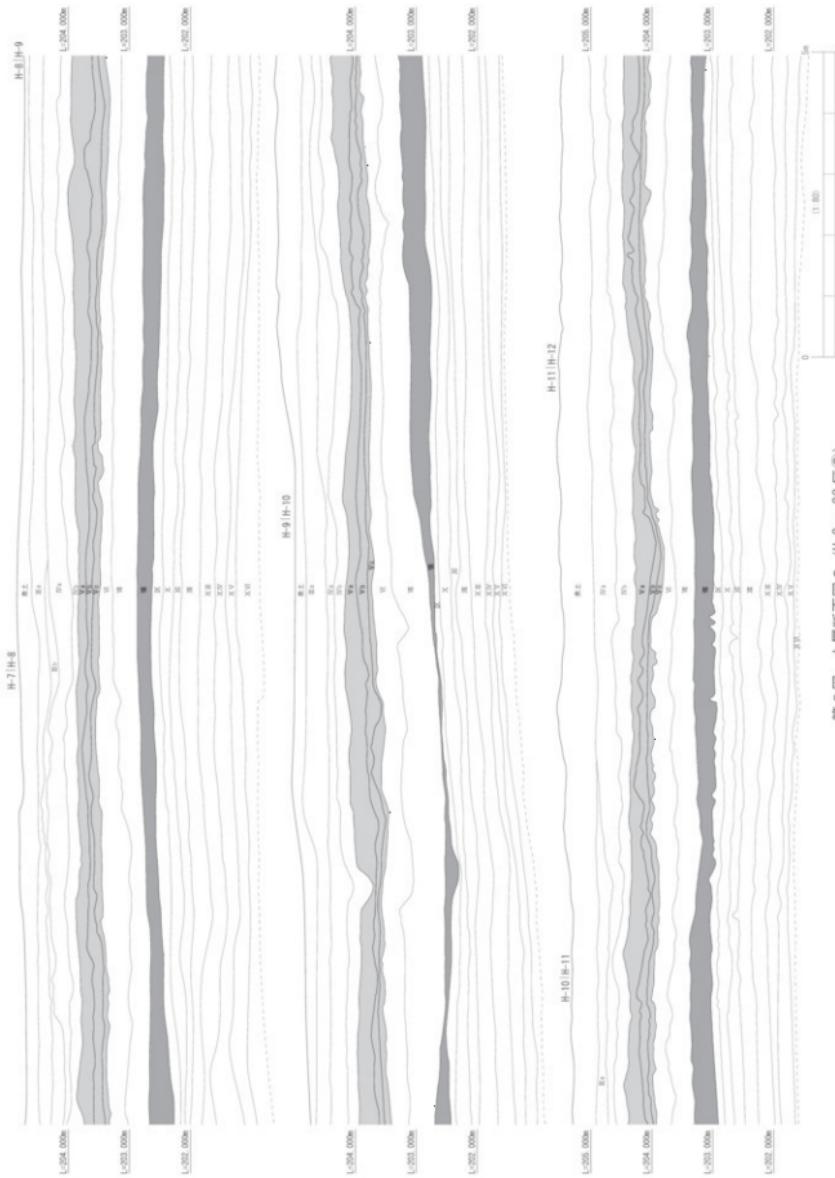
層位	色調等	平均厚cm
I層	表土	20
II層	明黄色バミス（P2）	3
IIIa層	黒色土	5
IIIb層	暗茶褐色土	5
IIIc層	オリーブ褐色土	5
IVa層	茶褐色土	10
IVb層	黄褐色土（P7混）	20
Va層	褐色土	20
Vb層	赤褐色土	30
Vc層	明赤褐色バミス（アカホヤ一次）	10
VI層	明黄褐色土	20
VII層	黒褐色土（P12・P13混）	50
VIII層	黄白色火山灰（P14）	25
IX層	黒褐色粘質土	10
X層	茶褐色粘質土	20
XI層	黒褐色粘質土	5
XII層	茶褐色硬質土（P16混）	20
XIII層	暗茶褐色硬質土（P16混）	40
XIV層	黄茶褐色硬質土（P17混）	20
XV層	暗黃褐色土	5
XVI層	明黄白色砂質土	20
XVII層	黄白色砂質土（AT）	—

火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺一』（p 108～110）から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、曆年較正した年代である。

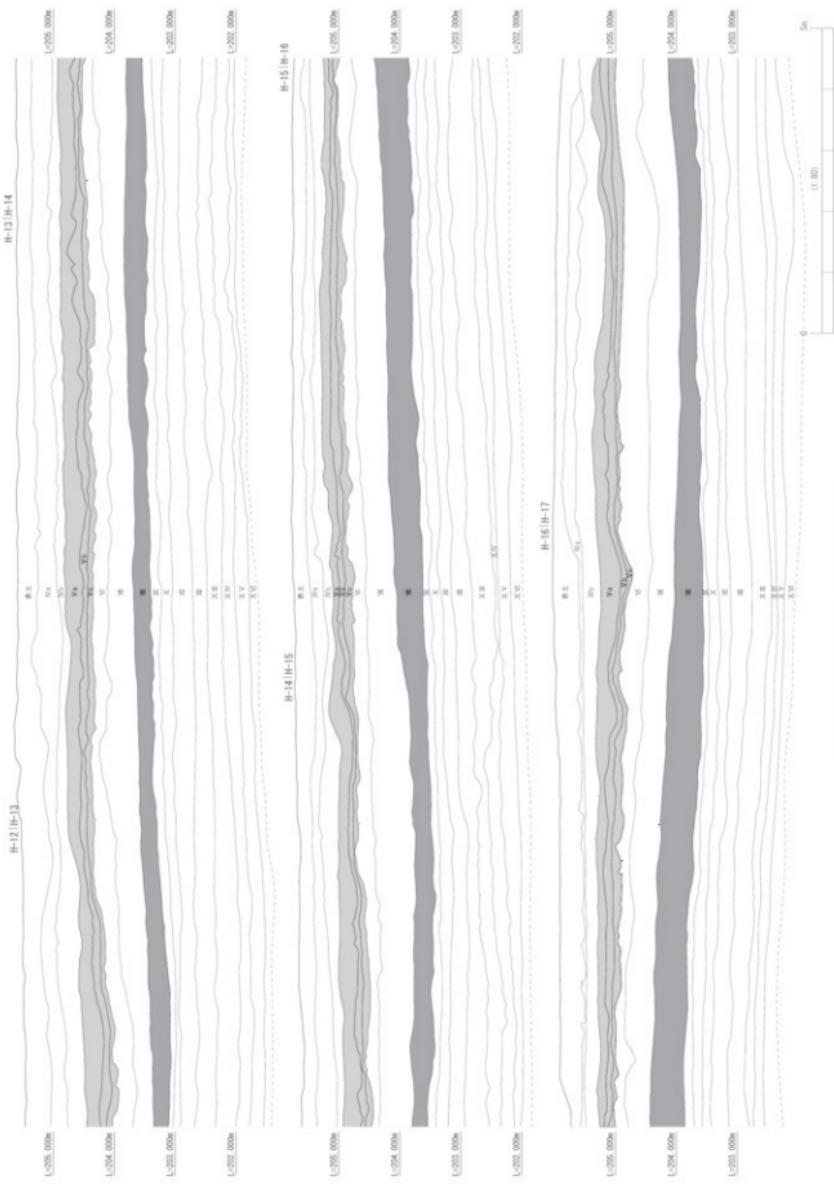


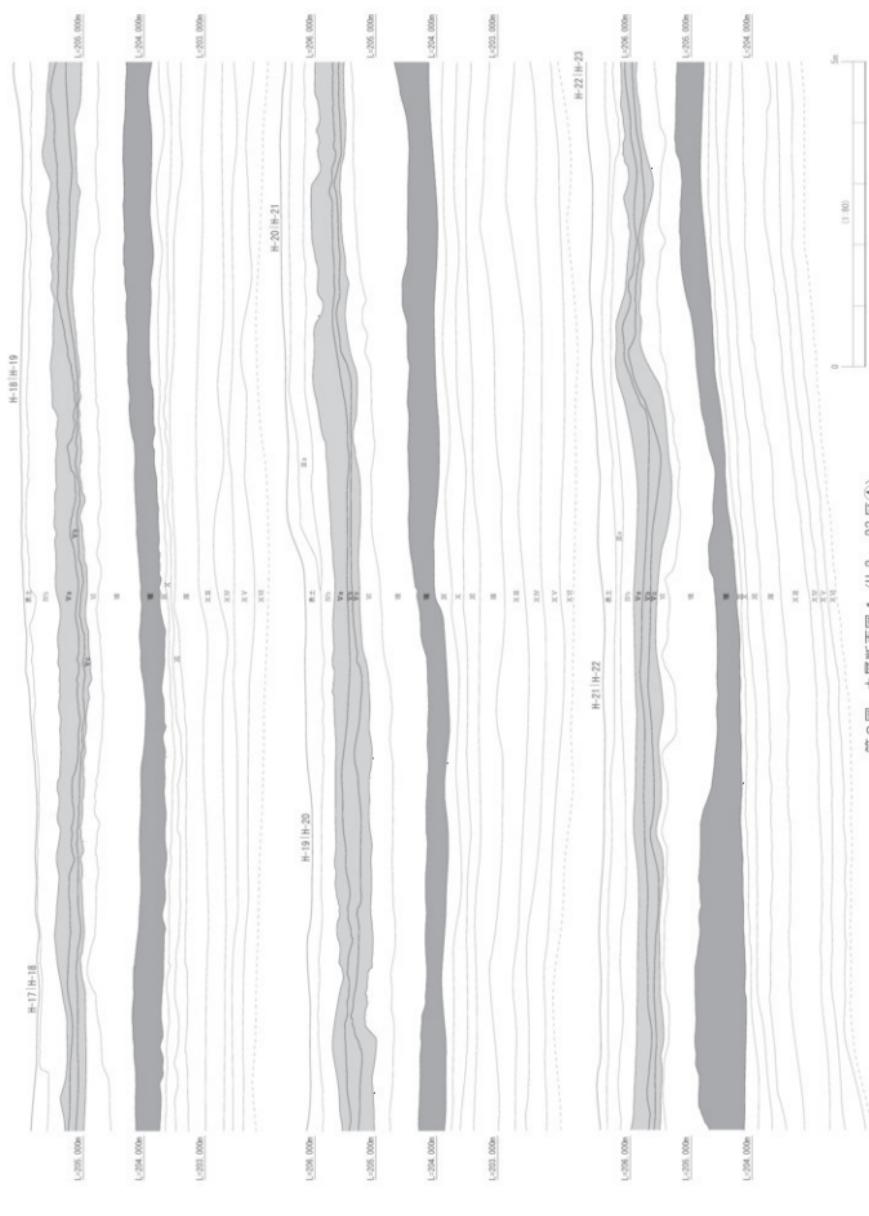
第5圖 土壠斷面圖1 (H-2 ~ 23區①)

H-7 H-8

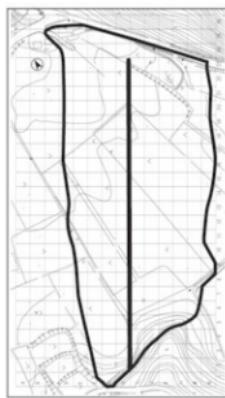
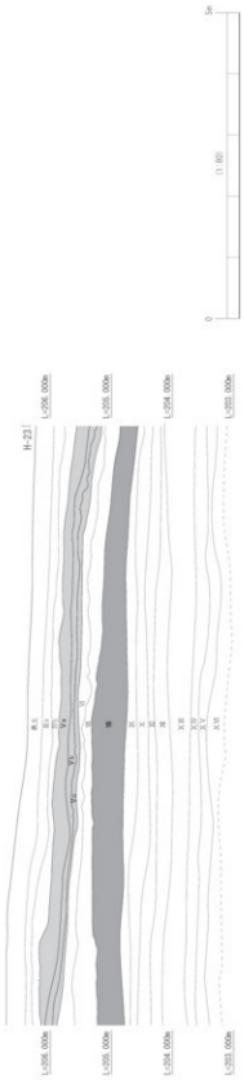


第6図 土壠断面図2 (H-2～23区2)

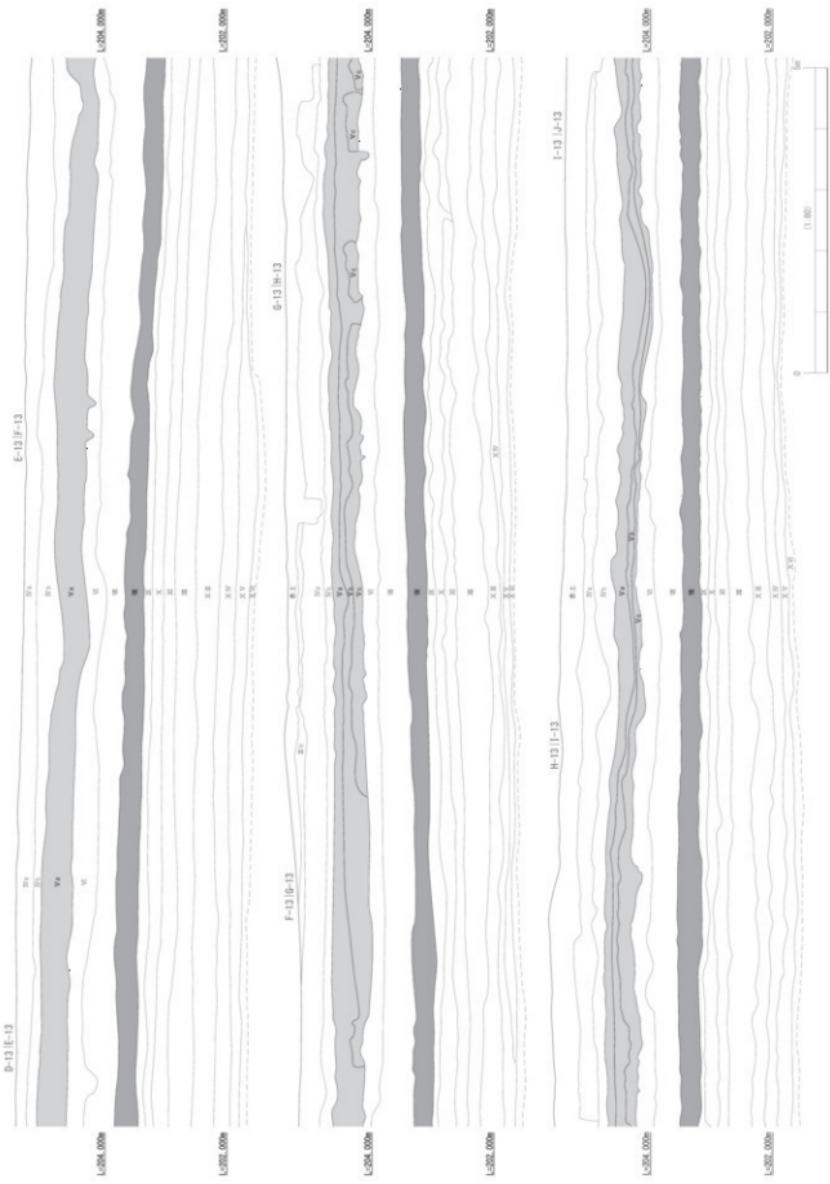




第8図 土壌断面図4 (H-2 ~ 23区4)

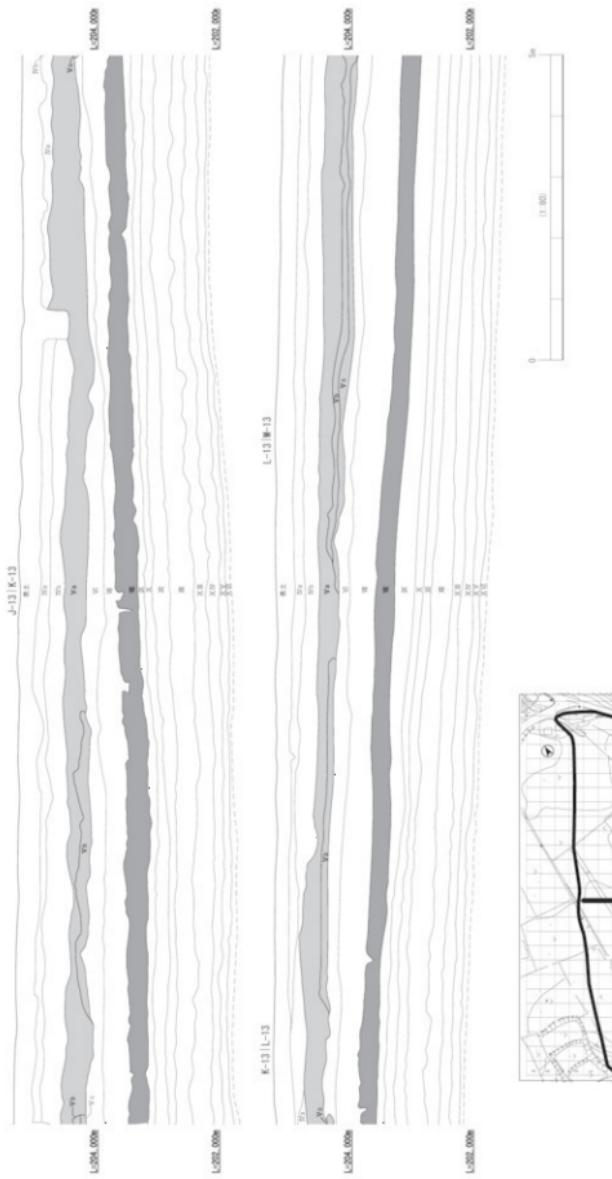


第9図 土壠断面図5 (H-2 ~ 23区(5))



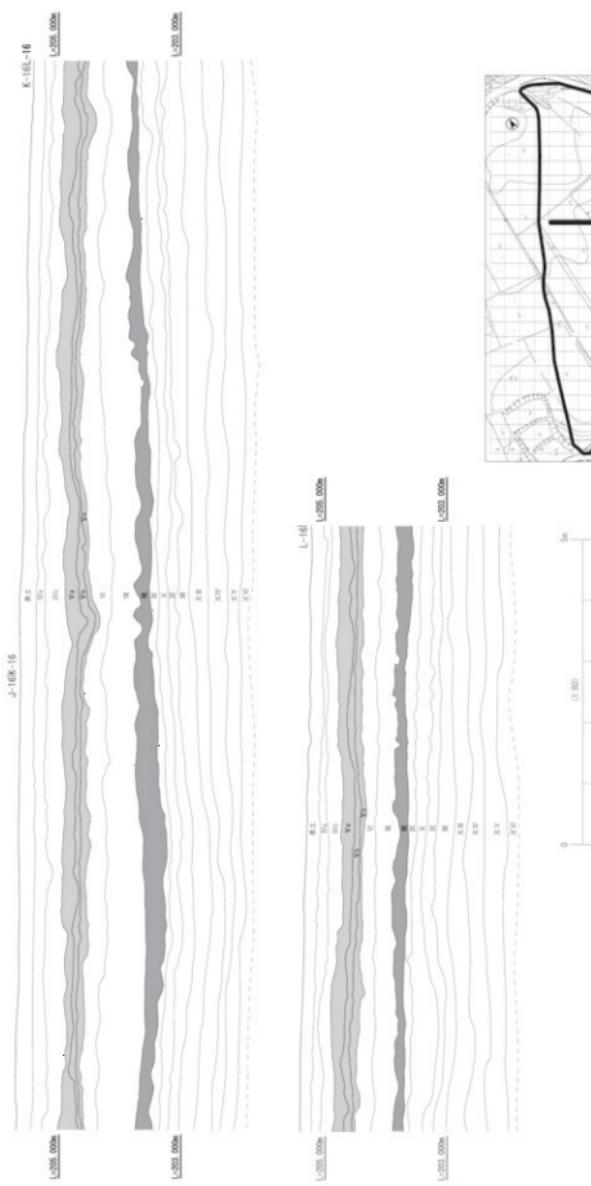
第10图 土剖面图6 (0 ~ H-13区①)

第11図 土壠断面図 7(0 ~ M-13区②)

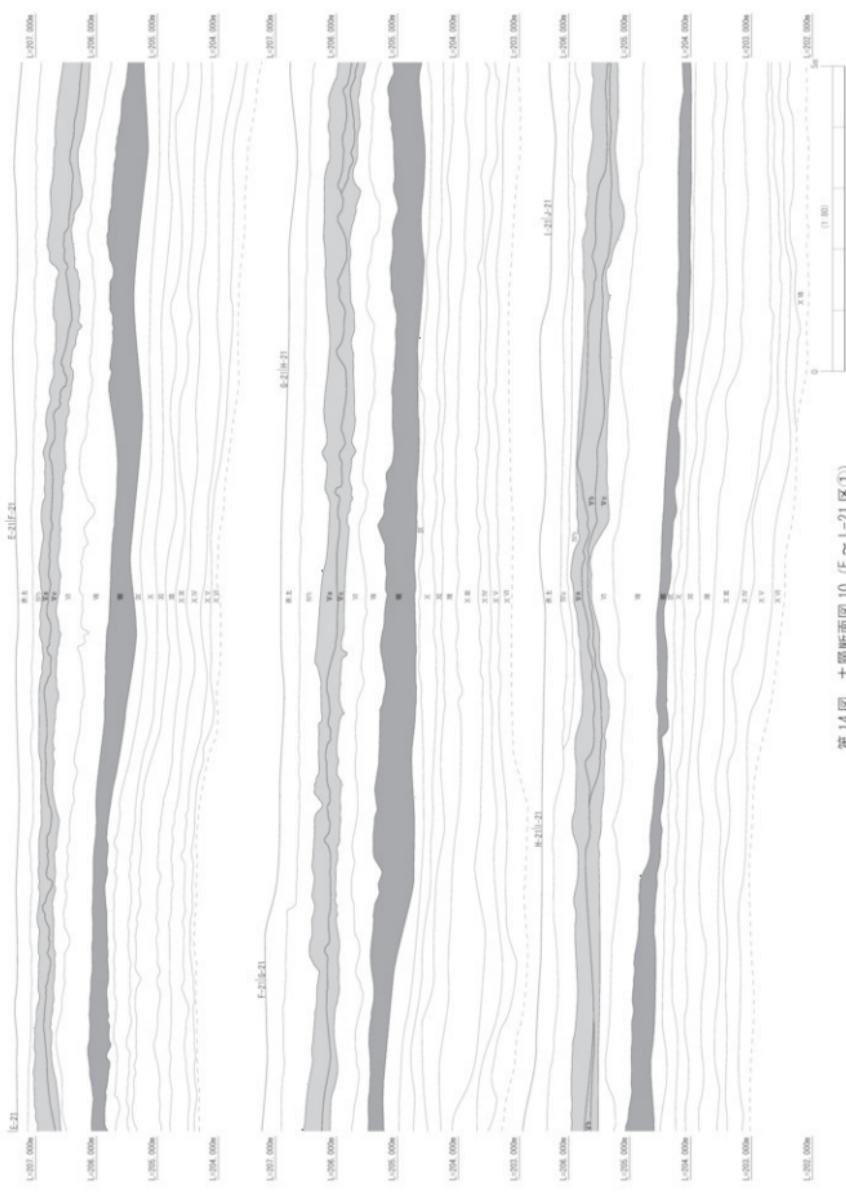




第12図 土層断面図8 (E ~ L-16 (Fig. 1))

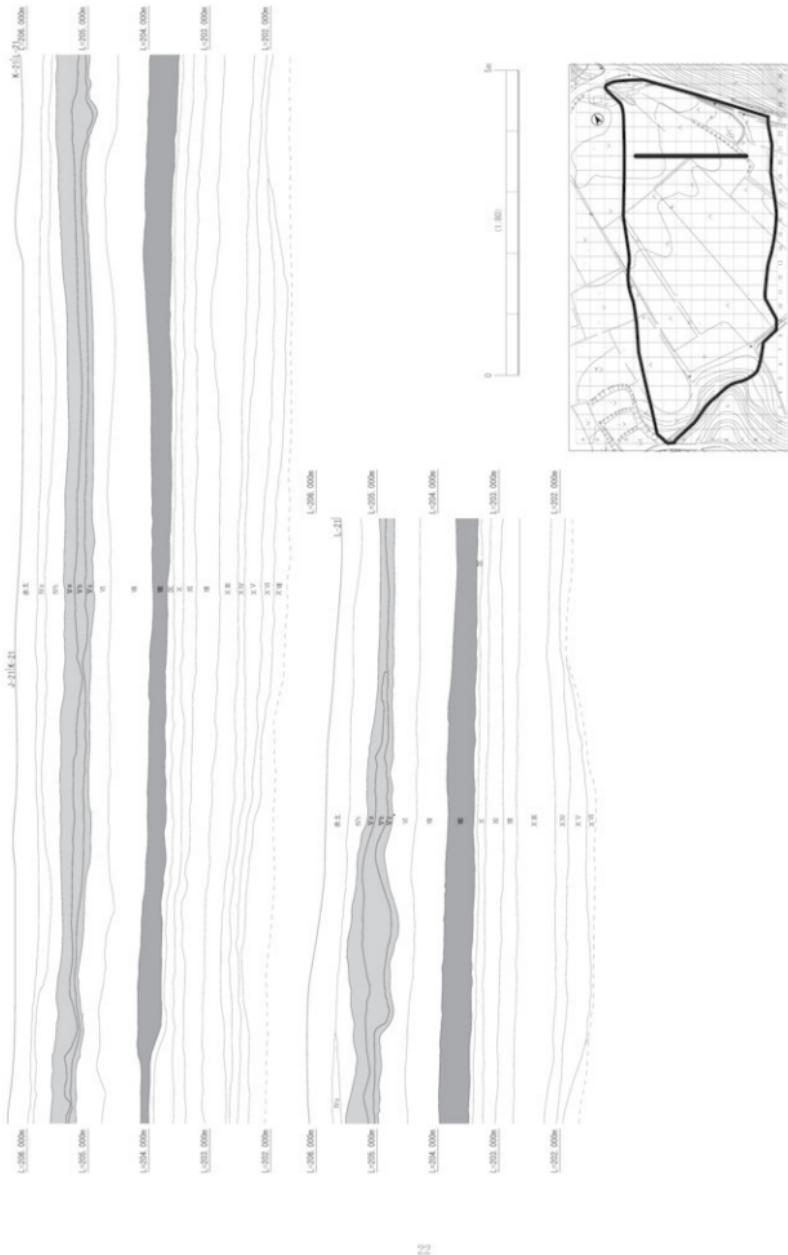


第13図 土壌断面図9 (E ~ L-16区②)



第14図 土層断面図10 (E ~ L-21区①)

第15図 土層断面図11 (E ~ L-21区2)



## 第IV章 発掘調査の成果

### 第1節 調査成果の概要

#### 1 文化層の概要

天神段遺跡では、旧石器時代から縄文時代草創期に該当する遺構・遺物がⅧ層の薩摩火山灰層下位で確認された。そのうち、IX・X層においては細石刃を主体とする石器群及び縄文時代草創期と考えられる土器・石器が、XI・XII層においてはナイフ形石器を主体とする石器群が出土した。IX・X層に関しては、縄文時代草創期と旧石器時代で明確な分層はできなかった。XIII・XIV層において遺構は検出されず、遺物と認定されたものも1点のみの出土であった。XV層は本遺跡のなかでも人為的痕跡が確認された最も下位の層であり、僅かながら遺構・遺物が確認された。XVI層以下は砂質土で、XVII層はシラスであり、その上面で調査を終了した。

本報告書では以上の状況を踏まえ、3つの文化層を認定した。第1文化層はXV～XVII層を主体とし、ナイフ形石器文化期に相当する。第2文化層はXI・XII層出土のナイフ形石器や台形石器を中心とするナイフ形石器文化期に相当する。第3文化層はIX・X層出土の細石刃核や細石刃等の旧石器時代終末期の遺物を中心に、土器や石器等の縄文時代の遺物を含む細石刃文化期～縄文時代草創期に相当する文化層である。なお、遺物は上下の層に浮遊しており、各文化層の主体となる層とは異なる層から出土したものもある。これららの遺物は帰属すると考えられる文化層の頁に掲載した。

#### 2 遺構の概要

第1～第3文化層で検出された遺構は縄群12基と炭化物集中域1箇所である。大半がXII層下部からXIII層にかけて検出された。縄群は1号縄群を除き、ほとんどが縄同士の密度が低く、掘り込みが確認された縄群は4基であった。構成縄は縄群内で可能な限り接合を試みた。

#### 3 遺物の概要

IX層以下で取り上げた遺物の総数は22,499点にのぼる。そのうち2,017点を図化し、文化層ごとに掲載した。なお、前述のとおり遺物は層位が多少上下して出土しており、IX・X層出土のナイフ形石器文化期相当の遺物は第2文化層、XI・XII層出土の細石刃文化期相当の遺物は第3文化層として取り扱った。また、縄文時代草創期の遺物についても、IX・X層を中心に出土している点から第3文化層に含めて掲載した。なお、図化していない剥片類については、XI・XII層出土のものは第2文化層、IX・X層出土のものは第3文化層にドットで提示した。

出土遺物の平面分布をみると、いずれの層もE～G-21～24区に集中する。この範囲は、旧地形で最も標高が高い位置にある。また、遺物はH～L-22～24区にかけての帯状の範囲、H～L-11～17区にやや集中域を持ち、遺跡南側の1～10区では密度が極めて低い。この傾向は、おおよそ全ての層で共通する。ただし、第2文化層（XI・XII層）、と第3文化層（IX・X層）では出土遺物の分布状況が異なり、F～M-10～18区の範囲は頗著である。出土遺物の石材・器種等のまとまりをとらえるため、広域での遺物のまとまり（エリア）とエリニア内でさらに遺物が集中する部分（集中部）を認定し、各エリア・集中部ごとに出土した石器類を掲載した。

また、石器製作過程の復元を目指して、出土石器の接合を試みた。接合に際し、出土遺物の平面分布や集中箇所を加味したまとまりを抽出し、さらにその中を小単位に分割し、隣接するまとまり間での接合を行った。その結果、476点の接合資料を得ることができた。そのうち、ツール類を接合資料に含む148点を図化した。図化しなかったツール類の接合資料に関しては、個別の石器の説明及び別添CD-ROM中の観察表に記載した。

#### 4 接合資料の表記

一部の接合資料の剥離順は、打面ごとにA, B, C…の順で記載し、色を分けて表記した。また、同一打面上での連続する剥離順については、A1, A2, A3…の順で記載した。同一打面上での剥離順の前後関係については、接合位置や剥離面の切り合い、打点の移動等から判断して記号化した。剥離順が明確に分かるものは「→」、そうでないものは「...」で前後関係を示し、また、一回の打擊で想定外の破断により複数の剥片が剥離されたいわゆるアクシデントによる剥離の場合は、それらを「+」でつなぎ、「括弧」にまとめて表記した。なお、括弧書きで表記したまとまり同士が複数接合している場合は、「([([()])])」の順で記載した。また、「[ ]」の範囲で表記したものは、分割単位を示している。

例をあげて説明する。

[(A1)…(B1→B2)]→C1→(C2+C3)→C4→D1  
上記の場合は、打面Aからは1点の剥離、打面Bでは2点の剥離があり、B1が先に剥出されている。ただし、打面Aと打面Bの前後関係は不明である。次の打面Cは、C1を剥離した後にC2・C3が剥離される。C2・C3はアクシデントによる剥離のため、2個体同時に剥離している。その後、打面CではC4まで剥離が行われ、D1が最後に残されたものである。

## 第2節 第1文化層（ナイフ形石器文化期1）

### 1 概要

第1文化層は、**XII**層以下から**XIV**層のシラス上面までの間に検出された遺構が該当する。**XIV**層～**XV**層までは被熱繩が数点出土した。また、**XV**層及び**XVI**層下部では遺構と遺物が少量確認されたが、文化層の認定には至らなかつた。しかし、遺構及び遺物とも広がりが確認できず、第2文化層（**XI**・**XII**層主体）及び第3文化層（**IX**・**X**層主体）と比較しても遺物量が圧倒的に少ない。

**XV**層では縄群1基及び炭化物集中域1箇所を検出し、上層である**XIV**層を含めて10点程の石器の可能性がある遺物を取り上げた。その後遺物を精査し、人為的な加工によると判断した残核及びフレイクの2点を図化した。

### 2 遺構（第16図）

#### 1号縄群（第17図）

H-11・12区、**XIV**層下部で検出した。約2mの範囲に142点の縄がまとまる。115cmの範囲で土層がシミ状に変色した縄が集中する部分を検出し（第17図アミカケ部分）、縄群の中心と想定して調査を行った。しかし、調査を進めた結果、縄の中心よりも西側に掘り込みが確認された。

掘り込みは平面形が東側がやや張り出した楕円形で、長軸119cm・短軸111cm・深さ17cmを測る。掘り込み内にはほとんど縄が入っておらず、掘り込みに対して東側に縄を掘き出したと考えられる。掘り込みの埋土は炭化物を含む黒褐色土で、崩壊と比較するとややしまりが弱く、軟らかい。また、周囲では多量の炭化物が検出された（図版2-②参照）。そのうち1点の年代測定を実施したところ、24180±90yrBP（較正曲線範囲外）の値が得られた。

縄は2・3cm大の小型のものが約8割を占め、一部10cm大の縄がみられる。石材のほとんどは凝灰岩で、頁岩と軽石が1点ずつ含まれる。いずれも、被熱により細かく破碎している。上層の第2・3文化層検出の縄群と比較しても、構成縄の大きさが小型である点が特筆される。構成縄の総重量は5565.0gであった。

縄群内の縄の接合を実施したことごとく、14組37点が接合した。ほとんどが隣接する2・3点が接合したものであり、大幅に離れて接合したものはなかつた。

縄群に関連する遺物は出土していない。

#### 炭化物集中域（第17図）

H-12区、**XV**層で検出した。1号縄群より5mほど離れた位置で、炭化物が集中して墨ずんだ発色をした範囲を検出した。長軸113cm・短軸75cmを測る。若干赤変した部分も認められたが、明確な範囲としてはとらえられなかつた。**XIV**層の土と比較するとややしまりが弱く、軟らかい。炭化物を多く含む埋土を掘り下げると、検出面から最大9cmほど深い皿状の形状となつた。関連する遺物は出土していない。

### 3 遺物（第18・19図）

**XII**層以下で石器と認定できた資料は少なく、**XIV**層下位出土の1と、**XV**層出土の2の2点を図化した。1は残核である。複数方向からの剥離が行われているが、目的となる石器は不明である。2は節理面を背面とした加工痕剥片である。正面の左側縁にはやや細かい剥離がみられるが、刃部を形成したような痕跡ではない。第1文化層出土の石器2点は、いずれも節理面が明瞭な頁岩Fを素材とする。

## 第3節 第2文化層（ナイフ形石器文化期2）

### 1 概要（第20図・第21図）

第2文化層は、**XI**・**XII**層主体のナイフ形石器文化に相当する時期である。遺構は縄群10基が検出された。

遺物の出土状況を踏まえ、遺物のまとまりとして20のエリアを抽出した（第21図）。エリア1～3及び5～6は、S字状の弧を描くような分布である。遺物の出土密度が最も高いD～F-21～24区にかけては、ブロック同士の境界の認定が困難であり、石器類の分布から大まかな範囲を想定した。

第2文化層に相当する接合資料は38点である。また、第2文化層で図化した個別の石器は487点、主体となる**XI**・**XII**層で取上げたチップ類（非掲載）は8,223点にのぼる。遺物はナイフ形石器、台形石器、石核、剥片を中心として少量の三棱尖頭器が確認された。

### 2 遺構

縄群が**XII**層上面で3基、**XI**層下部～**XIV**層で7基の計10基が確認された。1号縄群を除く9基はJ-21～23区に6基、K-17区に3基と、2箇所に分かれてまとまる傾向がある。縄群の形態は掘り込みが伴うものが3基、掘り込みが確認できなかつたものが7基であった。

以下では、**XII**層上面検出から**XIV**層下部検出の順に、掘り込みの有無を分けて概観する。

#### 2号縄群（第22図）

J-23区、**XII**層上面で検出した。構成縄数は16点であり、10cm大の縄の周囲に5cm大の小型の縄が広がる。縄同士の密度は低く、平面的にも重なりをもたない。石材は砂岩がほとんどで、数点凝灰岩を含む。構成縄の総重量は2270.5gである。

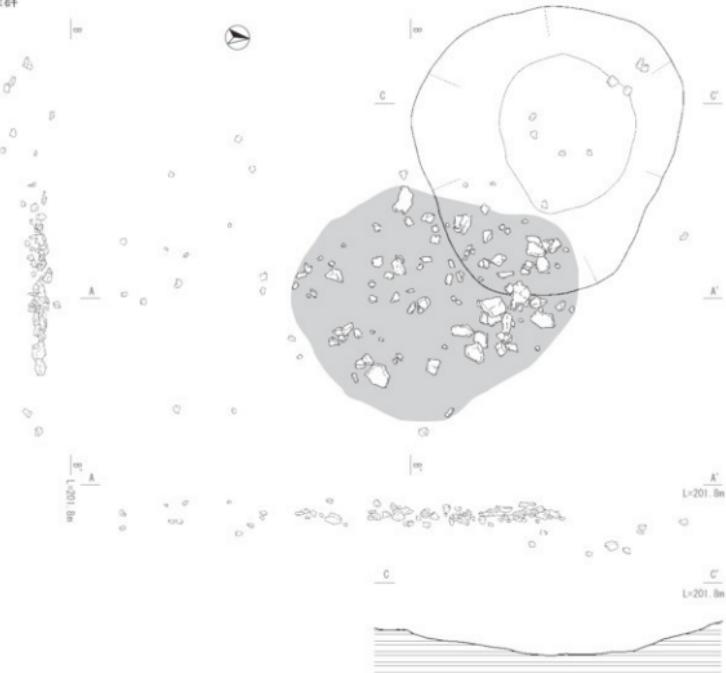
縄が広がる範囲には、不整形で浅い皿状の掘り込みが確認された。長軸111cm・最短軸75cm・深さ7cmを測る。埋土は暗褐色の粘質土である。少量の炭化物を含み、掘り込み内にまばらに広がる状況であった。

縄群内での接合を実施したことごとく、4組9点が接合した。ほとんどが隣接する数点が接合したものであり、破碎する前は10～15cm程の大きさの縄であったと想定される。



第16図 第1文化層遺構配置図

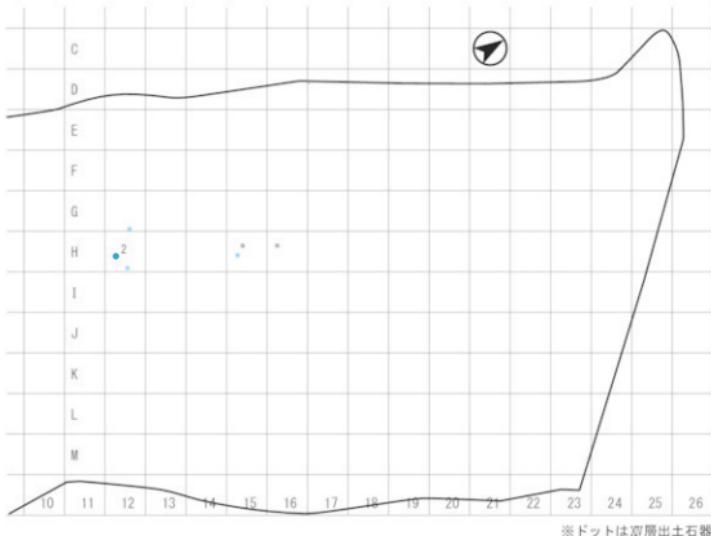
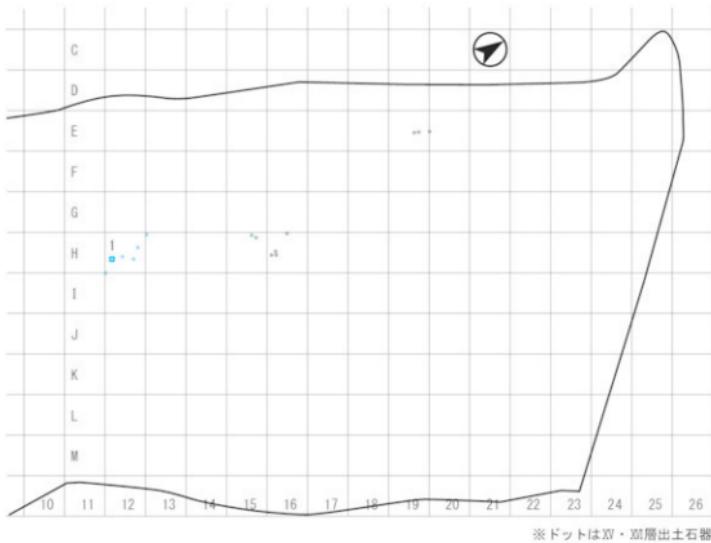
1号碟群



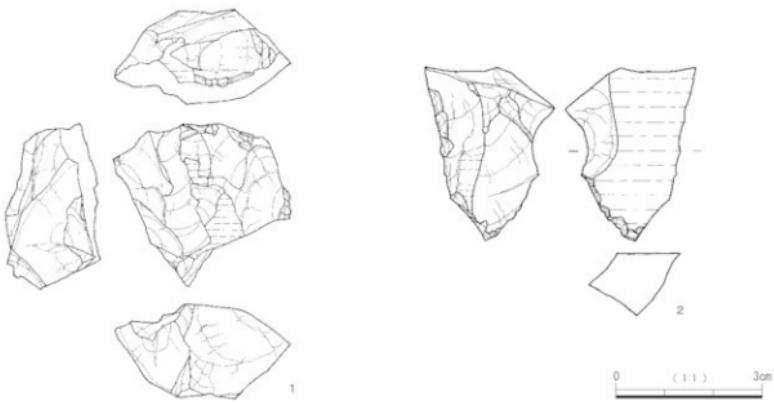
炭化物集中域



第17図 1号碟群及び炭化物集中域（第1文化層）



第18図 第1文化層遺物出土状況



第19図 第1文化層出土石器

第3表 第1文化層出土石器観察表

捕獲番号	揭露番号	取上番号	区	層	器種	石材	最大長 (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)	座標X	座標Y	座標Z	備考
19	1	44381	H12	IV下	殘核	頁岩	F	33.9	36.4	20	19.4	63.371	111.756	201.684
	2	46198	H12	VI	加工痕剥片	頁岩	F	36	26.6	15	9.8	63.827	112.739	201.921

### 3号縫群（第22図）

J-21区、XII層上面で検出した。長軸53cm・短軸35cmの範囲に縫がまとまる。構成縫数は19点で、5～8cm大の縫が主体をなす。10cmを超える縫は1点であった。石材は砂岩を主体とし、1点のみ凝灰岩であった。いずれも角縫で大半は被熱により赤変しており、風化して陥くなった縫もみられる。構成縫の総重量は2030.5gであった。

他の縫群よりも縫はまとまっているが、重層的ではなく、掘り込みも確認されなかつた。また、炭化物も検出されなかつた。縫群内での接合を実施したところ、4組12点が接合した。いずれも隣接する数点が接合したもので、破碎する前は10cm程の大きさの縫であったと想定される。

### 4号縫群（第22図）

J-22区、XII層上面で検出した。長軸72cm・短軸53cmの範囲に縫がまとまる。縫同士の密度は低く、重なりをもたない。構成縫数は12点で、5～8cm大の縫が主体をなし、構成縫の点数は少ないが縫の大きさはそろっている。石材は全てやや角の取れた凝灰岩の角縫であり、被

熱により赤変したものもある。総重量は2517.0gである。掘り込みや炭化物等は確認されていない。

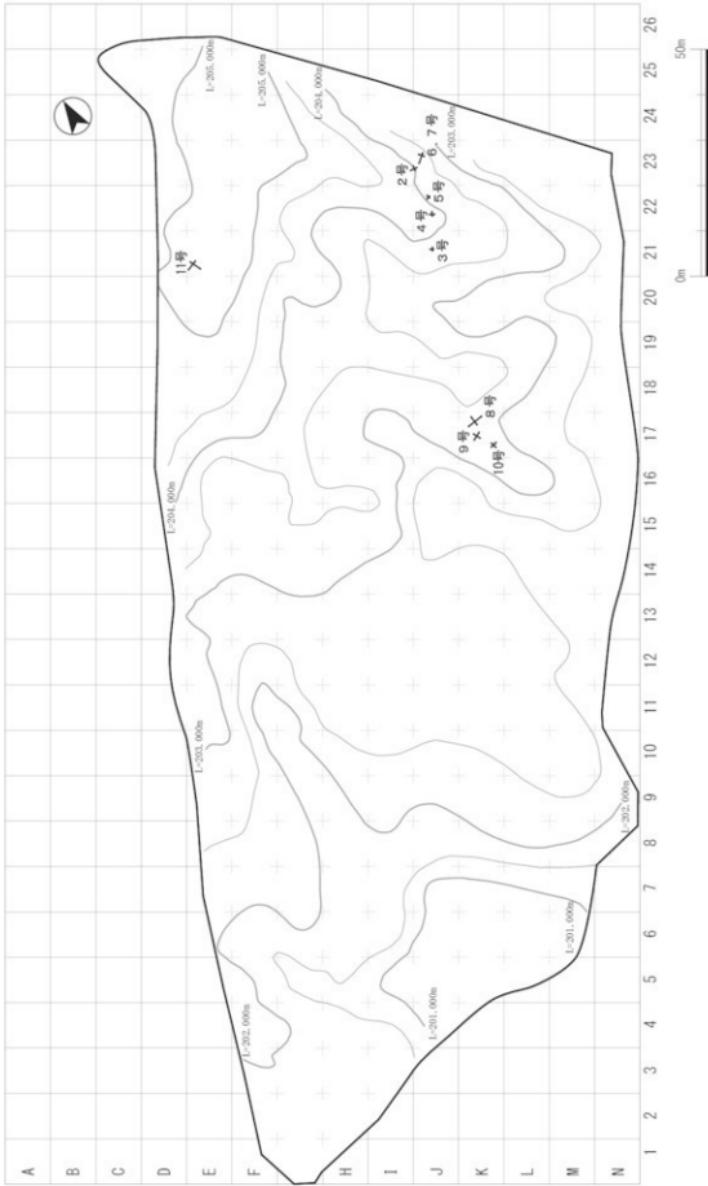
縫群内での接合を実施したが、接合したものはなかつた。また、隣接する5号縫群と接合したものもなかつた。被熱等で破碎した縫がほとんどみられない点からも、ほぼ原形を留めていると想定される。

間接する遺物としては、砂岩と黒曜石（産地不明）のチップが出土し、図中にドットで示した。

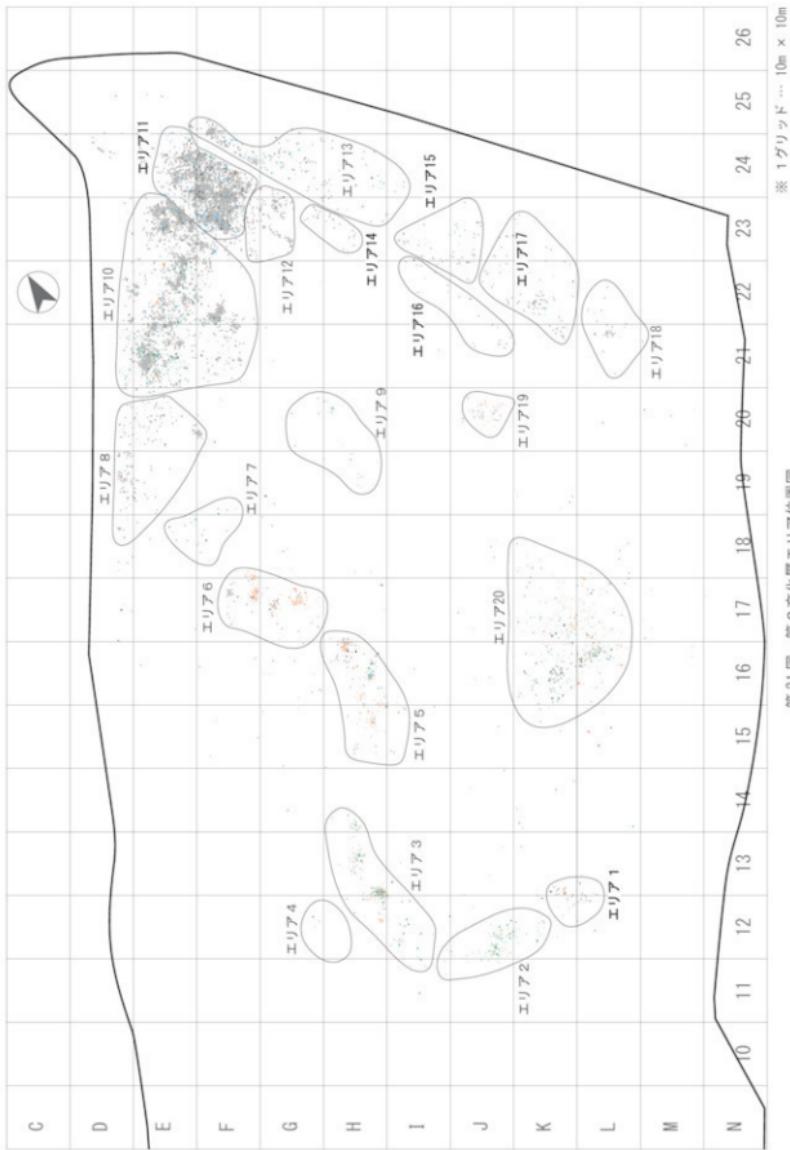
### 5号縫群（第22図）

J-22区、XI層下部～XII層上面にかけて検出した。長軸43cm・短軸35cmの範囲に縫がまとまる。構成縫数は12点で、砂岩の角縫が用いられている。全ての縫が被熱により赤化し、一部は破碎している。密度が高い部分は縫同士に重なる部分があるが、重層的ではない。総重量は、1212.5gである。

検出状況では縫の大きさにはらつきがあったが、縫群内での接合を実施したところ、2組10点が接合した。その結果、縫は全て約10cmの大きさとなり、本来はほぼ同じ大きさの縫が用いられていたといえる。掘り込み、焼土、炭化物等は確認されていない。



第20圖 第2文化層遺跡群配置圖



第21図 第2文化層エリア位置図

※ 1グリッド … 10m × 10m

## 6号縫群（第22図）

J-23区、XI層下部で検出した。7号縫群と隣接して検出され、形態もほぼ同様である。

掘り込みは径約45cmの円形で、深さ5cmを測る。内部および周囲で4点の縫が出土した。構成縫は5cm大であり、やや丸みを帯びた凝灰岩が1点、それ以外は砂岩の角縫が用いられている。なお、掘り込みからさらに南側に離れて1点縫が確認された。総重量は498gである。

縫群内での接合を実施したところ、1組3点（砂岩）が接合した。また、掘り込みから離れた1点は7号縫群内の縫と接合した。7号縫群と縫の質感が類似している点や接合後の大きさも7～8cm大でそろっている点を考慮すると、両者はほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

## 7号縫群（第22図）

J-23区、XI層下部で検出した。掘り込みは長軸63cm・短軸57cmの円形で、深さ11cmを測る。内部および周囲で13点の縫が出土し、やや丸みを帯びた凝灰岩が5点、砂岩の角縫が8点であった。砂岩はほとんどが被熱により赤変しており、破碎したものもみられる。凝灰岩はいずれも角が取れおり、やや丸みを帯びる点は類似するが、質感は全く異なる。縫の大きさは5～8cm大と2～3cm大の2つに大別できる。総重量は854.9gである。

縫群内で接合を実施したところ、3組9点が接合した。そのうち、掘り込み内で最も西側にある縫3点は、6号縫群の南側に離れて出土した縫と接合した。

## 8号縫群（第23図）

K-17区、XI層下部で検出した。構成縫数は22点で、長軸263cm・短軸228cmの範囲に広がる。縫は5cm大のやや角が取れたものが主体を占め、縫間の密度は低い。石材および構成縫の総重量は不明である。掘り込み、焼土、炭化物等は確認されなかった。

関連する遺物としては、3の水晶Bの剥片が出土した。上位の平坦面からの剥離が行われているが、端部などに細かい加工痕はみられない。比較的大型の剥片である点からも、石器素材利用の目的で剥離された可能性がある。

## 9号縫群（第24図）

K-17区、XI層下部で検出した。長軸138cm・短軸90cmの範囲に縫が広がる。構成縫数は14点であり、縫同士の重なりはない。同一区で検出された8号・10号縫群も同様の形態である。構成縫は5cm大と10cm大に大別され、前者は凝灰岩、後者は頁岩と安山岩である。また、頁岩および安山岩は細長い形態である。このような形態の安山岩を利用した縫群は、9号縫群のみである。構成縫は破碎しているが、被熱による赤変はみられない。総重量は1411.5gである。

縫群内で接合を実施したところ、3組8点が接合した。比較的近接した縫同士が接合していたが、凝灰岩のみは20cm程離れた3点が接合した。接合後の大きさは各石材

ごとに異なっている。また、隣接する10号縫群の構成縫と接合したものはなかった。掘り込み、焼土、炭化物等は確認されなかった。

## 10号縫群（第24図）

K-17区、XI層下部で検出した。長軸84cm・短軸65cmの範囲に縫が散在する。構成縫数は8点で、縫間の密度は非常に低く、縫同士の重なりはない。石材は全て凝灰岩で、5～8cm程の角縫や角の摩耗した亜角縫である。数点が被熱により赤化している。総重量は901.0gである。

縫群内での接合を実施したところ、1組2点が接合した。接合した縫は隣り合っており、赤化がみられる点からも被熱により破碎したものと想定される。掘り込みや焼土、炭化物等は確認されなかった。

## 11号縫群（第24図）

E-21区、XI層下部で検出した。第2文化層の他の縫群とは地点を隔てている。長軸88cm・短軸70cmの範囲に縫がまとまる。構成縫数は16点で、8cm程の風化した角縫を主体とし、3cm程のものが混ざる。やや密集部分がみられるが、重なりはわずかである。構成縫は凝灰岩を主体とし、総重量は1,882gを測る。縫群の中心及び周辺では炭化物が多く検出されたが、掘り込みは確認されていない。

調査時に11号縫群の周辺では縫が散在しており、本来はより多くの縫群が存在した可能性も考えられるが、まとまりをもっていたのは本縫群のみであった。

## 3 遺物

### (1) エリア1（第25図・第26図）

エリア1は、K・L-12・13区に位置する。K区にやや遺物が集中する。石材は水晶や玉髓、黒曜石が目立つ。接合資料は隣接部で1点確認された。エリア周辺では上層でナイフ形石器及び台形石器が出土しており、本エリアで掲載した。

#### 接合資料

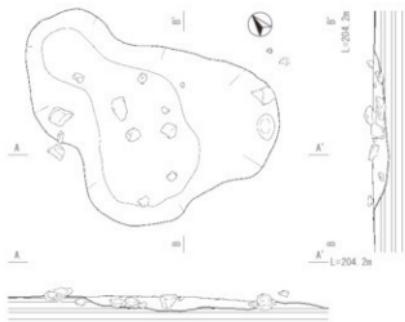
接合資料1（SG143） エリア1に隣接するK-13区内での接合資料で、折断剥片の頭部及び中間部の2点の接合資料である。石材は玉髓Bである。中間部が台形石器に加工されている。接-1は折断面を側縁とし、右側縁上部に腹面方向からの複数回のプランディングが施される。

#### エリア内出土遺物

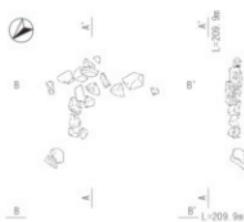
4点を図化した。いずれも台形石器である。

4・5・7は、不定形剥片を素材とする。4・5は腹面、7は背面からプランディングが施される。6はやや基部から体部が抉れたような形態であり、腹面右側縁部に微少剥離がみられる。

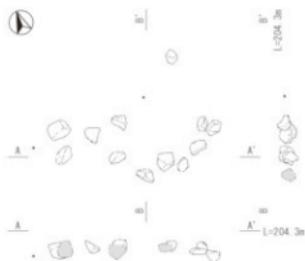
2号裸群



3号裸群



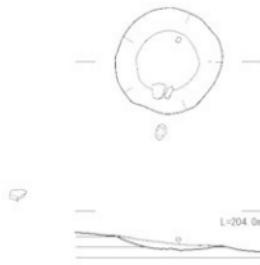
4号裸群



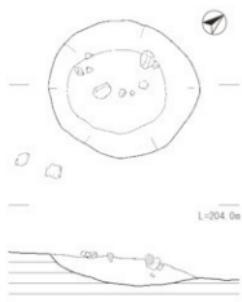
5号裸群



6号裸群

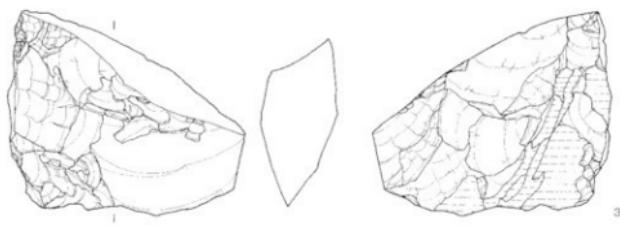
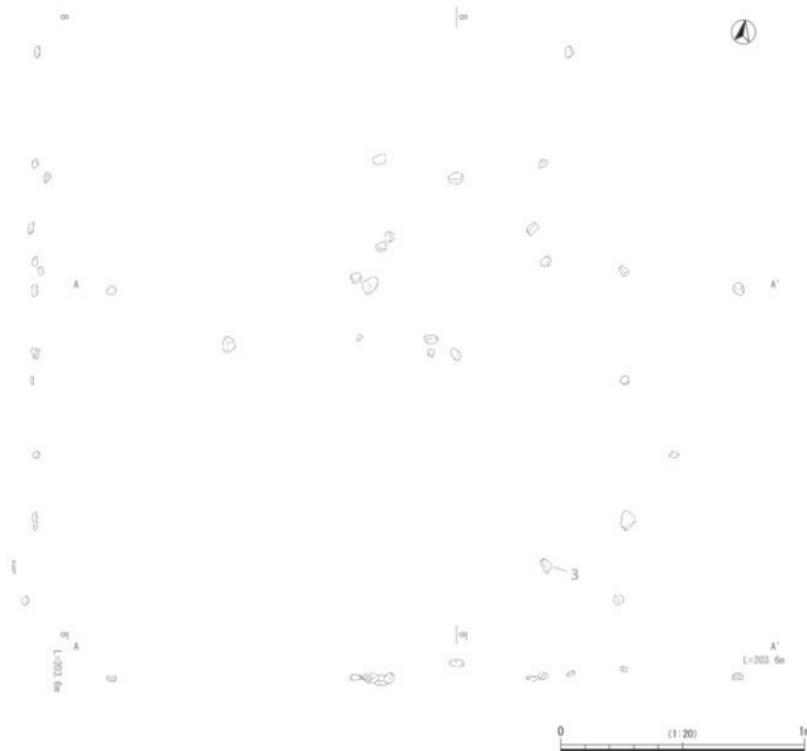


7号裸群



0 (1:20) 1m

第22図 2号～7号裸群



第23図 8号縕群・出土石器

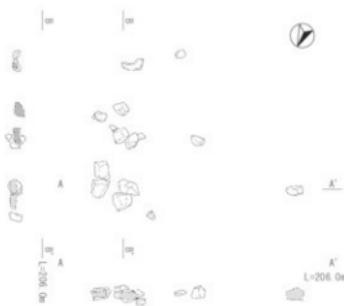
9号砾群



10号砾群



11号砾群

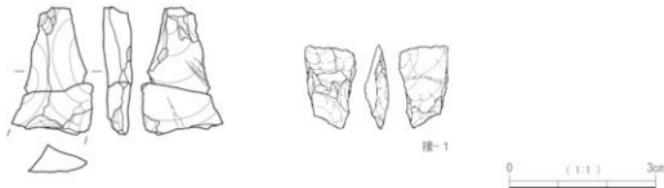


0 (1:20) 1m

第24図 9号～11号砾群



接合資料 1



第 25 図 エリア 1 遺物・接合資料出土状況・接合資料



第26図 エリア1関連出土遺物

#### エリア周辺の出土遺物

エリア1の周辺では、ナイフ形石器、台形石器、剥片が出土した。

8はナイフ形石器で、基部の両側縁に腹面方向からプランディングを施し、先端部は切出し形に仕上げられている。9～11は台形石器である。10は折断剥片を素材とする。いずれも腹面からのプランディングが施される。12は先端部に微少剥離がみられる剥片である。

#### (2) エリア2 (第27図～30図)

エリア2は、I～K-11・12区に位置する。J-12区を中心に2つの集中部を認定した。接合資料は3点である。石材は水晶が大半を占め、玉飾が次いで割合が高い。また、図化した石器もほとんどが水晶を素材とし、周辺のチップ類の石材分布とも整合的である。

#### 接合資料

接合資料2 (SG254) 集中部aで出土した石核と剥片の計2点の接合資料である。石材は水晶Aである。

接合資料3 (SG255) 集中部aで出土した接合資料で、ナイフ形石器が2点に欠損したものが接合する。横長剥片を素材とし、刃部は節理面が広く残る。石材は水晶Aである。

接合資料4 (SG123) 集中部a・b間を主体に接合する石核と調整剥片3点の計4点の接合資料である。石材

は水晶Aで、両側縁に自然面が残る。

接合資料5 (SG072) エリア内及びエリアに隣接して出土した剥片12点の接合資料である。石材は頁岩Fである。対峙する二方向から剥離した剥片が接合している。分割面を境に3点と9点に分かれ。異なる二方向で剥片剥離を行い、接合資料5-2のまとまりでは剥出した剥片を二次加工し、ナイフ形石器を作成している。

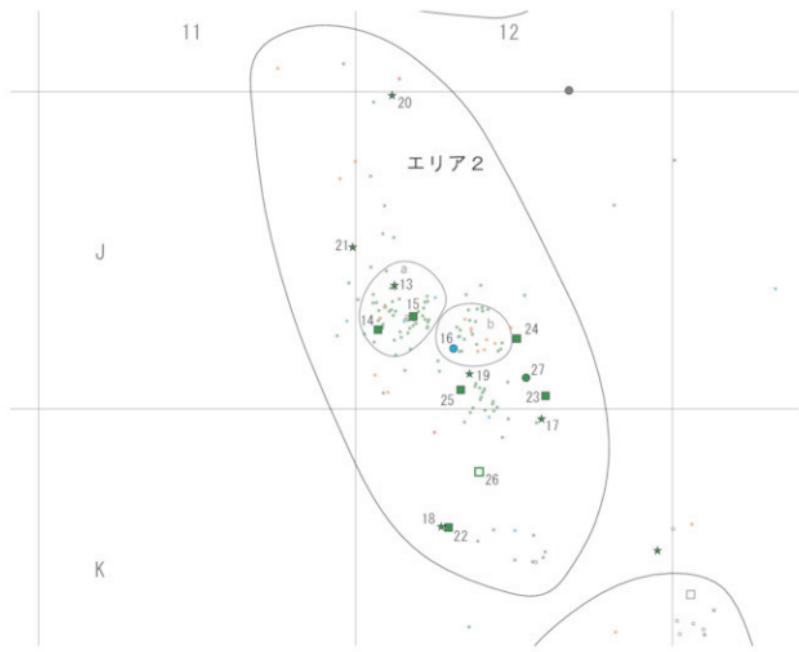
#### 集中部a・b出土遺物

集中部a出土の3点、集中部b出土の1点の計4点を図化した。13は小型のナイフ形石器である。腹面方向から、やや大ぶりのプランディングが施されている。先端部は欠損している。14・15は台形石器である。共に腹面からのプランディングが施される。14は折断剥片を素材とする。15は刃部の右上部が欠損する。いずれも水晶Aを素材とするが、15のみ結晶質が強く、透明度が低い。

16は集中部bから出土した頁岩Aの折断剥片である。

#### エリア内出土遺物

11点を図化した。17～21はナイフ形石器である。17は水晶Aを素材とし、側縁及び下縁には節理面が残る。右側縁に小剥離が加えられ、先端を鋭く仕上げている。18は左側縁に劈開面を残す。19は刃部がやや分厚く仕上げられており、基部は端部から欠損する。20は左側縁部、21は右側縁部下半に腹面からプランディングが施される。また、21は横長の剥片を素材としており、右側縁部上半



第27図 エリア2遺物出土状況

は背面から、下半は腹面からプランディングが施される。

22～25は台形石器である。22は両側縁とも腹面からプランディングが上位まで施される。また、腹面は劈開面から剥離している。23・24は長身であり、いずれも刃部が刃こぼれ状に欠損する。また、24は左側縁は背面・腹面の2方向、右側縁は腹面からプランディングが施されている。25は両側縁に腹面からプランディングが施される。基部は欠損する。ナイフ形石器・台形石器とも小型で水晶Aを素材とするものが多い。

26は水晶Bの石核である。XI層出土として第2文化層に含めたが、プランクの可能性もある。27は紙長の剥片素材の折断剥片頭部である。

### (3) エリア3（第31～34図）

エリア3は、H・I-11～14区に位置する。帯状の範囲に遺物密度が高い範囲が連なり、4つの集中部を認定した。接合資料は1点である。石材は水晶が目立つが、

集中部bには玉髄がみられる。出土したツール類の大半は、水晶を素材とする。

#### 接合資料

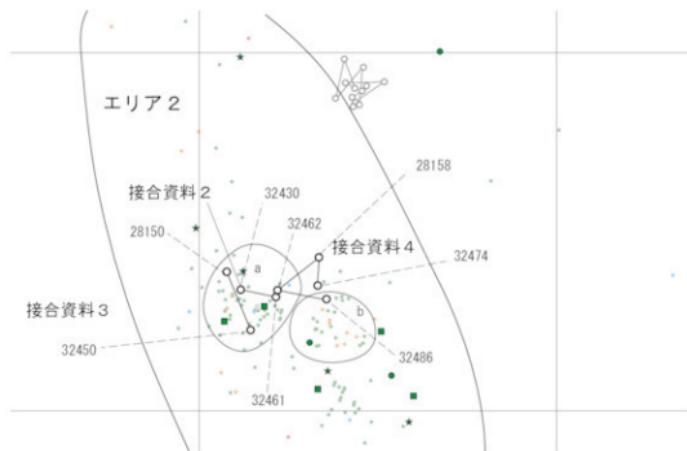
**接合資料6 (SG224)** 集中部cとエリア内で出土した石核と調整剥片の2点の接合資料である。石材は水晶Aで、小型ナイフ形石器を製作するための剥片剥離が目的と考えられる。調整剥片は集中部cで出土し、接-2の石核がやや離れて出土した。

#### 集中部a

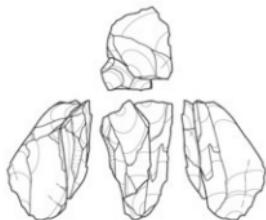
3点を図化した。28は台形石器である。不定形剥片を素材とし、腹面からプランディングが施される。29・30は石核であり、実測後接合した。水晶Bの分割礫を素材とし、不定形剥片の剥出が目的と考えられる。平坦な分割面を打面とする。

#### 集中部b

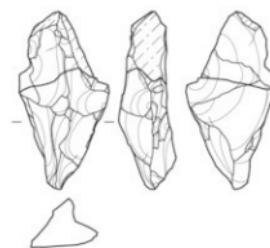
5点を図化した。31～33は台形石器である。31は右側縁に腹面からプランディングが施され、背面には両側



接合資料 2



接合資料 3

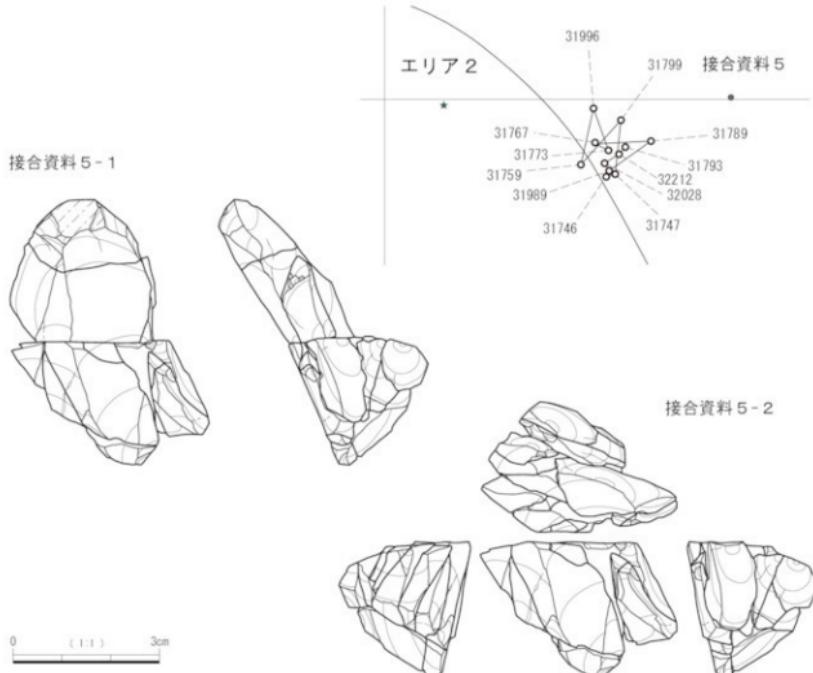


接合資料 4



0 (1:1) 3cm

第 28 図 エリア 2 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)



第29図 エリア2 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

縁からの平坦剥離が加えられる。32は斜刃で、側縁部と下縁の3面が腹面からプランティングが施されている。33は右側縁が素材剥片の打点にあたる。実測後、石核及び剥片と接合した。

34・35は石核で、いずれも水晶Aである。34は小型の石核で、打面は平坦である。小形剥片の剥出を目的としたものか、あるいはプランクの可能性がある。35は劈開面が多く残り、右側縁部を中心に剥離が行われている。

#### 集中部c

3点を図化した。36は台形石器で、刃部の先端がやや欠けている。37・38は石核である。37は残核と考えられる。38は黒曜石Cに近い石材であり、打面は平坦で背面に調整剥離がみられる。

#### 集中部d

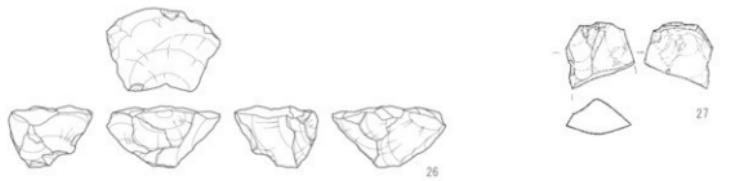
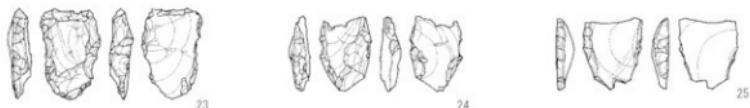
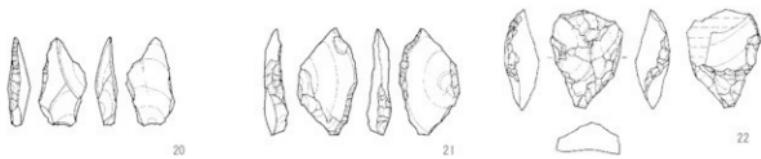
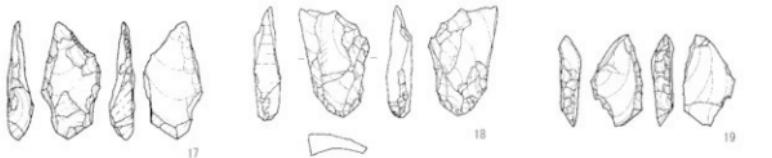
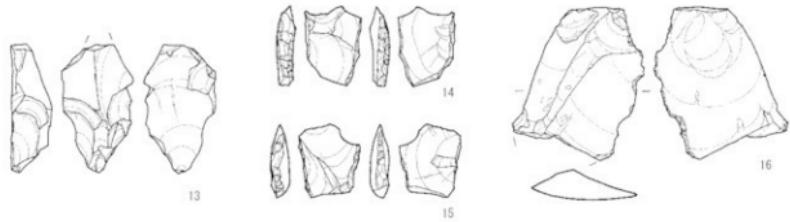
3点を図化した。39は折断剥片を素材とし、腹面からプランティングが施される。40・41は石核である。いずれも水晶Aを素材とし、打面及び背面に結晶面や劈開面

を残す。不定形剥片の剥離が目的と考えられる。なお、41は実測後下縁に剥片が1点接合した。

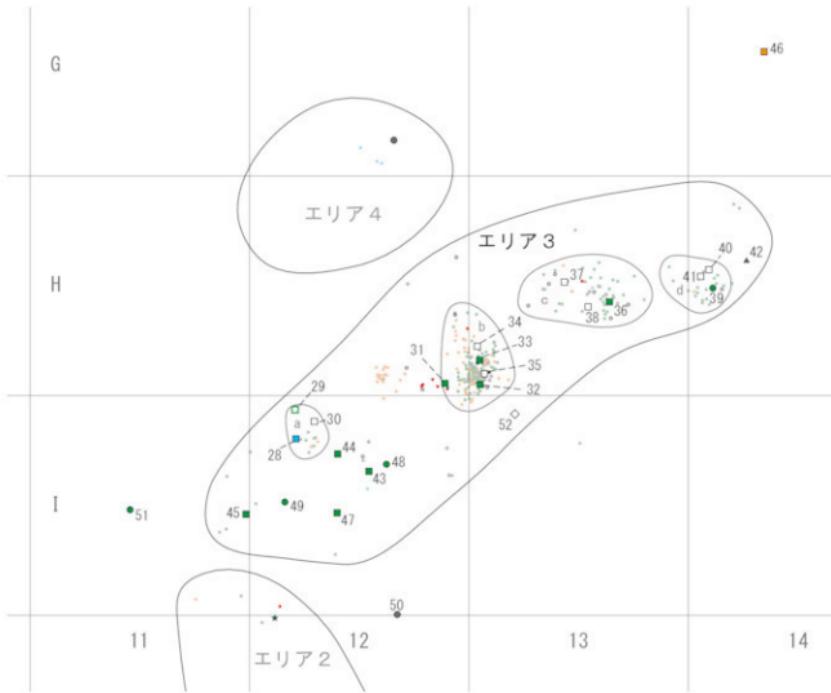
#### エリア内及びエリア周辺出土遺物

11点を図化した。46・50・51はエリア周辺で出土した。42は三棱尖頭器である。腹面に側縁からの平坦剥離が行われている。下半は欠損する。43～47は台形石器である。43は上部が欠損する。両側縁とも背面・腹面の双方からプランティングが施される。44は劈開面を左側縁とし、右側縁は腹面からプランティングが施される。刃部中央がわずかに欠損する。45は小型で基部が細く整形される。46は玉髓Bの薄い横広剥片を素材とする。右側縁は背面、左側縁は腹面からプランティングが施される。47は右側縁に一部プランティングがみられ、腹面の右側縁には平坦剥離が数回行われる。

48・50・51は二次加工剥片である。48は両側縁とも腹面からプランティングが施されており、ナイフ形石器の可能性もある。50は厚めの剥片を素材とし、右側縁を中



第30図 エリア2関連出土遺物



第31図 エリア3遺物出土状況

心に腹面からのプランティングがみられる。51は二等辺三角形状を呈し、左側縁及び下縁に細かい調整がみられる。

49は水晶Aの縦長剥片である。52は多孔質安山岩を素材とした台石片で、両面が摩滅している。

#### (4) エリア4（第35図・第36図）

エリア4は、G・H-11～12区に位置する。遺物密度はやや高いが、接合資料以外の石器の集中部はなかった。接合資料が1点確認された。なお、エリアを構成するほとんどの遺物は、接合資料に関連する。

#### 接合資料

**接合資料7（SG014）** エリア内で出土した二次加工剥片と不定形剥片17点の計18点の接合資料である。灰白色の細粒砂岩（砂岩A）を素材とする。いずれもIX・X層からの出土であるが、第2文化層に含めた。剥片剝離の規則性はみられず、左側縁から剝離を開始し、打点を

移動しながら剝離が行われたと考えられる。

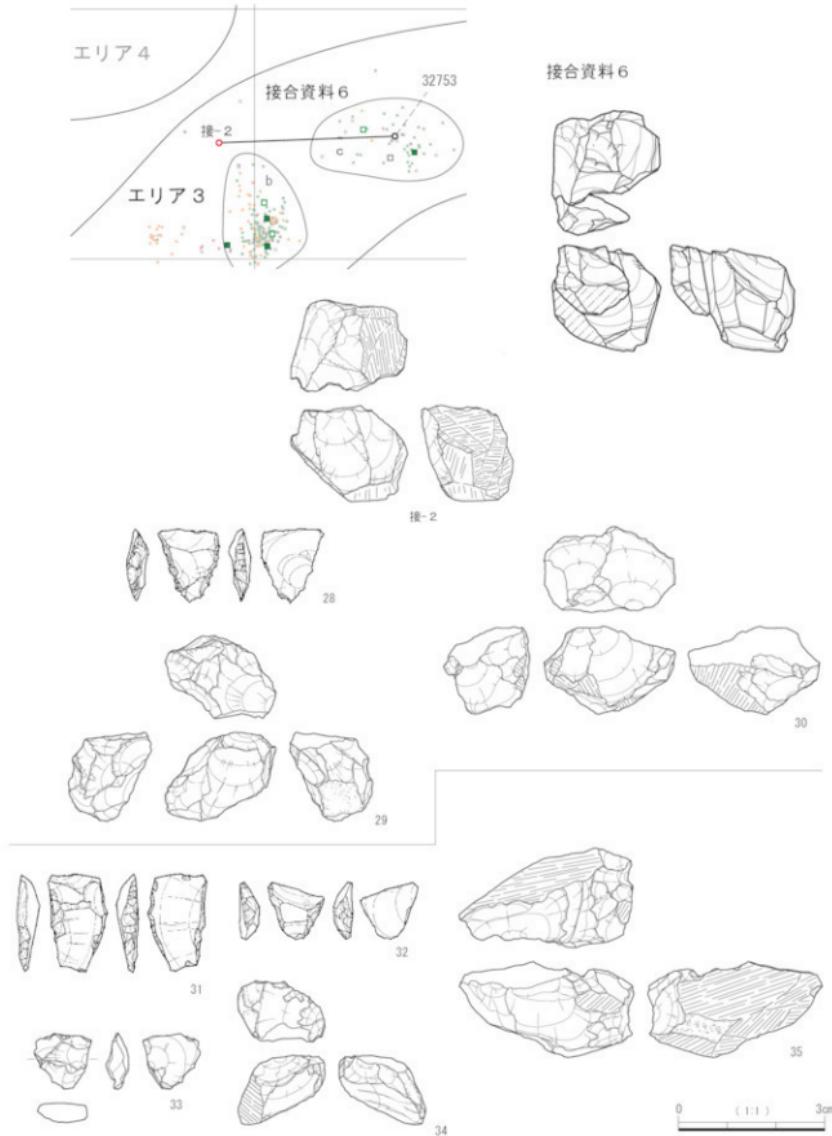
接-3は、表裏で異なる打点からの剝離で作出された横長の剥片を素材とした搔器の可能性もある。腹面側から側縁部に二次加工を施している。下縁及び復縁にはほとんど調整は加えられない。

#### エリア内出土遺物

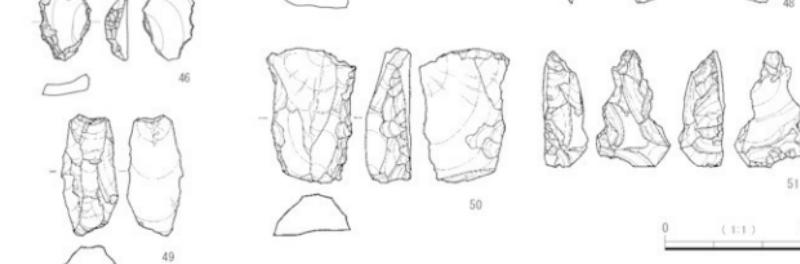
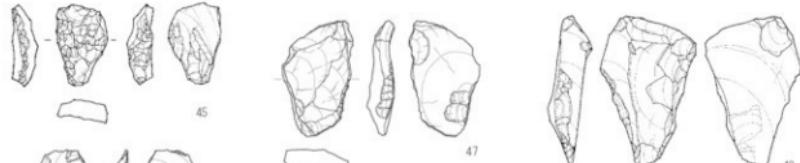
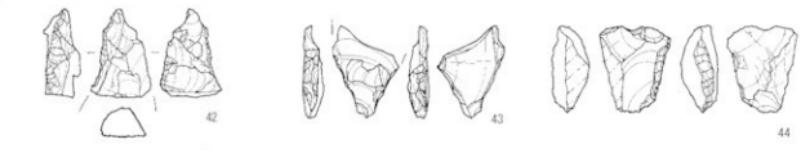
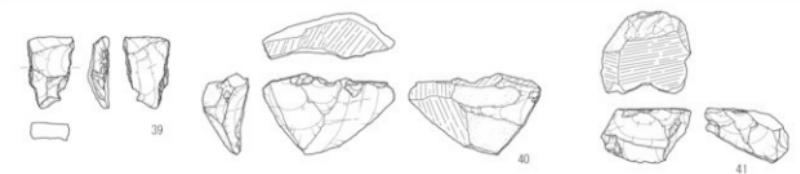
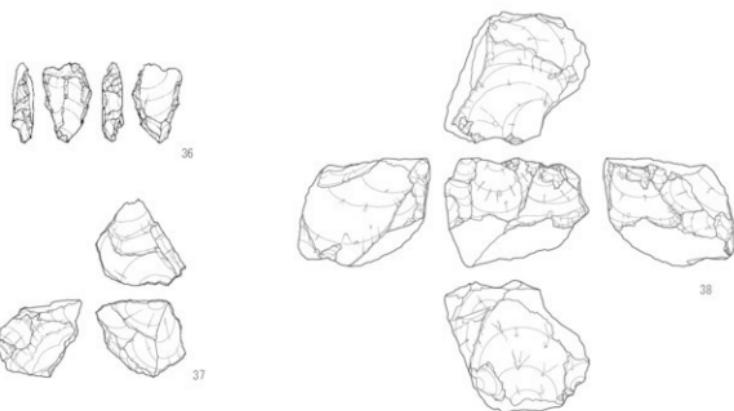
53は二次加工剥片である。縦長の剥片を素材として左側縁にプランティング状の剝離がみられるが、詳細は不明である。先端が欠損する。

#### (5) エリア5（第37～43図）

エリア5は、H・I-15～17区に位置する。5つの集中部を認定した。接合資料は、エリア隣接地の接合資料を含めて5点である。石材はいわゆる集中部も、玉髓が主体を占める。しかし、接合資料及びエリア内の石器は玉髓に偏ってはない。一方、集中部dは水晶の割合が高く、出土した石器類も水晶を素材としたものが多い。

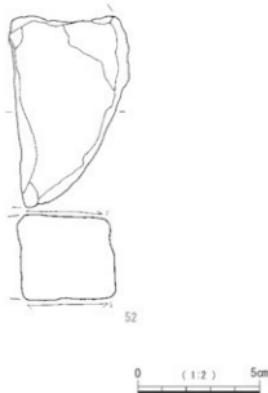


第32図 エリア3 接合資料出土状況・接合資料・関連出土遺物[1]



0 ( 1 : 1 ) 3cm

第33図 エリア3関連出土遺物②



第34図 エリア3関連出土遺物(3)

#### 接合資料

**接合資料8 (SG087)** 集中部dとエリアに隣接して出土した石核と不定形剥片の接合資料である。IX層～XII層までの4つの層にわたって出土した5点が接合している。素材は玉髓Bである。打面を変えながら剥片が剥出されている。接-4は石核で、平坦な打面から不定形剥片が剥出されている。

**接合資料9 (SG061)** 集中部dで出土した3点の剥片の接合資料で、石材は頁岩Gである。3点いずれも打面が異なり、最初に剥離した面から180度打面転移して1点、さらに180度転移して剥片1点が剥離される。なお、最後の打面から剥離された剥片は折れにより上部が欠損する。

**接合資料10 (SG176)** 集中部aに隣接するI-14～16区にかけて出土した石核と剥片5点の計6点の接合資料である。石材は頁岩Dウである。接-5は側面観が円錐形を呈し、剥片の接合状況から剥片剥離の進行過程が復元できる。接-6は素材剥片であるが、両側縁とも腹面からやや大ぶりのプランディングが施されており、台形石器の可能性もある。

**接合資料11 (SG226)** エリアに隣接するH-14区から出土した二次加工剥片とそれに伴う基部調整剥片の計2点の接合資料である。石材は砂岩Cである。接-7は右側縁部に背面から、腹面には側縁から平坦剥離を施した後、基部加工を行い、右上部を刃部とするナイフ形石器を製作したものと考えられる。

**接合資料12 (SG003)** エリアに隣接するG-15・16区で出土した剥片2点の接合資料である。石材は頁岩Aである。平坦な打面から連続して剥離された「ノ」の字状を

呈する剥片で、ナイフ形石器等の素材剥片として作出されたと考えられる。

#### 集中部a～c

各集中部から1点ずつを図化した。54は集中部aから出土した台形石器で、斜刃で切出し形に近い。左側縁に腹面からプランディングが施される。また、腹面先端部に小規模な剥離がみられる。55は集中部bから出土した黒曜石Dを素材とした石核である。角錐状の自然面を、背面及び上面に残す。56は集中部cから出土したナイフ形石器で、刃部を欠損していると考えられる。左側縁には腹面からプランディングが施される。

#### 集中部d

4点を図化した。57は二次加工剥片で、上端の剥離や下端部に剥離調整がみられる。58～60は石核である。58は亜円錐状の水晶Bの自然面を打面とし、小形剥片の剥出を目的としたと考えられる。2点の剥片が接合したが、実測は行っていない。59は詳細不明であり、石材の質も不良である。60は側縁からの剥離で打面を作り、下端部には敲打痕がみられる。XI層からの出土であるため第2文化層に含めたが、プランクの可能性もある。頁岩Gの亜円錐であり、母岩は5cm程の大きさと推定される。

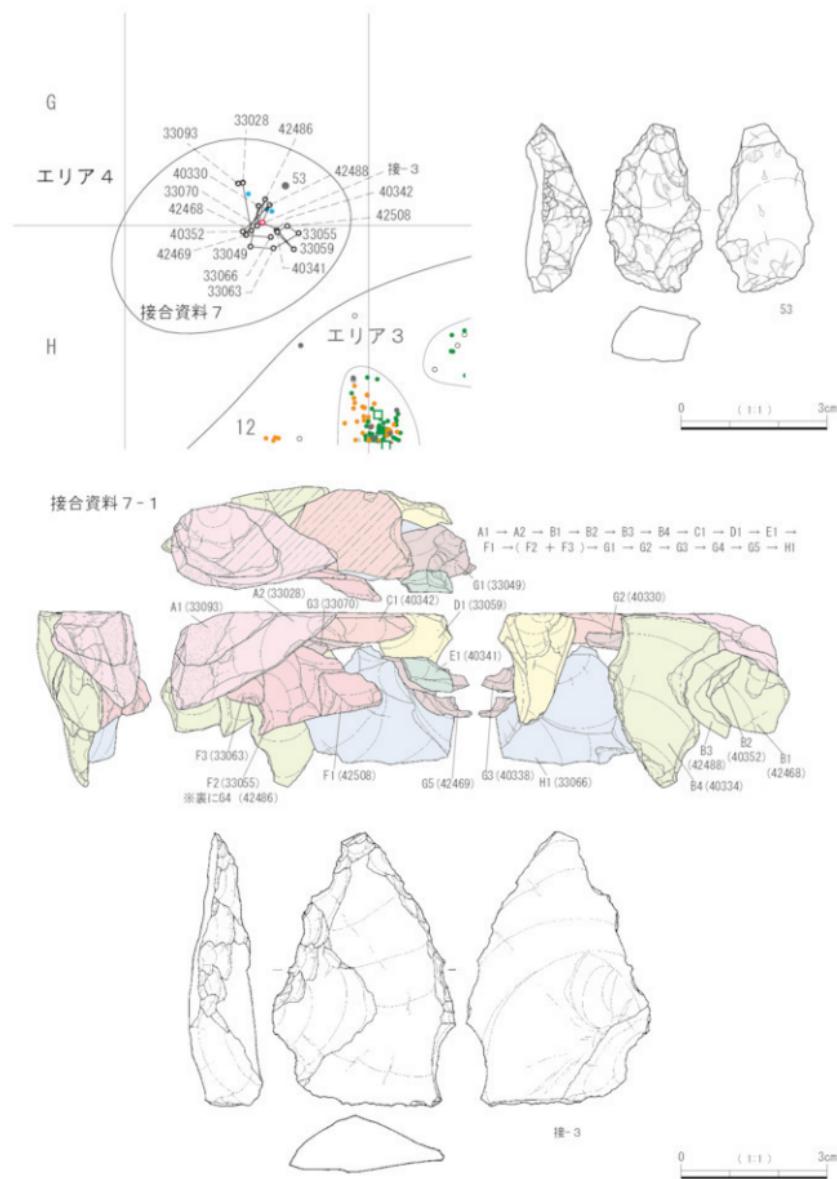
#### 集中部e

4点を図化した。61はナイフ形石器である。下端から右側縁に自然面が残り、左側縁には腹面から細かいプランディングが施される。62～64は台形石器であり、共通して腹面からプランディングが施される。62は黒曜石Dを素材とした不定形剥片を素材とする。背面には自然面を部分的に残す。63はチャートを素材とし、右側縁部は自然面を残す。やや厚めの素材剥片を用いている。64は継長の形状を呈し、背面に自然面が残存する。右側縁は折断面である。

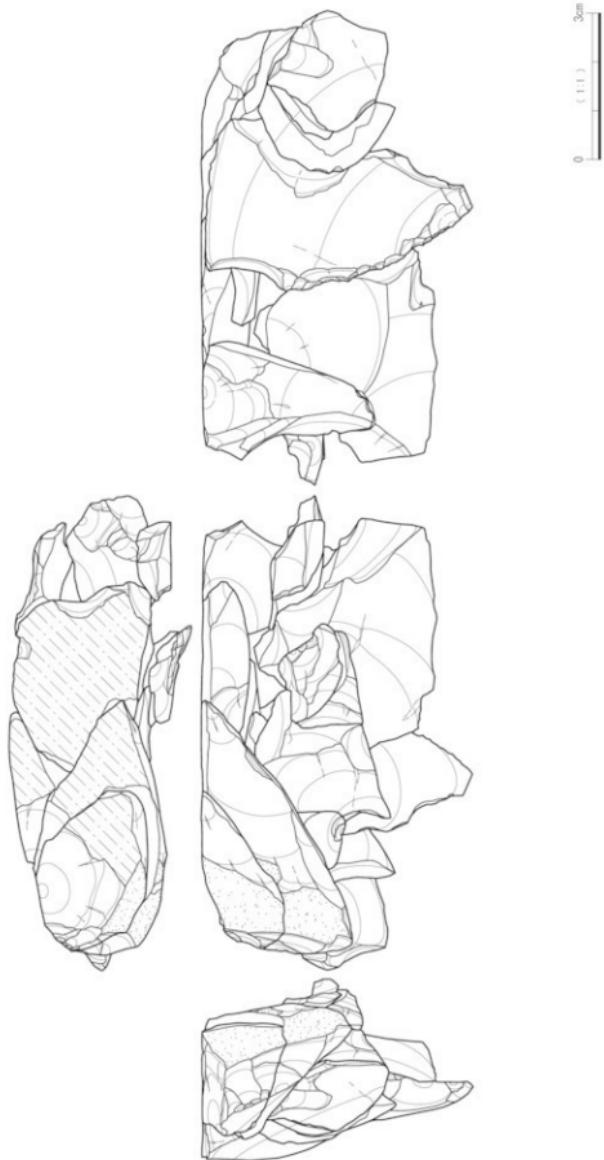
#### エリア内及びエリア周辺出土石器

6点を図化した。65はエリア周辺で出土し、黒曜石Bを素材としたナイフ形石器である。天神段遺跡のナイフ形石器の中では、比較的大型である。右側縁を刃部とし、腹面側の右側縁部に連続したプランディングが施される。

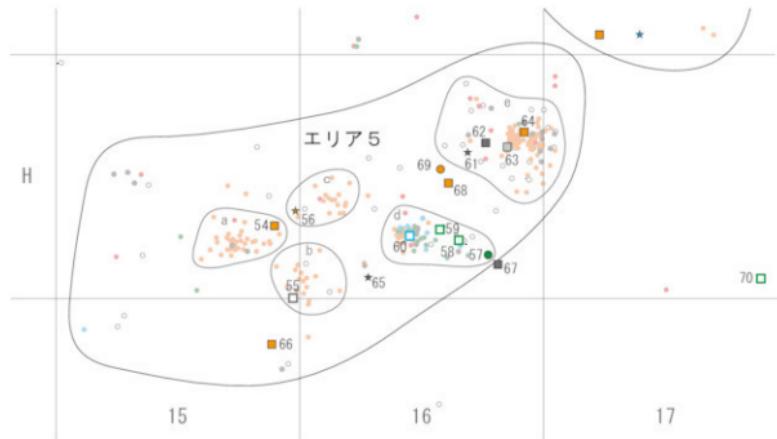
66～68は台形石器である。66は継断面が三角形状を呈し、厚みがある。腹面からのプランディングが施される。67は左側縁に自然面を残し、刃部は先端から複数回の細かい剥離が行われている点が特徴である。右側縁はガジリ痕と思われる。68は腹面からプランディングが施される。69は剥片で、背面右側縁に連続した微妙剥離痕がみられる。70は左側縁に自然面を残す石核で、不定形剥片を剥離したものと考えられる。



第35図 エリア4接合資料出土状況・接合資料(1)・関連出土遺物



第36図 エリア4 接合資料(2)



第37図 エリア5遺物出土状況

#### (6) エリア6（第44～50図）

エリア6は、F・G-16～18区に位置する。3つの集中部を認定した。接合資料は4点である。石材はいずれの集中部でも玉髓が主体を占め、一部に黒曜石がみられる。エリア6では接合資料を中心に玉髓を素材とした石器が目立ち、石材の分布とも整合的である。

##### 接合資料

**接合資料13 (SG021)** 集中部cを中心、H-17区までの範囲で接合する石核と剥片の計17点の接合資料である。石材は玉髓Bである。節理に沿って分離する2つの石核が、それぞれ剥片剥離される。剥片のほとんどは集中部c内で出土しているが、最終的な石核である接-8は離れてエリア外から出土している。

接-8を含む打面D～Gの単位は小型の不定形剥片の剥出を目的としたもので、打面は節理方向と直行する。縦長剥片の大きさは、長さ2～3cm程度と考えられる。その後、背縁に打面転移を行い、さらに小さい剥片剥離が加えられる。この剥離は小型剥片の剥出か、あるいは打面調整の可能性がある。一方、打面A～C側の石核からは、長さの短い不定形剥片が剥離されている。

**接合資料14 (SG065)** エリア内を主体としG-15区に飛び地的に1点出土した計13点の接合資料である。石材は頁岩Dアである。やや角を持つ水摩された原礫を素材としたもので、複雑な節理に沿って分割される。初めにA1を剥離し、背面側から縦軸に沿って剥片剥離が行われる。接-9は中央部が厚いベン先状のナイフ形石器で

ある。左側縁の基部から先端部に腹面方向からプランディング状の加工がみられる。接-9のみが、単独に出土している。

**接合資料15 (SG263)** 集中部aで出土した剥片2点の接合資料である。石材は玉髓Bである。先行して剥離された剥片の一部が、やや大型の不定形剥片に接合している。

**接合資料16 (SG164)** 集中部aで出土した調整剥片3点とエリア外から出土した石核で構成される計4点の接合資料である。石材は玉髓Bである。接-10は打面転移を繰り返して剥離が行われており、小型の不定形剥片の剥出が目的であったと考えられる。

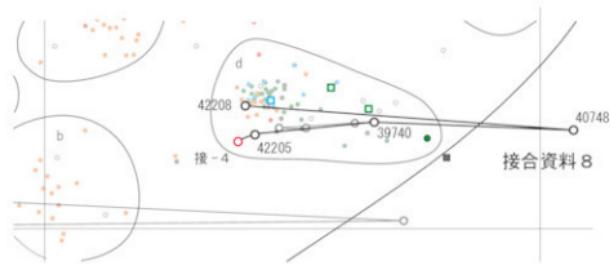
**接合資料17 (SG155)** 集中部aで出土した折断技法により作出された台形石器と、遺棄された剥片の計2点の接合資料である。石材は玉髓Bである。頭部までは残存していない。接-11は左側縁が折断面にあたり、右側縁は腹面からのプランディングが施される。

##### 集中部a

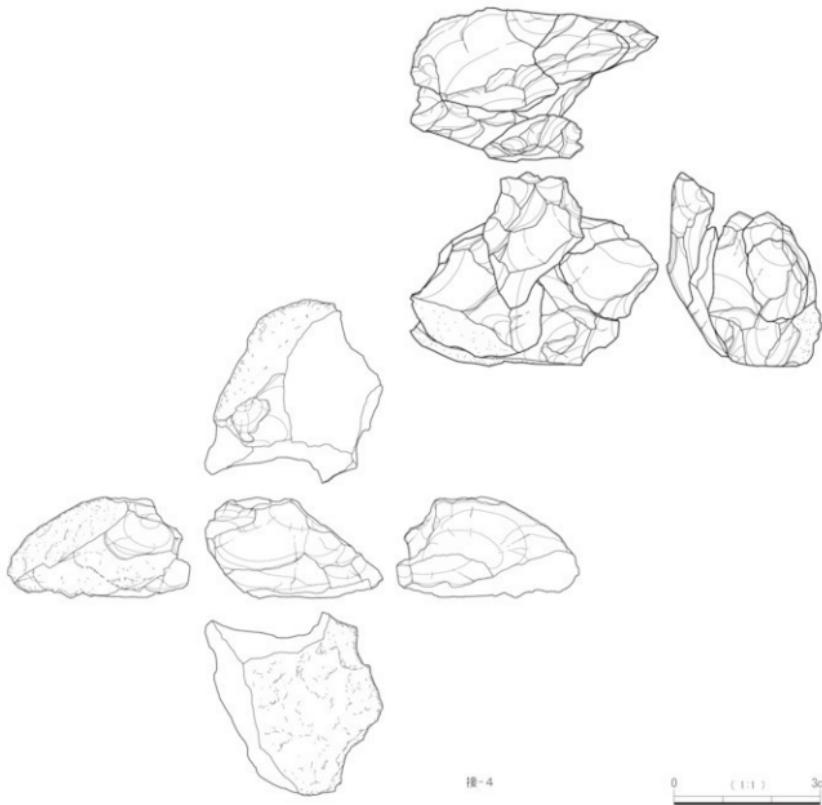
2点を図化した。71・72はいずれも台形石器であり、腹面からプランディングが施される。71は斜刃で、刃部は刃こぼれ状に欠損する。72は背面～基部、及び左側縁に自然面を残している。

##### 集中部b

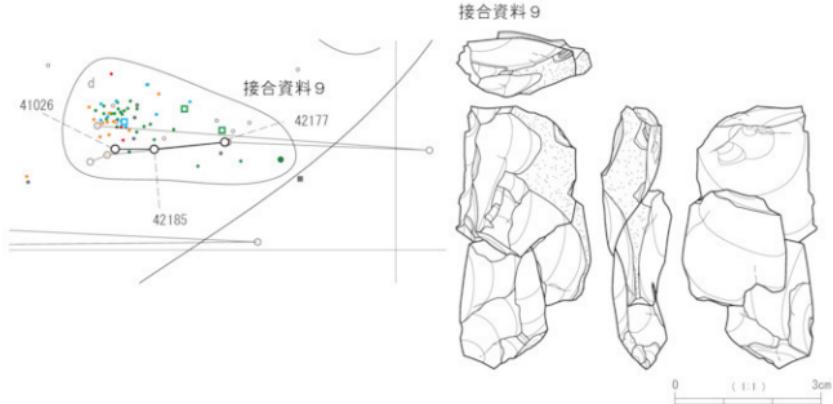
1点を図化した。73は台形石器で、背面に自然面を残す。左側縁は腹面側、右側縁は背面側からプランディングが施されている。刃部左側は一部欠損する。



接合資料 8



第38図 エリア5接合資料出土状況(1)・接合資料(1)



第39図 エリア5接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

#### 集中部c

3点を図化した。74はやや不整形な台形石器で、右側縁は腹面からプランディングが施される。背面には結晶面が残る。75は基部に腹面からの加工がみられる二次加工剥片である。

76は玉髓Cの石核である。腹面側は自然面であり、全体的に結晶質の構造が露出する。実測後、背面の打点左側に剥片が1点接合した。

#### エリア内及びエリア周辺出土遺物

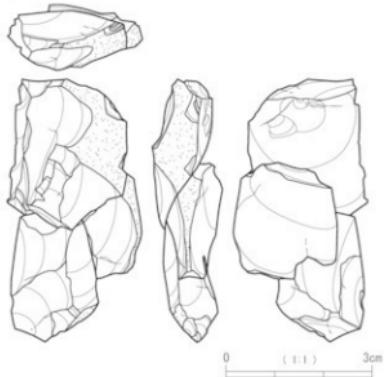
6点を図化した。77・78は長身のナイフ形石器である。いずれも頁岩の縦長剥片を素材とする。77は腹面からプランディングが施され、稜に調整剥離が加えられて基部が整形される。先端部は欠損している。78は先端部に自然面をわずかに残し、素材剥片を部分加工して作られている。79は三稜尖頭器であり、下半部が欠損する。右側縁は広い急傾斜剥離の後に腹面側から細かい剥離が加えられる。

80～82は台形石器である。80は左側縁から右側縁にかけての横断面が三角形状を呈する。左側縁は腹面、右側縁は背面からプランディングを施す。81は腹面からプランディングが施される。82は基部付近にやや厚みをもち、縦断面が三角形状を呈する。

#### (7) エリア7（第51図）

エリア7は、E・F-18・19区に位置する。平面的には遺物のまとまりはみられるが、密度はさほど高くない。また、エリア内の接合資料も確認されなかった。石材は黒曜石や頁岩が点在する状況で、石材ごとに偏る傾向は認められない。

#### 接合資料9



#### エリア内及びエリア周辺出土遺物

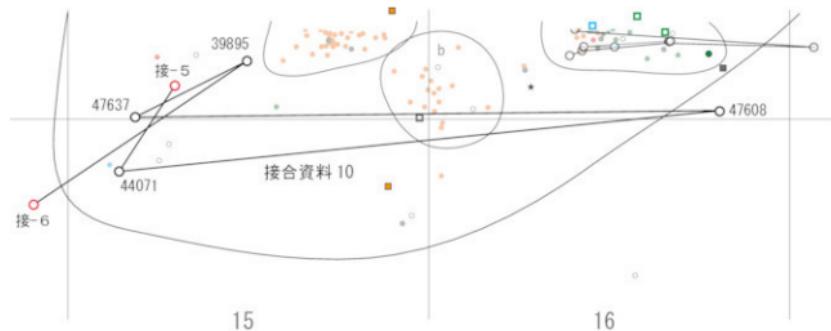
9点を図化した。83は細長く角の摩滅したホルンフェルスを素材とする石核である。上面及び左側縁に剥離がみられ、不定形剥片の剥出を目的としたものと考えられる。84は安山岩の円錐を素材とした敲石である。上下両端が欠損したように剥落しているが、角が残っているため、敲打によるものと判断した。また、側面は摩滅し、平滑である。

85～87はナイフ形石器で、いずれも黒曜石Eを素材とする。85は二側縁加工で左側縁は腹面、腹面両面からプランディングが施される。また、右側縁のエッジ部分には自然面がわずかに観察される。86は背面及び左側縁に自然面を残し、左側縁及び基部付近に二次加工が行われる。特に、左側縁は両面からプランディングが施される。86・87は先端部がわずかに欠損する。

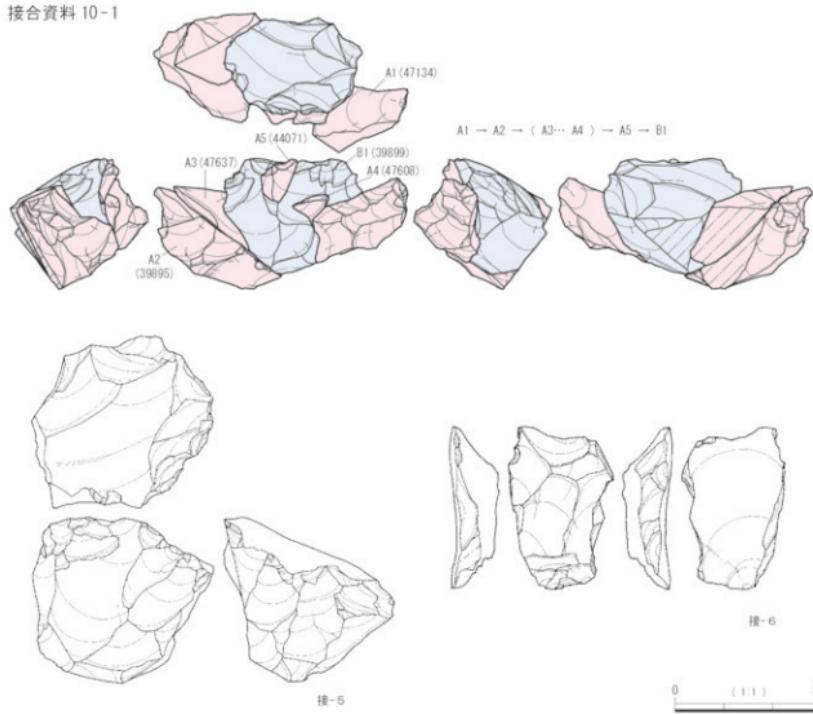
88～90は台形石器で、88・89は腹面から、90は背面からプランディングが施される。88はやや斜刃であり、90は長方形状を呈する。90のみエリア外から出土している。91は二次加工剥片であり、右側縁に自然面を残し、左側縁に腹面からの微細剥離が連続してみられる。撃器の可能性もある。

#### (8) エリア8（第52～54図）

エリア8は、D～F-18～20区に位置する。接合資料は1点確認された。E・F-20区に集中部が認められ、ツールとして1点を図化した。石材は黒曜石、砂岩、頁岩が多く、特に黒曜石の割合が高い。E・F-20区にチップのまとまりがみられ、大半が黒曜石である。エリア8から出土した石器類も、黒曜石を素材としたものが比較的多い。

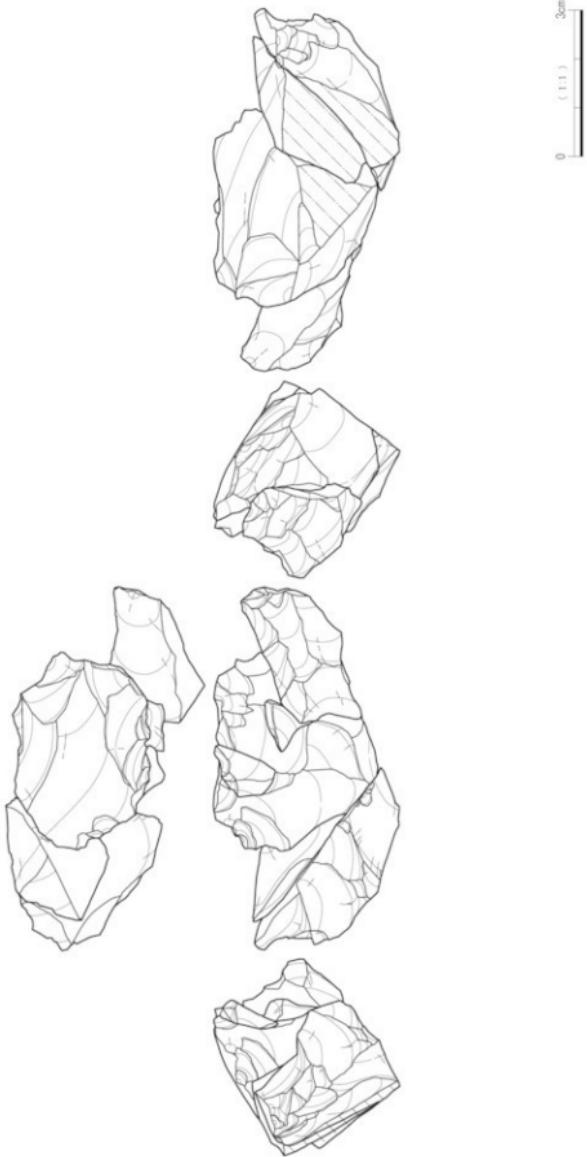


接合資料 10-1



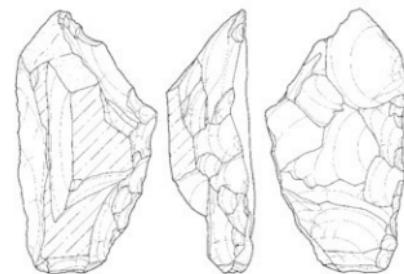
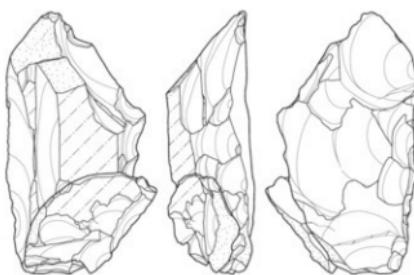
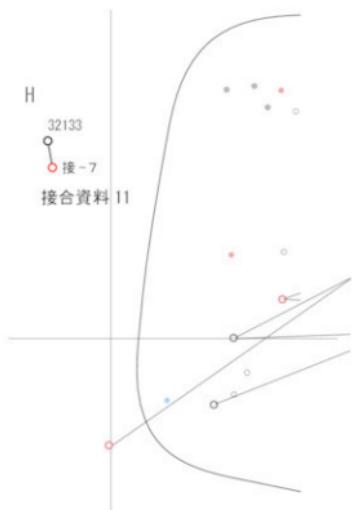
第40図 エリア5接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

接合資料 10-2



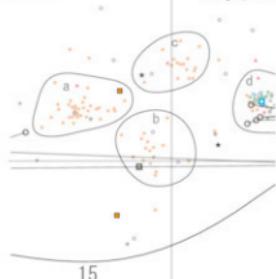
第41図 エリア5接合資料41(4)

接合資料 11

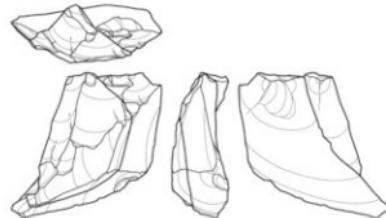


接-7

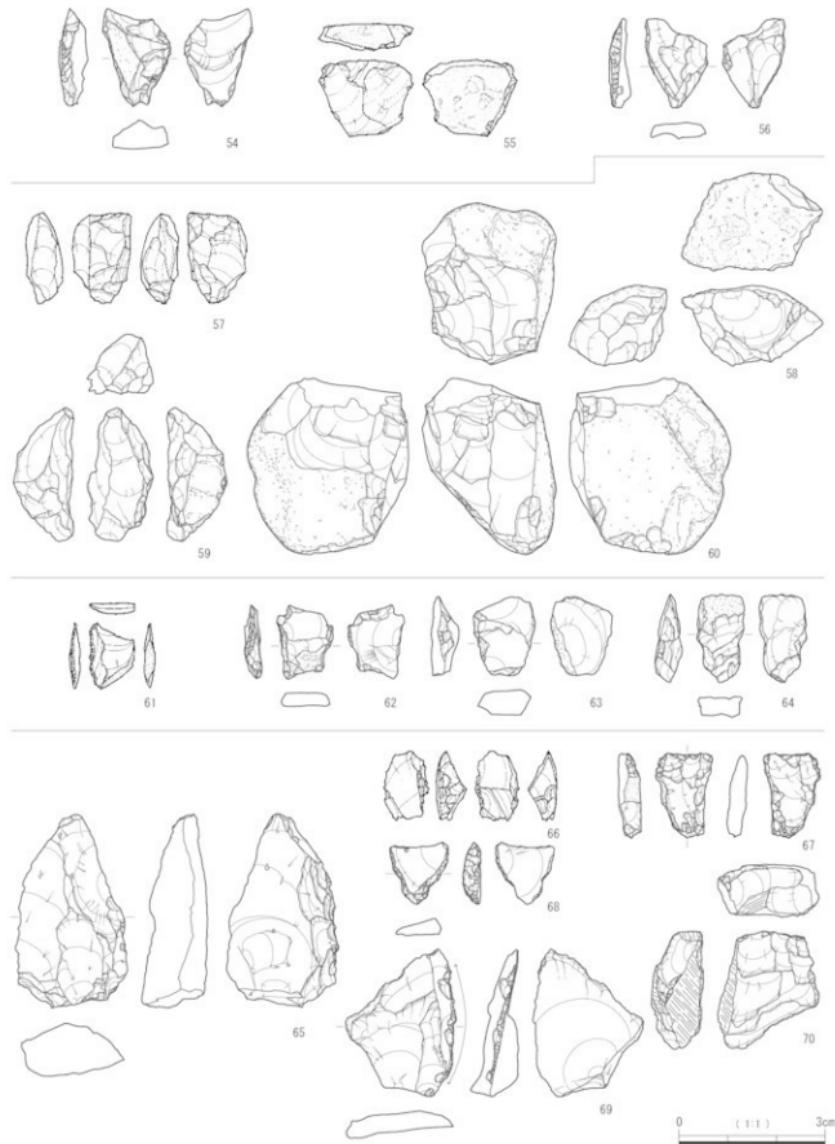
エリア 5



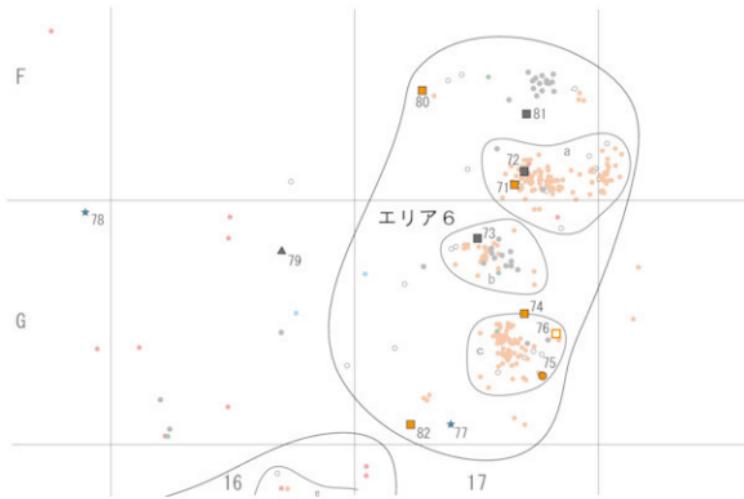
接合資料 12



第 42 図 エリア 5 接合資料出土状況(4)・接合資料(5)



第43図 エリア5関連出土遺物



第44図 エリア6遺物出土状況

#### 接合資料

接合資料18 (SG156) エリア内で近接して出土した2点の剥片の接合資料である。石材は頁岩Bである。縦長剥片で、背面左側は自然面である。接-12の腹面左側縁には、平坦状の微少剥離が連続する。

#### 集中部a・エリア内及びエリア周辺出土遺物

16点を国化した。92・97・101は、エリア周辺で出土した。92～96はナイフ形石器である。92・93は紙長剥片を素材とした大型のナイフ形石器である。92は背面の剥離面の観察から、打面転移を行った剥片素材と判断される。基部の左側縁には自然面が残存し、腹面から微少な剥離が連続する。右側縁の基部は腹面から抉り状の調整が加えられる。また、刃部は背面からの微少な平坦剥離に加え、下にはわずかに背面からの剥離もみられる。93は下端部分に両側縁から剥離を加えて基部を作出する。先端部を欠損する。94は右側縁に丁寧なプランディングが施される。95は先端部をわずかに欠損するが、左側縁及び右側縁下半に腹面からのプランディングが施される。また、右側縁刃部に微少剥離痕がみられる。先端部は欠損する。96は背面に自然面を残し、左側縁は腹面方向を基本としながら刃部の上半は背面からプランディングが施される。また、基部周辺も背面から調整が行われる二側縁加工で製作されている。

97～100は台形石器であり、いずれも方形から「U」

字形に近い形状を呈する。97は厚みのある剥片を素材とする。98・99は両側縁と下縁にプランディングを施し、98は左側縁が腹面、右側縁が背面から、99は右側縁が腹面、左側縁が背面からプランディングが施される。また、100はE・F-20区の集中部aからの出土である。刃こぼれ状に刃部が欠損する。101・102は剥片である。いずれも紙長剥片であり、102は折断されている。103は背面に自然面を残し、腹面は剥離面をそのまま残す使用痕剥片である。左右の側縁に微細な剥離痕がまばらにみられる。

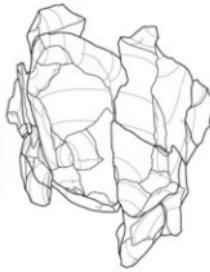
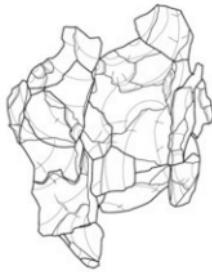
104・105は砂岩を素材とする磨石である。104はいびつな亜円錐で、左側縁に磨面がみられる。風化しているため赤変等の被熱痕は確認できない。105は下部が欠損しており、全体的に被熱したような赤色を呈し、表面も非常に脆い。106・107は敲打具である。いずれも安山岩を素材とする。106はやや平坦面をもついびつな円錐で、各面に小規模な敲打痕がみられる敲石である。107は磨擦石でボール状の円錐の下縁から右側面に、敲打痕が集中して観察される。

#### (9) エリア9 (第55図)

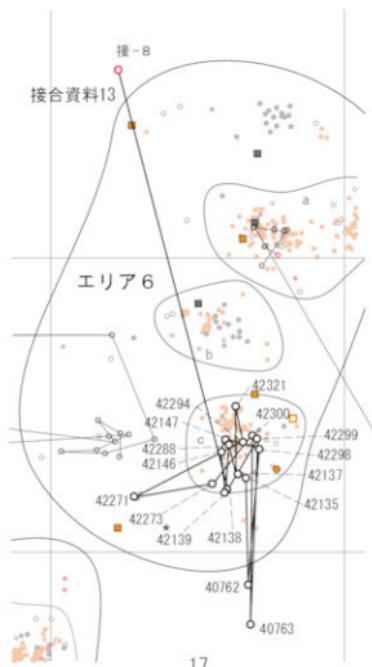
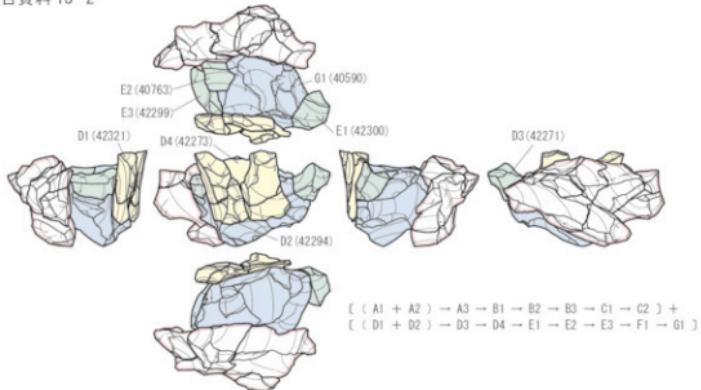
エリア9は、G・H-19・20区に位置する。周辺のエリアと離れて遺物の平面的なまとまりはあるが、密度は低い。また、エリア内の接合資料も確認されなかった。石材は水晶の割合が高いが、水晶を素材とするツール類は出土していない。

0 ( 1 : 1 ) 3cm

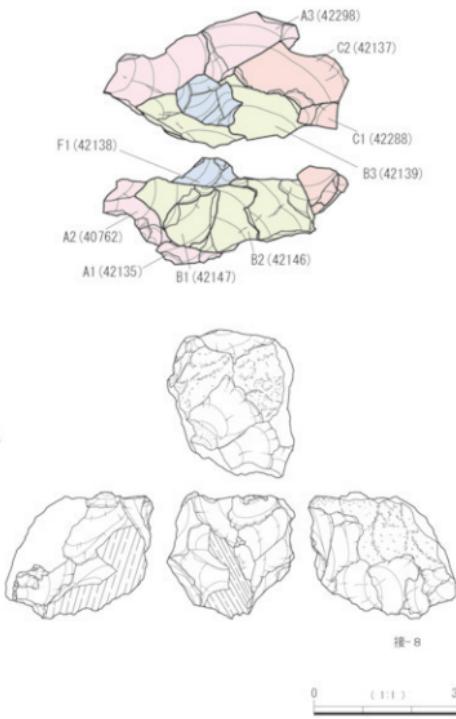
第45図 エリア6 接合質441)



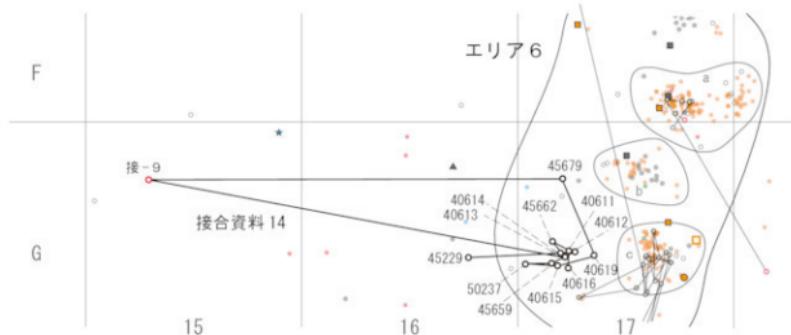
接合資料 13-2



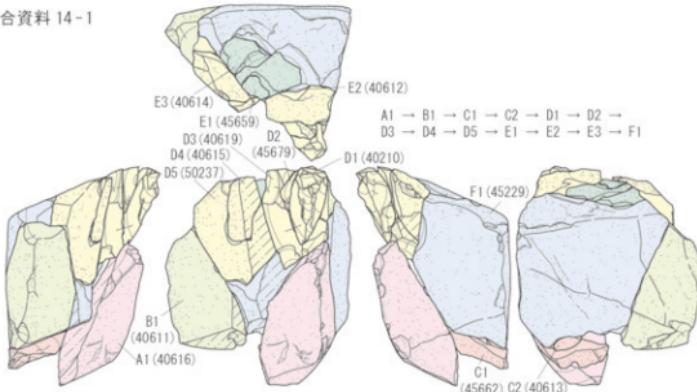
17



第46図 エリア6 接合資料出土状況(1)・接合資料(2)



接合資料 14-1



第47図 エリア6 接合資料出土状況②・接合資料③

#### エリア内出土遺物

1点を図化した。108は砂岩を素材とするハンマーである。上半が欠損しており、本来は断面が長楕円形の細長い棒状であったと想定される。下縁を中心に、側縁部にも敲打痕がみられる。

#### (10) エリア10（第56～66図）

エリア10は、D～F-20～24区に位置する。エリア11と共に遺跡内で遺物の密度が高い範囲であり、ツール類の出土事例が多い。本エリアでは特に高密度で遺物が出土した7つの集中部を認定した。出土石器が多い一方で接合資料は少なく、5点である。石材は水晶と黒曜石、頁岩が主体を占め、集中部a～cは水晶の占める割合も

高い。また、一部玉髓や頁岩の密度が高い範囲もあり、多様な石材利用が認められる。

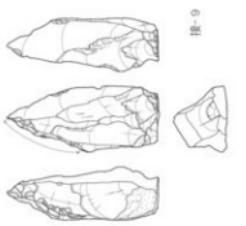
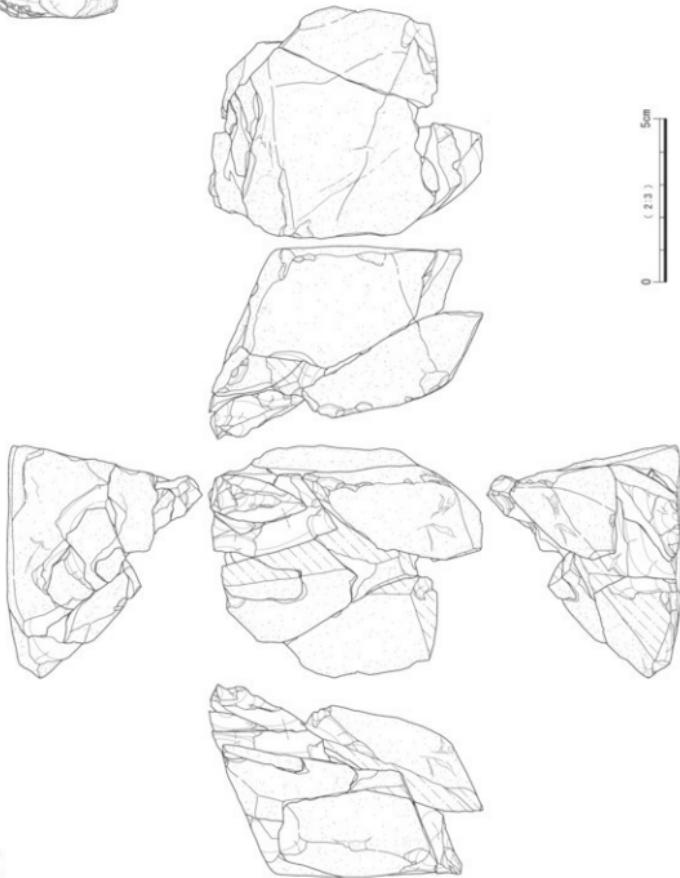
#### 接合資料

**接合資料19 (SG348)** 集中部aで出土した接合資料であり、異なる打面から剥出された2点の剥片が接合する。石材は頁岩A'である。いずれも背面は自然面であり、母岩から剥片剥離を開始した段階の剥片である。

**接合資料20 (SG280)** 集中部fで出土した2点の接合資料である。石材は玉髓Cである。横長の剥片が中央から分割されている。

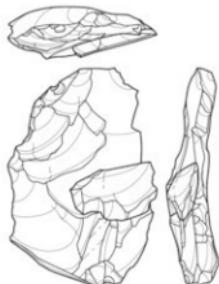
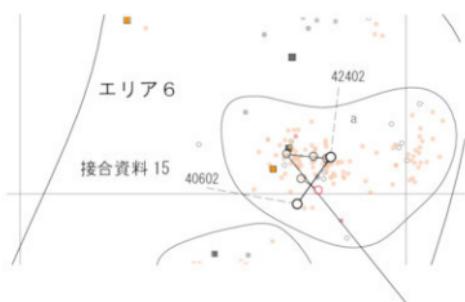
**接合資料21 (SG237)** 集中部fで出土した2点の接合資料である。石材はチャートである。小剥片の両側縁にプランディングを施した台形石器と剥片が接合している。

接合資料 14-2

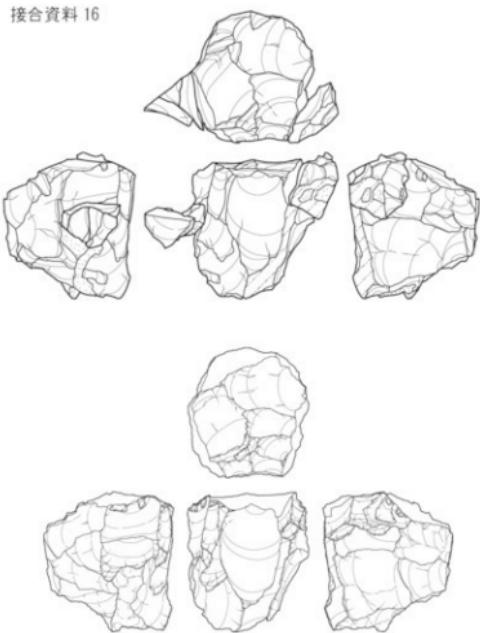
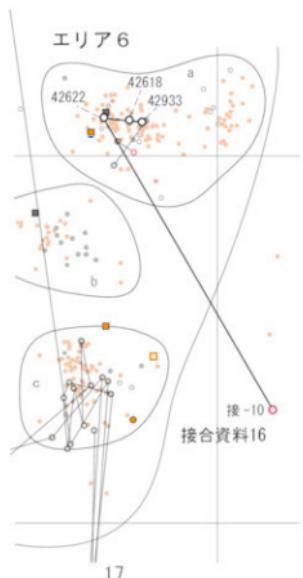


第48図 エリア6 接合資料(4)

接合資料 15

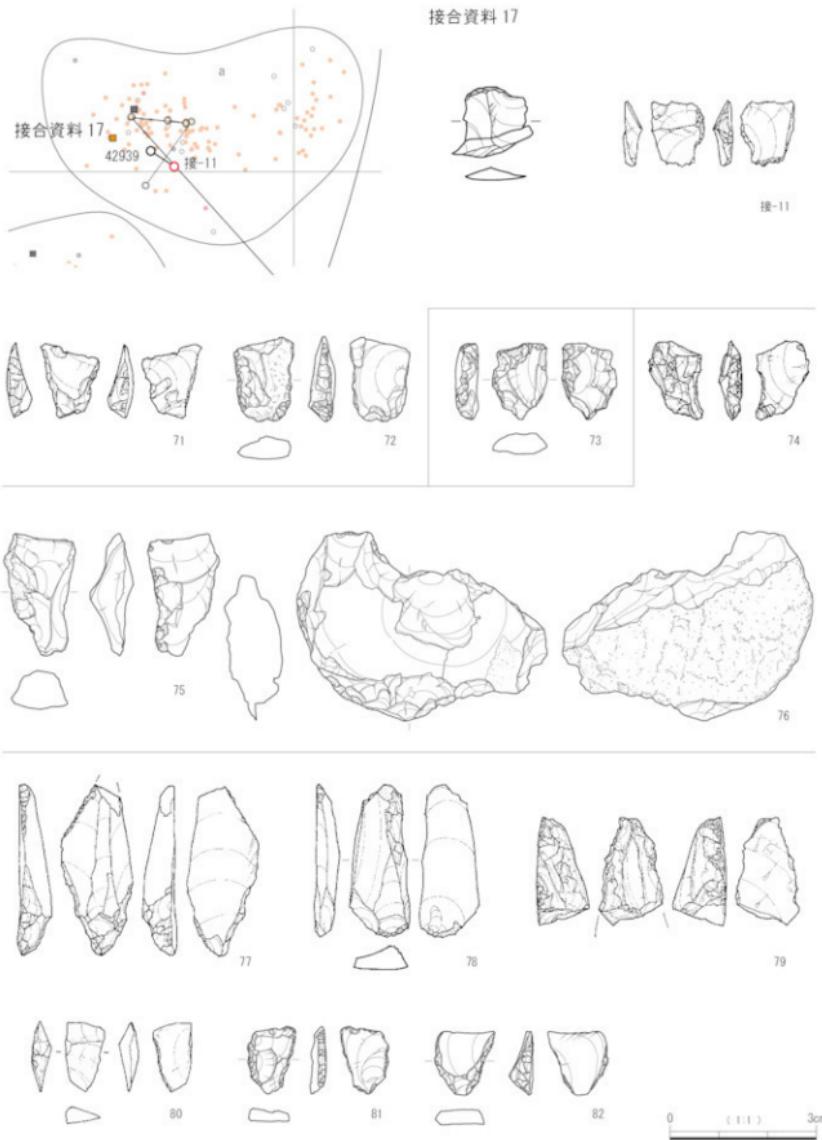


接合資料 16

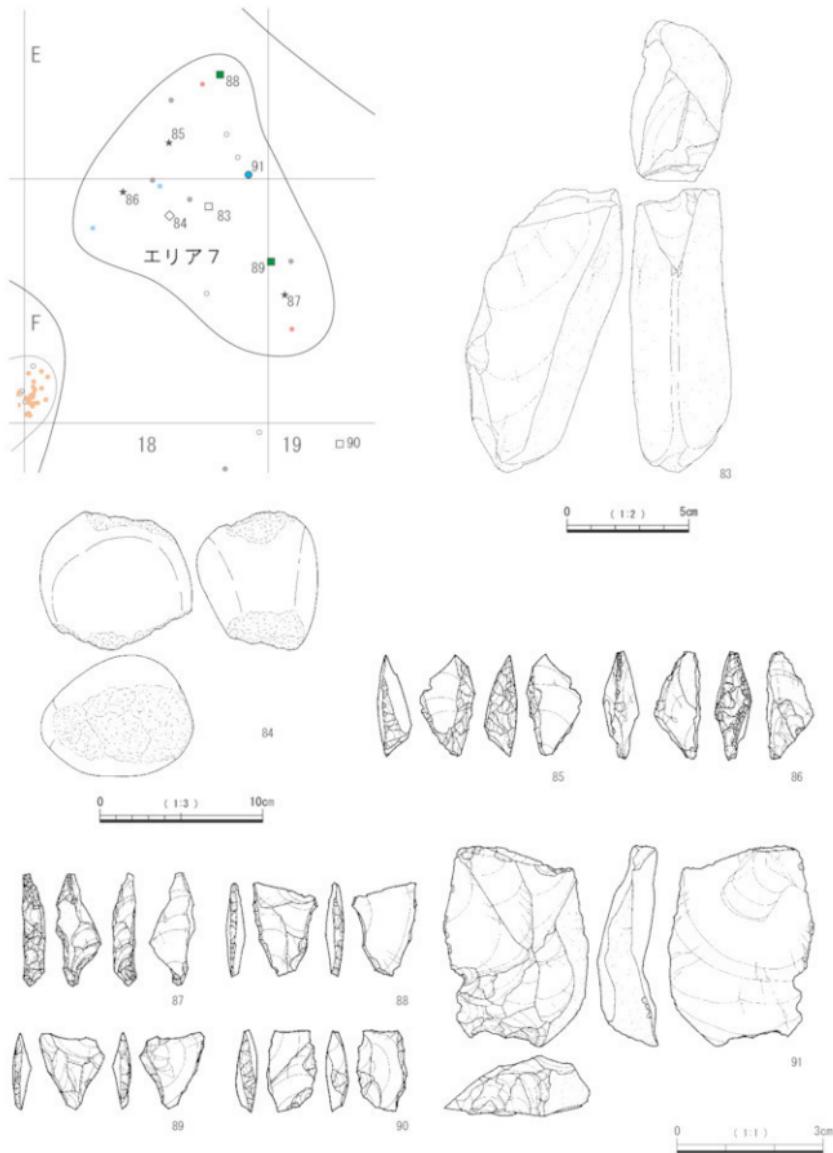


0 ( 1 : 1 ) 3cm

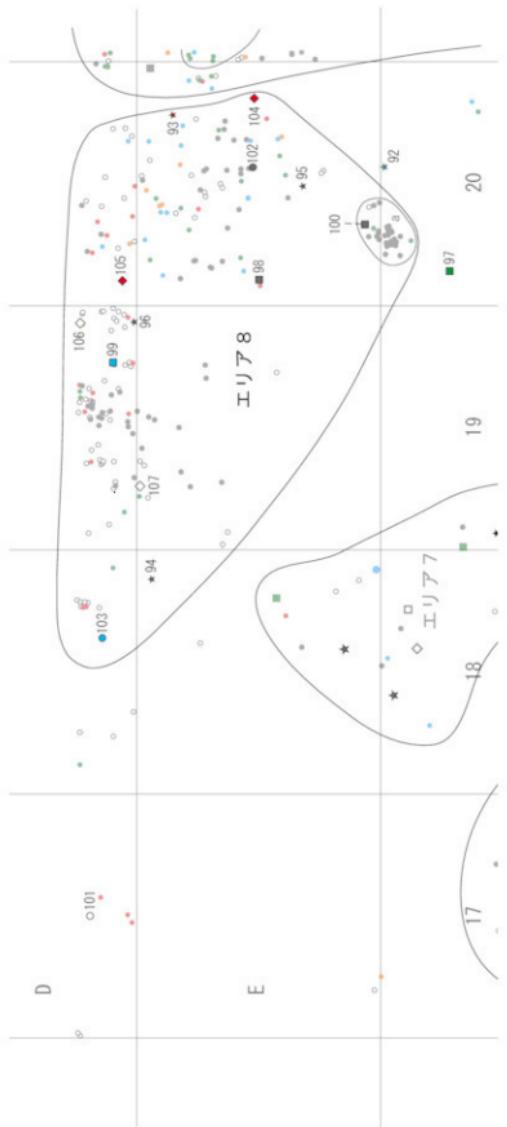
第49図 エリア6 接合資料出土状況(3)・接合資料(5)



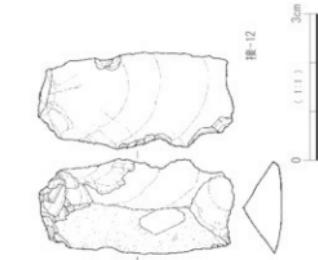
第50図 エリア6 接合資料出土状況(4)・接合資料(6)・関連出土遺物



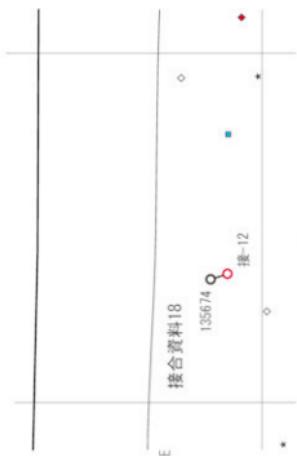
第51図 エリア7遺物出土状況・関連出土遺物

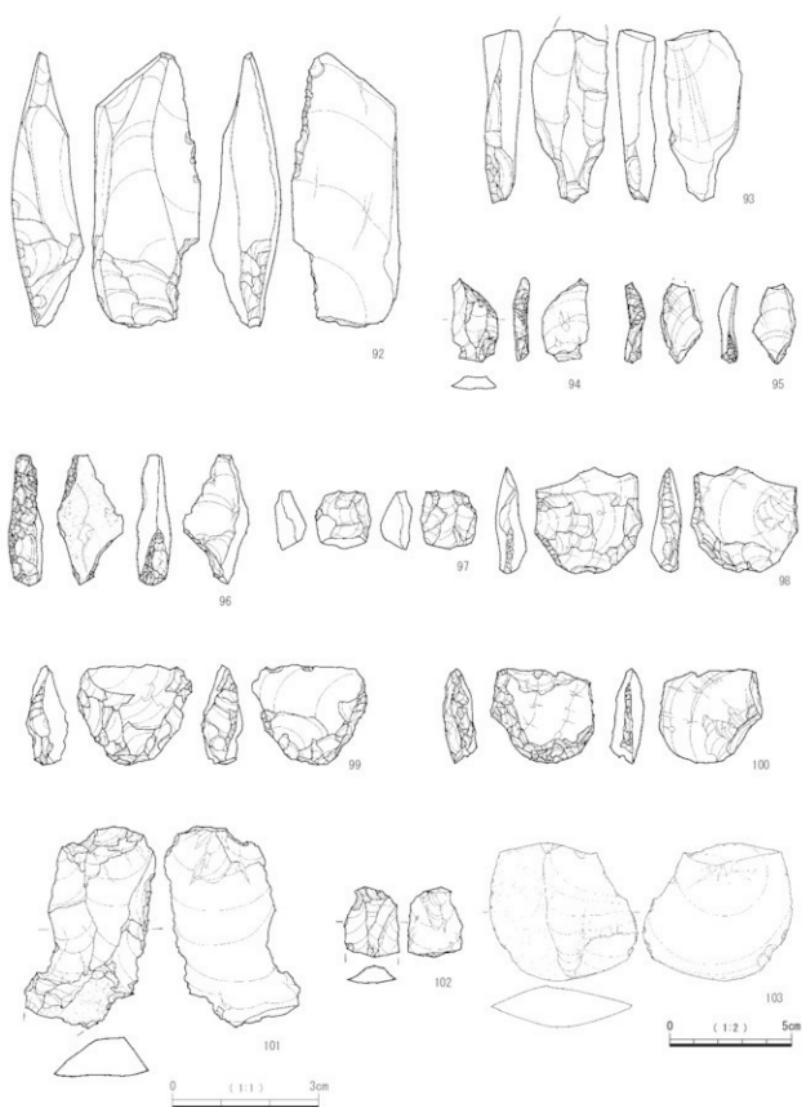


接合資料 18

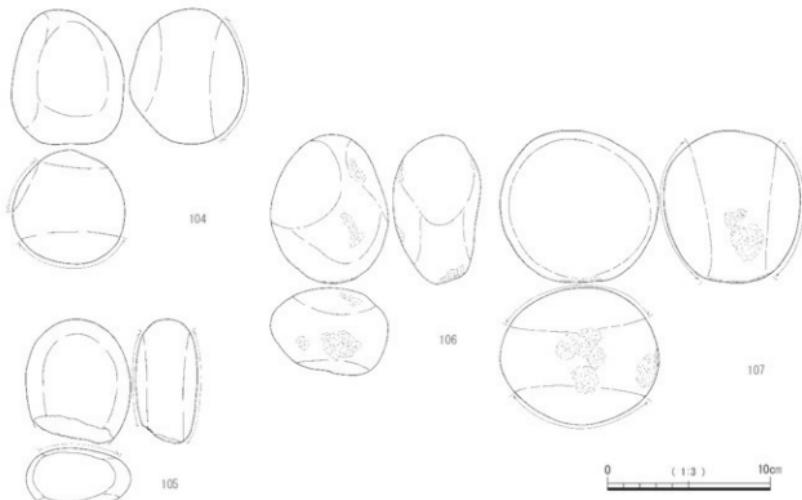


第52図 エリア8遺物・接合資料出土状況・接合資料





第53図 エリア8関連出土遺物(1)



第54図 エリア8関連出土遺物(2)

**接合資料22 (SG278)** 集中部a及びエリア内で出土した剥片の2点の接合資料である。石材は玉髓Cである。小剥片の下縁側に腹面からの調整剝離がみられ、刃部を意識した可能性がある。

**接合資料23 (SG219)** 集中部c及びエリア内のE-22区を中心に出土した剥片4点の接合資料である。石材は頁岩Gである。平坦な剝離面を打面とし、打点を移動しながら不定形剥片を剥出している。

#### 集中部a

9点を図化した。109はナイフ形石器である。やや大型の綫長剥片を素材とし、右側縁に腹面からプランディングがみられる。基部は欠損している可能性がある。

110～115は小型の台形石器である。110はやや斜刃を呈する。111は頁岩Aを素材とし、左側縁及び右側縁下部に加工が行われる。112は薄い剥片を素材とし、背面からプランディングが施される。113は不定形剥片を素材とし、斜刃で右側縁が突き出すような形状をなす。両側縁とも腹面からプランディングが施される。114は両側縁にやや膨らみを持った逆三角形状を呈し、腹面からプランディングが施される。115は逆三角形状を呈し、刃部は一部折れている可能性がある。やや厚みのある素材剥片の両側縁を腹面からプランディングし、整形されている。

116は二次加工剥片である。右側縁及び下縁に自然面を残す。117は綫長に剥出された剥片で、背面に節理面を残す。

#### 集中部b・c

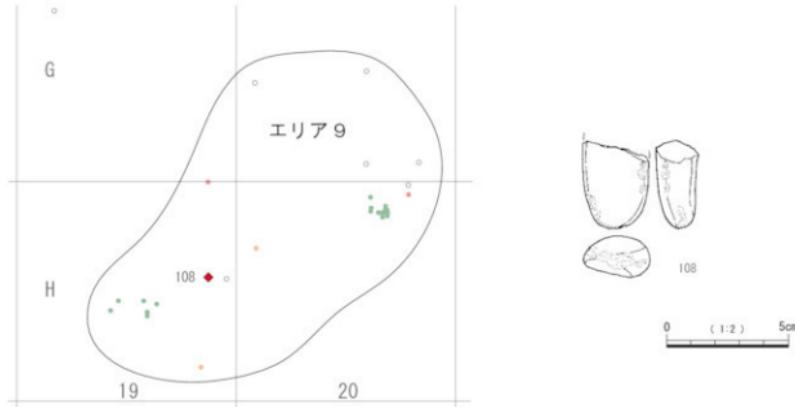
集中部b出土の1点、集中部c出土の3点の計4点を図化した。118は集中部bから出土した台形石器である。斜刃で両側縁とも腹面からプランディングが施され、右側縁は腹面側まで剝離が及んでいる。

119～121は集中部cから出土した。119は幅が狭く長身なナイフ形石器であり、背面頂部にわずかに自然面を残す不定形剥片を素材とする。先端部は背面からの細かい剝離で部分加工されて作られている。120は台形石器であり、下縁及び両側縁に腹面からプランディングが施される。121は右側縁に自然面を残す剥片である。

#### エリア内出土遺物1

集中部a～c周辺及びエリア周辺で出土した石器16点を図化した。122・123はナイフ形石器である。122は二側縁を加工して刃部を形成する。打面転移による不定形剥片を素材とする。123は左側縁を刃部とし、右側縁及び左側縁下部に調整剝離が加えられる。

124～136は台形石器である。124～131は逆三角形や綫長の長方形に近く、132～136は方形や「U」字形を呈する。後者は黒曜石製の占める割合が高い。124は自



第55図 エリア9遺物出土状況・関連出土遺物

全面を背面とする。125は不定形剥片の頭部を利用し、縦長の方形状を呈する。右側縁は腹面からプランディングが施される。刃部が刃こぼれ状に一部欠損する。いずれも、腹面からプランディングが施される。126は背面の一部に自然面を残した剥片を素材とする。127はやや厚みのある不定形剥片を素材とする。128は背面刃部付近に自然面を残す。左側縁は腹面、右側縁は背面側からプランディングが施される。129はややいびつな形状であり、両側縁とも腹面からプランディングが施される。130の左側縁は腹面、右側縁は腹面を主に一部背面からもプランディングが施される。131は腹面側からの加工で整形されるが、右上部を欠損する。132は不定形剥片を利用したやや大型の台形石器で、下縁から両側縁にかけて細かい調整が施されている。133は横長の「U」字形を呈し、両側縁と下縁にプランディングが施される。134は縦長剥片を素材とし、右側縁は折断面である。135は両側縁とも腹面からのプランディングであり、刃部は刃こぼれ状に欠損する。136は左側縁に自然面を一部残し、背面は平坦剥離で整形される。刃部は一部欠損する。

137は折断された縦長剥片の頭部である。

#### 集中部d

7点を図化した。138～140はナイフ形石器で、いずれも不定形剥片を素材とする。139は左側縁に腹面からの調整剥離が加えられ、右側縁は折断面が残される。140は右側縁の上下端に腹面からプランディングが施され、刃部は一側縁に鋭く形成される。

141～144は台形石器で、141のみやや大型である。縦長剥片を素材とし、折断面が右側縁にある。刃部は刃こぼれ状に欠損する。142～144はいずれも水晶Aを素材とした小形の台形石器であり、142・143は折断剥片を素材とする。143は素材剥片の頭部を利用する。144は不定形剥片を素材とし、下縁は劈開面が残される。

#### エリア内及びエリア周辺出土遺物2

集中部d周辺の出土石器として7点を図化した。145・146はナイフ形石器である。145は右側縁及び先端部付近の左側縁に細かい剥離が観察される。全体的に摩滅しており、特に先端部が顕著である。146はエリアに隣接して出土した。側縁の加工からナイフ形石器と判断した。

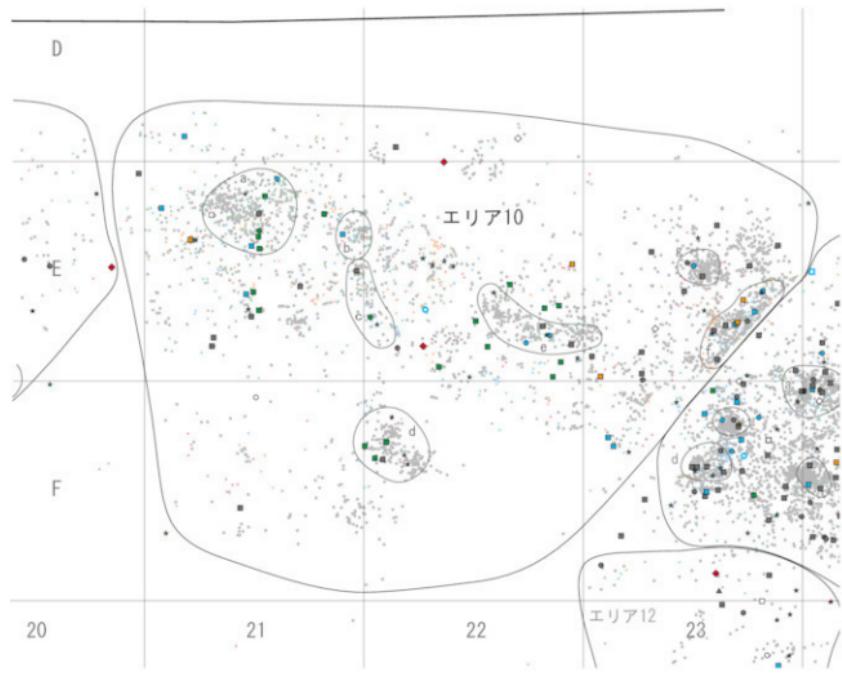
147・148は台形石器である。147は不定形剥片を素材とし、腹面の下半は平坦剥離によって整形される。148は「U」字形に近い形状で、背面からプランディングが施される。右側縁に一部自然面を残す。

149はドリルと考えられる。右側縁に急傾斜剥離を行い、左側縁は上部以外は剥離面を残す。先端がわずかに欠損する。150は使用痕剥片である。

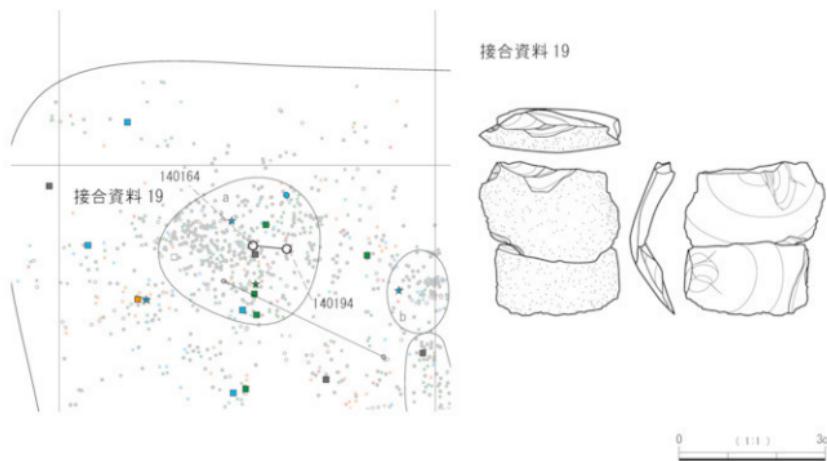
151はハンマーで、縦長の上下端部に敲打痕が集中する。石材は貫入構造がみられるため砂岩Bに含めたが、全体的な粒径などは砂岩Dに近い。

#### 集中部e

6点を図化した。152・153はナイフ形石器である。152は下半を欠損する。両側縁とも腹面からプランティ

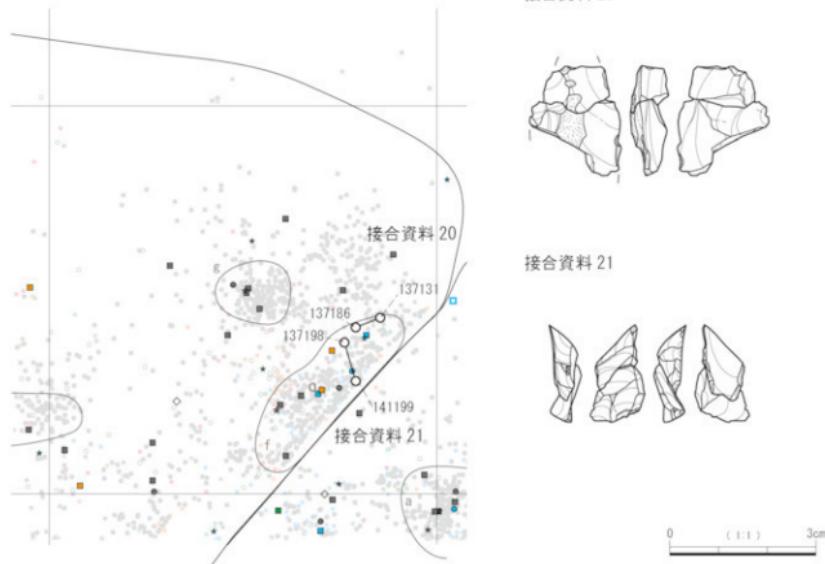


接合資料 19

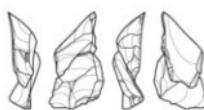


第 56 図 エリア 10 遺物出土状況(1)・接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

接合資料 20

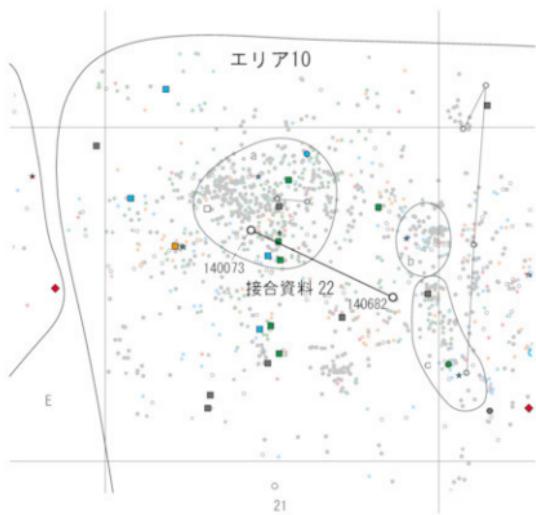


接合資料 21

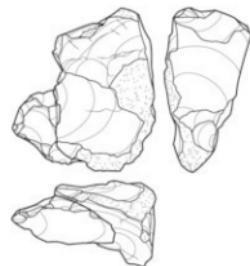


0 (1:1) 3cm

エリア10

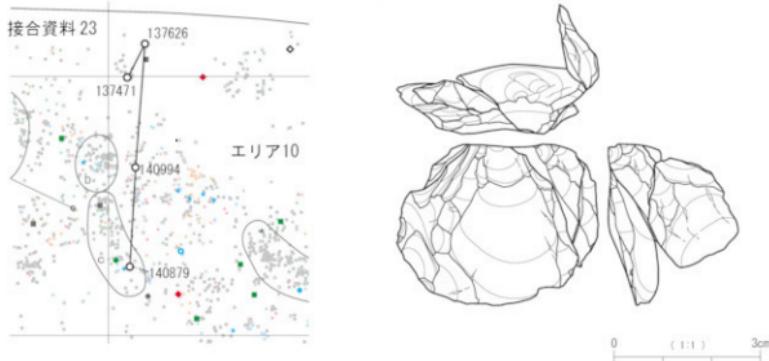


接合資料 22



第 57 図 エリア 10 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

### 接合資料 23



第 58 図 エリア 10 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

ングが施される。153の左側縁は劈開面を利用し、右側縁から左側縁の基部付近にかけて密なプランディングが施される。右側縁は背面、左側縁は背面・腹面の両面から加工される。先端は折れている可能性がある。154・155は横長の台形石器である。154は右側縁に素材剥片の打瘤を残す。両側縁及び下縁の3側面に腹面からのプランディングが施される。155は黒曜石Dの剥片を素材とし、腹面に素材剥片の打瘤を残す。

156は加工痕剥片と考えられる。左側縁に微少な剥離がみられ、尾部を折断し、二次加工を行っている。157は使用痕剥片と考えられ、折断された剥片の尾部である。

#### 集中部 f

11点を図化した。158・159はナイフ形石器である。158は背面に一部自然面を残し、両側縁は腹面からプランディングが施される。159は小型で幅の細い形状であり、先端部及び基部が欠損する。左側縁上部に復縁からの微少なプランディングがみられる。

160～167は台形石器である。160は左側縁は腹面、右側縁は上半は背面、基部付近は腹面からプランディングが施され、斜刃で逆三角形を呈する。161は左側縁は背面、右側縁は腹面からプランディングが施される。162は不定形剥片を素材とし、両側縁とも腹面からプランディングが施される。163は刃部が水平で方形を呈する。刃部から基部までほぼ同じ太さであり、本遺跡内でも類例が少ない。164は逆三角形を呈する。両側縁とも腹面からプランディングが施される。刃部左側をわずかに欠損する。165は横長の「U」字形を呈する台形石器で、両側縁とも腹面からプランディングを施し、下縁には自然面を残す。166は下半を欠損し、刃部も刃こぼれ状に欠損

する。167は折断された剥片の頭部を素材とし、下縁には細かいプランディングを施す。左側縁は折断面である。

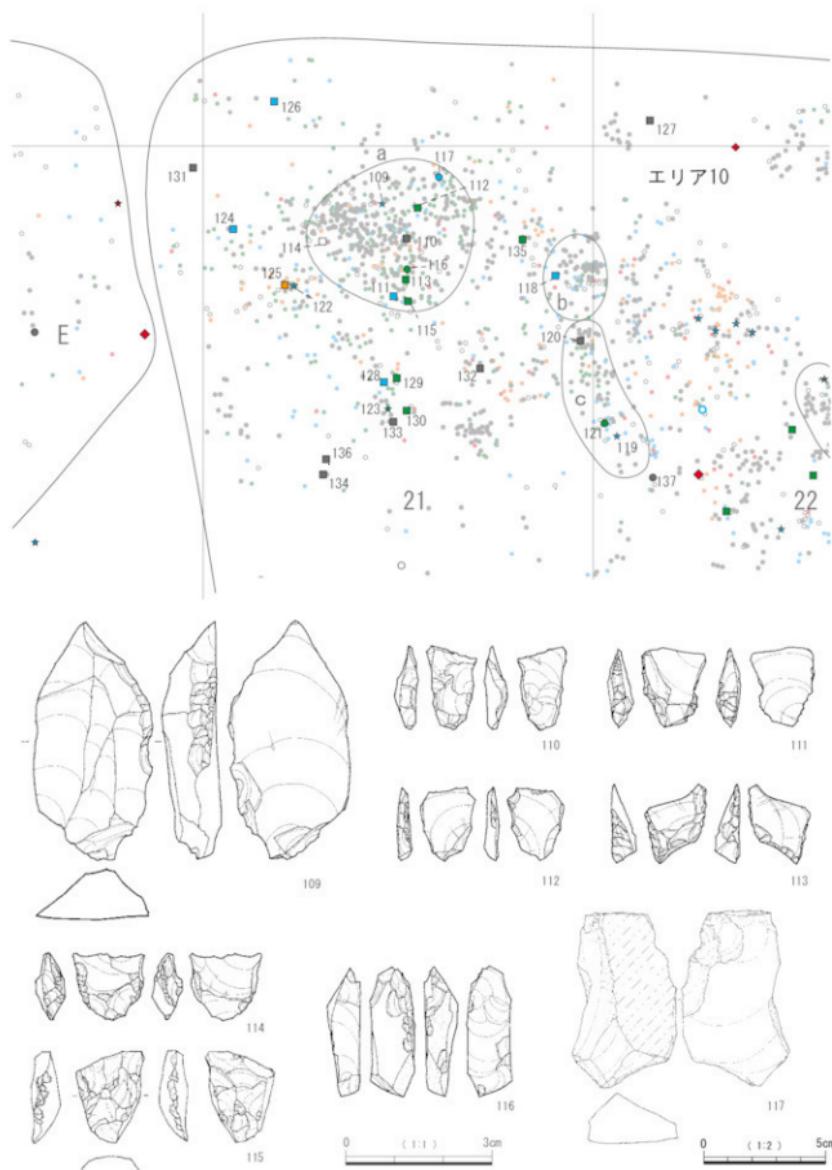
168は二次加工剥片である。右側縁から下縁を中心にして細かい剥離が観察される。下縁端部は折断されている。

#### 集中部 g

5点を図化した。169・171・172は台形石器である。169は厚みのある素材の右側縁及び下縁を調整して整形される。左側縁は平坦な剥離面で、ほとんどプランディングがみられない。171はやや厚みのある折断剥片を素材とする。172は背面・腹面とも右側縁からの調整剥離がみられる。170は加工痕のある不定形剥片素材であり、ナイフ型石器の可能性もある。173は調整剥片である。

#### エリア内及びエリア周辺出土遺物 3

集中部 e～g 周辺の出土石器として33点を図化した。174～183はナイフ形石器である。174～176は縦長剥片を素材とする。174は右側縁状半に部分的に腹面からのプランディングが施される。先端部は欠損する。175は右側縁に背面・腹面の両方から剥離を行って整形される。176は基部から左側縁を中心にプランディングが施される。先端部を欠損する。177は左側縁に腹面からプランディングを施す。節理面から先端は欠損している。178は左側縁を刃部とし、基部は節理面を残す。実測後、剥片1点と接合した。179は斜刃で切り出し形を呈し、両側縁とも腹面からプランディングが施される。180は両側縁に腹面からの加工が行われる。背面には一部自然面が残る。181は両側縁の加工が不明瞭であるが、刃部の形状からナイフ形石器に含めた。182は小型のナイフ形石器である。両側縁とも腹面からプランディングが施され、上縁を刃部とする。183は上半が欠損しているが、



第59図 エリア10 遺物出土状況(2)・関連出土遺物(1)



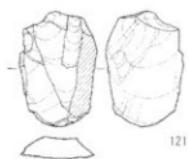
118



119



120



121



122



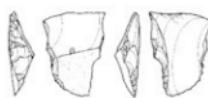
123



124



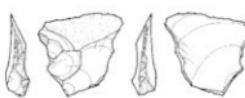
125



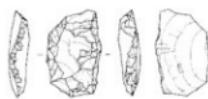
126



127



128



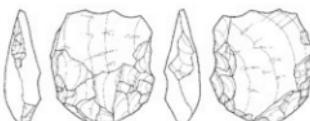
129



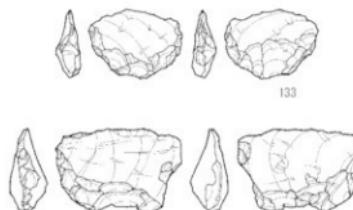
130



131



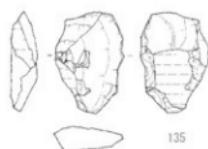
132



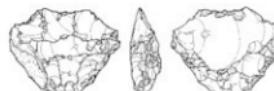
133



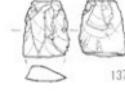
134



135



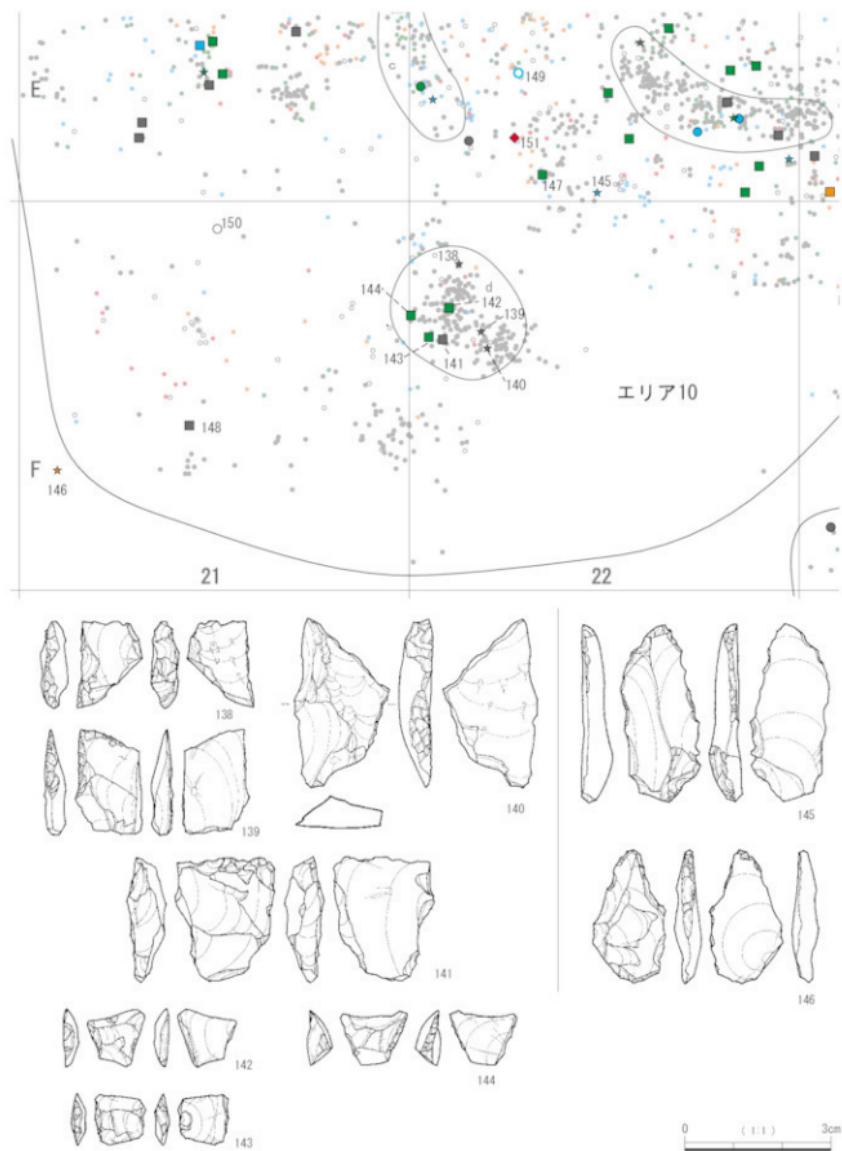
136



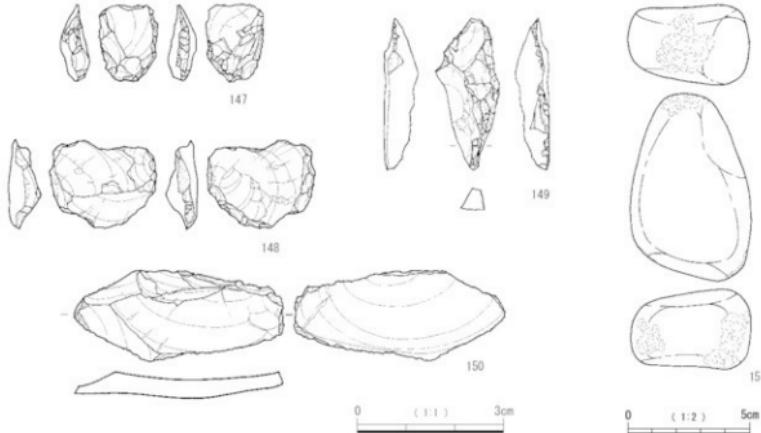
137

A scale bar marked from 0 to 3 cm.

第60図 エリア10 間連出土遺物(2)



第61図 エリア10遺物出土状況(3)・関連出土遺物(3)



第62図 エリア10関連出土遺物(4)

ナイフ形石器の基部と考えられる。

184～202は台形石器である。184～196がやや長身な形状や逆三角形を呈するもの、197～201が横長で「U」字形や方形に近い形状を呈する。184は不定形剥片の打瘤が腹面にみられ、背面は自然面を残す。185は腹面の調整により基部が突出する。186は左側縁は背面、右側縁は腹面から、187は左側縁は腹面、右側縁は背面・腹面の両面からプランティングを施す。188は両側縁とも腹面から加工される。189は背面に自然面を残し、腹面には平坦剥離が加えられる。190はやや斜刃であり、腹面には結晶面を広く残す。191は薄い素材剥片の両側縁を加工して整形される。190・191は両側縁とも背面からプランティングが施される。192・193はいずれも腹面からプランティングが施され、192は刃部に刃こぼれ状の微妙な剥離がみられる。194は背面に劈開面を残し、両側縁とも腹面から加工が施される。195は左側縁はエッヂ部分にプランティングが施される。また、刃部は刃こぼれ状に欠損する。196は斜刃で左側縁に自然面をわずかに残す。また、左側縁及び下縁にプランティングがみられ、右側縁はガジリにより欠損する。197～199は側縁及び下縁の3側面にプランティングを施す。200は左側縁は腹面、右側縁は背面から加工が施される。201の腹面は、背面側から平坦剥離によって下縁が整形される。202はやや厚みのある不定形剥片を素材とし、左側縁には結晶面が残る。右側縁は腹面からプランティングが施され、やや斜刃である。

203はやや幅広の縦長剥片の頭部であり、折れた下縁側から二次加工が行われている。204は磨石である。

頂部及び側縁部には明瞭な敲打痕が観察され、下縁は摩滅により平坦面をなす。205は磨石である。206は下部が欠損する礫器で、笄状を呈するが使用方法は不明である。

#### ⑩ エリア11(第67～80図)

エリア11は、E・F-23～25区に位置する。遺跡内で最も出土遺物の密度が高い範囲であり、多量の石器が出土した。集中部の境界を見いだすのは困難であったが、高密度で遺物の出土がある範囲を中心として5つの集中部を認定した。接合資料は6点である。

石材は黒曜石を主体に、頁岩が次いで高い割合を占める。特に集中部dでは頁岩がやや集中する。

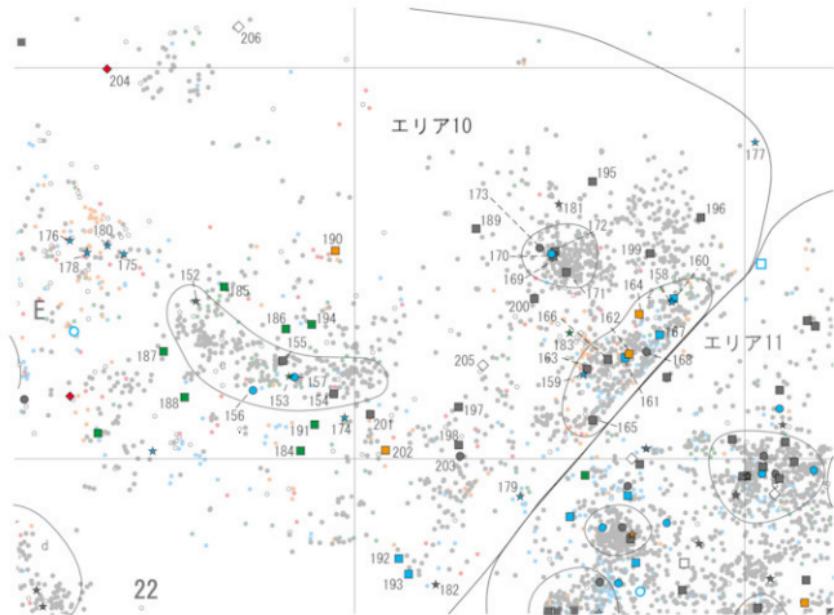
##### 接合資料

**接合資料24 (SG315)** 集中部b及びエリア内で出土した剥片2点の接合資料である。石材は頁岩Dイで、軟質で摩滅したような質感をなす。不定形剥片が剥出されたと考えられる。

**接合資料25 (SG174)** エリア内で出土した台形石器と剥片の計2点の接合資料である。石材は玉髓Bである。剥離は折断またはアクシデントによるものと想定され、剥片から斜刃の台形石器が製作される。接-13は両側縁とも腹面からプランティングが施される。

**接合資料26 (SG175)** 集中部d及びエリア内で出土したドリル1点と調整剥片2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。縱長剥片を剥出した素材から、右側縁に腹面からの調整剥離を加え、先端を鋭く仕上げた接-14のドリルが製作される。

**接合資料27 (SG181)** 集中部dを主体とし、1点のみ



第63図 エリア10遺物出土状況(4)

集中部dに隣接して出土した三稜尖頭器と剥片4点の計5点の接合資料である。石材は頁岩Aである。厚みのある縦長剥片を剥出し、腹面の基部に平坦剥離、左側縁には腹面からやや傾斜のある剥離を行い、接-15の三稜尖頭器が製作される。

**接合資料28 (SG066)** 集中部d及びその周囲で出土した、三稜尖頭器1点と剥片3点の計4点の接合資料である。石材は頁岩Aである。本来は大型の素材剥片から作出されたと考えられ、側面からの大まかな剥離と、側縁部に沿った急傾斜剥離によってA1及びA2が剥出される。その後、プランディングの過程でB1が剥落したと考えられるが、直接的な三稜尖頭器の製作剥離とは考えにくいため、アクシデント剥離を起こしたものと想定される。接-16の基部は、左側縁の右側縁から平坦剥離による行われている。

**接合資料29 (SG200)** エリア内で出土した石核および小型ナイフ形石器を含む7点の接合資料である。石材は頁岩Gである。接-17の石核は打面転移を行ながら不定形剥片を剥出しており、接-18のナイフ形石器や二次

加工剥片が石核に接合する。

接-18は左側縁のみが腹面からプランディングが施され、右側縁を刃部とする。複数の接合する剥片の形状から、小型ナイフ形石器を製作する素材を剥出する目的のものと考えられる。

#### エリア内出土遺物1

E-23～25区はやや出土遺物の密度が高い状況ではあるが、チップ類も含めて考えると集中部の認定には至らなかつた。ここではE-23～25区とエリアから隣接して出土した石器25点を図化した。207・217はエリア周辺の出土である。この範囲での石材は全体的に黒曜石のチップ類が目立ち、頁岩、玉髓、水晶が散在する状況である。

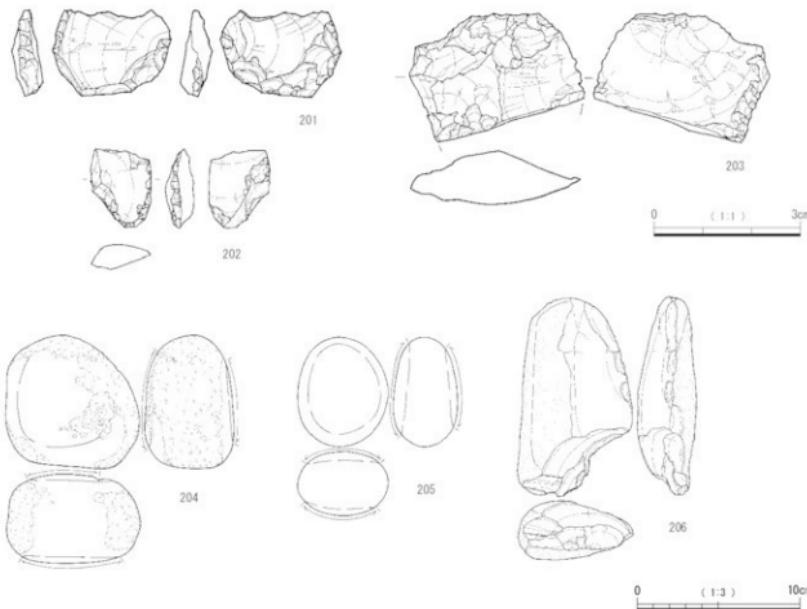
207～213はナイフ形石器である。207は横長剥片を素材とし、左側縁に微少な剥離を連続して施して刃部とする。上部を欠損する。208はやや厚めの剥片の左側縁に、腹面からプランディングを施す。先端は欠損する。209は上下縁に自然面が残る玉髓を素材とし、両側縁とも腹面からプランディングが施される。ナイフ形石器に含めたが、刃部は不明瞭である。210は両側縁が加工され、幅



第64図 エリア10 関連出土遺物(5)



第65図 エリア10関連出土遺物(6)



第66図 エリア10関連出土遺物(7)

が狭く長身な形状を呈する。211・212は切出形である。211は斜刃で、基部が尖る逆三角形状を呈する。212は背面に筋理面を広く残し、両側縁を加工してそのまま利用している。213は斜刃で、両側縁とも腹面からプランディングを施す。基部は欠損している。

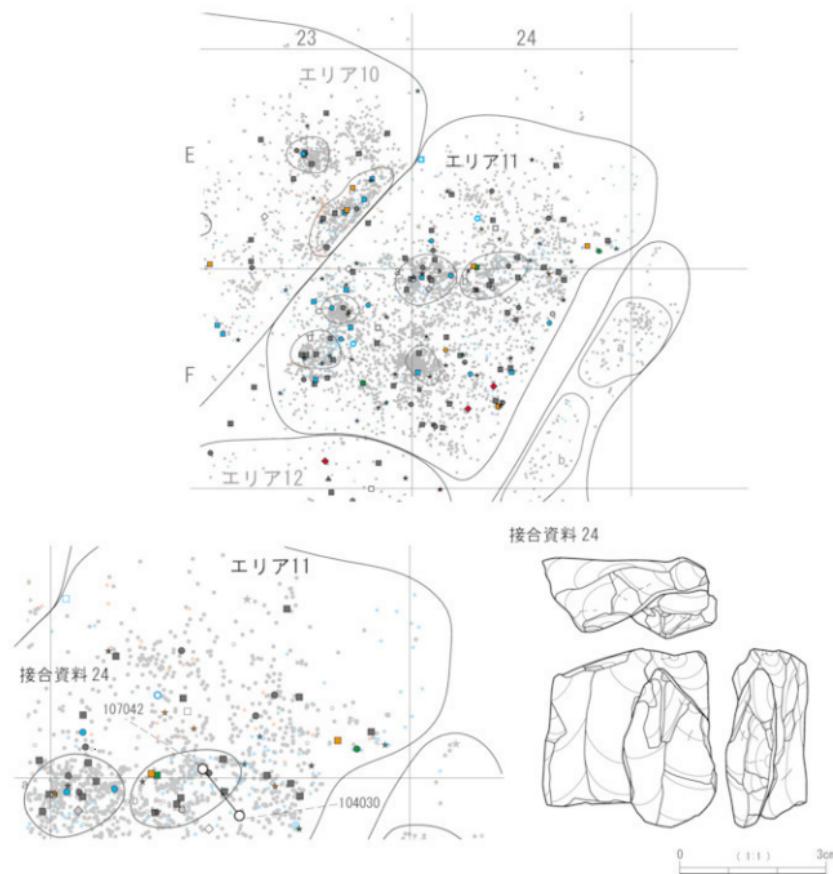
214～222は台形石器である。214は両側縁とも腹面からプランディングを施す。刃こぼれ状に刃部が欠損する。先端部が欠損する。215・216は継長の方形を呈する。215はやや厚みのある素材を折断しており、左側縁に折断面が残る。216はやや斜刃で、両側縁とも腹面からプランディングが施される。217は背面及び下縁に自然面を残す。刃部は刃こぼれ状に欠損する。218は小型で折断剥片の中間部付近を素材とする。219・220は折断剥片を素材とする。219は右側縁、220は左側縁が折断面である。221・222は台形を呈する。221は弧を描くように中央部がカーブする斜刃で、厚みのある素材の剥離面を生かして刃部が形成される。222は折断剥片を素材とし、背面・腹面の各左側縁に平坦剥離がみられる。基部は欠損する。

223～225は二次加工剥片である。223は左半分を欠損

する。右側縁に調整がみられ、刃部も明瞭であるため、ナイフ形石器の可能性もある。224は左半分が欠損する。右側縁は背面から細かいプランディングが施され、先端部に刃部が作出されている。225は上半が欠損する。左側縁は腹面からの調整によって基部が整形され、腹面の基部付近には平坦剥離がみられる。そのため、三稜尖頭器の可能性も考えられる。

226・227は剥片である。226は折断された縦長剥片の尾部である。227は水晶Aの剥片で、側縁に自然面を広く残す。円錐状の素材であったと推定される。228は左側縁に筋理面が残り、基部は腹面から加工される。撞器と考えられる。229は左側縁に腹面からの調整剥離が連続して加えられる。また、背面・腹面とも上端に加撃による剥離痕が重複して観察される。ドリルと考えられる。

230・231は石核と判断した。230は頁岩Bを素材とし、ほぼ原礪に近く、扁平な円錐の一部が剥離されている。231は黒曜石Dを素材とし、自然面を多く残す。小型の不定形剥片の剥出を目的とした可能性がある。



第67図 エリア11遺物出土状況(1)・接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

集中部a

13点を図化した。232～234はナイフ形石器である。232は右上縁まで加工を行っており、刃部は一部欠損する。233は不定形剥片を素材とし、基部は非常に薄い。234は黒曜石Bを素材とし、やや斜刃である。刃部は欠損している可能性がある。

235～238は台形石器である。235は両側縁とも腹面からプランディングが施される。236～238は方形を呈する。236の刃部は、刃こぼれ状に欠損する。237は折断面を右側縁とし、下縁及び左側縁に調整剥離が加えられる。238は小型でやや厚みのある剥片を素材とし、基部から

右側縁にかけて自然面を残す。腹面右側縁には平坦剥離がみられる。

239は搔器の可能性があり、右側縁下半に腹面からのプランディングが施される。左半分を欠損する。240は紙長の剥片で、2点が接合する。241は不定形剥片で下縁が折れている。また、右側縁には微少剥離痕が観察される。242は折断片の頭部である。243は背面・腹面で剥離方向が異なる不定形剥片で、下縁及び右側縁、左側縁のエッヂ部分に微少剥離痕がみられる。244は安山岩の細長い棒を素材としたハンマーで、上下端部に敲打痕が集中する。

#### 集中部 b

10点を図化した。245・246はナイフ形石器である。245は両側縁を腹面から加工し、斜刃である。基部は平坦である。246は腹面左侧縁部に平坦に近い剥離が、連続して行われている。刃部が折れている可能性もあり、基部の形態を考慮してナイフ形石器に包括した。

247～253は台形石器である。247・249は三角形状を呈し、いずれも腹面からのプランディングが施され、248は斜刃で左側縁が加工が顕著である。250は左側縁は腹面、右側縁は背面からプランディングが施される。下縁は欠損する可能性がある。251はやや斜刃となる「U」字形を呈し、左側縁に自然面を残す。腹面には平坦剥離がみられる。252は腹面に平坦剥離がみられる。右側縁は折断面と考えられる。

253はやや大型の台形石器で、背面に自然面を残す。腹面には打点が残り、やや厚めの不定形剥片を素材とする。刃部は折れている可能性がある。254は調整剝片である。

#### エリア内出土遺物 2

集中部 a・b周辺で出土したエリア内の石器として、28点を図化した。255～262はナイフ形石器である。255は切り出し形を呈し、二側縁を腹面から加工し、刃部を形成する。256は不定形剥片を素材とし、左側縁を腹面からプランディングし、右側縁に刃部を作出している。先端部は一部自然面を残し、全体にマンガン分が付着する。257も二側縁を加工しているが、255と形態は異なり、全体的に縦長く刃部は左側縁のみである。先端が一部欠損する。258は左側縁及び右側縁の基部付近を加工し、背面基部は一部自然面を残す。259は小型で、両側縁を加工している。先端部は欠損する。260は両側縁を腹面から加工し、斜刃で鋭い刃部を作出する。261は左側縁のみを腹面からプランディングし、刃部を形成する。262は右側縁に腹面からの加工が行われる。左側縁は加工痕が不明瞭で、欠損あるいは折断されている可能性がある。

263～274は台形石器である。264・271～274は横長の「U」字形を呈する。263は上端及び右側縁に調整剝離が観察される。左側縁は折断または欠損と考えられる。加工形状から台形石器に含めた。264は背面に自然面を残し、腹面には平坦剥離が行われる。刃部に微妙剥離がみられる。265は左側縁は背面から、右側縁は背面・腹面の両方からプランディングが施される。右側縁及び下縁は石材の不純物によって不規則に剥離している。刃部は中央が欠損する。266は両側縁及び下縁の3側面に腹面からのプランディングがみられる。刃部右側は欠損する。267は薄い不定形剥片を素材とする。左側縁は背面、右側縁は腹面からプランディングが施される。268は逆三角形を呈し、左側縁は腹面、右側縁は背面からプランディングが施される。269は下半が欠損し、刃部も刀こぼれ状に欠損する。270は左側縁に背面からの加工が行われる。

刃部右側は一部欠損する。271は横長の「U」字形で背面に自然面を残す。また、下縁及び両側面にプランディングが施され、腹面には平坦剥離がみられる。272は両側縁とも腹面から加工が行われ、刃部中央が一部欠損する。273は縦長剥片を横位で用い、素材剥片の鋭利な側縁を刃部とする。両側縁及び下縁にかけて腹面からのプランディングが施される。274は大型で両側縁及び下縁を調整して方形に近い形状に仕上げている。左側縁に自然面が残る。

275は上縁に背面・腹面とも連続した剥離痕がみられ、下端は鋭く突出した形状に仕上げられている。ドリルと考えられる。276は両面とも輪郭に沿って剥離が行われており、擂器と考えられる。左上部を欠損する。277～279は二次加工剝片である。277は左側縁は腹面、右側縁は背面からプランディング状の小剥離が施される。278は腹面左侧縁に微少な剥離がみられる。279は折断剝片を素材とするが、側縁には加工等はみられない。280は使用痕剝片、281は素材剝片である。282は多孔質安山岩を素材とする台石片である。表面は摩滅により平坦面をなしている。

#### 集中部 c

4点を図化した。283・284はナイフ形石器である。283は良質な玉髓Aを素材とし、基部は背面・腹面とも平坦剥離が施される。実測後、背面側に1点剝片が接合したが完形にはならなかった。284は黒曜石Dを素材とし、長身で幅が細い。上部を欠損している。

285は調整剝片である。下半は折断されている。286は二次加工剝片である。上縁にプランディング状の細かい剥離が観察され削器の可能性がある。

#### 集中部 d

8点を図化した。287～289はナイフ形石器である。287は両側縁の下半を加工し、背面基部は平坦剥離を行っている。288は左側縁を刃部とし、厚みのある断面三角形状の剥片素材の右側縁に平坦剥離を行う。右側縁に一部自然面を残し、基部は欠損する。289は右側縁を刃部とし、左側縁は腹面からプランディングが施される。

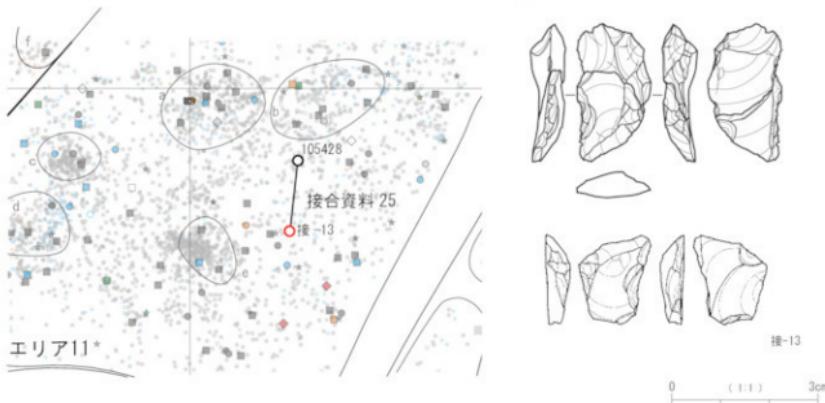
290～293は台形石器であり、292・293は横長の形態である。290は黒曜石Dを素材とし、長身で幅が細い。291は小型の不定形剝片を素材とし、右側縁は折断面である。背面左側縁には平坦剥離が行われ、刃部には微妙剥離がみられる。292はやや斜刃で、背面・腹面とも基部を中心として平坦剥離が行われ、整形される。293は両側縁及び下縁に腹面からプランディングが施される。腹面は右側縁のみ加工される。

294は縦長の素材剝片で、背面に自然面を残す。

#### 集中部 e

3点を図化した。295は両側面に数回程度、腹面からプランディングが施される。上部が折れているナイフ形石器と考えられる。296・297は台形石器である。296は

## 接合資料 25



第 68 図 エリア 11 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

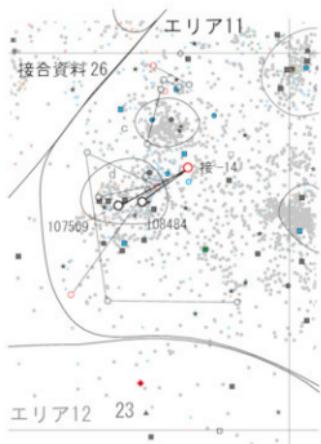
横長で、両側縁及び基部に腹面から調整を行い、やや膨らみのある刃部を作出する。297はやや斜刃である。左側縁は腹面、基部及び右側縁は腹面側から平坦剥離に近いプランディングが施される。

### エリア内及びエリア周辺出土遺物③

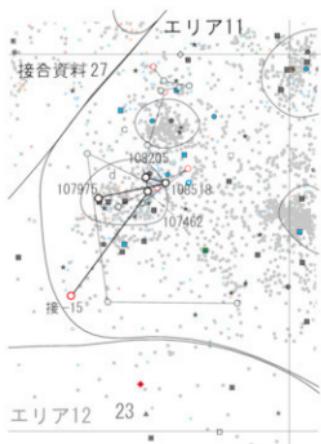
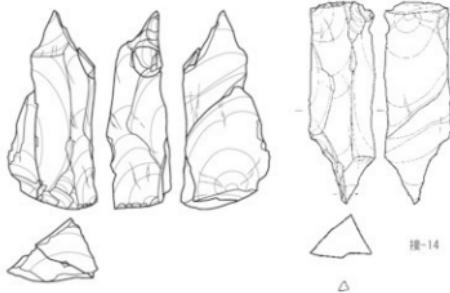
集中部 c ~ e 周辺で出土した石器として、41点を図化した。なお、321はエリアに隣接した地点で出土した。298 ~ 310はナイフ形石器である。298は縦長剥片を素材とし、右側縁上部及び基部を加工して左側縁を刃部とする。299は下縁及び左側縁に一部自然面を残し、腹面からプランディングを施す。また、腹面には両側縁から平坦剥離が加えられる。300は縦長剥片を素材とし、背面に自然面を残す。やや横幅がある点が特徴である。左側縁及び基部を加工し、右側縁を刃部とする。301は左側縁を刃部とし、背面には自然面を残す。右側縁上部と左側縁下部を腹面から加工し、整形している。302は小型であり、右側縁に腹面からのプランディングがみられる。左側縁及び基部を加工し、右側縁を刃部とする。303は小型で長身であり、基部及び左側縁を加工し、右側縁を刃部とする。先端は欠損する。304は均質な厚みの素材剥片の両側縁及び基部に腹面からプランディングを施している。刃部は欠損する。305は長身で幅が狭く、小型である。下縁は自然面であり、両側縁に腹面からプランディングを施す。先端を欠損していると考えられる。306は右側縁のみ背面からプランディングが施される。先端左側が欠損する。307は折断剥片を素材とし、左側縁が折断面である。両側縁の調整は行われず、背面には両側縁から平坦剥離が加えられる。

308は幅が狭く長身で、左側縁は腹面、右側縁は背面からプランディングが施される。刃部は欠損していると考えられる。309は小型で、左側縁は腹面、右側縁は背面・腹面の両面から細かいプランディングが施される。310は左側縁が腹面側、右側縁は上半が腹面側、下半が背面からプランディングが施される。刃部の先端には剥離痕がみられ、使用に伴って欠損したと考えられる。

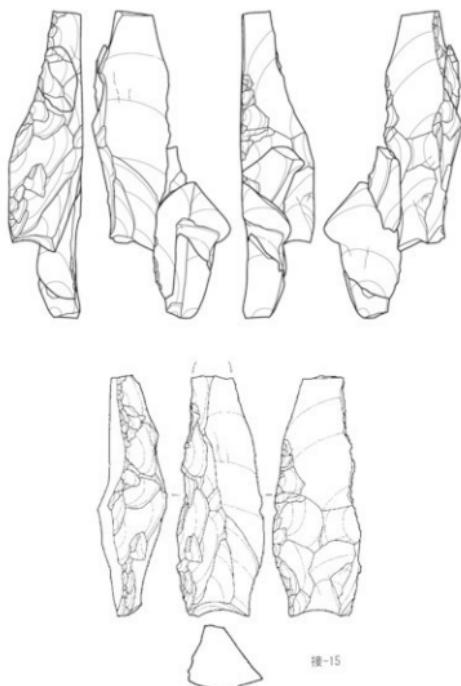
311 ~ 326は台形石器である。311 ~ 319は縦長あるいは方形の一群、320 ~ 325は横長の一群である。311は折断剥片を素材とし両側縁とも折断面を残す。312・313はいずれも折断剥片を素材とし、312は両側縁とも腹面側から、313は左側縁は背面側、右側縁は腹面側からプランディングが施される。314はやや斜刃で、基部に対し刃部が大きく広ぐる。左側縁は背面、右側縁は腹面からプランディングが施される。315は右側縁は折断面であり、左側縁のみ両面からプランディングを施す。また、腹面には下縁方向から平坦剥離が行われる。316は不定形剥片を素材としており、先端部が欠損する。腹面には左側縁からの剥離が認められる。形態から台形石器に含めた。317は斜刃で、両側縁に腹面からプランディングを施す。基部に加工は行われていない。318は斜刃で基部に対し刃部が大きく湾曲する。刃部には微少剥離痕が密に観察される。319は小型で正方形に近く、腹面からプランディングが施される。また、刃部は刃こぼれ状に欠損する。320は両側縁及び下縁が調整され、背面には下縁からの平坦剥離が加えられる。321は両側縁及び基部に平坦剥離が行われる。刃部は刃こぼれ状に欠損し、背面・腹面



接合資料 26



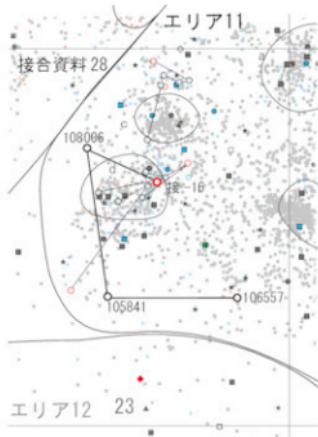
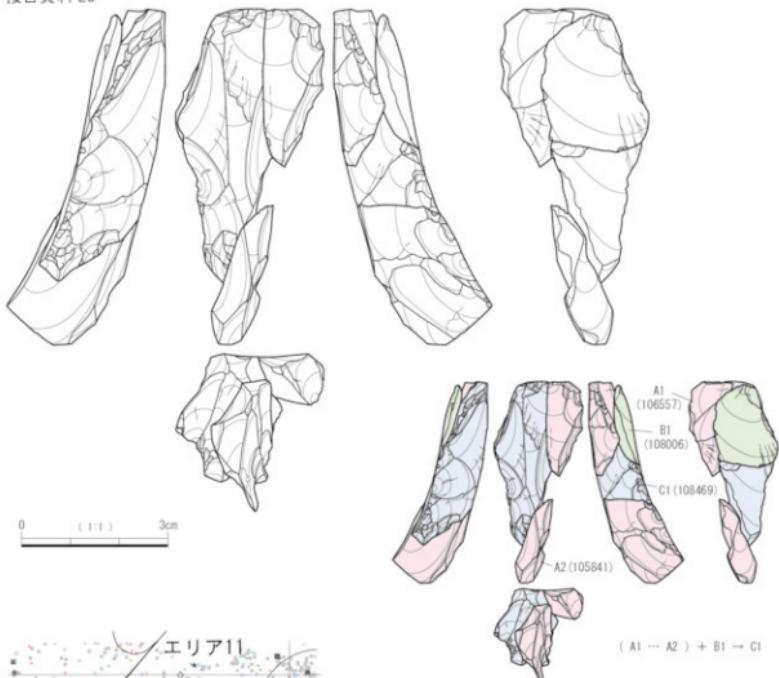
接合資料 27



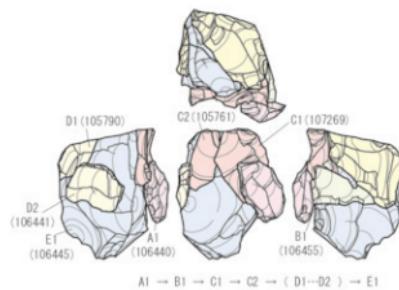
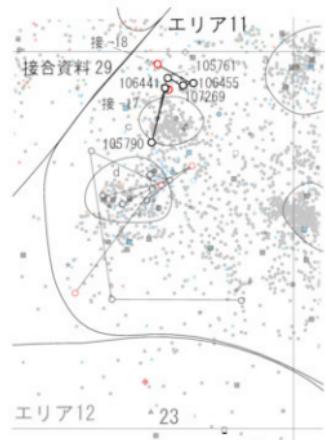
0 (1:1) 3cm

第 69 図 エリア 11 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

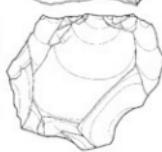
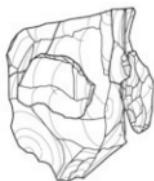
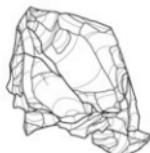
接合資料 28



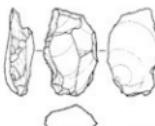
第 70 図 エリア 11 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)



接合資料 29



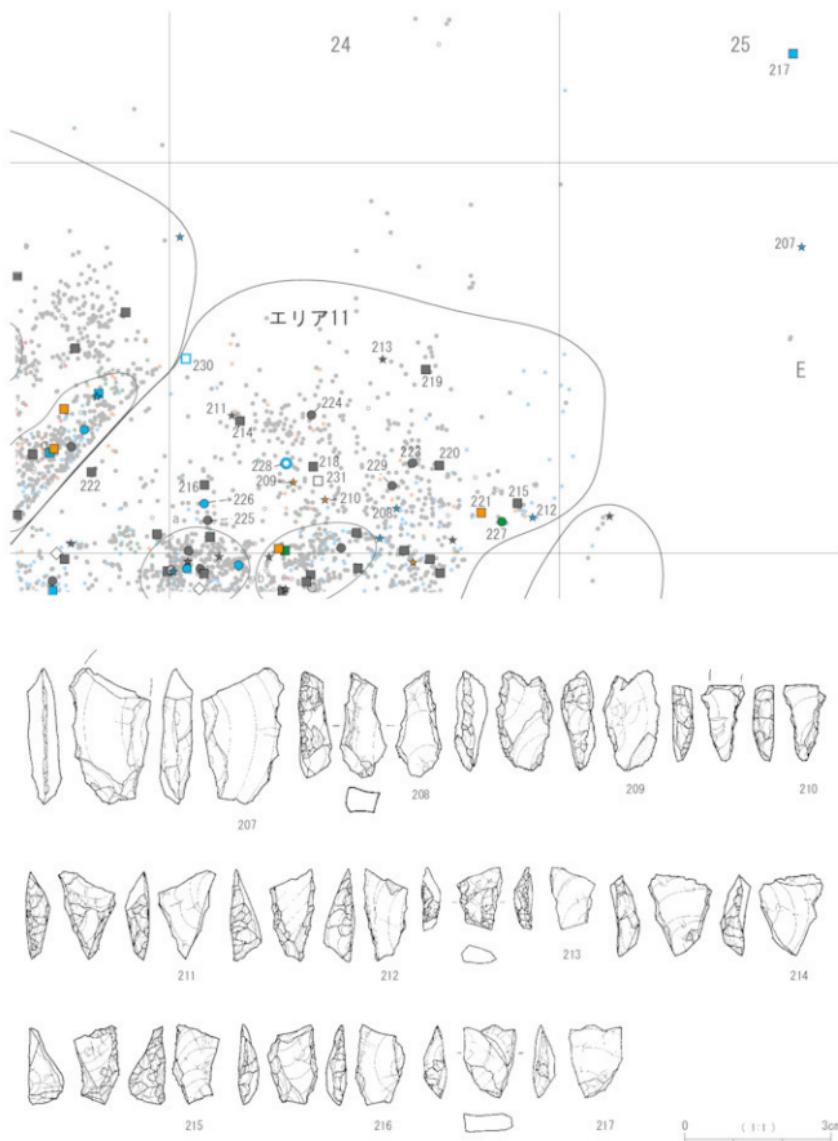
接-17



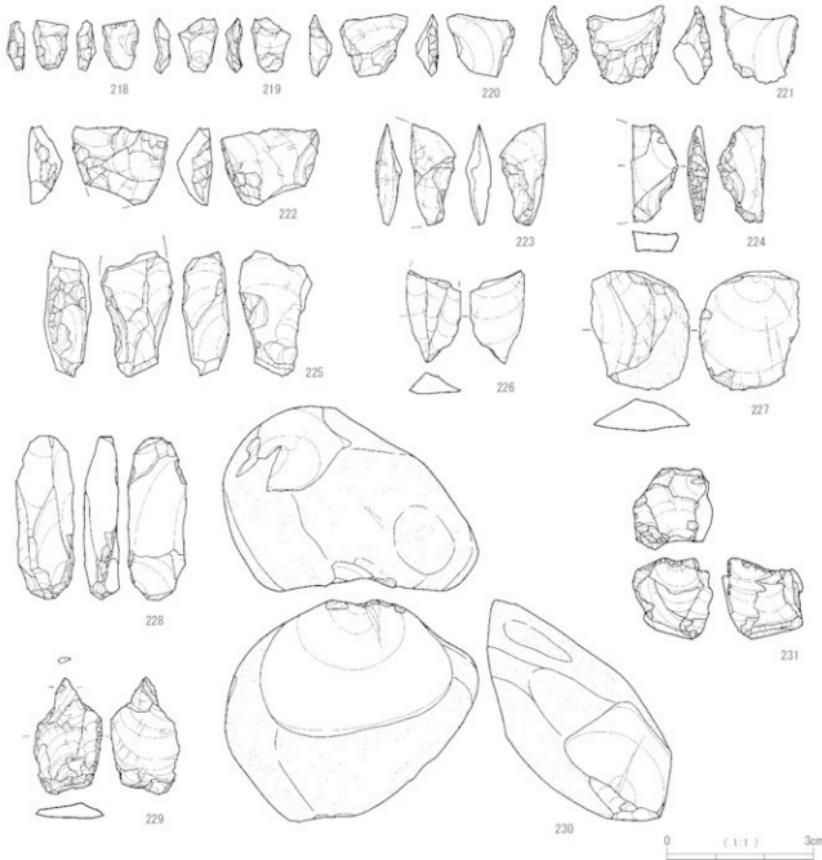
接-18



第 71 図 エリア 11 接合資料出土状況(5)・接合資料(5)



第72図 エリア11遺物出土状況(2)・関連出土遺物(1)



第73図 エリア11関連出土遺物(2)

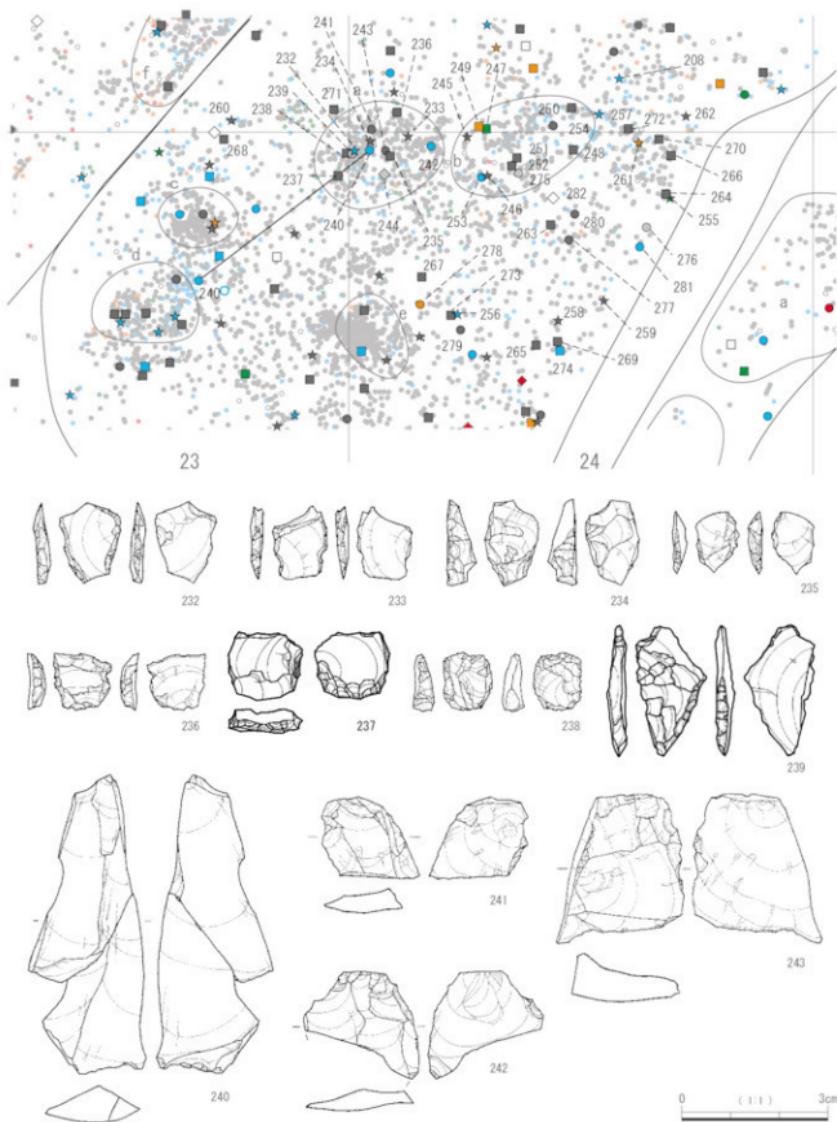
とも微少な剥離が観察される。322は両側縁及び下縁にプランディングが施され、さらに両面とも平坦剥離が加えられる。323は背面下縁部を中心と調整が加えられる。324は幅広で薄い不定形剥片を素材とし、両側縁及び基部に腹面からプランディングが施される。325は両側縁とともに広めの剥離で整形される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。326は基部に腹面からのプランディングがみられる。刃部は不明瞭であるが、形態から台形石器に含めた。

327は石核である。平坦な剥離面を打面とし、不定形剥片を剥出したものと考えられる。328はドリルである。背面は急傾斜剥離によって整形され、先端部との境界は

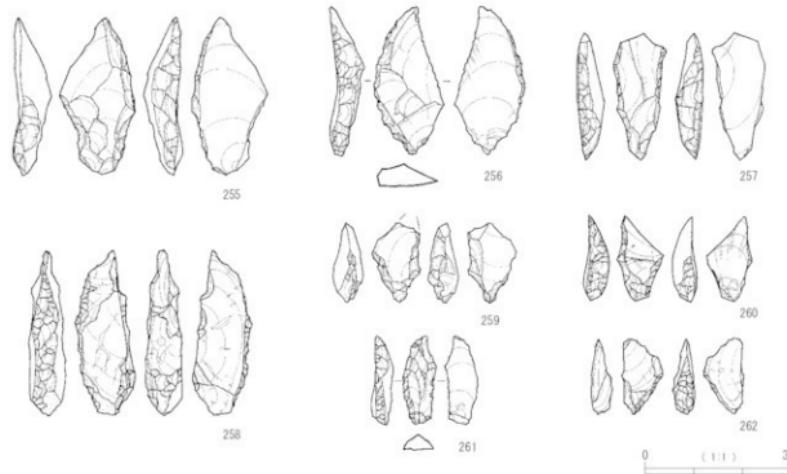
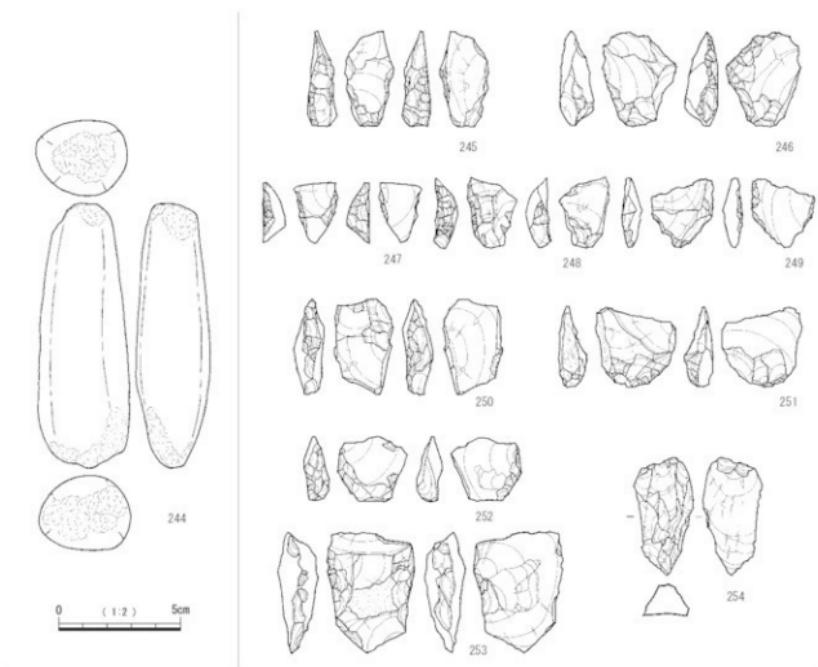
抉り状に加工されている。腹面は傾斜の緩い平坦剥離が加えられる。

329～332は二次加工剥片で、329は左側縁に連続した剥離がみられる。330は両側縁及び基部は腹面からプランディングが施され、右側縁上部に刃部が形成されているが先端が欠損しており、詳細な機能は不明である。331は両側縁に微少剥離痕が重なる。332は縦長の折断剥片の頭部に剥離を加えている。333・334は縦長の折断剥片の頭部、335は尾部である。

336～338は磨歯石である。336は風化して表面はもうくなっているが、一部に敲打痕がみられる。砂岩Dの



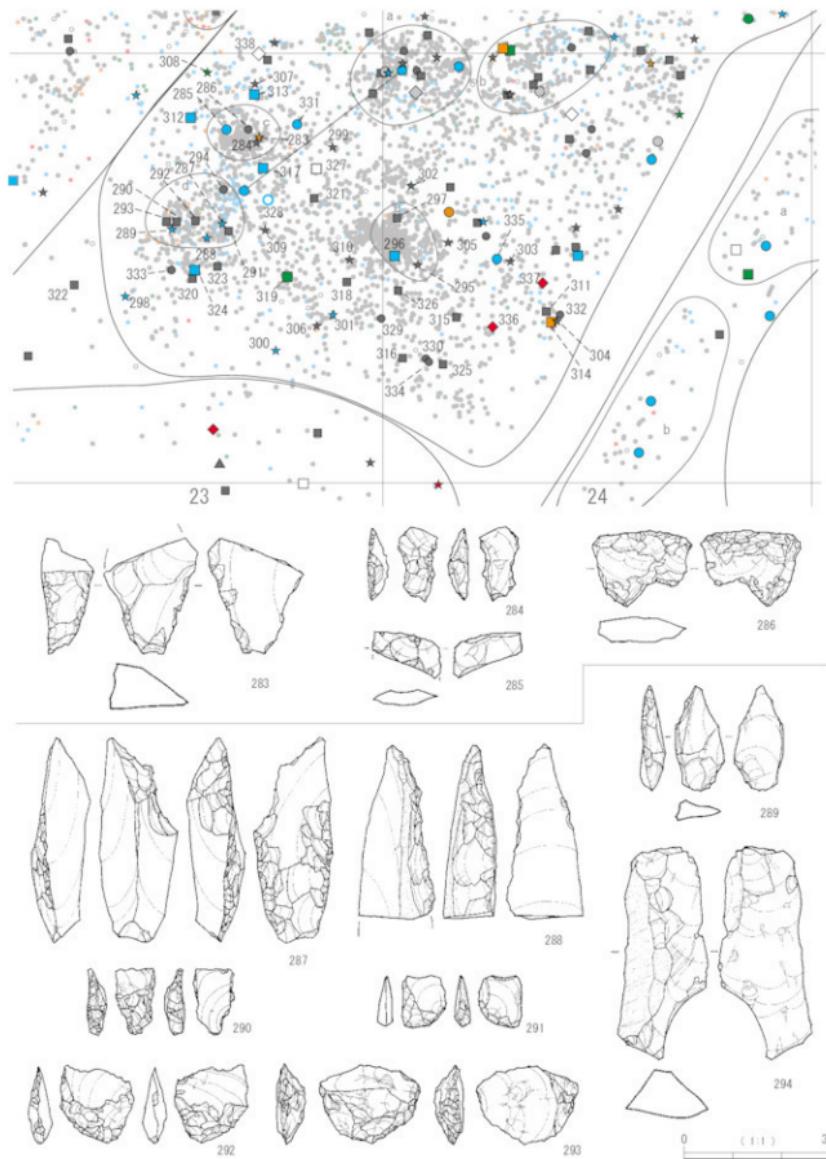
第74図 エリア11遺物出土状況(3)・関連出土遺物(3)



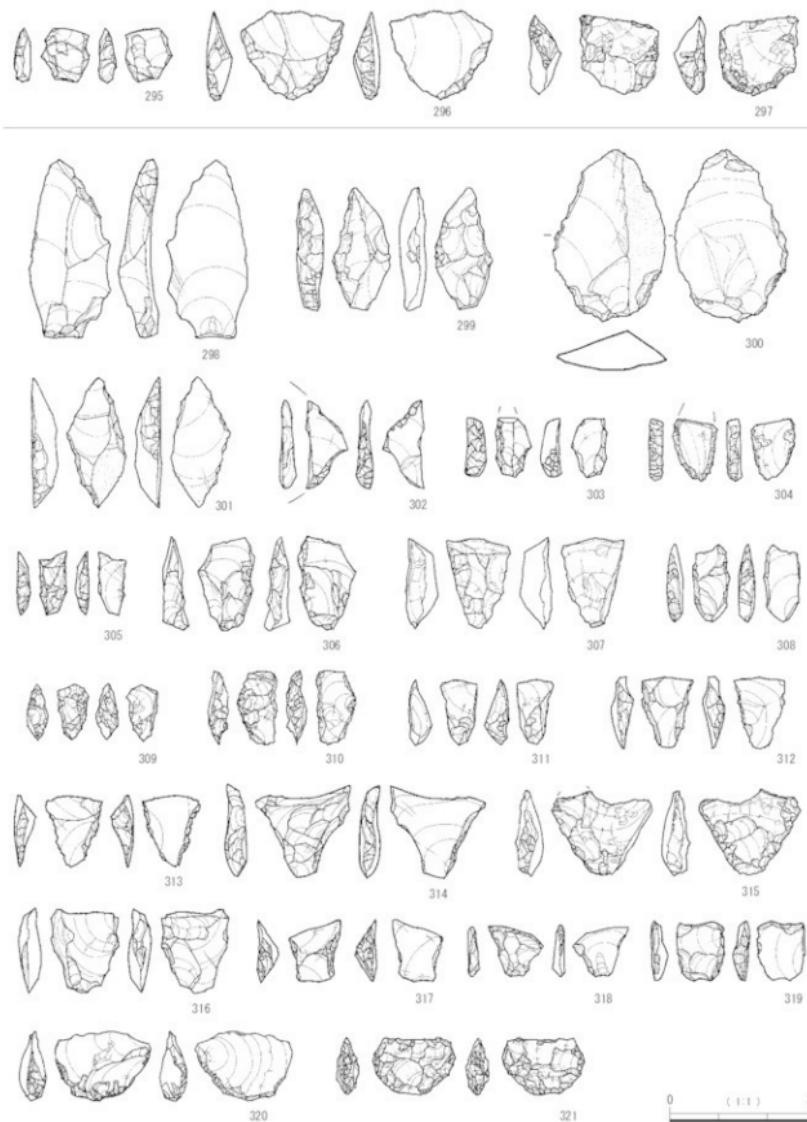
第75図 エリア11 関連出土遺物(4)



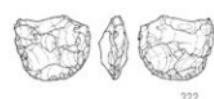
第 76 図 エリア 11 関連出土遺物(5)



第77図 エリア11 遺物出土状況(4)・関連出土遺物(6)



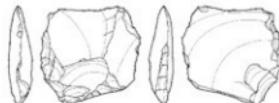
第78図 エリア11関連出土遺物⑦



322



323



324



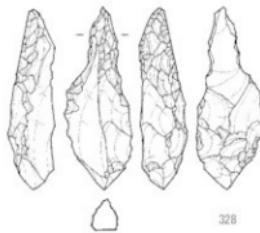
325



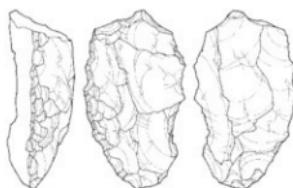
326



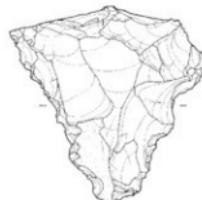
327



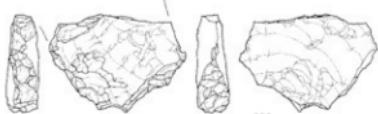
328



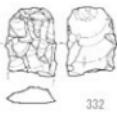
329



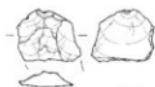
330



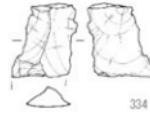
330



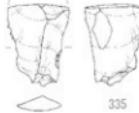
332



333



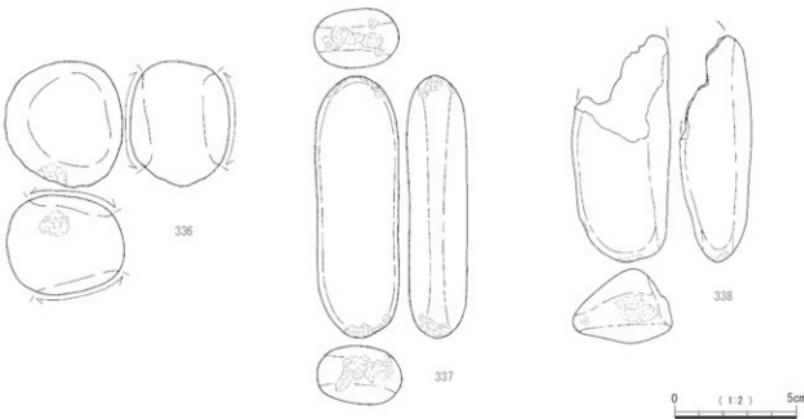
334



335

A scale bar with markings at 0, 1, and 2 cm, with a total length of 3 cm indicated.

第79図 エリア11 関連出土遺物(8)



第80図 エリア11関連出土遺物(9)

円縁を素材とする。337は砂岩Dの棒状の縁を素材とし、上下端に細かく密集した敲打痕がみられる。338はホルンフェルスの扁平な横円形縁を素材とする。上部が欠損し、下面には細かい敲打痕がみられる。上部の被断面は層状に剥離する。

## 12 エリア12(第81図・第82図)

エリア12は、F・G-23~24区に位置する。東側に遺物出土が偏る傾向にあるが、明確な集中部は認定できなかった。

石材は黒曜石が中心であり、わずかに水晶や頁岩、玉髓が点在する状況である。エリア12内から出土したツール類も黒曜石を素材としたものが多く、次いで頁岩、砂岩となる。

### エリア内及びエリア周辺出土遺物

19点を図化した。なお、348はエリアに隣接して出土した。339~346はナイフ形石器である。339は両側縁に腹面からプランディングを施し、左側縁を刃部とする。右側縁上部には自然面を残す。340は縱長の剥片の両側縁を加工している。特に、背面の右側縁先端部付近と腹面側が顕著である。341は不定形剥片を素材とし、右側縁に両面から調整を加えている。342は小型で、先端が欠損する。左側縁に腹面からプランディングを施している。343は刃部を欠損する。両側縁に腹面からのプランディングがみられる。基部は鋭角に突出する。344は下半を欠損する。右側縁に腹面からのプランディングが施される。腹面には平坦剥離が観察され、基部加工の可能

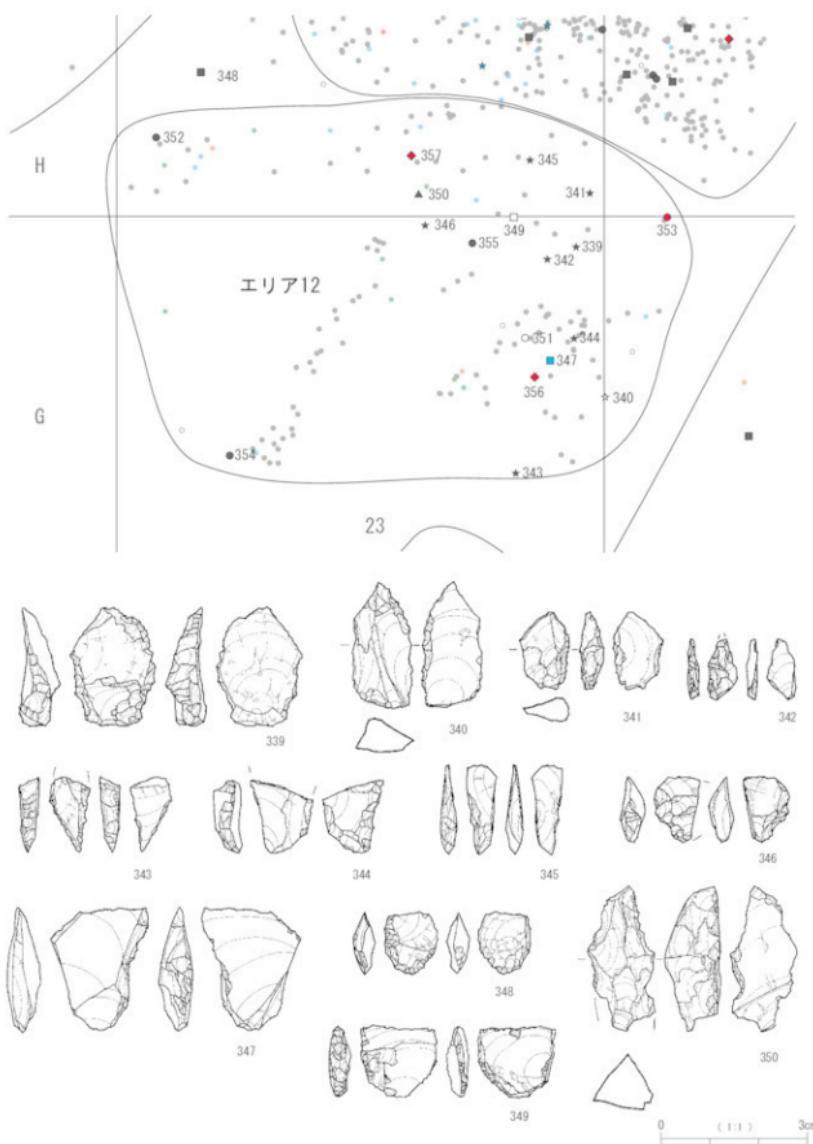
性を考慮してナイフ形石器に含めた。345は長身であり、右半は欠損または折断と考えられる。左側縁は腹面からプランディングが施される。346は背面に平坦剥離が加えられ、右側を欠損する。

347~349は台形石器である。347は不定形剥片を素材とし、左側縁は折断面である。刃部は刃こぼれ状に細かく欠損する。348~349は横長の「U」字形を呈する。348は小型であり、両側縁及び下縁に腹面からのプランディングが施される。349は両側縁及び下縁を背面側からプランディングし、刃部は平坦である。刃部は刃こぼれ状に欠損する。

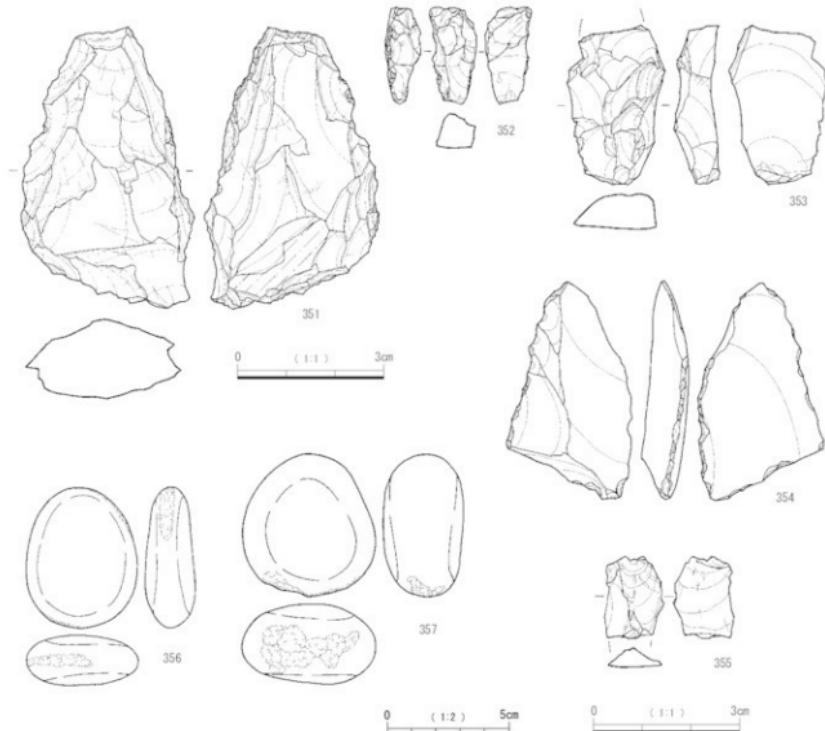
350は三稜尖頭器である。両側縁から急傾斜剥離によって稜が作出され、さらに腹面から小剥離が加えられる。先端部及び下半を欠損する。

351~354は二次加工剥片である。351は全縁に剥離がみられ、尖頭器状をなす。352は左側縁にやや急傾斜の剥離が行われる。右側縁は欠損している可能性がある。353は背面側の右側縁を中心に平坦剥離が連続して加えられる。先端を欠損する。354は多孔質安山岩を素材とし、表面がやや摩滅する。基部は折れにより欠損している。また、両側縁に連続する密な微少剥離が観察される。353・354はナイフ形石器の可能性もある。355は折断剥片の頭部である。

356・357は小型のハンマーである。356は上端部右と下端部左に細かい敲打痕が集中する。357は下縁に敲打痕が集中し、やや平坦面をなす。



第 81 図 エリア 12 遺物出土状況・関連出土遺物(1)



第82図 エリア12関連出土遺物[2]

### [13] エリア13(第83~87図)

エリア13は、E～I-23～25区に位置する南北にやや長い範囲である。北西部分が出土遺物の密度がやや高く、2つの集中部を認定した。ただし、ツール類の出土状況でみれば、エリア内の南側においても偏りなく平均的な密度で点在する。接合資料は1点確認された。

石材は黒曜石が主体を占め、頁岩、水晶、玉髓が点在し、わずかに砂岩が分布する。エリア内のツール類は黒曜石及び頁岩を素材としたものの割合が高い。

#### 接合資料

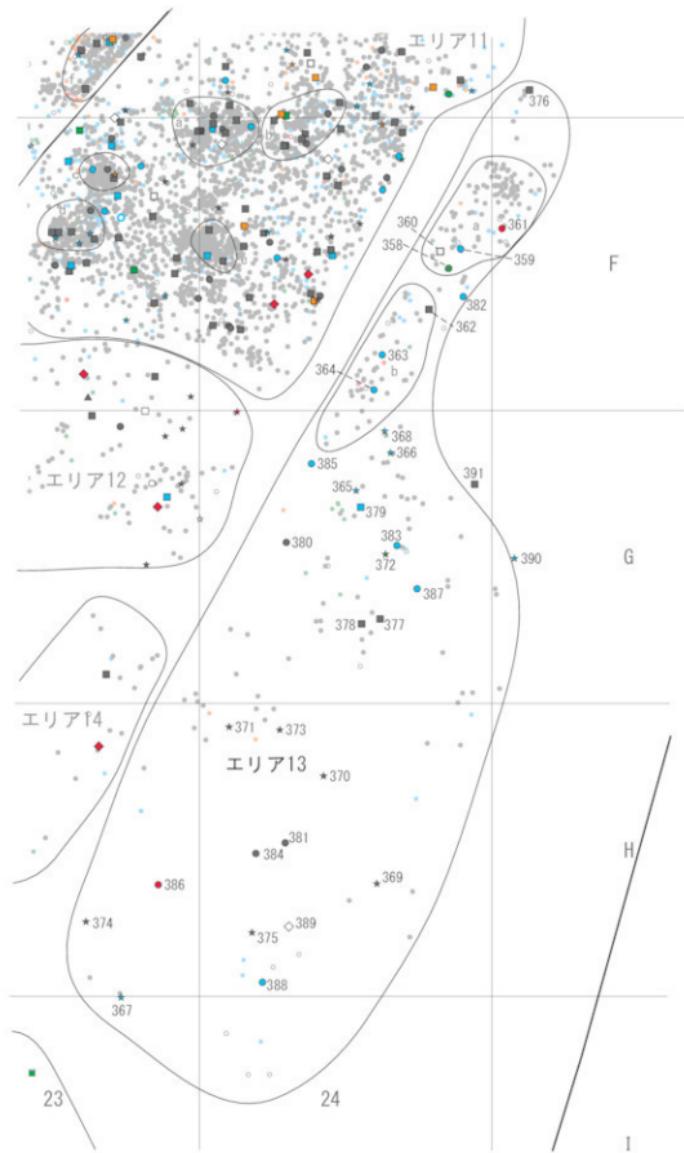
接合資料30(SG177) 近接して出土した剥片2点の接合資料である。右側縁から下縁に自然面を残し、母岩は円錐状であったと考えられる。石材は頁岩Aである。平坦な打面から接-19・接-20の2点の縦長剥片が剥出されている。

#### 集中部 a

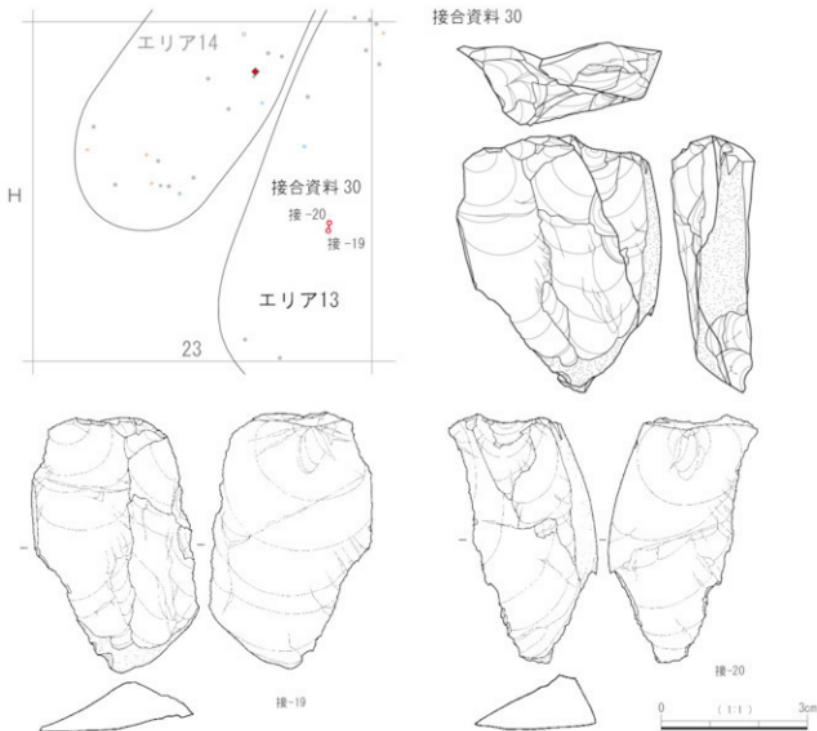
4点を図化した。358は二次加工剥片である。逆三角形状を呈し、両側縁とも腹面から細かいプランディングが施される。上部を欠損するが、剥離面の観察から上部は打瘤部にあたると想定され、刃部になるとは考えにくい。359は剥片である。下端は折れまたは欠損している。360は石核で、不定形剥片を剥出したものと考えられる。361は縦長剥片で、左側縁下部に自然面を残す。

#### 集中部 b

3点を図化した。362は台形石器である。刃部及び右側縁は折断面を利用し、左側縁も素材剥片の頭部をそのまま用いている。基部にのみ集中してプランディングが施される。363は折断された剥片の頭部である。364は剥片である。下縁には自然面が残る。



第83図 エリア13遺物出土状況



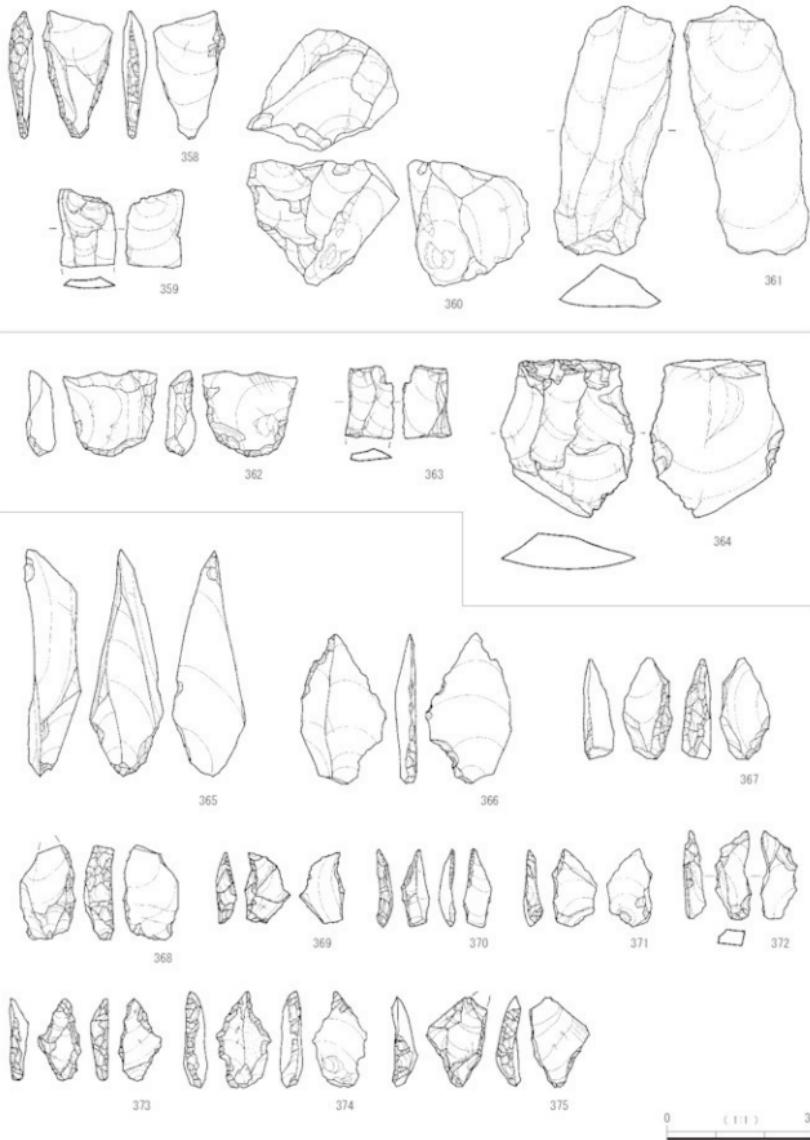
第84図 エリア13 接合資料出土状況・接合資料

**エリア内及びエリア周辺の出土遺物**

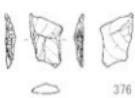
27点を図化した。390・391はエリア周辺で出土した。365～375はナイフ形石器である。石材は頁岩、黒曜石、水晶である。365は素材剥片の形状を活かして基部を加工し、両側縁にはほとんど加工を行わない。先端部には使用痕と思われる微少剥離がみられる。366は薄手の剥片を素材とし、基部及び左側縁に加工を行う。367は不定形剥片を素材とし、基部を中心に両側縁に加工を行われる。右側縁は背面・腹面の両面からプランティングが施される。368は367と類似し、刃部の向きは異なるものの石材も同じ頁岩である。先端部を欠損する。369は不定形剥片を素材とする。「ノ」の字に近い形態を呈し、刃部は大きく湾曲する。370は長身で幅が狭い不定形剥片を素材とし、左側縁に腹面からプランティングを施し、右側縁を刃部とする。371は小型の剥片の左側縁に腹面

からプランティングを施す。刃部にわずかに刃こぼれ状の欠損がみられる。372は基部及び左側縁の上半に加工を行い、腹面は刃部を中心広めの調整剥離が行われる。373は刃部である左側縁の先端部付近を除き、側縁及び基部は全て腹面からの調整が行われる。374は縦長の剥片を素材とし、背面及び基部に自然面を残す。両側縁とも腹面からプランティングが施され、先端部には使用痕と考えられる剥離がみられる。375は不定形剥片を素材とし、左側縁下部は腹面、右側縁は背面・腹面の両面から細かい加工が行われる。先端部を欠損しており刃部の長さは不明である。上記したナイフ形石器は、上層のIX・X層からの出土事例が多く、特に黒曜石製のものの大半は上層からの出土である。

376～379は台形石器である。376は小型で、素材剥片も非常に薄い。斜刃で、両側縁には微少剥離に近い細か



第85図 エリア13 関連出土遺物(1)



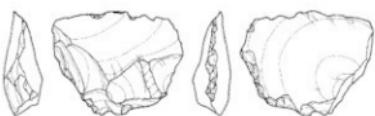
376



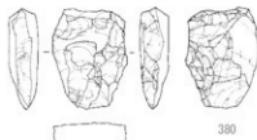
377



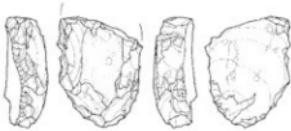
378



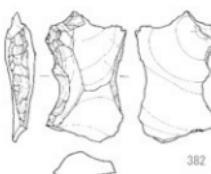
379



380



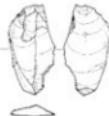
381



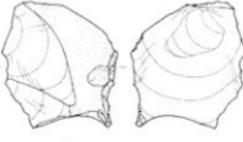
382



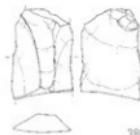
383



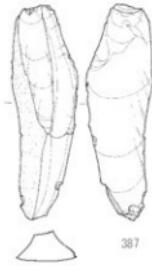
384



385



386



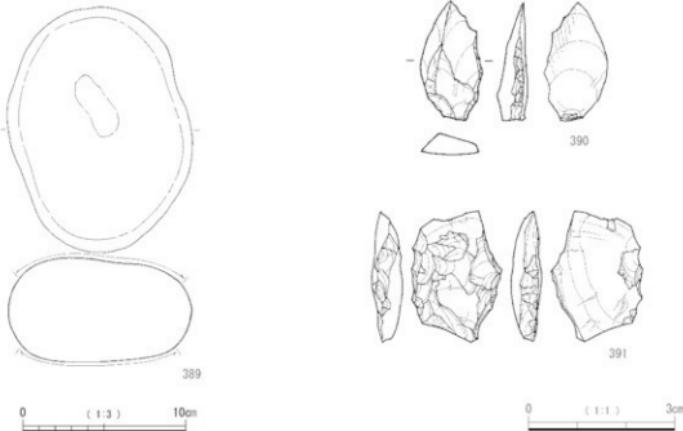
387



388

0 (1:1) 3cm

第 86 図 エリア 13 関連出土遺物②



第87図 エリア13関連出土遺物(3)

いプランディングが腹面から施される。377は薄い素材剥片を利用しておらず、小型である。左側縁は背面、右側縁は腹面からプランディングが施されている。刃部はやや斜刀をなす。378は台形を呈し、両側縁及び下縁の3面が折断面である。腹面には平粗削離が行われ、刃部は刃こぼれ状に欠損する。379は「U」字形を呈するやや大型の台形石器で、節理面が部分的に露出する頁岩を素材とする。両側縁及び下縁に加工が行われる。特に、腹面の左側縁には背面からのプランディングが連続して施される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。

380～384は二次加工あるいは使用痕のある剥片である。380は厚めの折断剥片を素材とし、上端と下端に対向する剥離痕が観察される。楔形石器の可能性もある。381は縱長の素材剥片の両側縁を加工し、背面には自然面を残す。上半を欠損するため刃部は不明瞭であるが、ナイフ形石器の欠損品の可能性がある。382は左側縁にのみ腹面から連続した加工が行われる。広めの剥離により凹みが整形されており、抉入石器の可能性もある。383は頁岩Aの縱長剥片である。両側縁に不規則な微少剥離がみられる。384は右側縁の下部に抉り状の微少剥離が観察され、下端が欠損する。いずれも、使用痕と考えられる。385は背面に自然面を残す剥片である。素材は頁岩Bで、母岩は円礫と考えられる。右側縁下部に腹面からの加工が行われる。386～388は縱長剥片であり、386は折断された剥片の頭部である。387は左側縁に自然面を残し、388は平坦な打面から剝出されている。また、

388の素材は、白色の斑が顕著な頁岩Eである。

389は台石である。表裏面とも平滑であるが、細かい敲打痕がみられる。

390・391はエリア14に隣接して出土した石器である。390はナイフ形石器である。基部を加工し、右側縁に腹面からプランディングを施して左側縁を刃部とする。下縁は平坦である。素材は頁岩と判断したが、針尾産黒曜石にも近い青灰色の良質な石材である。391は長方形を呈する台形石器である。両側縁とも腹面からプランディングが施される。

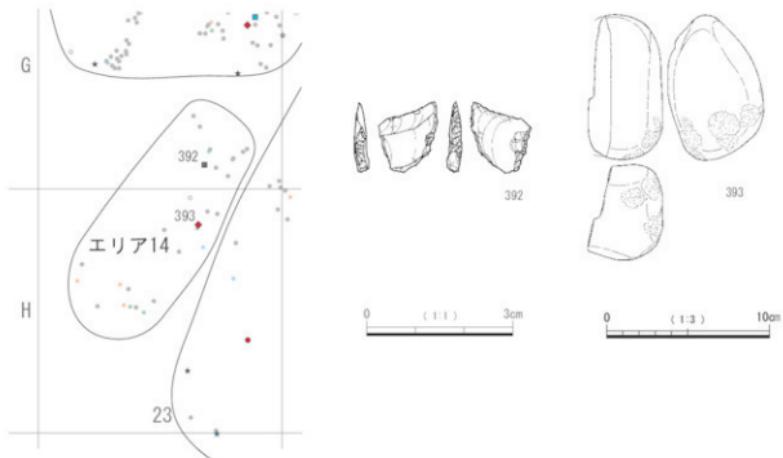
#### 14 エリア14 (第88～90図)

エリア14は、エリア13に隣接するG・H-23区に位置する。遺物の密度は低い。集中部は認定されなかったが、接合資料は1点確認された。

石材は黒曜石を主体とし、玉髓、頁岩、水晶が点在する。出土石器は少なく、黒曜石製の台形石器と砂岩製の敲打具が各1点ずつである。

##### エリア内出土遺物

2点を図化した。392は台形石器である。不定形剥片を素材とし、下端は折断面である。左側縁は背面、右側縁は腹面からプランディングが施され、斜刃である。393はハンマーである。左半分を欠損する。下半の稜を中心に敲打痕が集中してみられる。



第88図 エリア14遺物出土状況・関連出土遺物

#### 接合資料

接合資料31 (SG212) エリア内及び一括資料として出土した剥片2点と、隣接部で出土した接-21の石核の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。円盤形を呈する典型的な盤状石核で、周縁部を打面とする求心剥離により、やや幅広で丈の短い不定形剥片を連続して剥出している。石核資料の中では最も大きい。

#### 15 エリア15 (第91図)

エリア15は、I・J-22～23区に位置する。出土遺物はやや密度が高い範囲もあるが、集中部の認定には至らなかつた。また、接合資料も確認されなかつた。

石材は黒曜石と頁岩がほぼ同率で、J区側に水晶が点在する。出土したツール類も黒曜石と頁岩を素材とするものが大半で、1点のみ水晶であった。

#### エリア内出土遺物

10点を図化した。394～399はナイフ形石器である。394は基部及び左側縁を腹面から加工し、右側縁を刃部とする。背面と腹面で剥離方向が異なる不定形剥片を素材とする。395は「ノ」の字状の剥片を素材とし、背面に自然面を残す。下半の両側縁を腹面から加工している。先端がわずかに欠損する。396は縦長剥片を利用しており、側縁は先端部分のみ腹面から加工を行う。基部は背面に数回の剥離がみられるが、下縁も自然面を残すなど、剥離調整が部分的であるのが特徴といえる。先端部は一部欠損している。以上の3点は頁岩を素材とする。397は

上半が欠損するものの、上端左侧の刃部は残存する。両側縁に腹面からプランディングを施す。398は左側縁に腹面から連続したプランディングが施され、右側縁を刃部とする。基部は欠損する。刃部には微少剥離痕が観察される。399は基部が広く三角形状を呈する。左側縁に腹面からプランディングが施され、一部自然面が残る。刃部には微少剥離痕が観察される。397～399は黒曜石を素材とする。

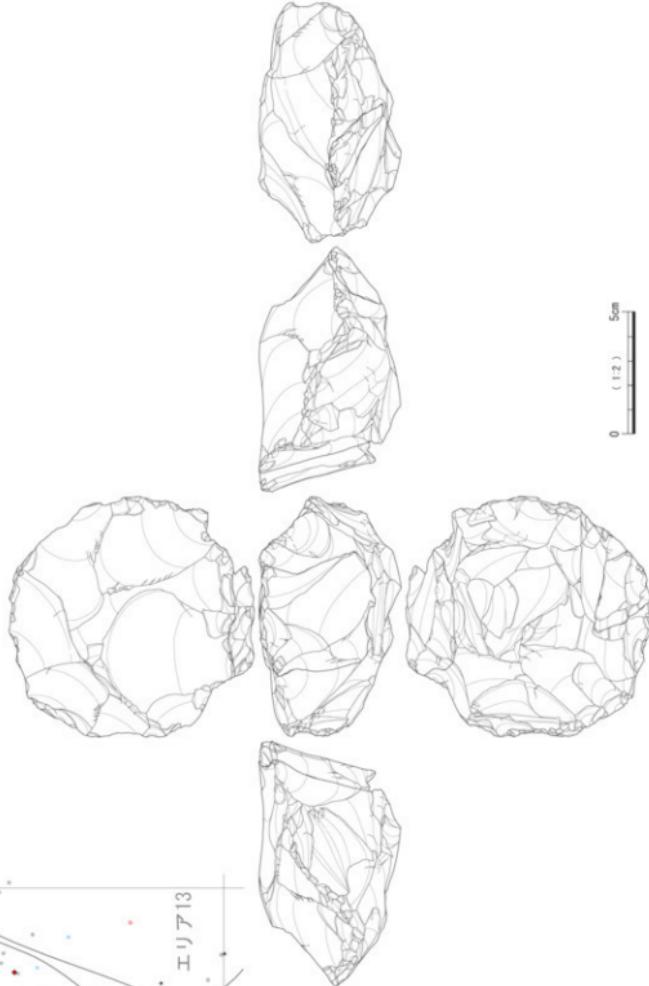
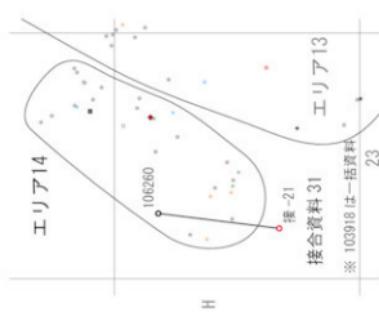
400・401は台形石器である。長身でやや斜刃である。背面には自然面を広く残す。401は基部の幅が狭い台形形状を呈する。刃部は刃こぼれ状に欠損する。400・401にはいずれも腹面からのプランディングが施される。

402は二次加工剥片である。水晶Aの不定形剥片を素材とし、背面は複数方向から剥離が行われる。結晶面でステップ状に剥離しており、形状がいびつである。403は剥片で、大型の縦長素材剥片と考えられる。平坦な打面から剥出され、背面には自然面を残す。

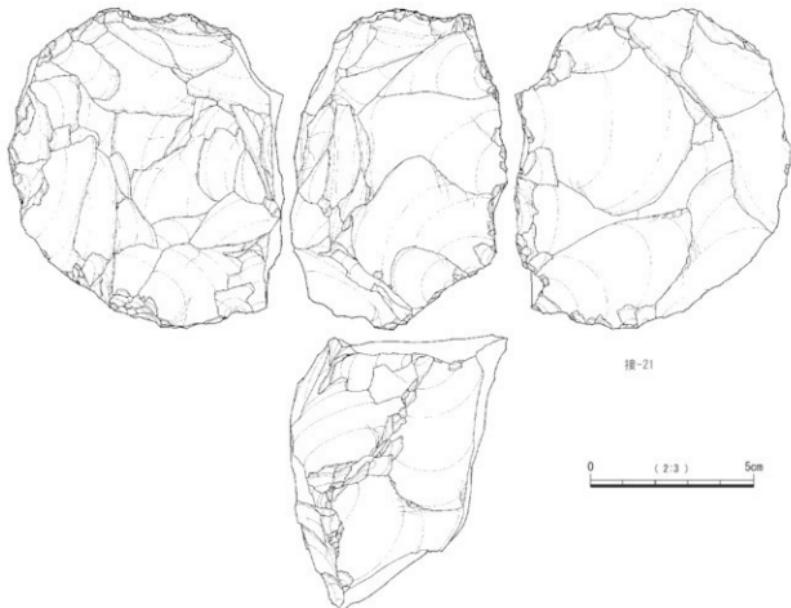
#### 16 エリア16 (第92図・第93図)

エリア16は、エリア15に隣接するI・J-21・22区に位置する。南北に細長い範囲に、石器が散在する。密度は低く、集中部は認定されなかつた。また、接合資料も確認されなかつた。

石材は少ない資料ながら黒曜石の占める割合が高く、ツール類は黒曜石と頁岩がほぼ同率である。



第89図 エリア14 接合資料出土状況・接合資料(1)



第90図 エリア14接合資料(2)

**エリア内及びエリア周辺出土遺物**

8点を図化した。408はエリア周辺で出土した。404～408はナイフ形石器である。404は縦長剥片を素材とし、右側縁と基部に加工を行い、左側縁を刃部とする。刃部は中央部分が欠損する。基部は下縁側から平坦剥離を数回行っている。405は二等辺三角形状を呈し、左側縁に腹面からプランティングを施して右側縁を刃部とする。下縁は平坦な自然面である。406は背面左側縁から右側縁下部にかけては急傾斜剥離、右側縁全体に平坦剥離が行われる。そのため、断面が三角形状を呈する。上半を欠損するが、右側縁に刃部が残存している。407は小型の剥片を素材とし、左側縁及び基部から右側縁下部にかけて腹面からプランティングを施し、刃部を整形する。先端を欠損する。408は下縁からの剥離で基部を整形し、右側縁を加工している。先端を欠損する。

409は加工痕のある剥片である。砂岩Dの縦長剥片を素材とし、剥片の形状をほぼ変えずに左側縁のみ調整を加えて整形している。腹面の右側縁先端部には使用痕と思

われる平坦剥離が観察される。410は板状の蔽石である。全体的に角が摩滅しているが、上端及び下端にわずかに敲打痕状の潰れが認められる。

411は砂岩Aを素材とする石核である。平坦な自然面を打面として側縁から求心剥離が行われる、いわゆる盤状石核である。

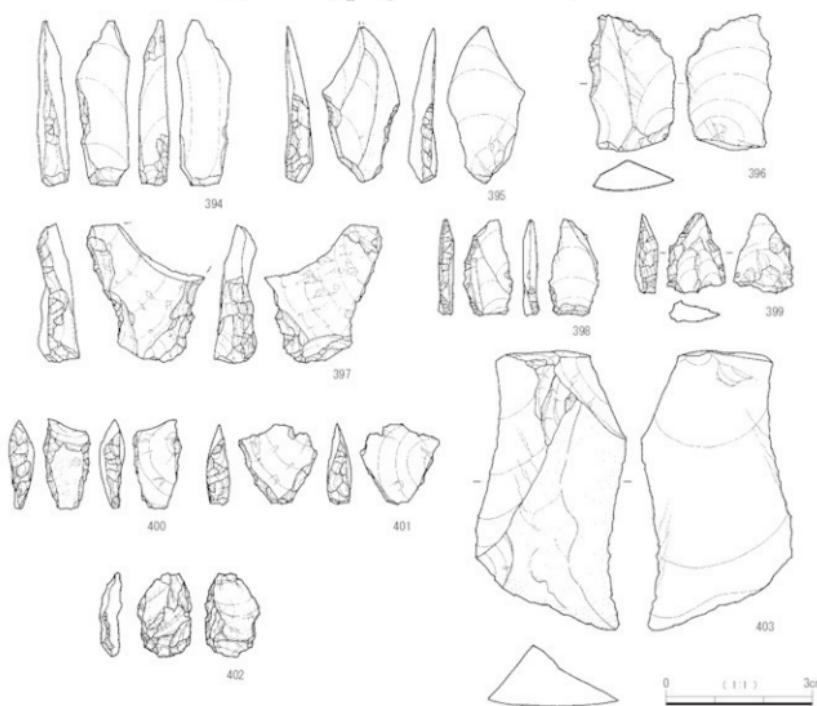
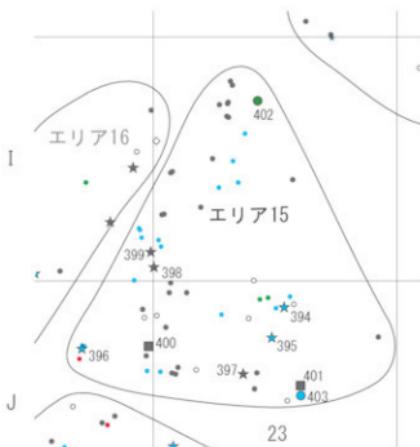
**⑦ エリア17(第94図・第95図)**

エリア17は、J・K-21～23区に位置する。遺物の密度がやや高い範囲があるが、集中部としての認定には至らなかった。また、接合資料は確認されなかった。

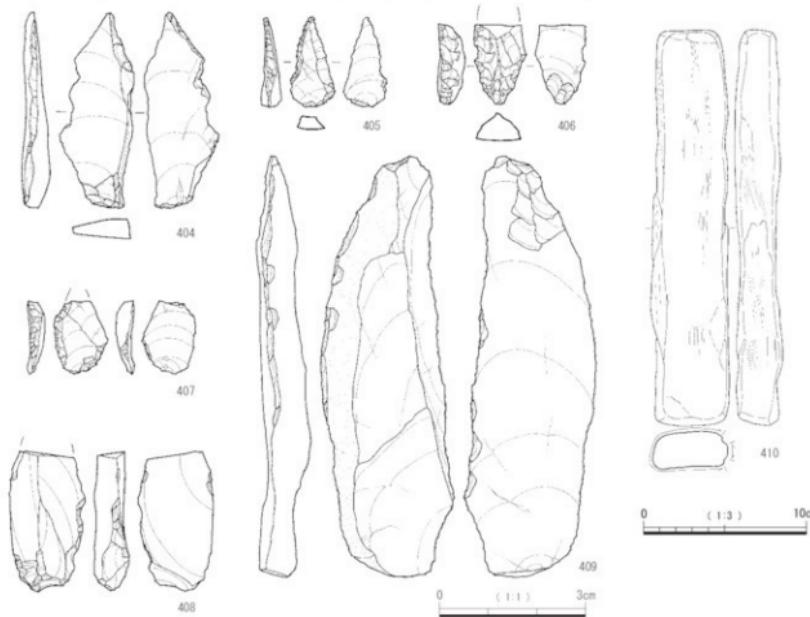
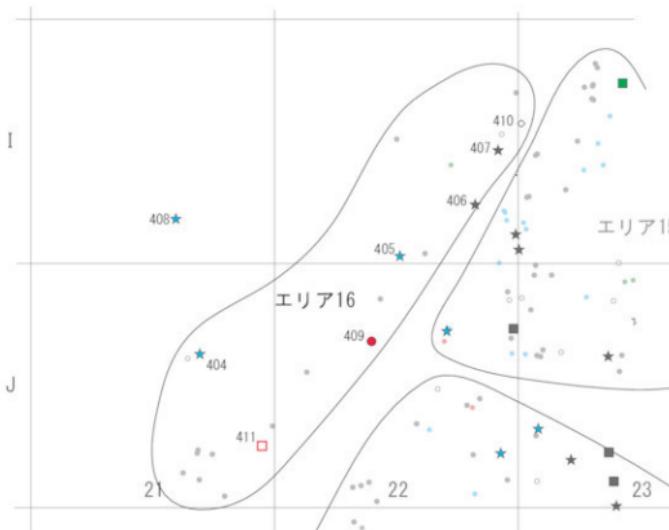
石材は黒曜石が主体を占め、次いで頁岩の割合が高い。ツール類は頁岩と黒曜石が主体である。

**エリア内出土遺物**

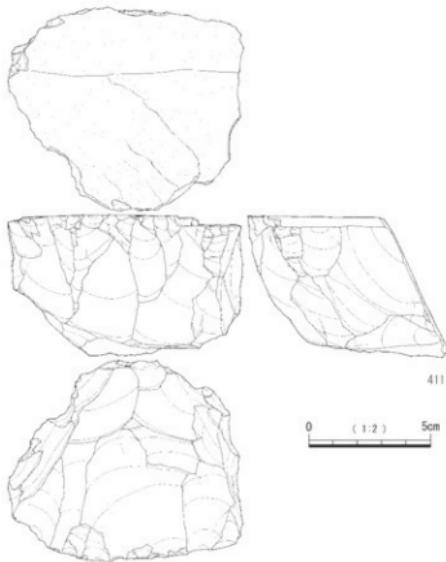
10点を図化した。412～417はナイフ形石器である。412～415は頁岩、小型の416・417は黒曜石を素材とする。412は断面が三角形に近く、三棱尖頭器に類する形態である。左側縁及び背面を急傾斜剥離で整形し、ブ



第91図 エリア15遺物出土状況・関連出土遺物



第92図 エリア16遺物出土状況・関連出土遺物(1)



第93図 エリア16関連出土遺物(2)

ンティング状の剥離調整が行われる。腹面の基部付近は平坦剥離が行われる。413は両側縁は素材の形状をそのまま活かし、基部を集中的に加工している。先端部は欠損する。414は縦長剥片を素材とし、基部や左側縁にわずかに加工が行われるのみで、ほぼ素材剥片の形状を留めている。右側縁を中心に微少剥離痕が連続してみられる。先端部がわずかに欠損する。415は幅広でやや厚みのある素材の両側縁及び基部に腹面からプランティングを施して整形する。斜刃であり、刃部は刃こぼれ状に欠損する。416は左上半を欠損するため形態は不明であるが、両側縁に腹面からプランティングを施し、基部が鋭く突出する。刃部は湾曲すると想定される。417は斜刃で背面には自然面を残す。両側縁に腹面からプランティングが施される。基部に加工痕はみられない。

418は使用痕のある剥片である。小型の縦長剥片を素材とし、右側縁には自然面を残す。刃部には鱗状の剥離が数回みられ、使用痕と考えられる。419・420は二次加工剥片である。419は右側縁に腹面からのプランティングが施され、左側縁は刃部状をなす。また、420も同様に左側縁に細かい調整が行われ、右側縁はわずかに刃部が残存する。いずれも先端及び下半が欠損するため二次

加工剥片にとどめたが、ナイフ形石器の欠損品の可能性がある。421は剥片であり、わずかに自然面が残る。腹面右側縁には剥離が連続して行われるが、詳細は不明である。

#### 08 エリア18(第96図)

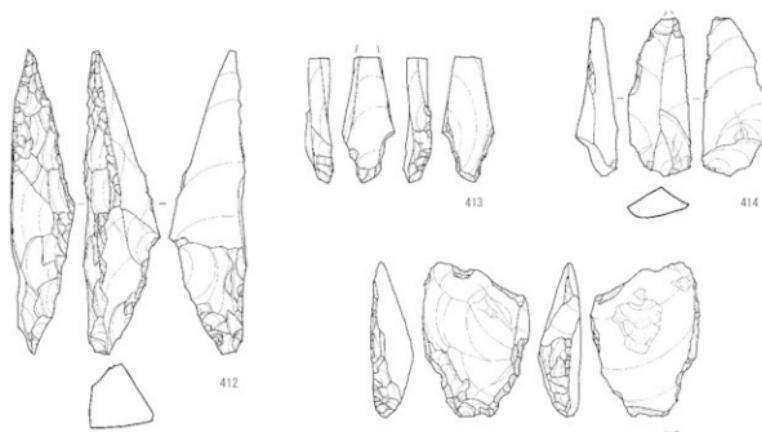
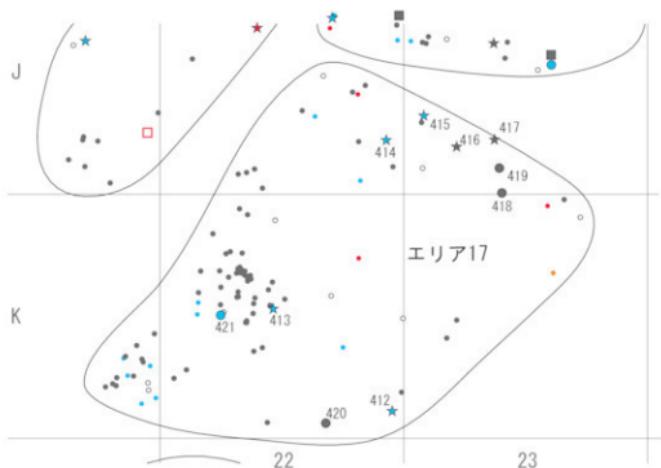
エリア18は、L・M-21・22区に位置する。やや遺物がまとまる範囲もあるが、集中部の認定には至らなかつた。また、接合資料も確認されなかつた。なお、隣接するL・M-20区で出土した敲打具もここで取り上げる。

石材は黒曜石が主体であり、出土したツール類は頁岩、黒曜石を素材とする。

#### エリア内及びエリア周辺出土遺物

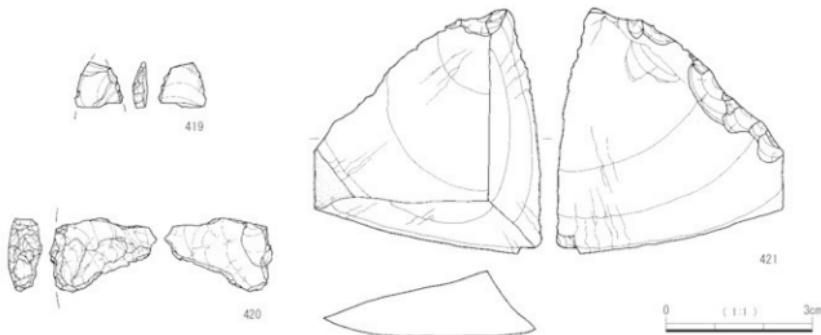
5点を図化した。422・423はナイフ形石器である。422は大型の縦長剥片を素材とし、基部に平坦剥離を行って整形する。また、両側縁の下半は腹面からプランティングが施される。先端には使用痕と考えられる剥離が観察される。423は小型の縦長剥片を素材とし、両側縁を加工して柳葉形を呈している。背面基部は、下縁からの平坦剥離が行われる。

424は「U」字形を呈する台形石器である。右側縁に



0 (1:1) 3cm

第94図 エリア17遺物出土状況・関連出土遺物(1)



第95図 エリア17関連出土遺物(2)

は自然面がわずかに残る。背面は平坦剥離により整形され、両側縁及び下縁の3側面に背面・腹面の両面から細かいプランディングが施される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。

425・426はエリアの周辺部で出土した板状の磨礫石である。いずれもやや粒子の目立つ砂岩を素材とし、表裏面及び両側面は研磨したように平滑である。特に、426は頗著である。いずれも下縁に細かい敲打痕が観察される。エリア16で出土した410と形態は類似するが、側面を研磨し平坦面を作出した可能性がある点で性格が異なる。いずれも上部が欠損する。

#### 19 エリア19(第96図)

エリア19は、J~L-20区に位置する。範囲は狭いが、遺物の密度は比較的高い。しかし、ツール類は少なく、大半は剥片類であった。集中部は認定されなかった。また、接合資料も確認されなかった。石材は玉髓が中心であり、出土した石器とも整合的である。

##### エリア内出土遺物

3点を図化した。いずれも玉髓を素材とする。427はナイフ形石器である。左側縁から基部、右側縁の下端にかけて腹面からプランディングが施される。斜刀であり、先端が一部欠損する。428は不定形剥片を素材とし、背面に自然面、腹面に節理面が残る。左側縁を腹面、右側縁を背面から加工し、基部は下縁側から平坦剥離が行われる。刃部は山状に突出しており、いわゆるペン先形のナイフ形石器の範疇に含まれると考えられる。

429はやや厚みのある剥片を素材とする長身の台形石器である。左側縁は自然面を残し、右側縁と下縁に腹面からプランディングを施す。

#### 20 エリア20(第97~102図)

エリア20は、J~L-15~18区に位置する。中心付近に集中域が点在し、3つの集中部を認定した。接合資料は3点である。

石材は集中部ごとに特徴があり、集中部aでは黒曜石主体に頁岩と水晶が一定量出土しており、ツール類は水晶と黒曜石の比率が高い。集中部bは玉髓を主体に頁岩と黒曜石、そして水晶と多様な石材が認められる。ツール類は玉髓と頁岩が多く、黒曜石と水晶が少量含まれる。集中部cはツール類と併せて玉髓を主体に頁岩と水晶がみられ、黒曜石を素材とするものは確認されていない。

##### 接合資料

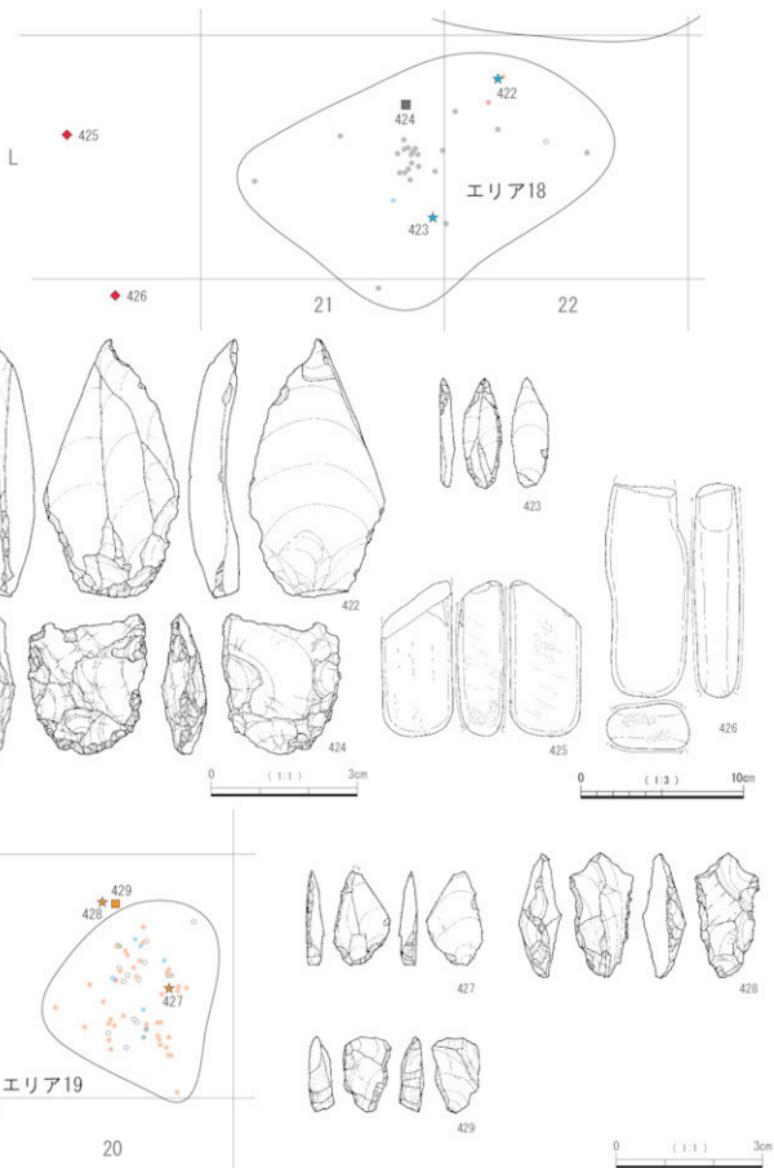
**接合資料32 (SG036)** 9~11層の3つの層にわたる8点の接合資料である。エリア内に剥片が点在する。石材は頁岩Cである。下縁部に残る自然面の形状から、長楕円形の縁を分割したと想定される。分割面は複雑で複数方向から剥離が行われているが、いずれも不定形剥片の剥出を目的としたものと考えられる。

**接合資料33 (SG221)** 石核と3点の調整剥片の計4点の接合資料である。石材は頁岩Fである。調整剥片のうち、2点は打面調整剥片である。また、腹面は節理面である。

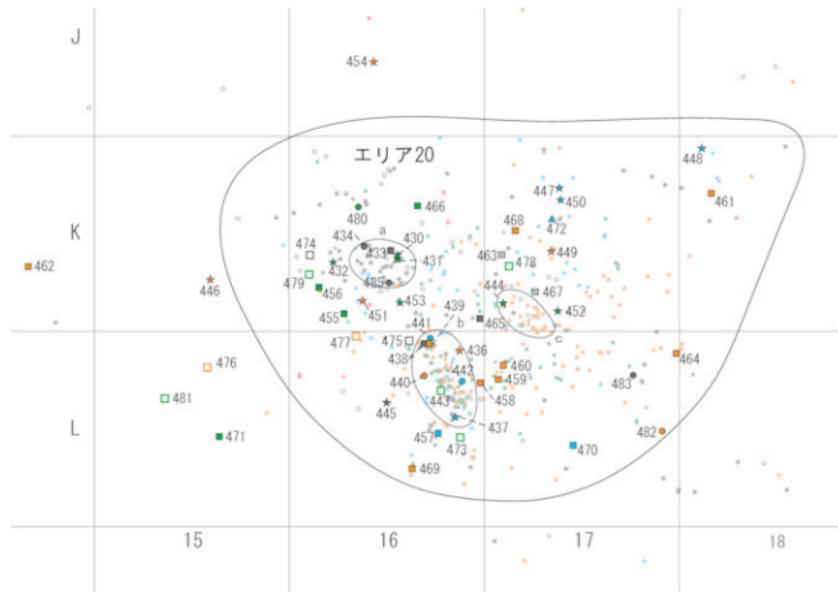
**接合資料34 (SG285)** エリア内で出土した2点の折断剥片の接合資料である。石材は玉髓Bである。背面に自然面を広く残す継長剥片を、頭部3分の1程で折断している。

##### 集中部a

6点を図化した。430~432はナイフ形石器である。430は腹面の右側縁を中心に平坦剥離が行われる。プランディングは不明瞭である。431~432はいずれも10層からの出土であるが、第2文化層に含めた。431は背面の



第96図 エリア18・19遺物出土状況・関連出土遺物



第97図 エリア20遺物出土状況

ほとんどは劈開面である。また、両側縁と基部を加工し、切り出し形を呈する鋭い斜刃を整形する。432は小型で斜刃であり、両側縁とも腹面から幅が広い剥離を行い、右側縁に細かくプランディングを施す。

433は台形石器である。小型で方形を呈し、不定形剥片を素材として両側縁とも背面からプランディングが施される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。

434・435は二次加工剥片である。いずれも黒曜石を素材とする横長の剥片の打面を側縁に置き、縱長に使用する。両側縁に細かいプランディングが施されるが刃部が不明瞭である。形態から、台形石器の可能性がある。435は上部を欠損する。

#### 集中部b・c

集中部bの8点、集中部cの1点の計9点を図化した。436・437はナイフ形石器である。436は背面に結晶面を広く残す。上半が欠損しており、刃部の形態は不明であるが、両側縁に腹面からの細かいプランディングが確認される。437は斜刃で、腹面に打点を残す。左側縁及び右側縁下部に腹面からの加工が行われ、背面は右側縁側からの平坦剥離で整形される。

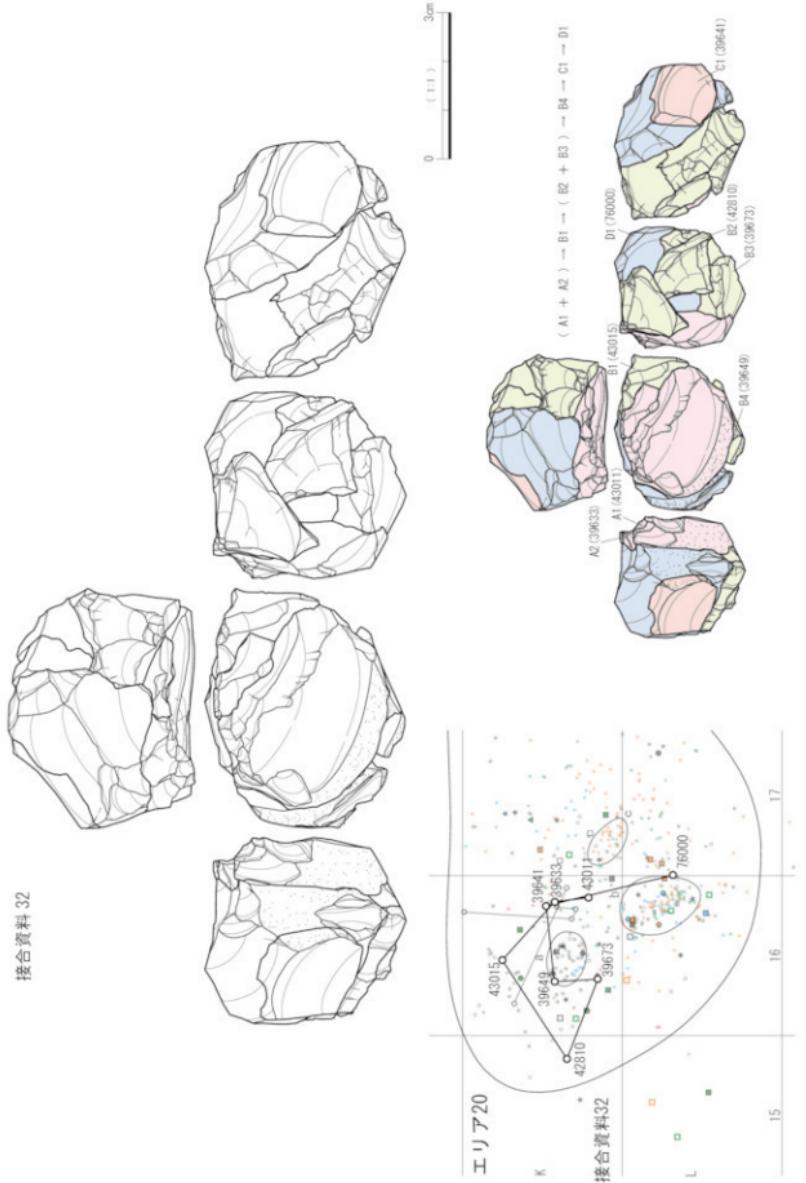
438・439は台形石器である。438は腹面に打瘤を残し、両側縁に腹面からの細かいプランティングが施される。刃部は中央が欠損する。439は小型の不定形剥片を素材とし、刃部は溝曲する。背面は平坦剥離により整形され、背面右側縁及び腹面の右側縁が加工される。腹面は打瘤を残す。

440は二次加工剥片であり、先端部の両面に平坦剥離状の加工が行われる。スクレイパーの可能性もある。441は折断剥片の頭部である。打面は平坦であり、剥離方向対し斜位に折断されている。442は調整剥片であり、実測後に背面側に同様の剥片が1点接合した。443は水晶素材の劈開面を打面とし、不定形剥片の剥出を目的とした石核と考えられる。

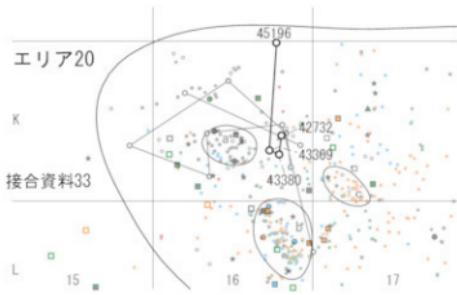
444は集中部cで出土したナイフ形石器である。基部が尖る逆三角形を呈し、両側縁に腹面からプランティングが施される。刃部の左側がやや欠損する。

#### エリア内及びエリア周辺出土遺物

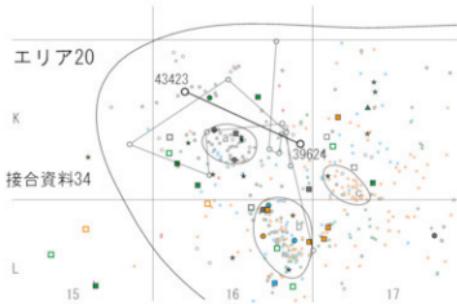
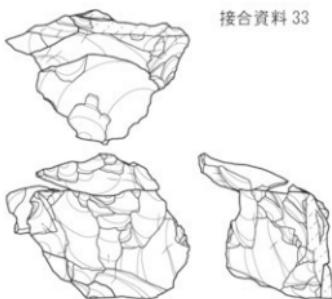
39点を図化した。なお、446・454・462・471・476・480は、エリア周辺の出土である。445～454はナイフ形石器である。445は左側縁を腹面、右側縁下部を背面から調整



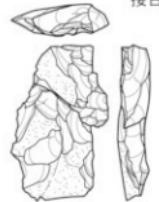
第98図 エリア20接合資料出土状況(1)・接合資料(1)



接合資料 33



接合資料 34



0 (1:1) 3cm

第 99 図 エリア 20 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

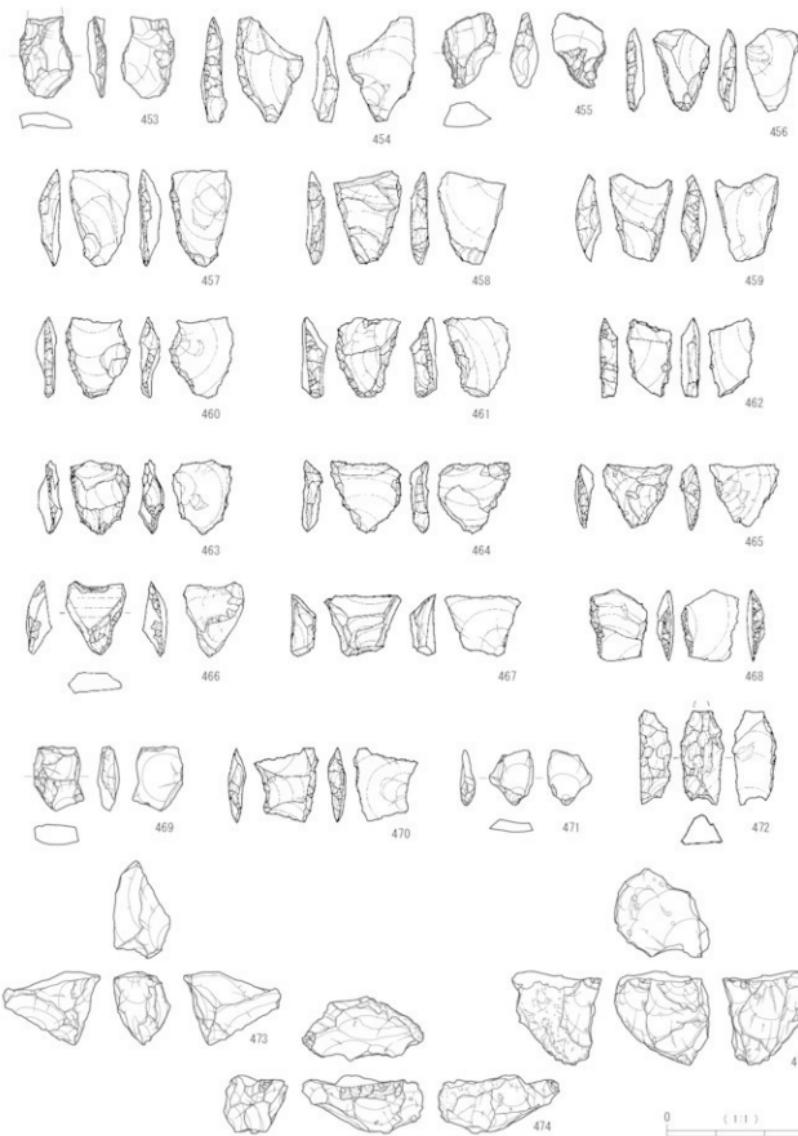
し、刃部を作出する。刃部は一部欠損する。446も445と同様に二側縁加工であるが、全体的に角が鈍い。両側縁とも腹面からプランディングが施される。447は斜刃で切出形を呈し、背面に自然面を広く残す。両側縁とも腹面からプランディングが施され、基部は尖る。448は両側縁及び基部が腹面から加工される。刃部は欠損するが、推定線の方向に伸びることを想定し、ナイフ形石器に包括した。449は両側縁とも腹面からプランディングを施し、やや不整形な刃部を作出する。刃部の先端は欠損している可能性がある。450は右側縁のみを腹面から加工し、左側縁を刃部とする。先端及び基部は欠損する。刃部には刃こぼれ状の微少な剥離が観察される。451は右側縁を腹面から加工し、先端は欠損する。452・453はいずれも両側縁が背面・腹面の両面からプランディングが施される。452は小型であり、先端部を欠損する。453は腹面右側縁には平坦剥離が加えられる。刃部が欠損する。454は両側縁及び基部を加工し、刃部がわずかに残存する。右上部は欠損する。側縁調整からナイフ形石器と判断した。

455～471は台形石器である。エリア全体の傾向とし

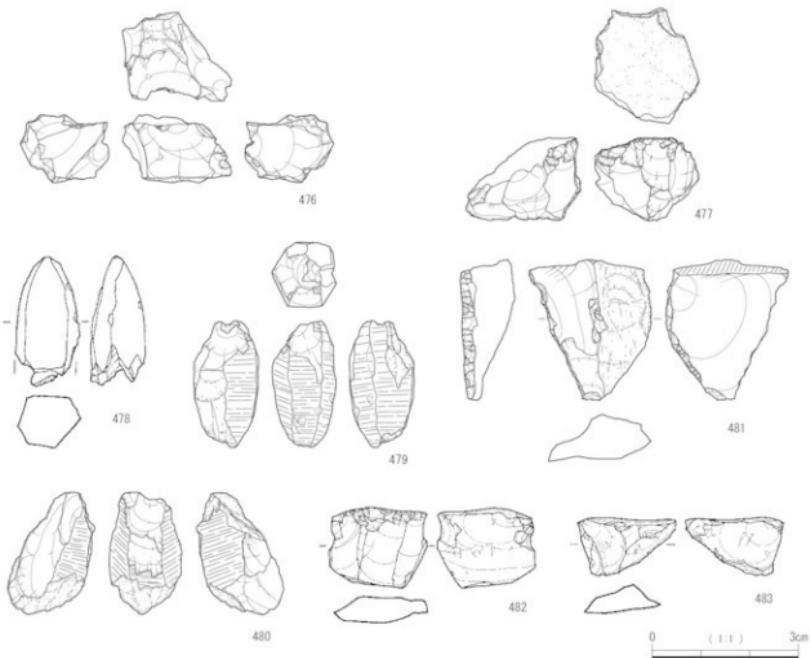
て一部方形を呈するものがあるが、ほとんどが長身のものであり、「U」字形を呈するものが少ないのが特徴である。455は斜刃である。右側縁下部は広めの剥離により抉り状に加工され、左側縁に細かい調整が加えられる。また、腹面基部付近には左側縁からの平坦剥離が行われる。456は不定形剥片を素材とし、背面に劈開面、腹面は打瘤が残存する。刃部は中央から斜刃となる。両側縁とも腹面からプランディングが施される。457は左側縁のみ腹面からプランディングが施されており、右側縁は折断面と考えられる。刃部は平坦である。458はやや斜刃で、両側縁とも腹面からプランディングが施される。また、腹面の基部は右側縁側から連続した平坦剥離が加えられる。玉髄を素材とし、背面は節理により階段状に剥離する。459はステップ状の剥離を背面とし、左側縁は両面、右側縁は腹面からプランディングを施す。刃部が大きく凹んでいるが、欠損した状況は認められない。460は両側縁及び基部の3側縁を加工し、腹面には打瘤が残存する。背面には右側縁から平坦剥離が数回行われる。461は不定形剥片を素材とし、両側縁に腹面から加工を行う。刃部中央は刃こぼれ状に欠損する。462



第100図 エリア20関連出土遺物(1)



第101図 エリア20関連出土遺物(2)



第102図 エリア20関連出土遺物③

は折断剥片を素材とし、右側縁が折断面で左側縁に腹面から加工を行う。斜刃で、刃こぼれ状の欠損がみられる。463は腹面に打瘤を残し、背面は複数方向からの平坦剝離によって整形される。左側縁には腹面からの繊かいプランティングが施される。464は逆三角形状を呈し、両側縁とも腹面から加工が行われる。腹面の刃部附近には平坦剝離に近い削離が複数観察される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。465は逆三角形状を呈し、両側縁に腹面からプランティングが施される。466は背面及び左側縁に劈開面を広く残し、右側縁に腹面からプランティングを施す。刃部中央は欠損している。467は台形状を呈し、右側縁は折断面である。468は刃部と下線は素材となる不定形剥片の端部を加工せずに利用する。左側縁は腹面、右側縁は背面からプランティングを施している。469は右側縁は折断面であり、腹面は素材剥片の打瘤が残存する。左側縁は腹面からプランティングが施される。470は折断された剥片の頭部を素材とし右側縁が折断面である。両側縁は腹面から加工されるが、上縁と下縁には加工が行われない。刃部は刃こぼれ状に欠損する。471は

小型の剥片素材で基部部分にわずかに加工されている。湾曲した刃部を想定し台形石器に含めたが、両側縁の加工は不明瞭である。

472は小型の三稜尖頭器である。背面の節理面を活かしながら両側縁に急傾斜剥離を行い、断面三角形状に加工する。先端及び基部を一部欠損する。腹面には加工は確認できない。

473~480は石核・原礫である。473は水晶を素材とし、打面は平坦であるが幅が狭い。474は黒曜石Bを素材とし、上面及び側面に自然面を残す。平坦部を打面と考えると、正面に細かい剥離が連続して行われるが、目的は不明である。475は左側面に自然面を残し、自然面の形状から本来は円礫であったと想定される。476は玉髓Bを素材とし、平坦な打面から剥離が行われる。小型の不定形剥片の剥出が目的と考えられる。477は玉髓Cを素材とし、結晶質の構造が貫入状に入る。やや丸みを帯びた自然面を打面に、小型の不定形剥片を剥出したものと考えられる。実測後、打面から剥離した剥片が1点接合した。478は水晶の原礫である。下縁は結晶面であり、先端に

向かってつぼみ状に収まる六角柱である。いずれの面も加工痕はなく、劈開面を明瞭に残す。水晶の原礫として完形をなすのは本例のみであり、素材形状をとらえるための重要な資料である。479は水晶の原礫にわずかに加工痕がみられるが、自然面及び劈開面がほぼ残存し、端部がつぼみ状にすぼまる六角柱状をなす。頭部と下縁が潰れたように剥離しており、打撃痕と考えられる。480は水晶の原礫にわずかに加工痕がみられる。478・479・480はいずれも自然面及び劈開面が残っており、端部がつぼみ状にすぼまる六角柱状をなす。

481は二次加工剥片である。背面は自然面、上面は劈開面を残す。左側縁に腹面から、腹面側の左側縁には背面からのプランティングが行われているが、詳細は不明である。482・483はいずれも折断剥片である。482は作業面再生剥片と考えられ、下端が折断面である。483は上面が折断面にあたる。

#### 20 その他の接合資料・遺物（第103～106図）

接合資料のうち4点がエリアを隔てて接合、あるいはエリアと認定した範囲外で接合した。また、飛び地的に出土したり、一括で取り上げた石器があるため、本項で取り上げる。

接合資料35（SG128） 剥片6点の接合資料である。エリア11を中心、エリア10・13に剥片が点在する。素材は玉剣Aである。1点を除き、5点が同一打面から連続して剥出されており、小型石器を作成するための素材剥片と考えられる。下縁には自然面が残り、形状から母岩は円錐であったと推定される。

接合資料36（SG215） I-14区にまとまる3点の接合資料である。石材は頁岩Fである。最初に剥出した剥片は、右側縁からプランティングを施し、台形石器に加工されている。

接合資料37（SG096） IX層・XI層・XII層に亘る三稜尖頭器の製作に係わる15点の接合資料である。石材は頁岩Aであり、エリア11を中心、エリア10、F-22区、G-21区に点在する。

打面Aから剥離が進み、打面Bから最初に剥出した剥片の打面に二次加工を加え、ナイフ形石器（接-22）を作出する。その後、打面C・D・Eと側面が剥離され、打面Fからの剥離によって三稜尖頭器の基部が作られる。この段階からさらに側縁部に急傾斜剥離が行われる。製作された三稜尖頭器（接-23）は基部腹面に平坦剥離が行われる。先端部分は欠損し、接合していない。なお、接-22はF-22区、接-23はG-21区で点的に出土しており、剥片が集中する範囲から離れている。

この接合資料により、三稜尖頭器の素材剥片は4.5×8.5cm程のやや厚みのある紙長剥片と考えられる。また、剥離の過程で剥出された剥片素材をナイフ形石器などの他の製品へ利用することも把握された。

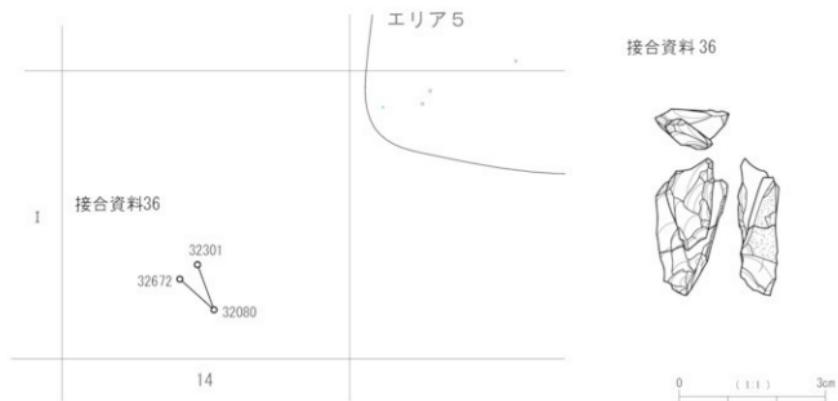
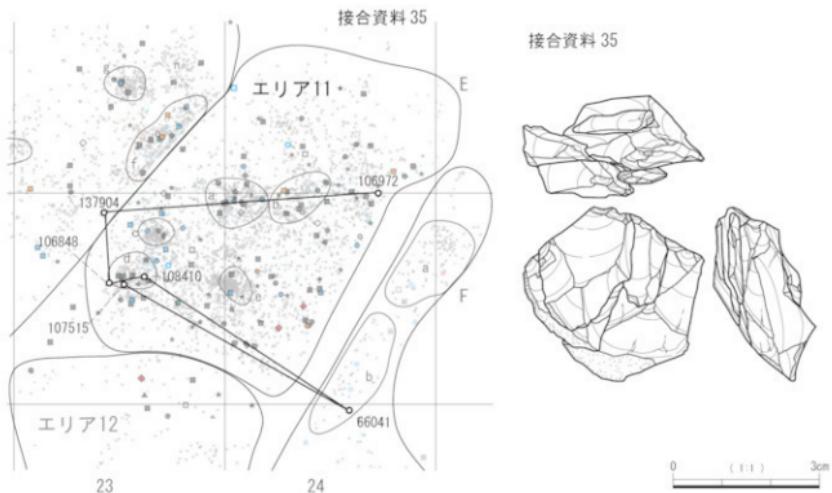
接合資料38（SG305） エリア13と15で各1点ずつ出土した剥片の接合資料である。石材は黒曜石Aである。折断剥片資料の接合であり、下半の剥片は折断時あるいは折断後にさらに半分に折断されている。頭部の左側縁には自然面が残る。

#### その他の遺物

第2文化層出土の石器のほとんどが上記の20のエリア内で分布しているが、数点のみC-24区、H-4区で出土が確認され、各地点のツール1点を図化した。

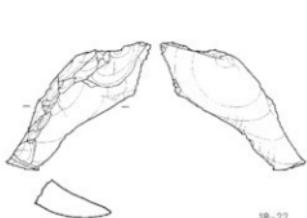
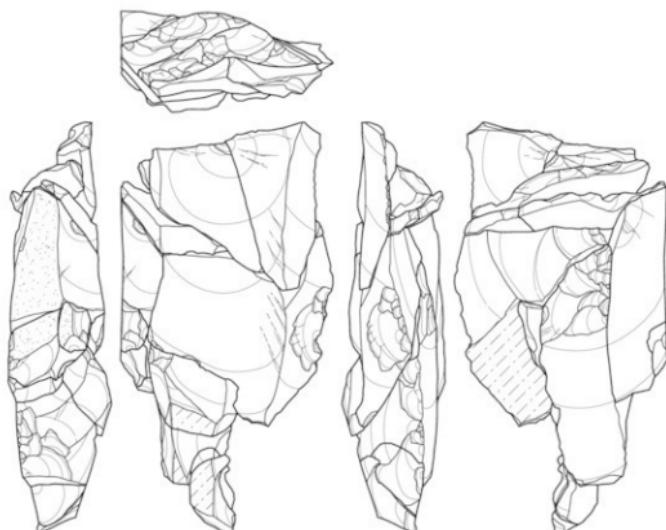
484はC-24区から出土した折断剥片の中間部である。出土層位は10層であるが、第2文化層に含めた。周辺ではほとんど石器が出土していない。485はH-4区から出土した折断剥片を素材とする台形石器である。両側縁とも腹面からプランティングが施される。刃部は刃こぼれ状に欠損する。

また、グリッド一括資料としてF-24区から出土した台形石器2点を図化した。486は薄い小型の剥片を素材とし、両側縁に腹面からプランティングを施す。斜刃である。487は背面に一部自然面を残し、両側縁及び下縁の三側縁を腹面から加工する。また、腹面には基部からの平坦剥離を行っている。刃部は刃こぼれ状に欠損する。



第 103 図 その他の接合資料(1)

接合資料 37-1



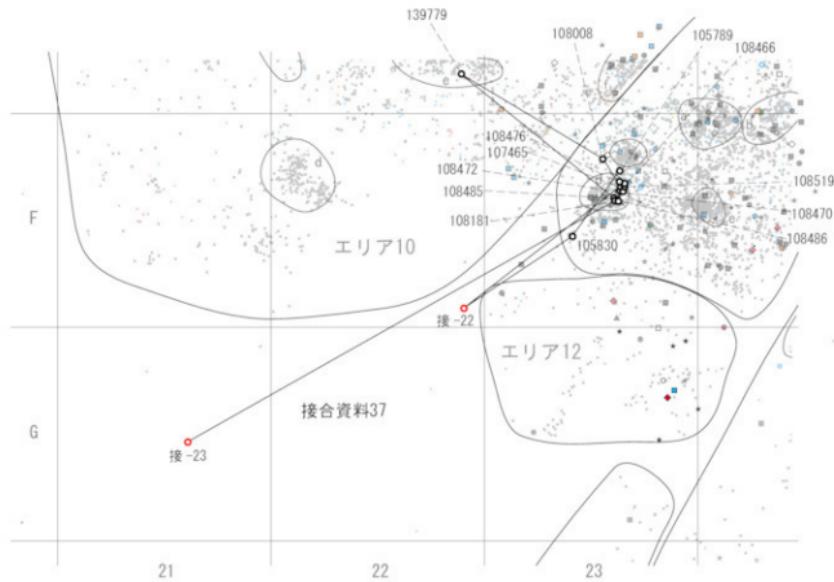
接-22



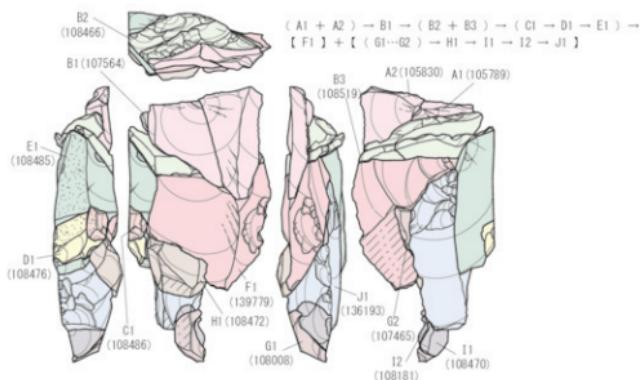
接-23



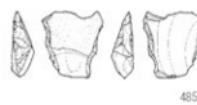
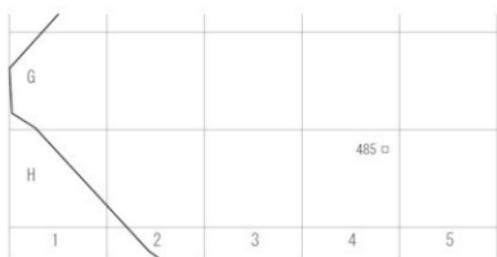
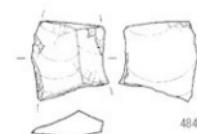
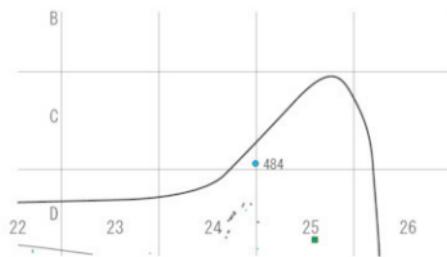
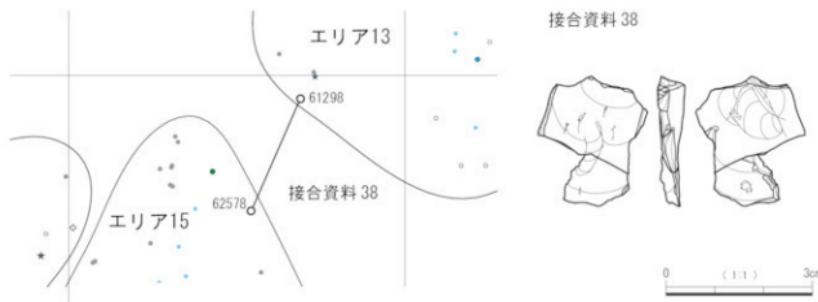
第 104 図 その他の接合資料(2)



接合資料 37-2



第 105 図 その他の接合資料(3)



0 (1:1) 3cm

第 106 図 その他の接合資料(4)・石器





















#### 第4節 第3文化層（エリア1～7）

##### 1 概要

第3文化層はIX層・X層を中心に出した遺物及び遺構で構成され、縄石刃文化期及び縄文時代草創期に相当する時期である。遺構は、縄群1基が検出された。遺構数は第2文化層と比較すると小規模であるが、出土遺物の点数は第2文化層と比較しても圧倒的に多い。第3文化層で国化したツール類は1417点、主体となるIX・X層で取り上げたチップ類を含む非掲載遺物は8,050点にのぼる。ツール類は残存状況の悪い縄石刃や土器小片を除き、ほとんどを図化した。遺物の出土状況を踏まえ、遺物のまとまりとして26のエリアを抽出した（第109図）。第2文化層のように弧状にエリアが展開するのではなく、11～24区の間に遺物密度に濃淡を持ちながら平面的に広がる状況が確認された。集中部・エリアの位置は異なっているものの、調査区の北側に遺物密度の高い範囲が位置する点は第2文化層と類似している。第3文化層出土遺物は前述のとおり遺物点数が多く、特にエリア21などは非実測遺物の密度も高い。そのため、接合資料の出土位置や個別石器の出土位置を図示する場合に、非実測遺物は表示しなかったものもある。エリア内の非実測遺物の出土状況については、各エリアの冒頭で図示したため、そちらを参照されたい。なお、縄文時代草創期に関しては縄石刃文化期との層位での分離は困難であった。そのため、縄文時代草創期と想定される土器及び石器についても、第3文化層で取り扱った。これらの資料についても、エリアごとに掲載した。また、F～H-23・24区で出土した一部の遺物はグリッド一括取り上げた資料があるため、それらについては他の石器としてエリア内出土遺物の後に掲載した。

第3文化層出土遺物で特筆されるのが、接合作業により縄石刃の製作工程を示す接合資料が多く得られたことである。接合資料は第3文化層が最も多く、110個体を実測・図化した。また、接合資料は第2文化層に比べて広域間で接合したものが多く、エリア1～14までの範囲でその傾向が顕著に確認できる。接合資料は第2文化層と同様にエリア内で接合した資料に関しては各エリアで詳述し、エリアを越えて接合した資料についてはその他の接合資料として取り扱っている。

##### 2 遺構（第107図・第108図）

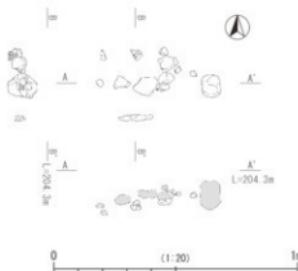
縄群1基が検出された。第2文化層の縄群の一部と検出地点は近接しているが、検出面にレベル差がある。

##### 12号縄群

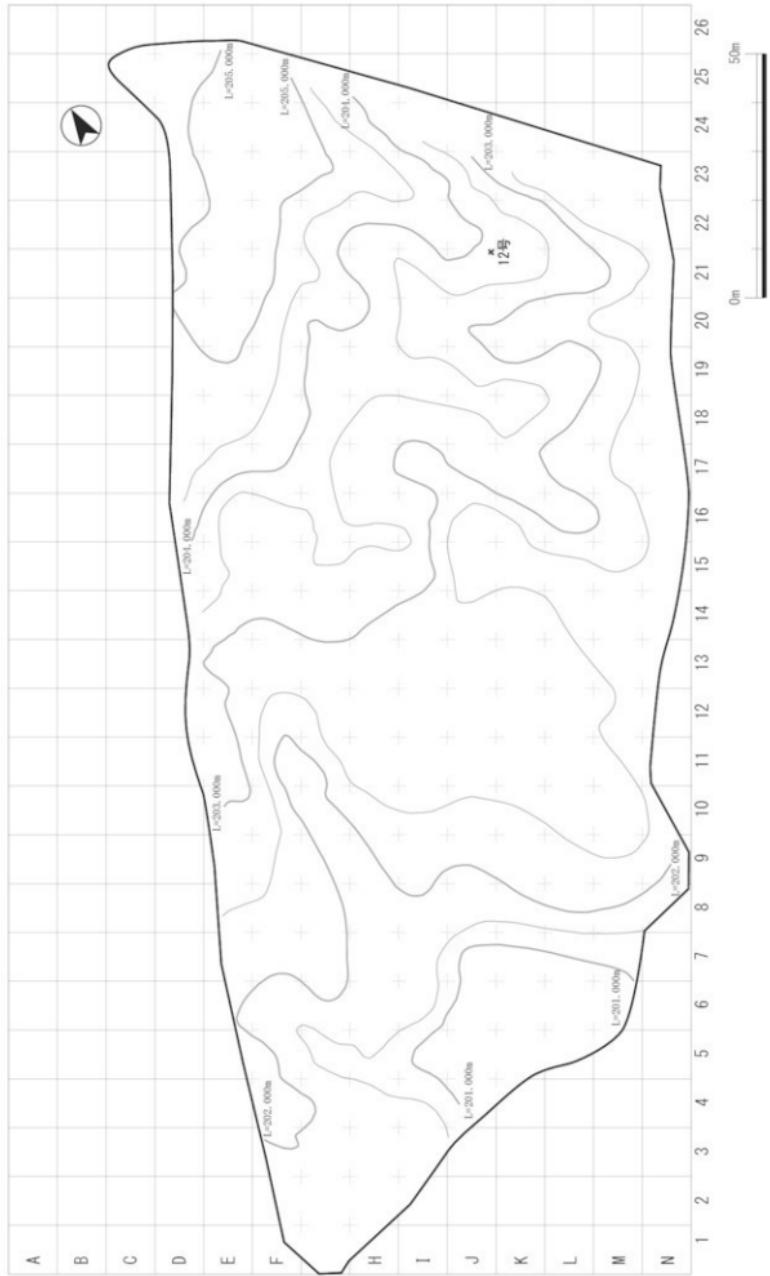
J-21区、X層で検出した。長軸52cm・短軸30cmの範囲に礫がまとまる。構成礫数は16点で、硬質の凝灰岩と、軽石に近い軟質な凝灰岩、および頁岩が用いられている。硬質の凝灰岩は10cm程の大型の円礫、頁岩は約15cmの細長い形状であった。硬質な凝灰岩はやや被熱し赤変しているが、その他は被熱の痕跡は不明瞭である。総重量は2297.5gである。

軟質な凝灰岩は、検出時は3cm程の小ぶりのものから10cm弱の扁平なものまで含まれた。しかし、縄群内での接合を実施したところ、2組9点が接合し、細かく破碎していたものが約15cm程の扁平な礫としてまとまった。比較的小規模な縄群であり、本来は本来の構成礫数も少なかったと想定される、掘り込み、焼土、炭化物等は確認されなかった。

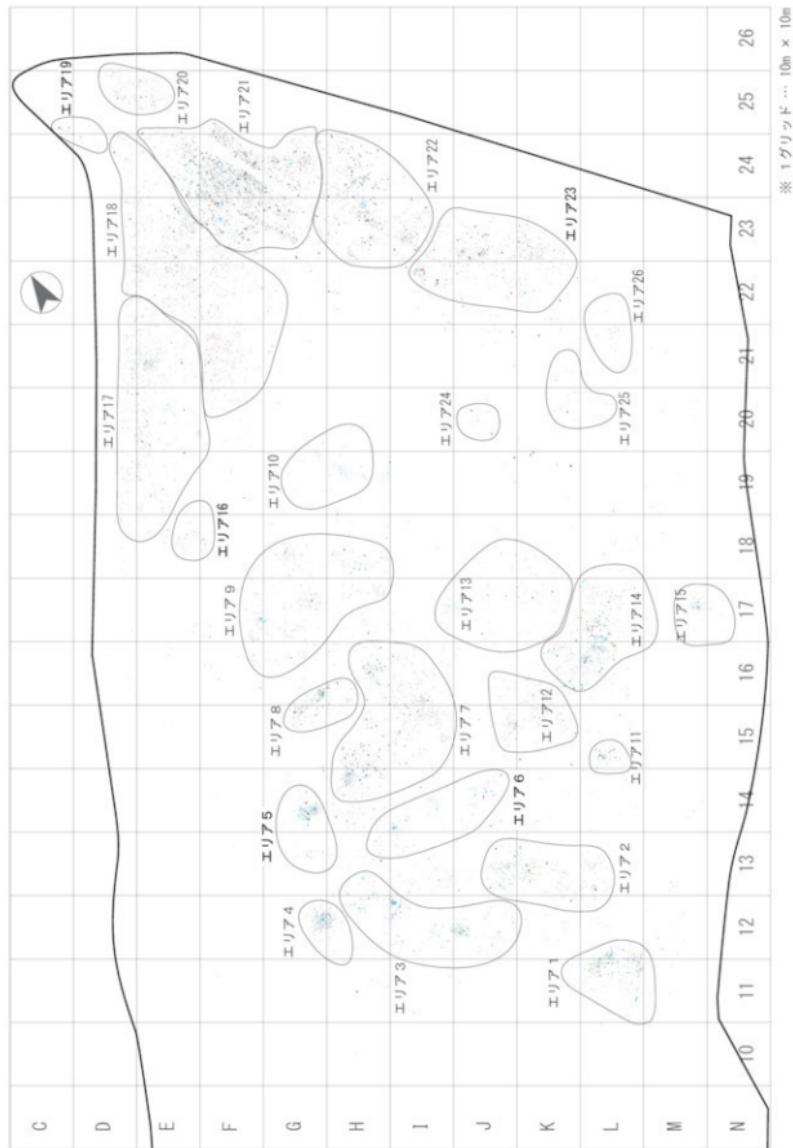
関連する遺物は、中央付近から黒曜石（产地不明）のチップが1点出土しドットで図示した。



第107図 12号縄群



第108圖 第3文化廢址群配置圖



第109図 第3文化層エリア位置図

### 3 遺物

第3文化層では縄石刃文化期間連の多量の遺物が出土し、縄石刃核にもバリエーションがみられた。そこで、縄石刃核を下記のとおり分類した。(第110図)

#### I類

打面調整を正面から行う、あるいは自然面をそのまま打面として縄石刃剥離を行うもの。小型の円礪・角礪を素材とし、自然面を側縁または背縁に残すものや厚手の剥片を素材とするものをIa類、板状剥片を素材とするものをIb類とする。比較的小型のものが多く、作業面が幅広いものや、打面に奥行きがないものなどがある。また、複数の作業面を有する例が多くみられる。

#### II類

分割面や剥離面を打面として側縁調整を加え、端部から縄石刃剥離を行うもの。円礪などの分割素材のものをIIa類、剥片素材のものをIIb類とする。平坦な分割面や剥離面を打面とし、打面調整を行わないのが特徴である。また、作業面再生や作業面の転移は行われても、打面転移は行われない。

#### III類

素材剥片の主要剥離面を側縁とし、側縁側からの横位の調整剥離によって打面が作出されるもの。側縁の片方が剥離面、もう片方が自然面となる例も含む。また、下縁調整や背縁調整が加えられる場合が多い。

#### IV類

円礪あるいは扁平礪を両極打法で分割し、その分割面を打面として端部から縄石刃剥離を行うもの。打面調整

は行わず、作業面を転移する場合も同一打面から剥離される。

#### V類

縱長の不定形剥片をそのまま横位に使用し、側縁から縄石刃剥離を行うもの。

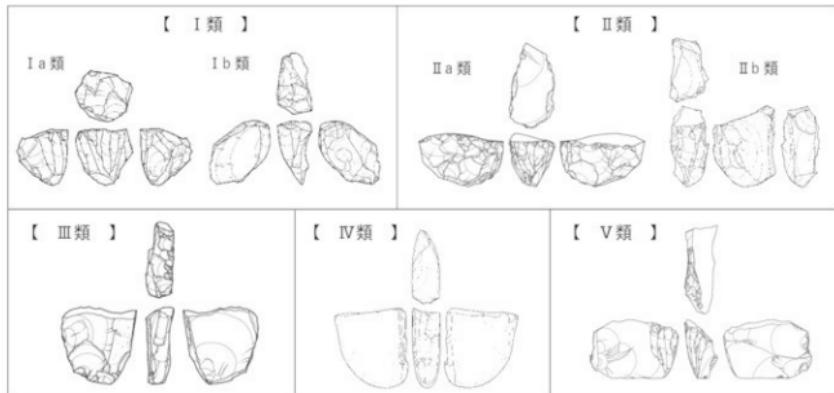
#### (1) エリア1 (第111~122図)

エリア1は、K~M-10~12区に位置する。遺物の密度が高い範囲として3つの集中部を認定した。接合資料は10点である。石材は頁岩を主体として水晶や黒曜石の割合が高く、エリア内で出土したツール類の石材組成とも類似している。

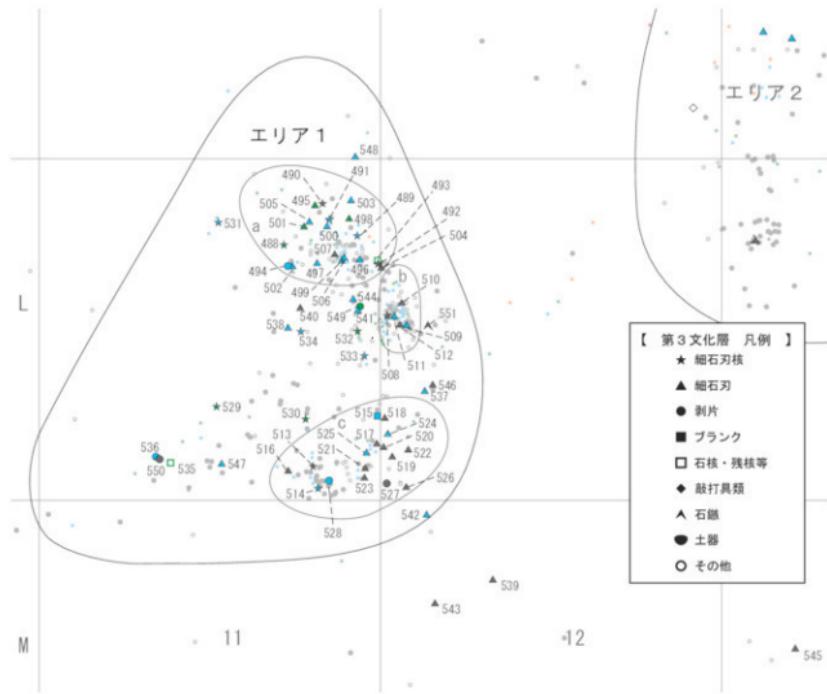
#### 接合資料

接合資料39 (SG085) 集中部aで出土したプランクと調整剥片2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。接-24は板状剥片を素材とするプランクで、舟形状を呈する。右側縁が主要剥離面と考えられ、打面が分割面に相当する。接合する剥片は縄石刃剥離面の調整剥片と側縁調整剥片である。

接合資料40 (SG028) 集中部aで出土した縄石刃核と打面調整剥片2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aであり、わざかに白い斑文が入る。左側縁及び打面に自然面を広く残しており、径4cm程の亜円礪を半削し、その分割面を右側縁としている。左側縁は自然面である。接合した2点の調整剥片は、縄石刃の剥離面に対し右側縁から横位の打面調整を行ったものである。そのため、接-25はIII類に分類される。縄石刃剥離は自然面から約



第110図 縄石刃核分類図（スケール不同）



第111図 エリア1遺物出土状況

1cm弱しか行われておらず、スポールの分を考慮すると、さほど剥離枚数は多くなかったと推定される。

**接合資料41 (SG140)** 集中部aで出土した細石刃核と剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Aのやや厚手の剥片を素材とする。接合した剥片は打面調整剥片である。接-26は剥離面を両側縁とし、右側縁の一部は節理である。打面前方に複数回の打面調整剥離が加えられ、細石刃剥離は階段状剥離が生じたところで遺棄されている。接-26は作業面に対して打面調整がやや側縁寄りであるため、III類に含めた。

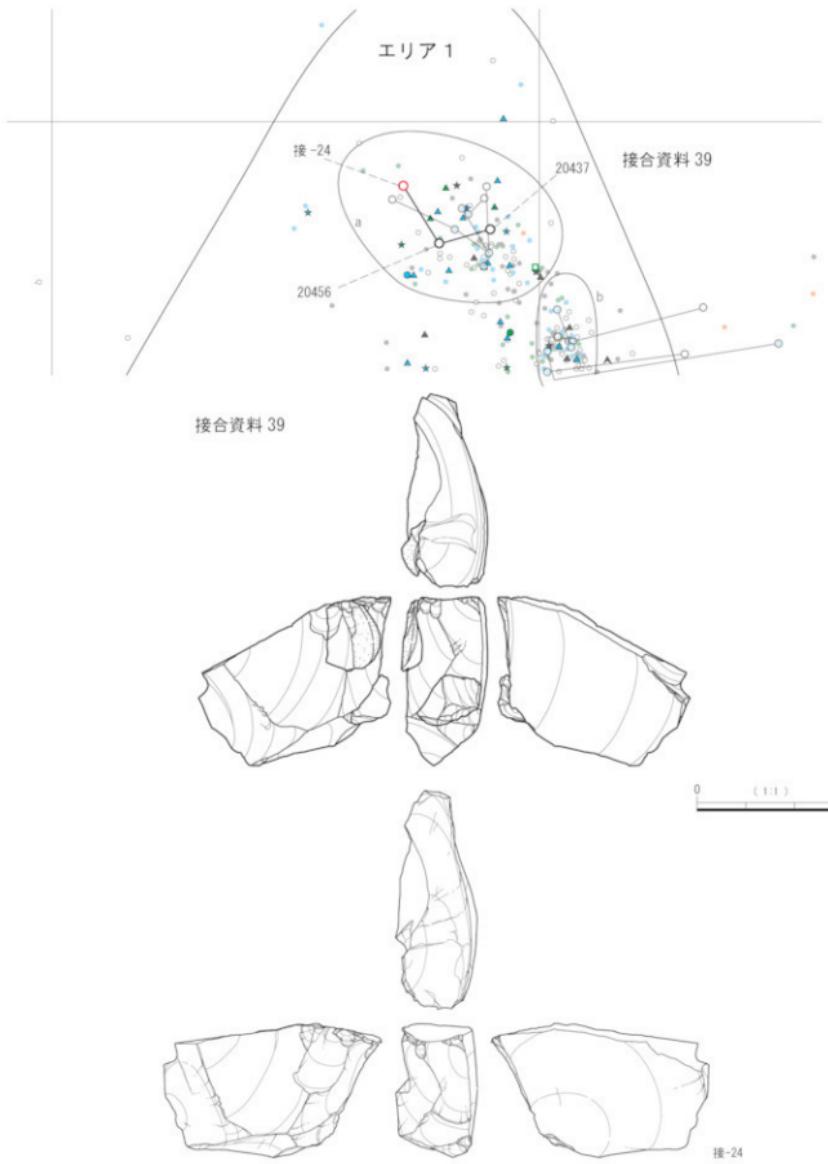
**接合資料42 (SG210)** エリア内及び集中部cに隣接して出土したブランクと打面調整剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Aである。右側縁が主要剥離面で、左側縁には下縁調整が行われる。接合資料から判断すると、当初は打面調整は左側縁から行われているが、右側縁からの打面再生剥離を行い、接-27の段階では右側縁

から連続して打面調整が加えられる。接-27はIII類に分類される。

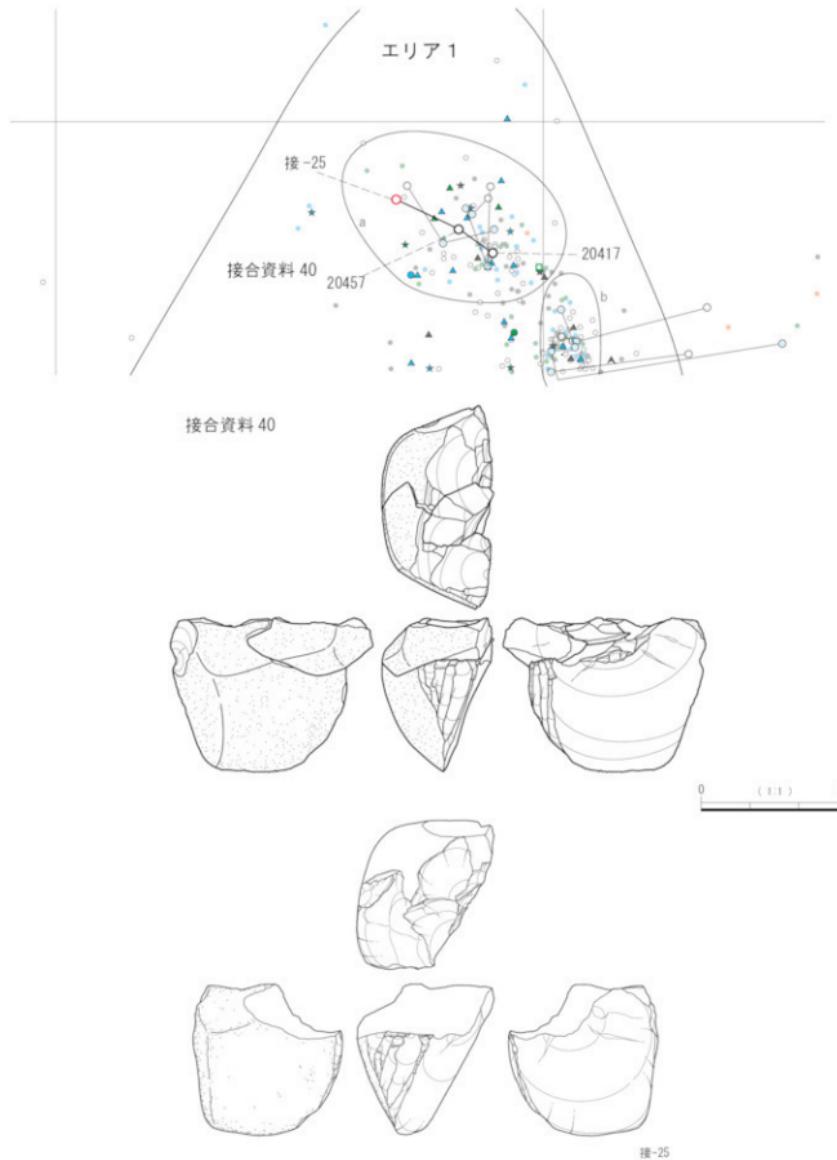
**接合資料43 (SG229)** 集中部aで出土した細石刃核と剥片2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。右側縁に自然面が残存しており、素材はやや扁平な亜円錐と推定される。左側縁が主要剥離面である。接合した打面再生剥片の正面には先行する細石刃剥離面が残存する。主要剥離面からの横位の剥離によって2点の打面再生剥片が剥出され、打面が大きく変化している。接-28はIII類に分類される。

**接合資料44 (SG063)** 集中部bで出土した剥片3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。背面は分割面ないしは主要剥離面で、下縁には自然面が残存する。また、左側縁からは剥片剥離に先行する調整剥離がみられる。ツール類は接合していない。

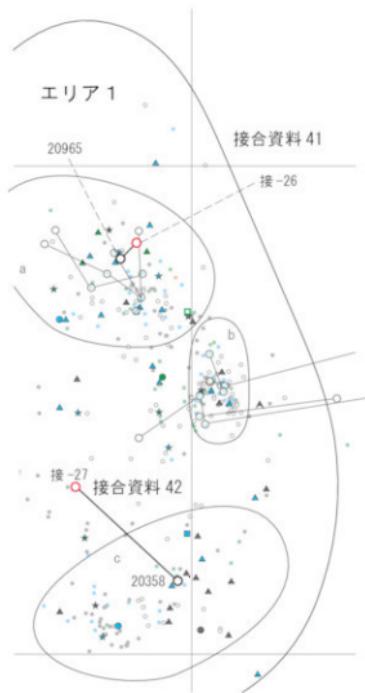
**接合資料45 (SG222)** 集中部bで出土した素材剥片と



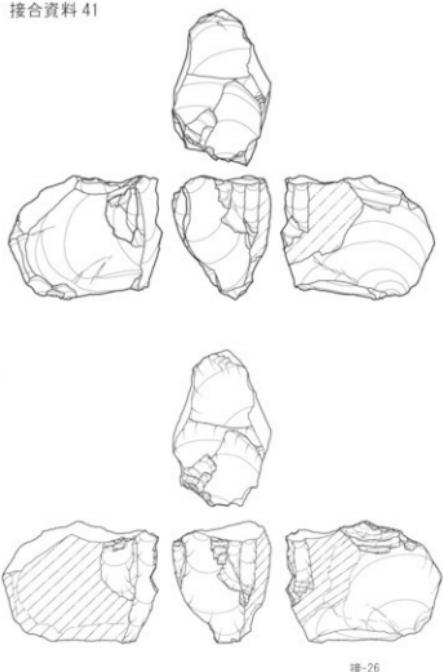
第112図 エリア1接合資料出土状況(1)・接合資料(1)



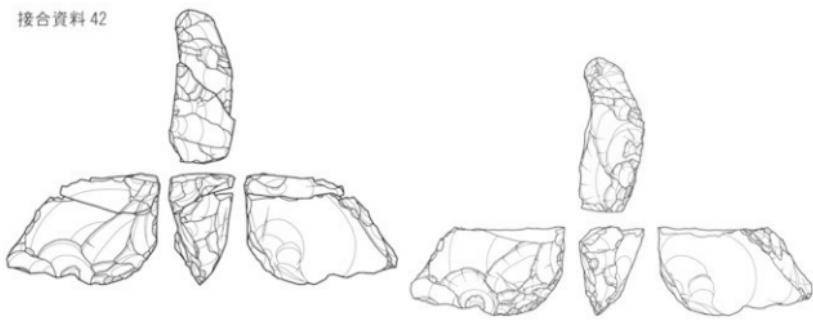
第 113 図 エリア 1 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)



接合資料 41

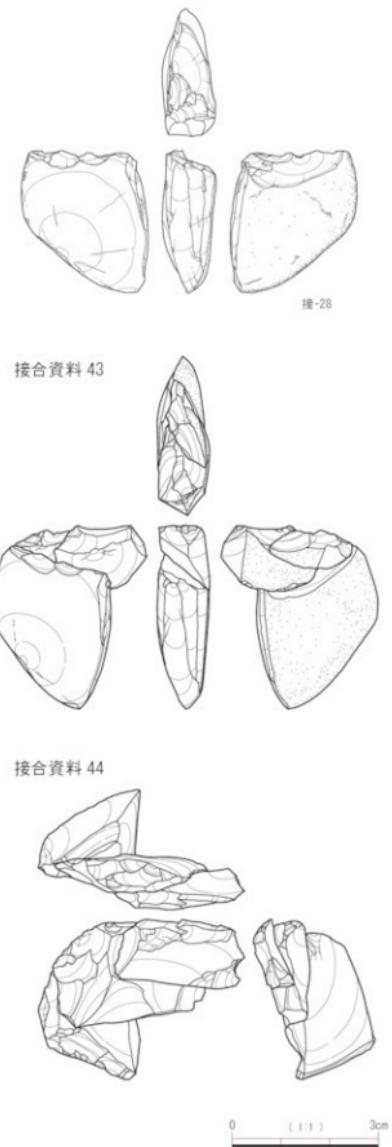


接合資料 42

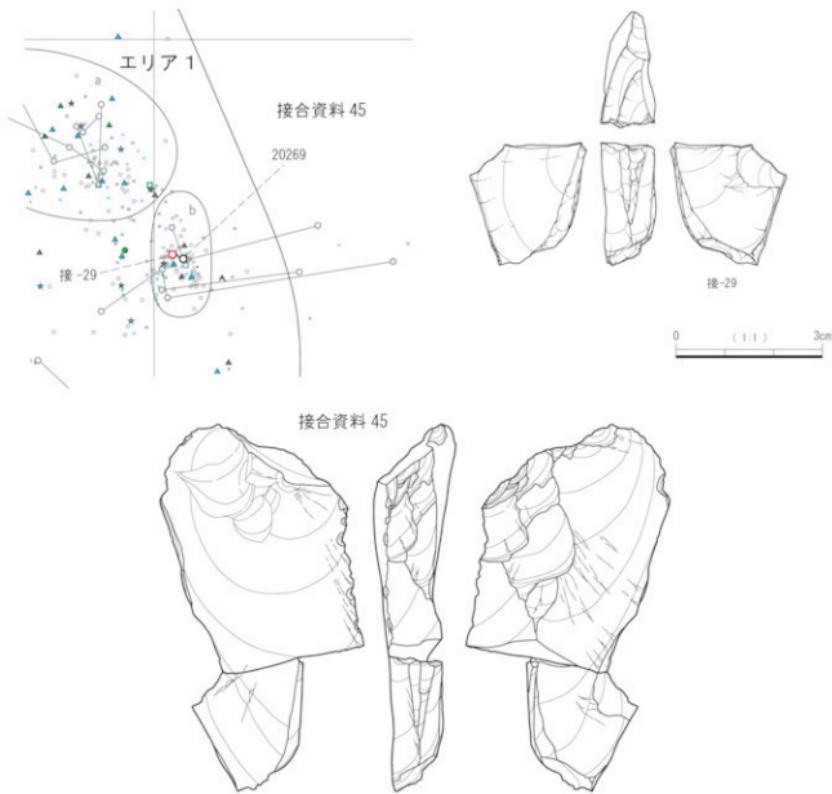


0 ( 1 ) 3cm

第 114 図 エリア 1 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)



第115図 エリア1接合資料出土状況(4)・接合資料(4)



第 116 図 エリア 1 接合資料出土状況(5)・接合資料(5)

細石刃核の計 2 点の接合資料である。石材は頁岩 A で、一部が鉄さび状の赤みを帯びる。長さ 8 cm 程度の縦長剥片の先端部 3 分の 1 程で折断して細石刃核（接-29）とし、打面は切断面をそのまま用いている。接-29からは比較的長い細石刃が剥出されている点が特徴である。下線調整が加えられているが、細石刃剥離の途中段階か、あるいは最終剥離まで行った後の段階で行われたものかは不明である。接-29は IIb 類に分類される。

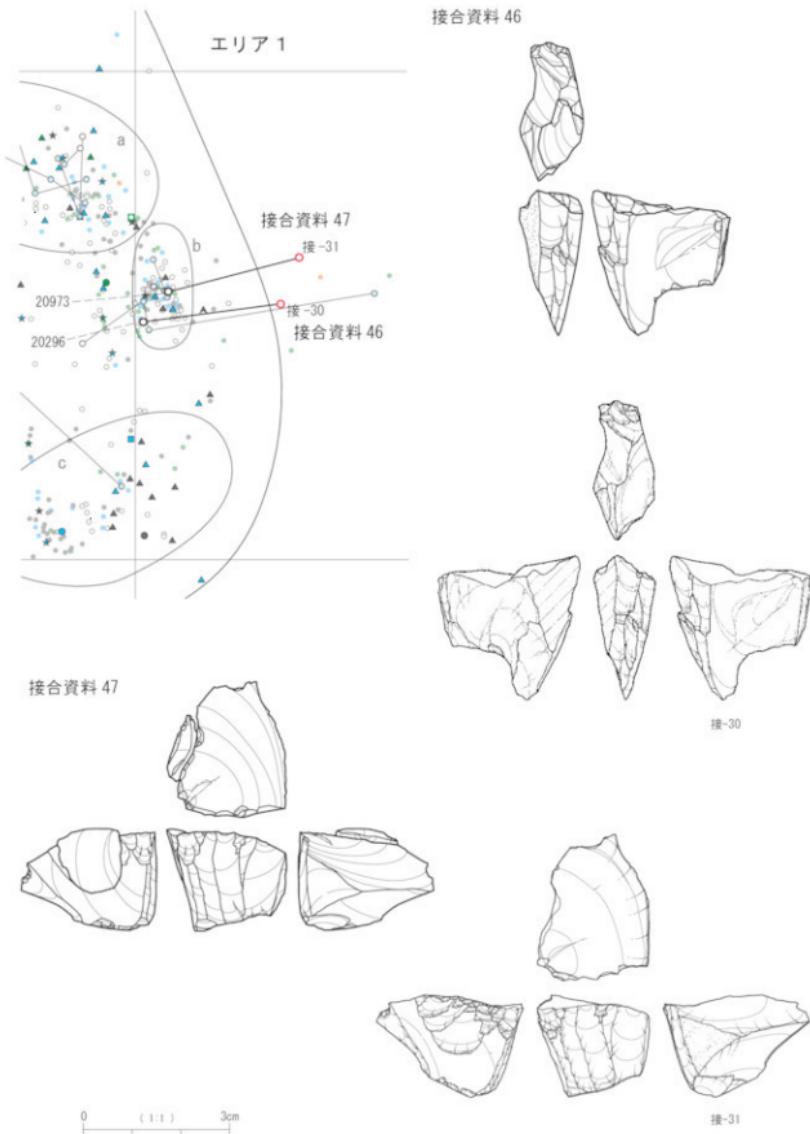
**接合資料46 (SG230)** 集中部 b 及びエリア周辺で出土した細石刃核と打面再生剥片の計 2 点の接合資料である。石材は頁岩 B である。左側縁の一部に自然面を残す剥片を素材とし、主要剥離面である右側縁から打面再生剥離

を行っている。また、背面には先行する作業面が残存しており、最初の細石刃剥離を終了し、作業面を転移するにあたって、打面再生剥離を加えたものと考えられる。

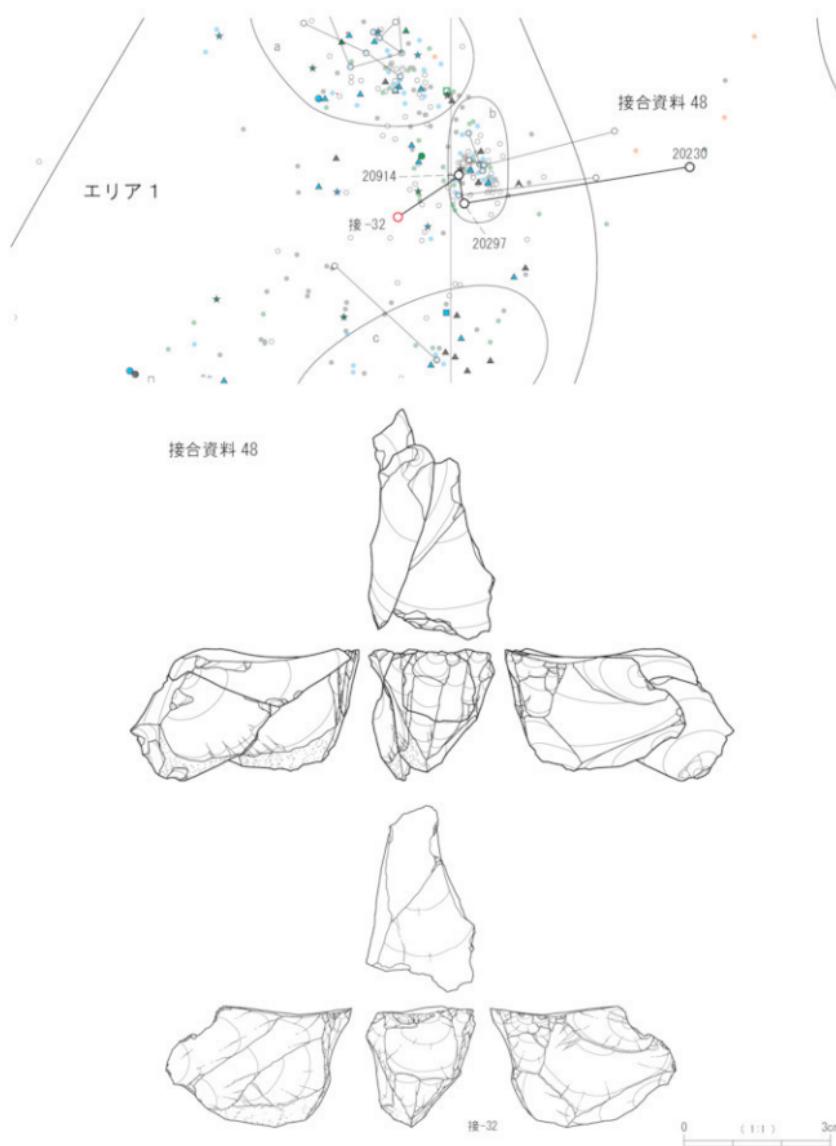
最終の細石刃剥離面には階段状剥離が生じており、その段階で作業を終了している。接-30は III 類に分類される。

**接合資料47 (SG141)** 集中部 b とエリア周辺で出土した細石刃核と調整剥片の計 2 点の接合資料である。石材は頁岩 C である。細石刃核の左側縁に調整剥片が接合している。接-31の右側縁には自然面が残り、左側縁が主要剥離面と考えられる。打面及び下線は平坦な剥離面である。接-31は IIb 類に分類される。

**接合資料48 (SG139)** 集中部 b、エリア内及びエリア周



第 117 図 エリア 1 接合資料出土状況(6)・接合資料(6)



第118図 エリア1接合資料出土状況(7)・接合資料(7)

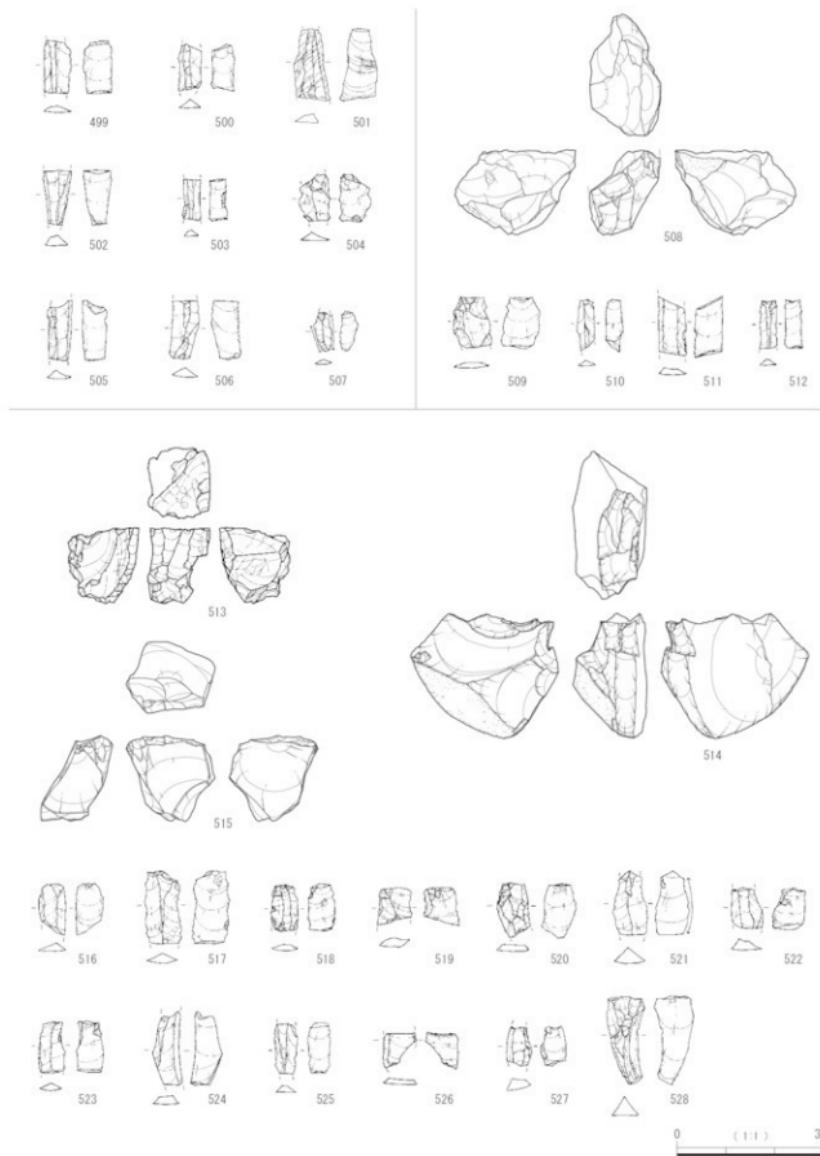


第119図 エリア1関連出土遺物(1)

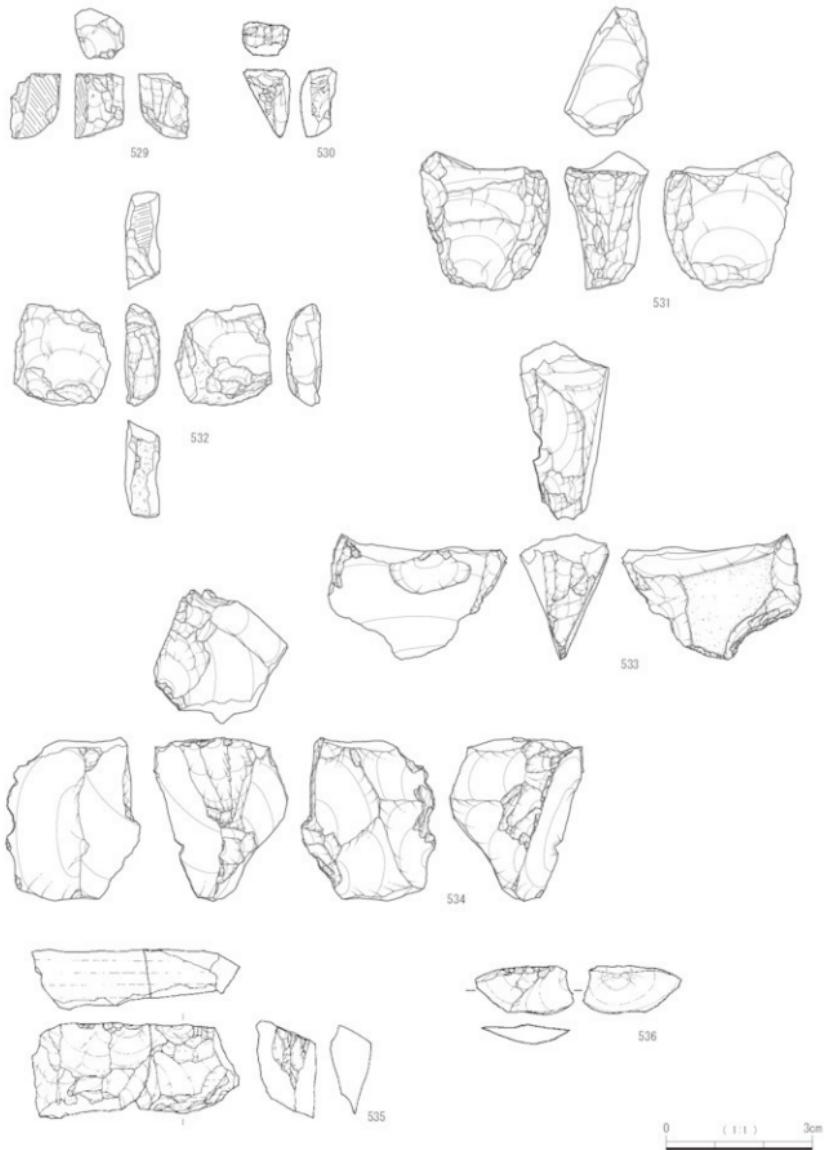
辺で出土した細石刃核と調整剥片2点、作業面再生剥片の計4点の接合資料である。石材は頁岩Bである。調整剥片の1点のみが、エリア外で出土した。下縁に自然面を残し、打面は素材分割面と考えられる。背面方向から側縁調整が加えられ、細石刃剥離が行われる。細石刃剥離面は階段状剥離が生じており、作業面再生を行ったと考えられるが、残存する接-32では作業面再生後に細石刃を剥離した痕跡ではなく、そのまま遺棄されたものと考えられる。接-32はIIb類に分類される。

#### 集中部 a

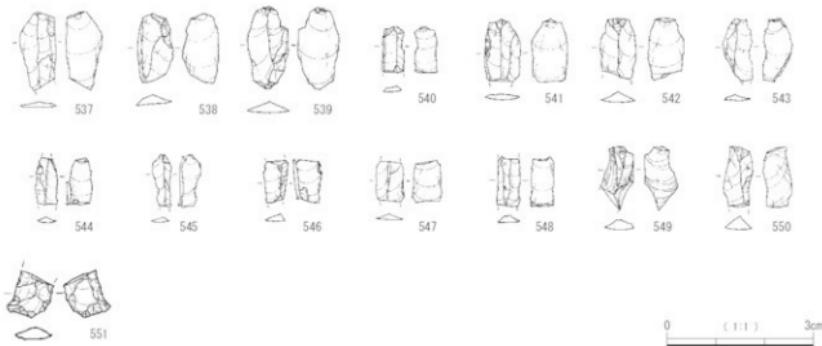
20点を図化した。488～491は細石刃核である。488は右側縁に自然面を残し、分割面を打面として細石刃剥離を行ふ。また、打面調整は作業面方向から連続して加えられる。Ia類に分類される。489は板状剥片を素材とし、両側縁が剥離面にあたる。打面調整は右側縁から行われる。490は右側縁に自然面を残し、平坦打面に左側縁から広めの剥離調整を加えている。491は右側縁に自然面を残し、剥離面を左側縁とする。打面調整は左側縁から行われる。489～491はIII類に分類される。492も細石刃



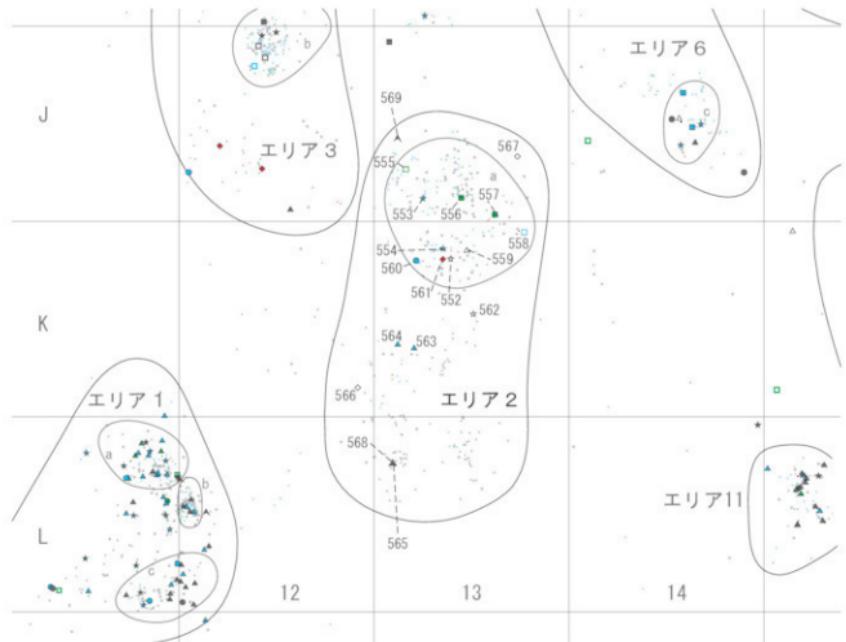
第120図 エリア1関連出土遺物(2)



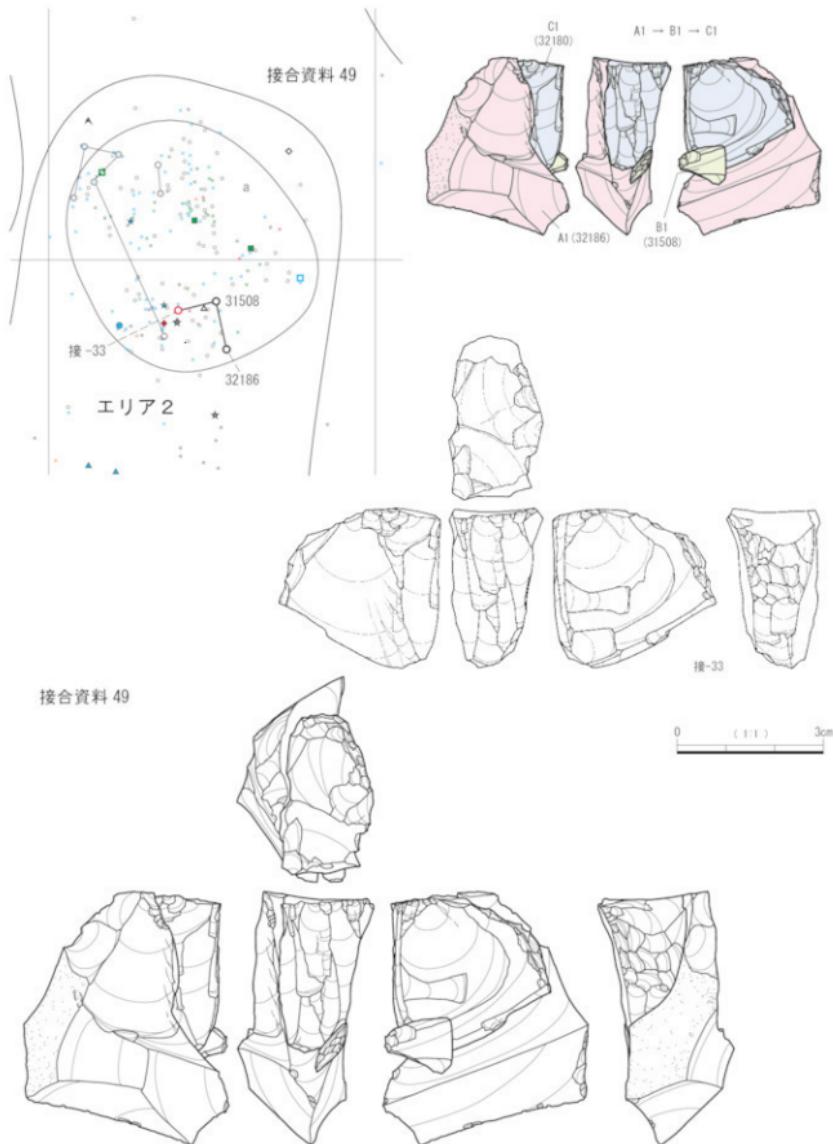
第121図 エリア1関連出土遺物(3)



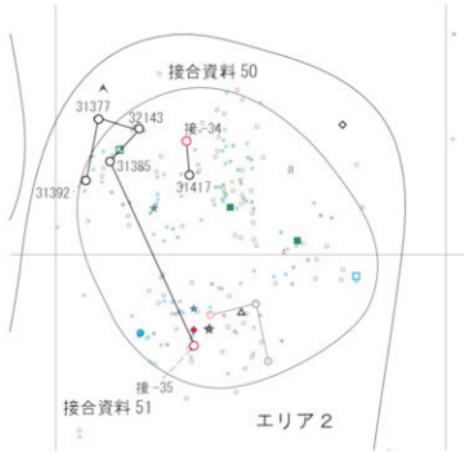
第122図 エリア1関連出土遺物(4)



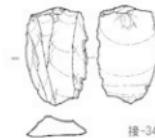
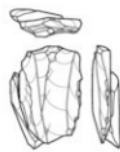
第123図 エリア2遺物出土状況



第124図 エリア2接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

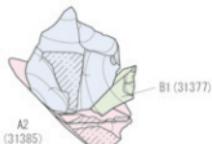
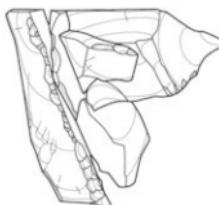
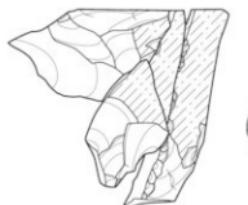


接合資料 50

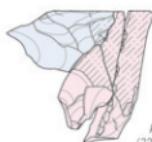


接-34

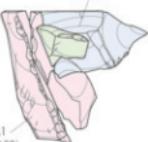
接合資料 51



C1  
(31392)

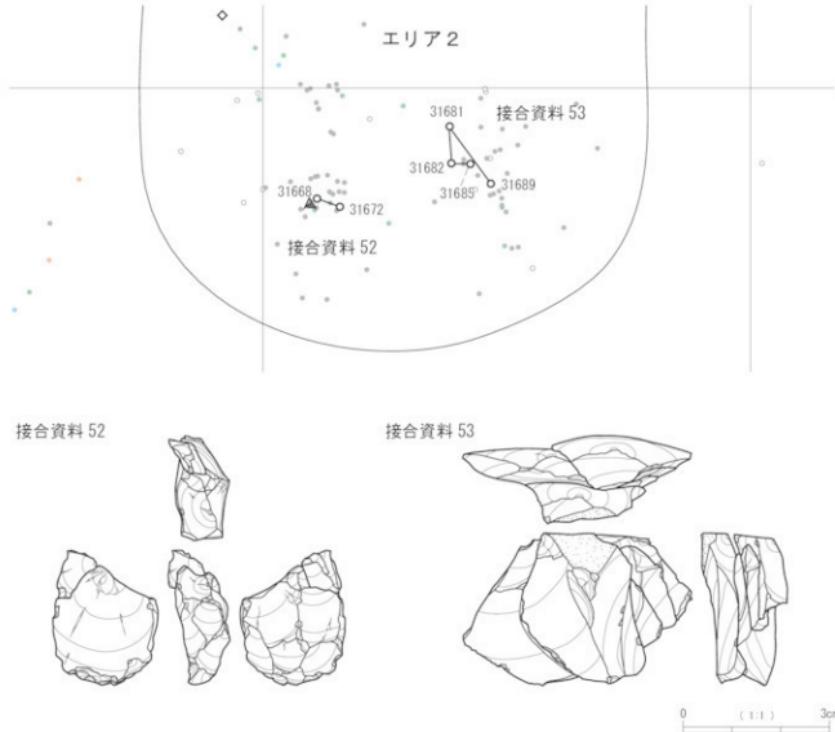


A1 → (A2 + A3) → B1 → C1



0 (11) 3cm

第 125 図 エリア 2 接合資料出土状況[2]・接合資料[2]



第126図 エリア2接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

核あるいは残核と考えられる。492は実測後、上面に調整剥片が1点接合した。493は水晶の原礫である。6角柱の劈開面の上部を剥離し分割しているが、その後の加工痕はみられない。

494は作業面再生剥片である。495～507は細石刃である。495は頭部～胴部で尾部を欠損するのみではほぼ完形である。496～498は頭部～中間部、499～505は中間部、507は尾部である。細石刃の石材は、頁岩が約8割を占め、次いで水晶、黒曜石が少量みられる。

#### [集中部 b]

5点を図化した。508は細石刃核である。508は右側縁に自然面を残し、正面には細石刃剥離痕が残存する。打面が段状になっており、打面再生剥離の後の剥離は確認できない。

509～512は細石刃で、509・510は頭部～中間部、511・512は中間部である。細石刃の石材は、黒曜石と頁岩である。

#### [集中部 c]

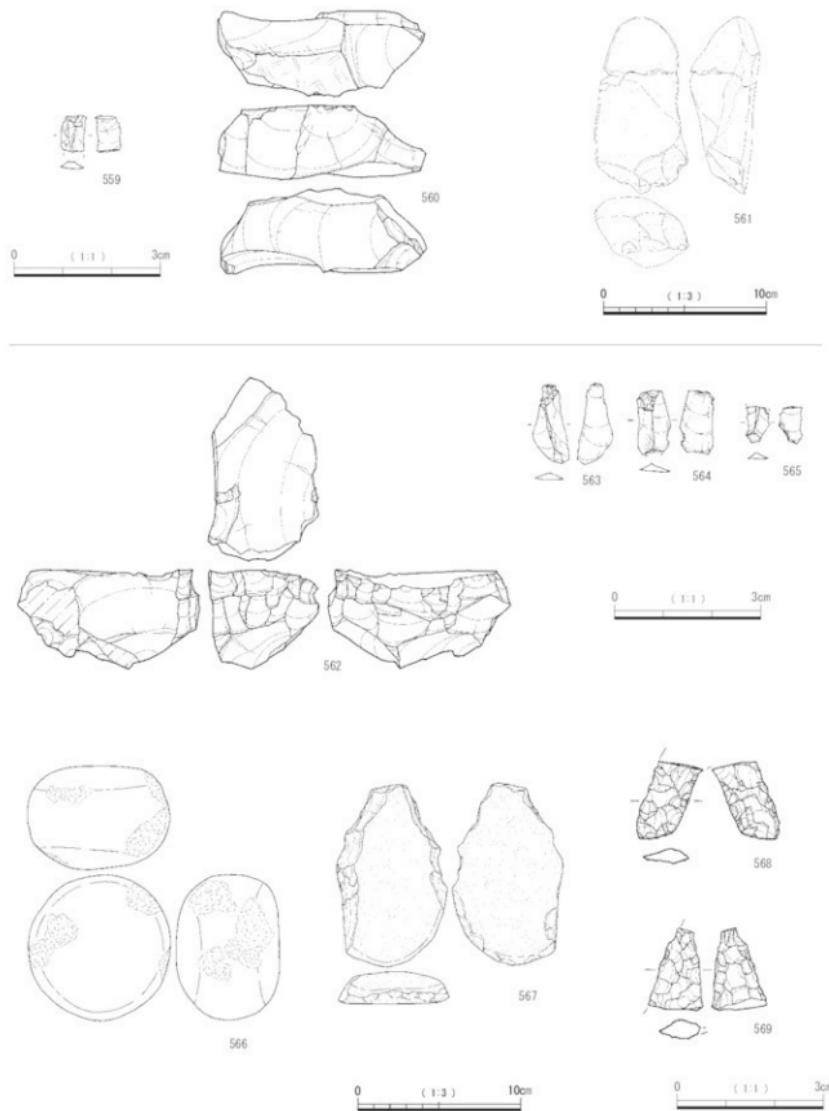
16点を図化した。513・514は細石刃核である。513は剥片を素材とする小型の細石刃核で、右側縁下部が大きく欠損する。石材には不純物が多いが、細石刃剥離は数回行われている。一部に作業面側からの打面調整が確認できるためⅠa類に含めた。514は左側縁下部に自然面を残し、右側縁は剥離面である。右側縁からの横位の打面調整剥離によって平坦打面を作出し、最終的には階段状剥離が生じたことにより細石刃剥離を終了している。Ⅲ類に分類される。515はブランクと考えられる。上面に階段状剥離のような先行する剥離痕が残存しており、細石刃核を再加工した可能性もある。

516～526は細石刃である。516～520は頭部～中間部、521～526は中間部である。石材は524・525のみが頁岩で、それ以外は黒曜石である。

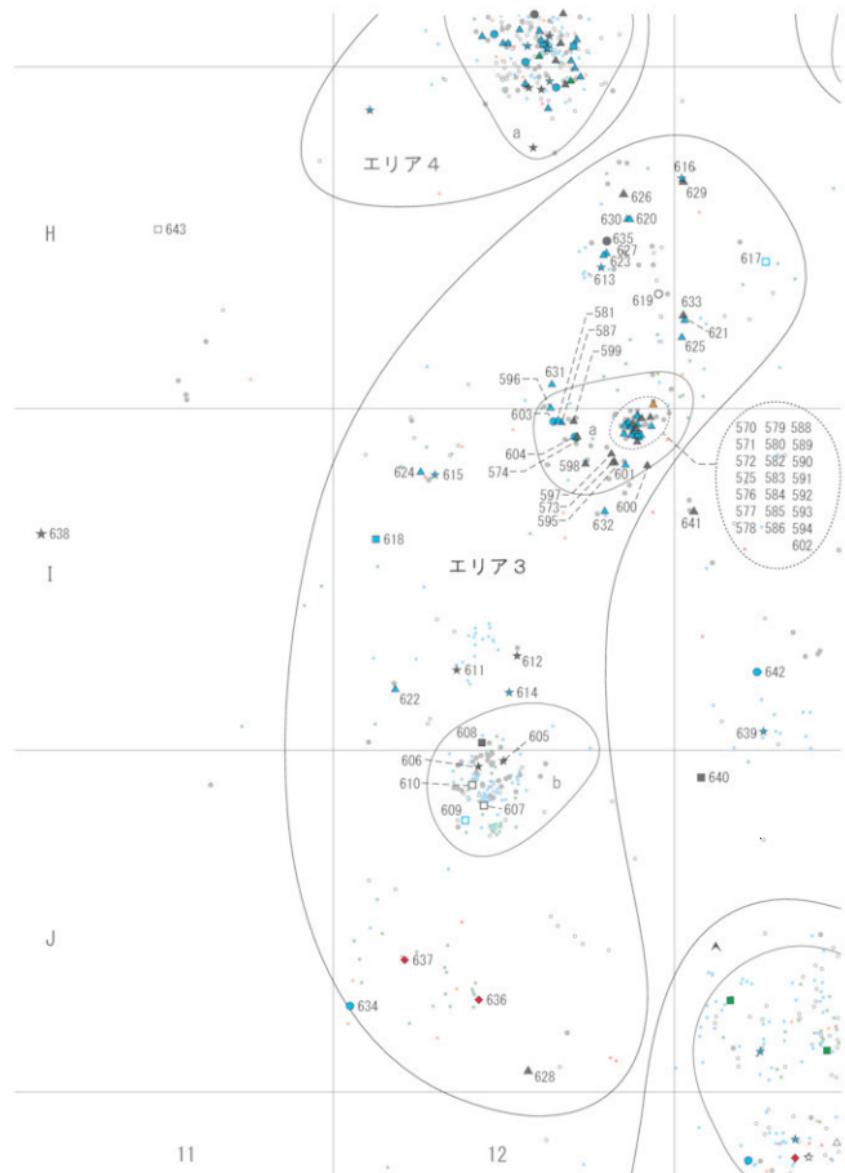
527は作業面調整剥片、528はファーストスポールと考



第127図 エリア2関連出土遺物(1)



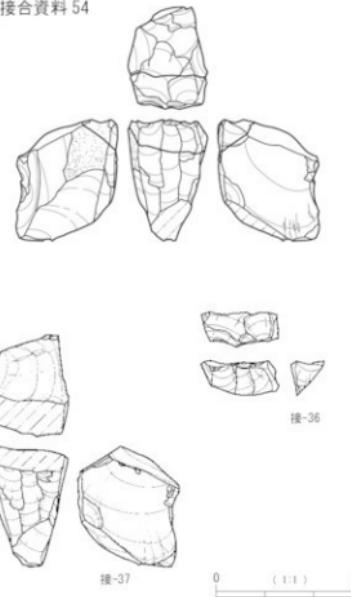
第128図 エリア2関連出土遺物②



第129図 エリア3遺物出土状況



接合資料 54



第130図 エリア3 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

えられる。

#### エリア内出土遺物

23点を図化した。529～534は細石刃核である。529は自然面を左側縁とする。打面再生剥離を行っているが、その後の細石刃剥離は確認できない。530は小型で楔形を呈する。剥離面を側縁とし、やや斜位の打面から剥離が行われる。529・530は小型の一類で、529が Ia類、530が Ib類に分類される。531は素材剥片の剥離面を両側縁とし、背縁調整が加えられる。打面はゆるやかに回む。Ia類に分類される。532は薄い剥片を素材とし、右側縁は自然面、打面には劈開面を残す。正面からの打面調整剥離を行い、幅の狭い小口面から細石刃を剥離する。Ib類に分類される。533は剥片を素材とし、右側縁が自然面、左側縁が剥離面である。細石刃剥離が行われた後、左側縁側から打面再生が行われているが、その後の細石刃剥離は実施されていない。III類に分類される。534は方形のブランクの角部分を作業面として細石刃剥離が進められる。打面は平坦で、一部左側縁側からの調整剥離がみられるためIII類に分類したが、II類的な特徴も有する。また、背面側には右側縁からの小剥離が連続して行われており、いずれも階段状剥離のように段をなして剥離が止まっている。

535は石核である。平坦な劈開面を打面とし、打面から調整剥離を行っている。中央で割れており、2点が接合している。536は平坦な打面から剥離された調整剥片である。

537～548は細石刃である。537～543は頭部～中間部、544～548は中間部である。石材は黒曜石と頁岩が約半数ずつである。なお、539・543・545はエリアの隣接部で出土した。

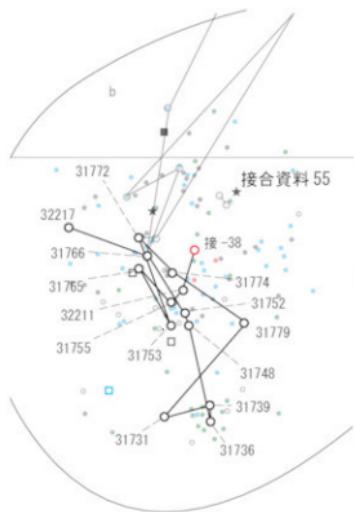
549・550は調整剥片である。いずれも細石刃剥離に関連するものであり、549は作業面再生剥片である。

551は石鏃である。欠損し、左側の脚部のみが残存する。基部が大きく凹む形状と想定される。

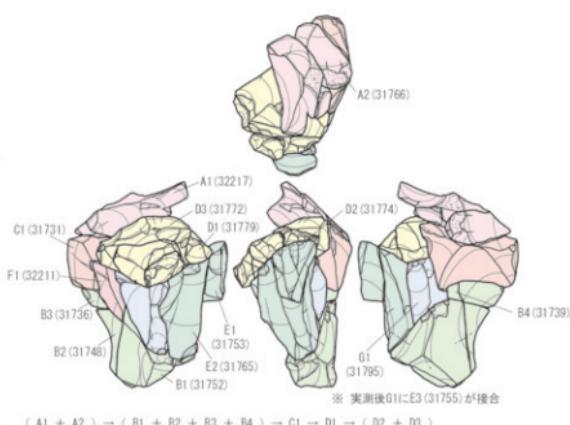
#### (2) エリア2 (第123～128図)

エリア2は、J～L-12・13区に位置する。J区付近に遺物がまとまっており、やや広域であるが集中域として認定した。接合資料は5点である。

石材は頁岩の割合が高く、次いで水晶が多い。K・L区側には集中部は認定されなかったが、石材分布としては黒曜石がまとまっている。一方、K・L区側で出土したツール類は、砂岩を素材とした櫛器や頁岩製のもので

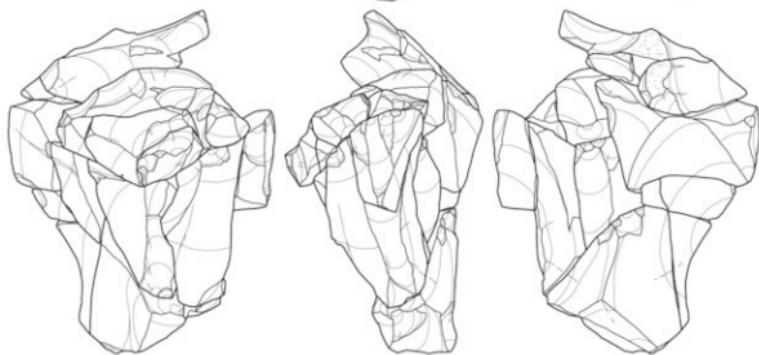
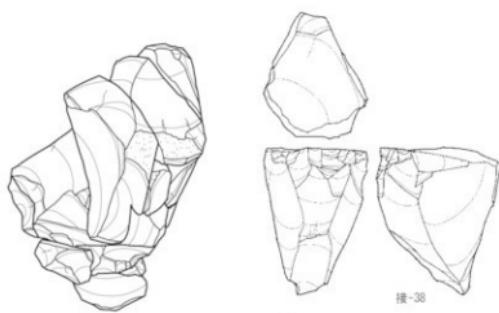


接合資料 55



( A1 + A2 ) → ( B1 + B2 + B3 + B4 ) → C1 → D1 → ( D2 + D3 )  
→ E1 → ( E2 + E3 ) → F1 → G1

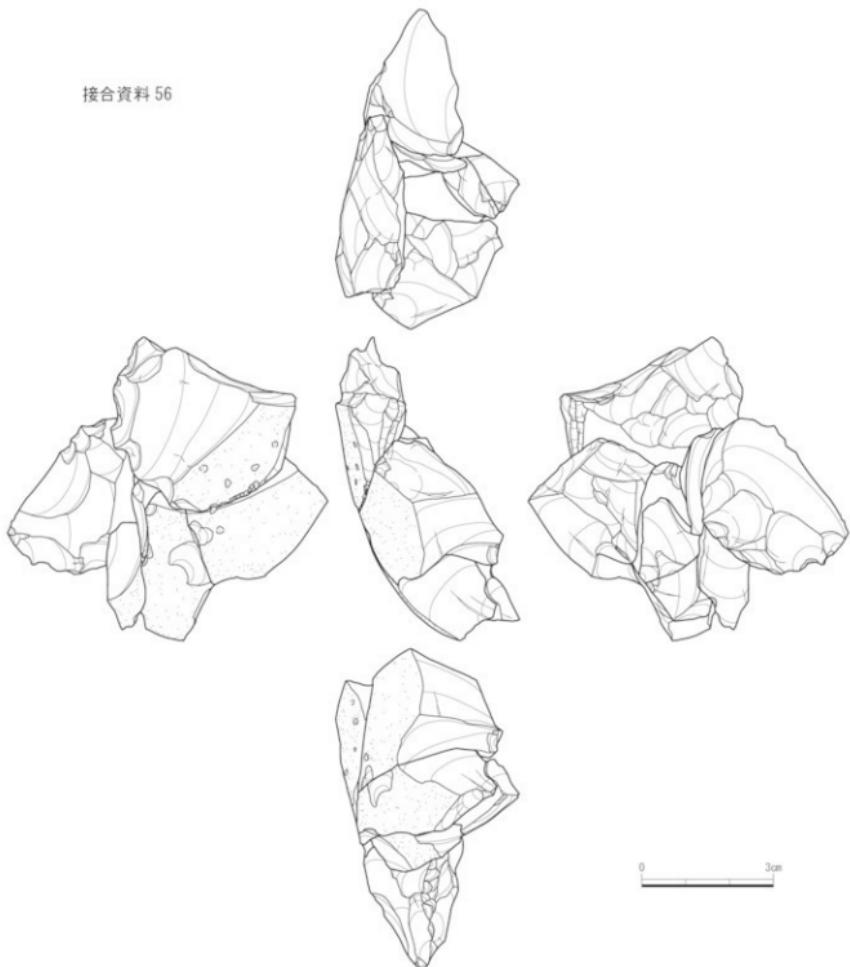
※ 実測後G1にE3 (31755)が接合



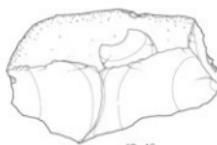
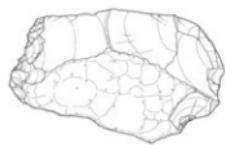
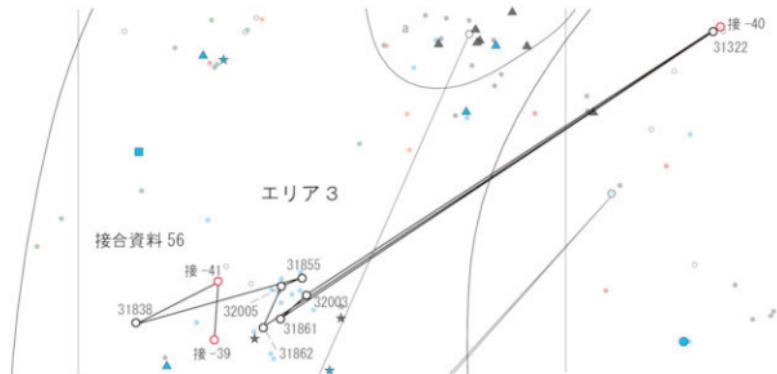
0 ( 1 : 1 ) 3cm

第 131 図 エリア 3 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

接合資料 56



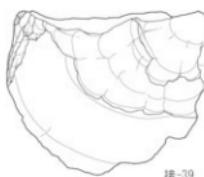
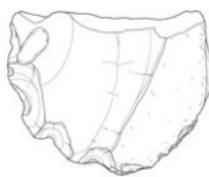
第 132 図 エリア 3 接合資料(3)



接-40



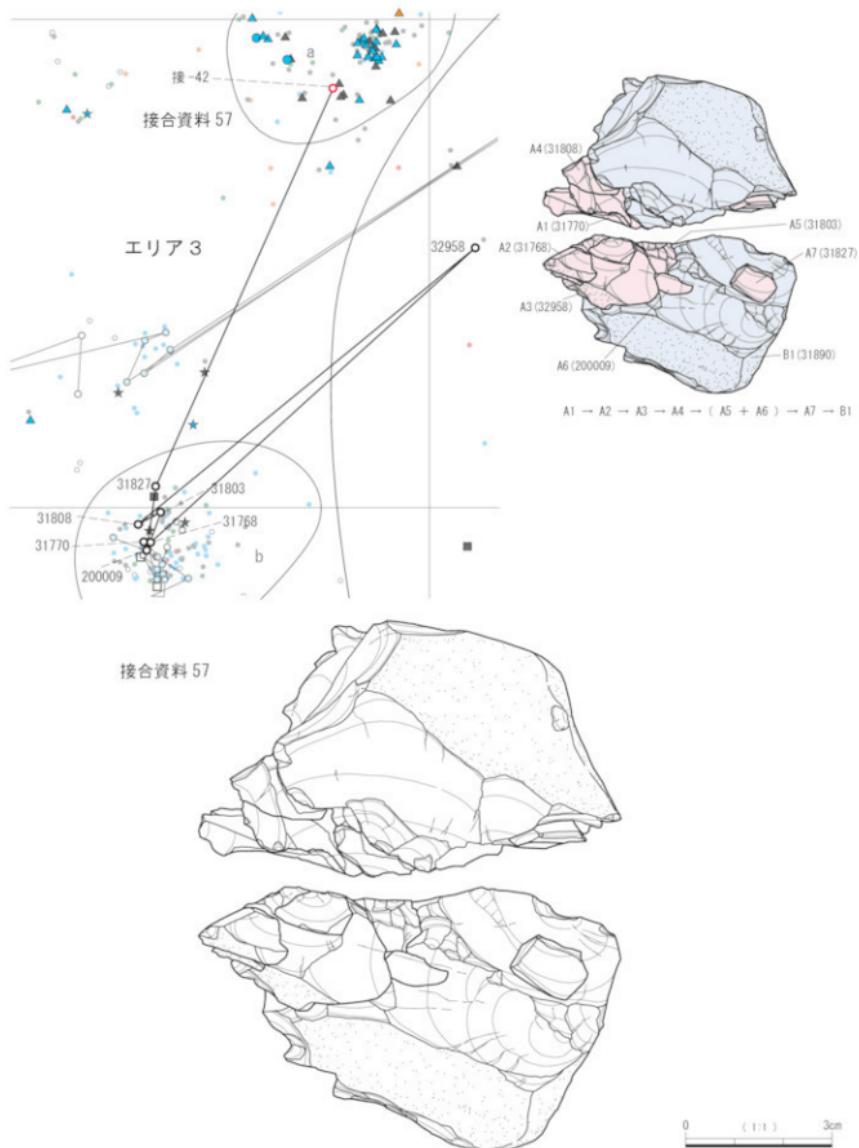
接-41



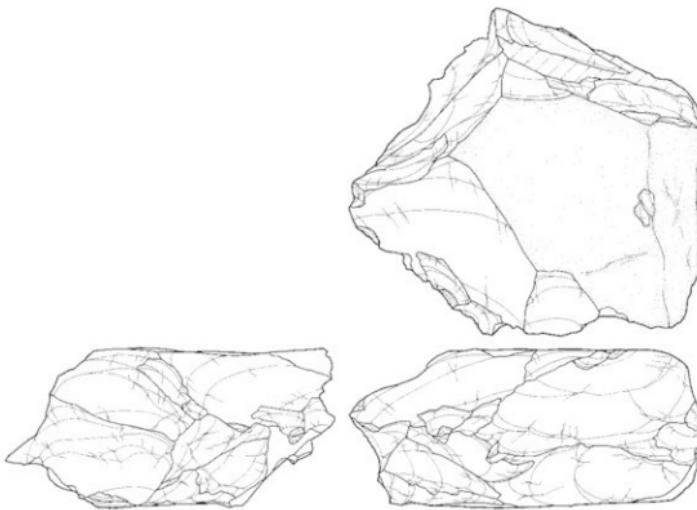
接-39



第133図 エリア3 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)



第134図 エリア3 接合資料出土状況(4)・接合資料(5)



接-42



第135図 エリア3接合資料(6)

あり、黒曜石製のものは出土していない。

#### 接合資料

**接合資料49 (SG201)** 集中部 a で出土した細石刃核と調整剥片 2 点の計 3 点の接合資料である。打面 A を含む素材剥片を自然面から剥離し、その後上面側から加壓して細石刃核の素材剥片を作出する。細石刃核（接-33）は剥離面を左側縁として利用し、右側縁から打面調整を行っている。なお、接-33は下縁にも細石刃剥離面がみられ、調整剥片の接合状況からこちらが先行する作業面と判断される。先行する作業面についても同様に、左側縁から連続して打面調整が行われる。また、この作業面には階段状剥離が生じており、細石刃剥離が終了する。その後、接-33の正面側に作業面を移して細石刃が剥離される。接-33はIII類に分類される。

**接合資料50 (SG144)** 集中部 a 内で出土した作業面再生剥片と細石刃の接合資料である。石材は頁岩 A である。接-34は下端、接合する細石刃は上下端を欠損する。

**接合資料51 (SG056)** 集中部 a 及びエリア内で出土した石核と剥片 4 点の計 5 点の接合資料である。打面 A から 2 点、打面を変えて剥離された 3 点が接合する。接-35は二次加工剥片であり、上縁・下縁は節理面を残し、

両側縁に腹面からの加工が行われる。いずれの剥片も IX・X 層からの出土であるため第 3 文化層に含めたが、二次加工剥片の形態や側縁加工は第 2 文化層でみられる資料とも類似する。

**接合資料52 (SG296)** エリア内で出土した石核と剥片の計 2 点の接合資料である。石材は黒曜石 B である。石核の左側縁は主要剥離面である。

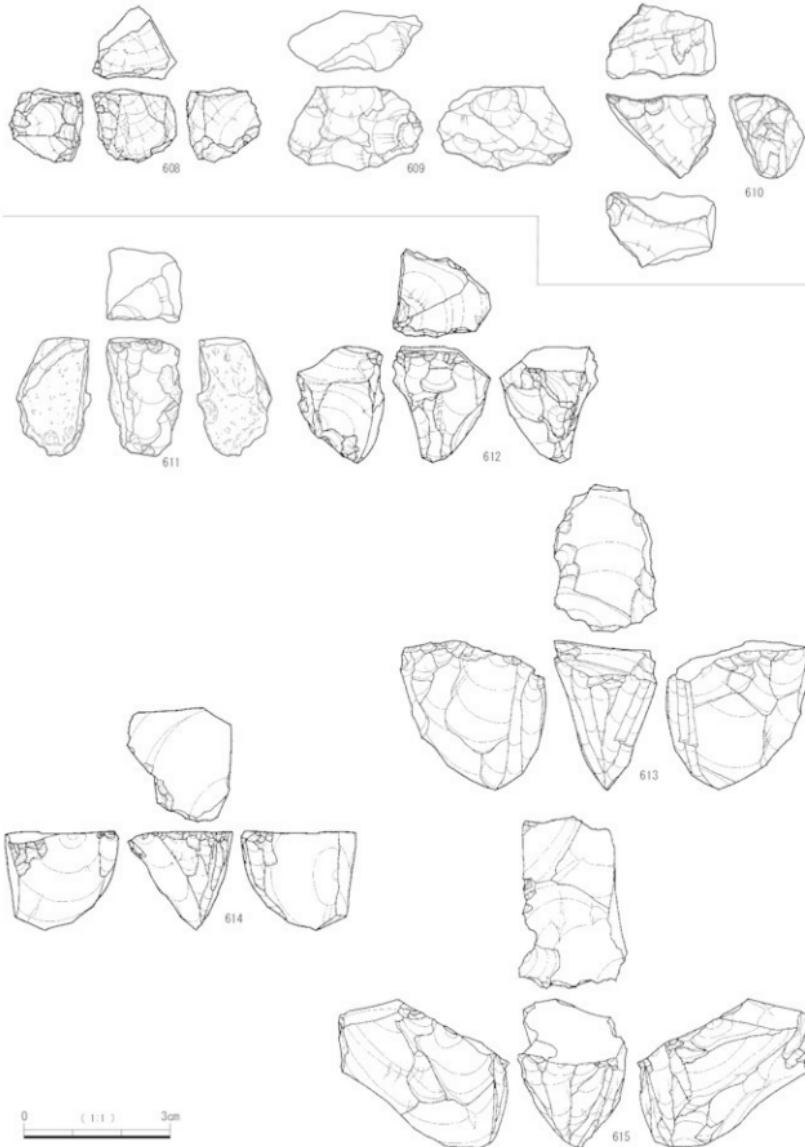
**接合資料53 (SG018)** エリア内で出土した接合資料で、平坦打面から連続して剥離した 4 点の不定形剥片の接合資料である。石材は頁岩 B である。ツール類は接合していない。

#### 集中部 a

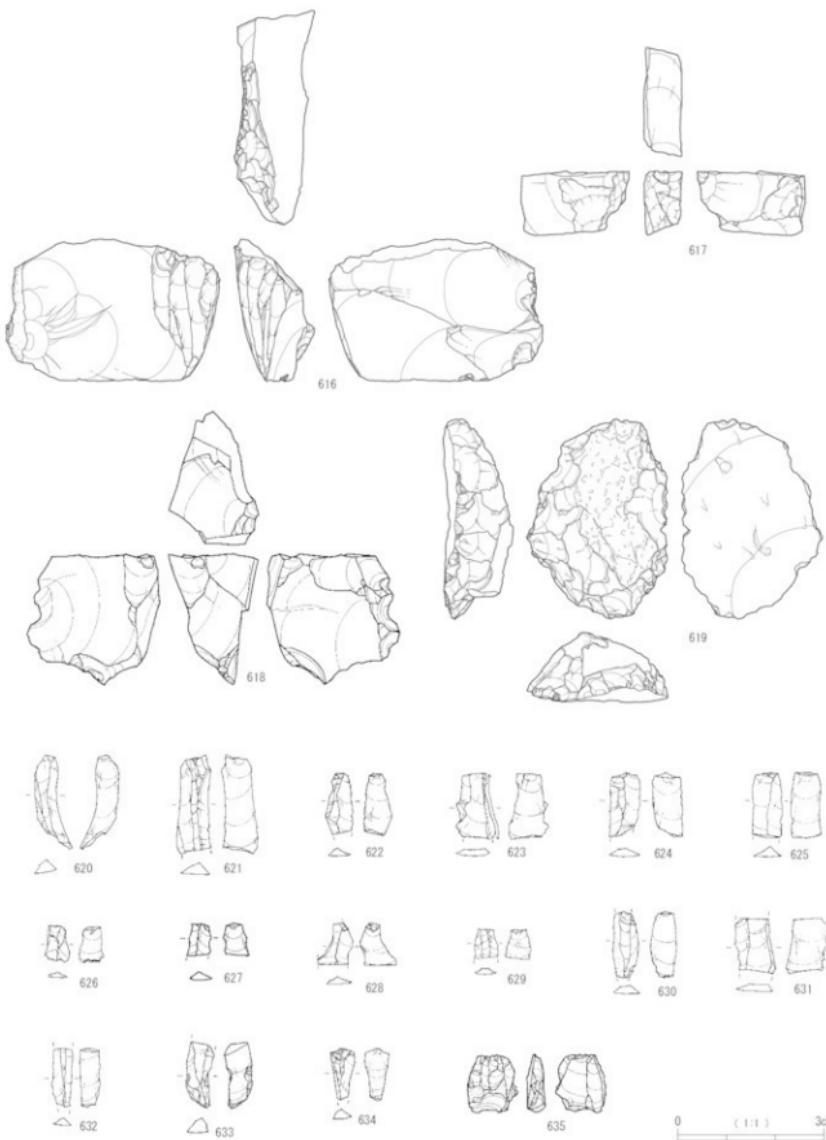
552～554は細石刃核である。552はチャートを素材とし、上面には自然面が残存する。正面側からの調整剥離で平坦打面を作出し、細石刃剥離が行われる。Ia類に分類される。553は自然面を左側縁、剥離面を右側縁とし、正面に細石刃剥離痕が残る。打面は平坦であり、左側縁から小剥離が連続して加えられる。実測後、背面側に剥片が接合し、その剥片に素材剥片の打面が残存していた。本来は、自然面から剥離された厚めの縦長剥片であり、その先端部分を分割して細石刃核としたと考えら



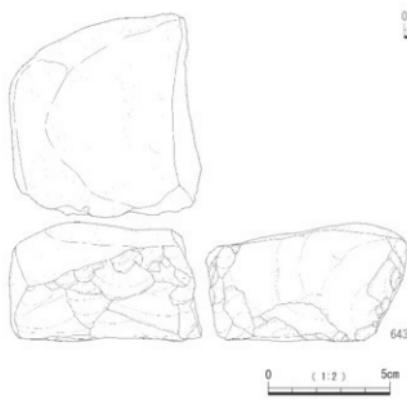
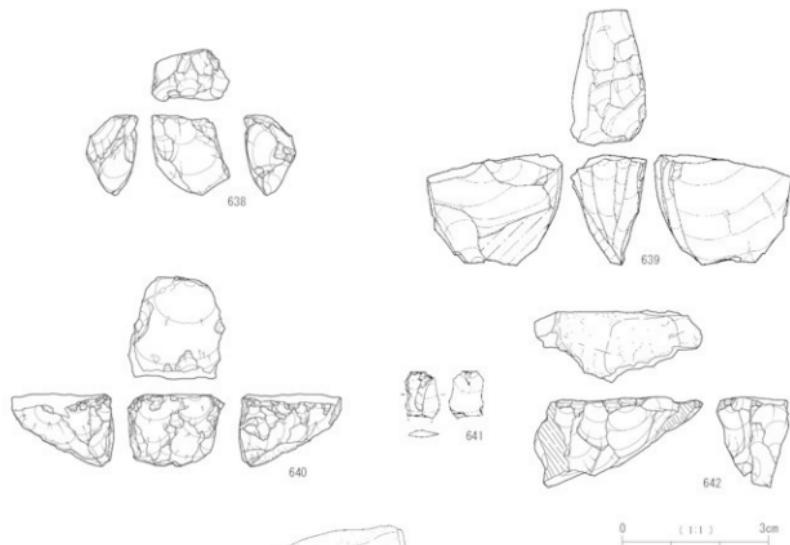
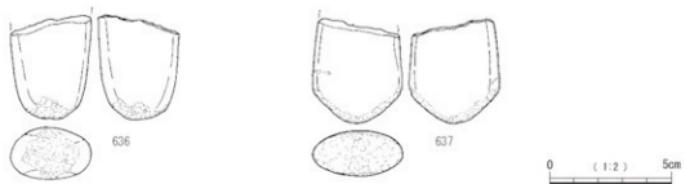
第136図 エリア3関連出土遺物(1)



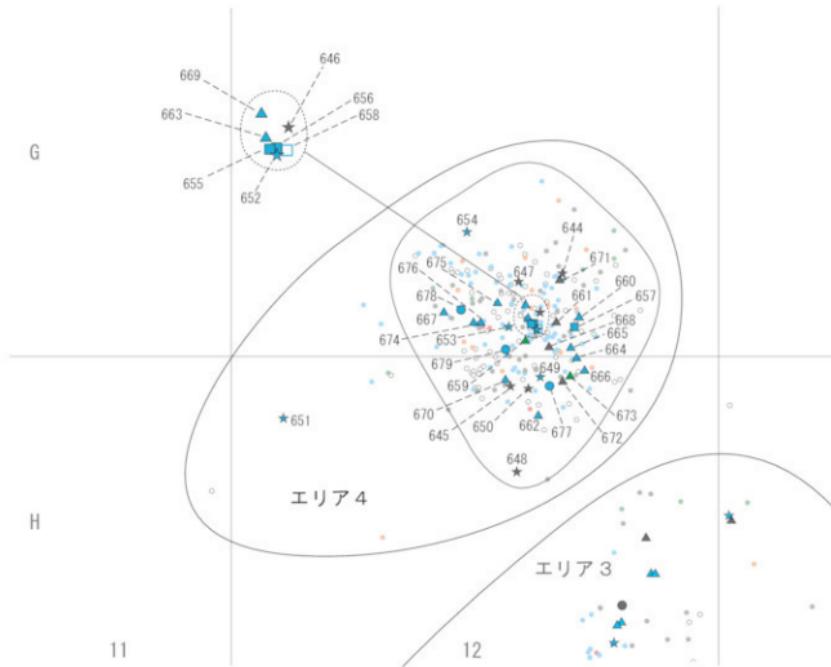
第137図 エリア3関連出土遺物(2)



第138図 エリア3関連出土遺物(3)



第139図 エリア3関連出土遺物(4)



第140図 エリア4遺物出土状況

れる。側縁からわざかに打面調整が加えられる点からIII類に包括した。554は自然面を右側縁、剥離面を左側縁として左側縁からの打面調整によって平坦打面を作出する。554はIII類に分類される。

555は瘦核である。自然面を打面とし、不定形剥片が剥出されたと考えられる。556・557はプランクである。556は右側縁は劈開面、左側縁は自然面であり、打面は両側縁から横位の剥離調整が行われ、ほぼ水平な打面が作出されている。557は右側縁に劈開面を残し、両側縁からの打面調整により平坦な打面を作出している。558は石核である。平坦な打面からほぼ全側縁に調整剥離が行われる。石材は頁岩Eであり、やや軟質で風化している。実測後、背面に剥片が1点接合した。

559は細石刃の頭部で、石材はチャートである。560は上面に自然面を残し、そこを打面として正面に数回の剥離が行われた痕跡がみられる。下面是右側縁から剥離されていることから、大型の打面形成剥片と考えられる。実測後、下面に剥片が1点接合した。

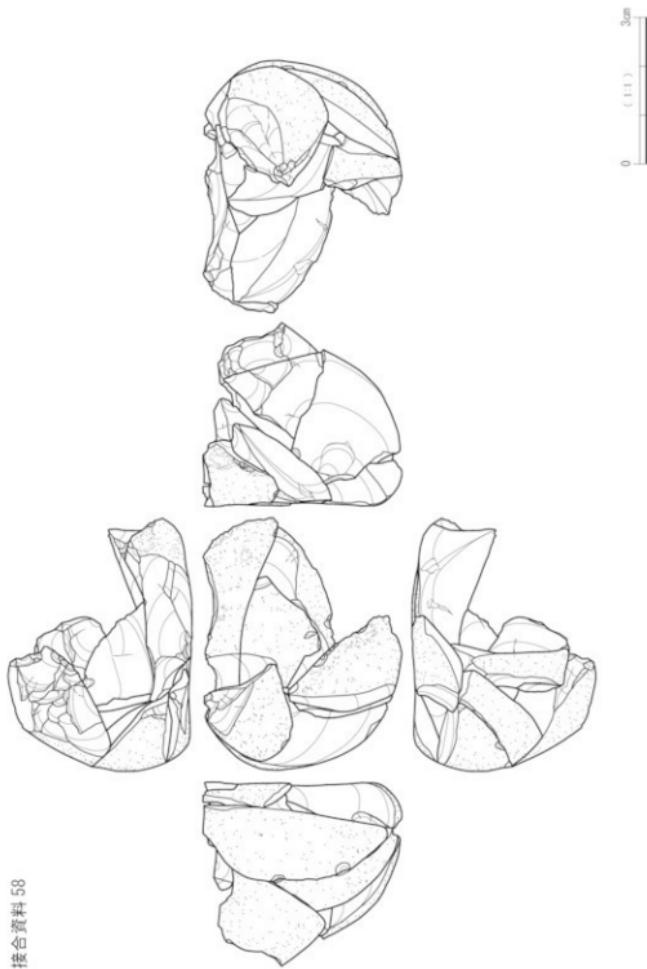
561は穢器である。やや歪みのある楕円形の礫の下縁が複数回剥離され、刃部状を呈する。胸部で欠損した2つの破片が接合している。

#### エリア内出土遺物

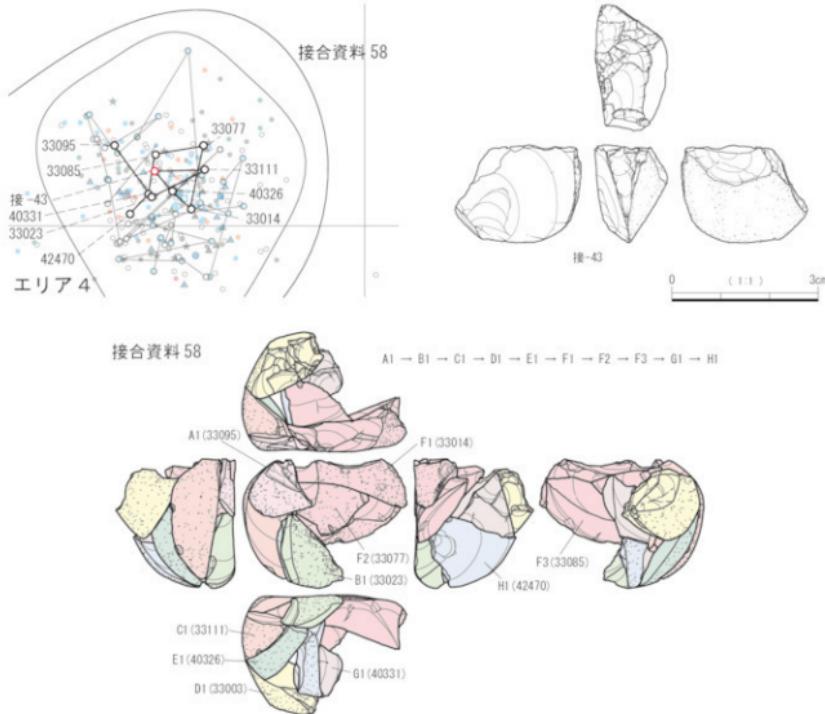
8点を固化した。562は細石刃核である。左側縁に自然面を残し、平坦な打面から側縁調整が行われる。正面の細石刃剥離面には階段状剥離を生じている。IIa類に分類される。563～565は細石刃である。また、564はXI層出土である。563は完形、564は頭部～中間部、565が尾部である。

566は敲石である。多孔質安山岩の円錐を素材とし、側縁の棱を中心に敲打痕が集中する。567は穢器である。両側縁から先端が剥離によって矛状に加工されているが、機能は不明である。

568・569は石鐵の欠損品で、いずれも左脚部と考えられる。なお、569は姫島産黒曜石を素材としており、第1～第3文化層全体でもこの1点のみである。そのため、上層からの落ち込みの可能性が高い。



第141図 エリア4接合資料1)



第142図 エリア4接合資料出土状況[1]・接合資料[2]

### (3) エリア3（第129～139図）

エリア3は、H～K-11～13区に位置する。H・I区及びI・J区のそれぞれ境付近に集中域がみられ、2つの集中部を認定した。接合資料は4点である。

石材は集中部aは黒曜石を主体に水晶が比較的多く、集中部bでは黒曜石と頁岩がほぼ同量である。

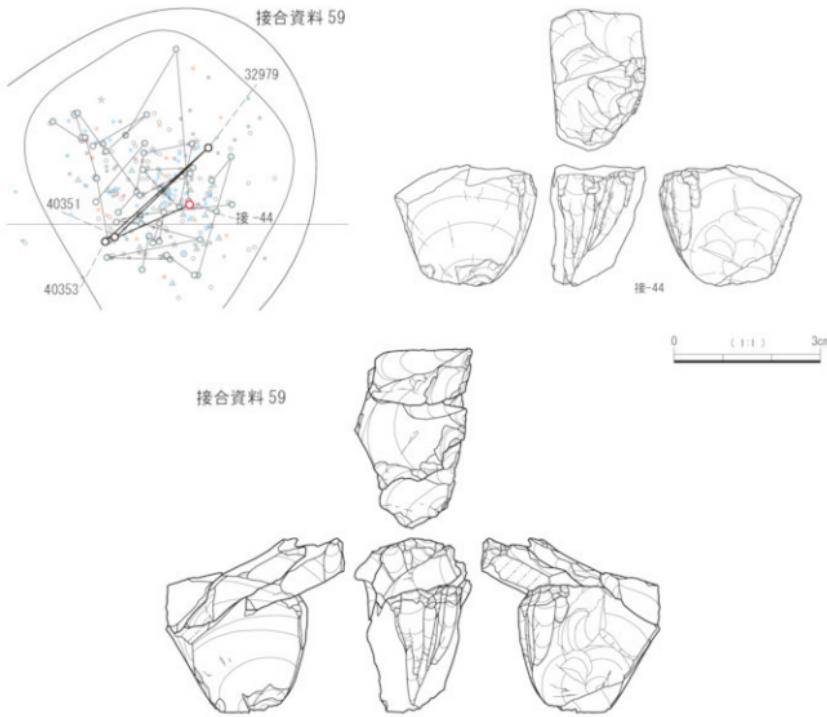
#### 接合資料

**接合資料54 (SG225)** 集中部b内で出土した細石刃核と剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Dアである。左側縁に自然面、下縁に節理面を残し、主要剥離面を右側縁とする。接合資料からみると、複数方向からの剥離で平坦面が作出され、最終的に正面から打面調整剥離が数回行われている。打面再生剥片（接-36）は作業面側の一部のみであり、剥離が節理面にあたって剥離が延びず、適切な打面角度が得られなかつたため遺棄されたと考えられる。接-37は先行する打面調整が正面から

で、打面再生後は節理面を打面としてそのまま細石刃剥離が行われており、1類に含まれる。

**接合資料55 (SG067)** 集中部bで出土したプランクと剥片14点の計15点の接合資料である。上面には自然面を残し、自然面を含む打面Aからの剥離の後、側縁の剥離が進行し、打面Dからの剥離面がE 1及びプランク（接-38）の打面となる。なお、打面Eから剥出されたE 1は細石刃剥離痕が確認でき、E 2と併せて細石刃核であったと考えられる。E 1の下縁は節理面で剥落している。接-38は正面に作業面調整と思われる剥離が加えられるが、細石刃剥離は行われていない。

**接合資料56 (SG026)** 集中部a・bの間とエリア外で出土した細石刃核、プランク2点、調整剥片7点の計10点の接合資料である。石材は頁岩Cである。細石刃核（接-39）は素材剥片の剥出後、側縁からの調整剥離が加えられ、主要剥離面側からの横位の剥離によって打面が作



第143図 エリア4 接合資料出土状況②・接合資料③

出される。III類に分類される。接-40・接-41はプランクであり、他にも同様の大きさの剥片が接合している点から、複数の素材剥片を獲得することが目的であったと考えられる。

**接合資料57 (SG068)** 集中部b内を主体とし、集中部a及びエリア外で出土した石核と不定形剥片7点の計8点の接合資料である。石材は頁岩Gである。自然面の残存状況から、母岩は亜角礫と考えられる。石核(接-42)は集中部aで単独で出土した。平坦な打面を作出した後、石核の棱線に沿って剥片剥離が行われる。

#### 集中部a

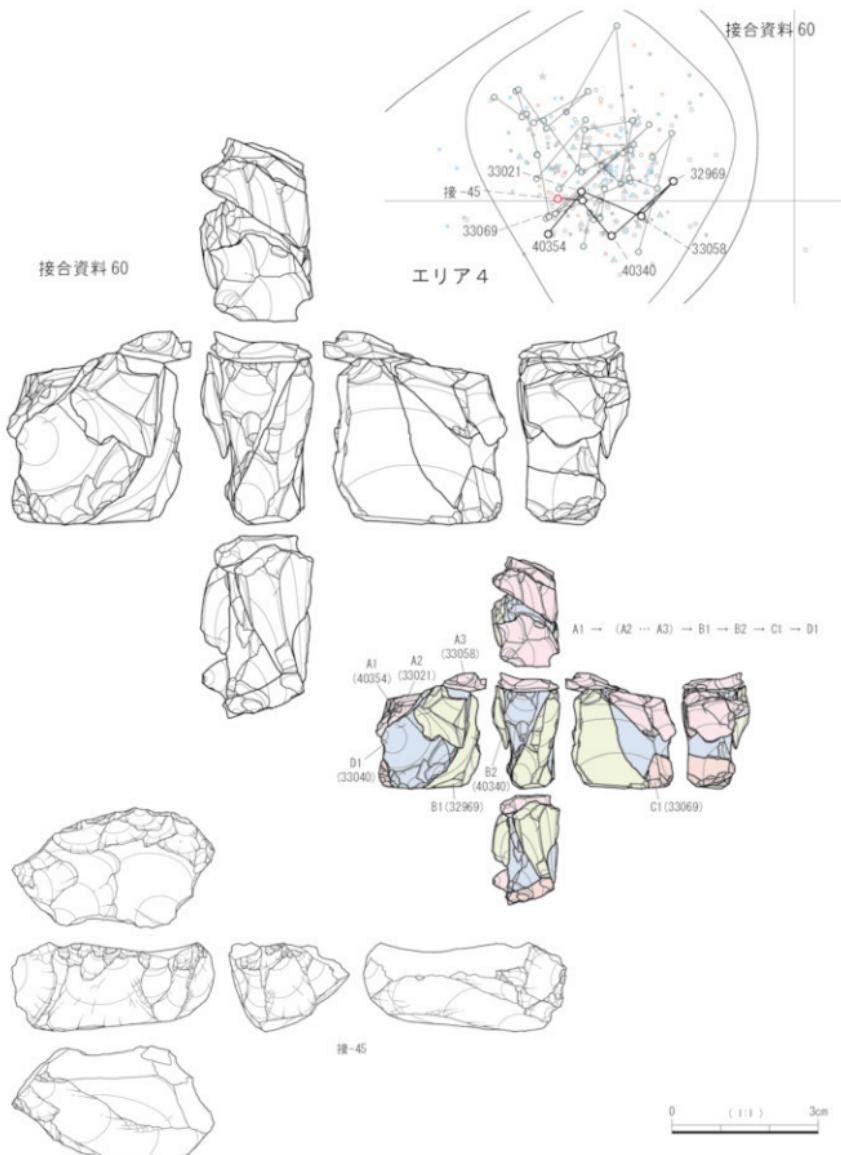
35点を図化した。細石刃が主体を占めるのが特徴である。570～602は細石刃である。570～573は完形で、570・572には自然面が残る。いずれも緩やかな「ノ」字状に湾曲する。574～593は頭部または頭部～中間部であ

る。幅が広いものが主体であるが、579・580のように幅が狭いものもみられる。594～598は中間部、599～602は尾部である。石材は頁岩と黒曜石がほぼ同量である。

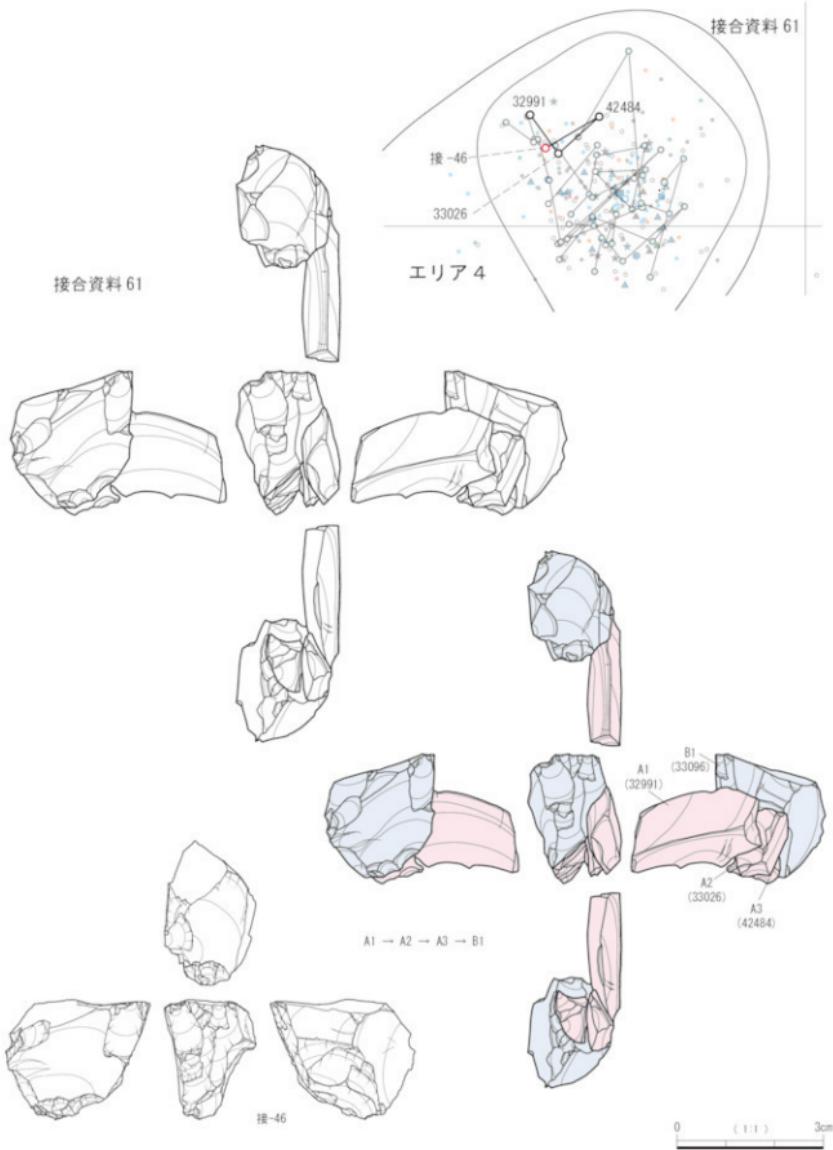
603・604は調整剥片である。

#### 集中部b

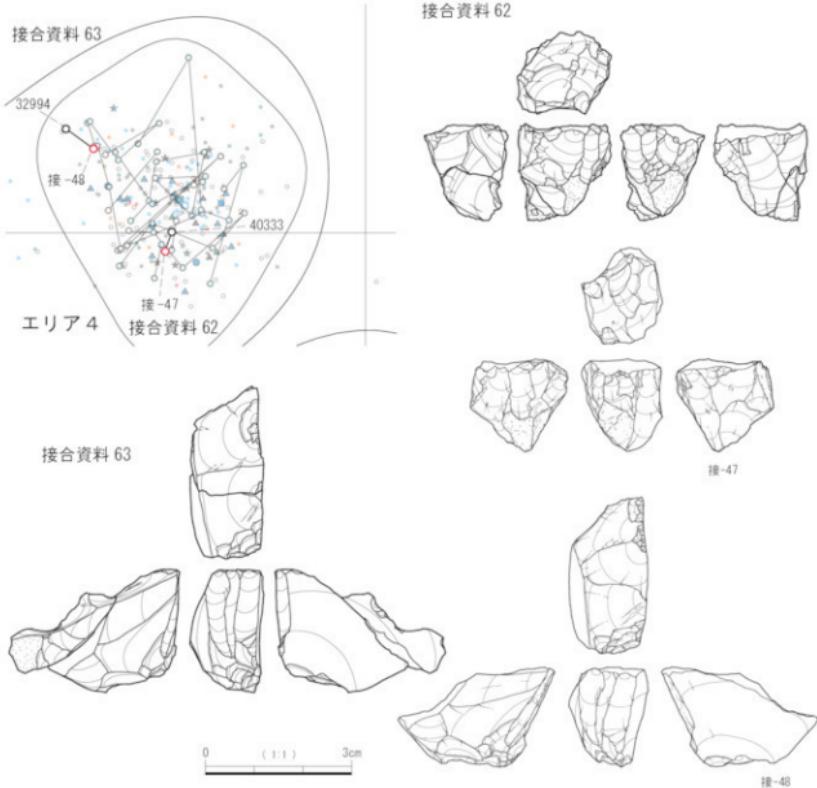
6点を図化した。605・606は小型の細石刃核である。605は打面と細石刃剥離面が鋭角であり、ほぼ上端から剥離が行われる。両側縁は剥離面である。小型である点や、素材礫をそのまま利用する点などから、I類に包括されると考えられる。606は板状剥片を素材とし、平坦な剥離面を打面とする。細石刃幅は約3mm、長さは1cm弱である。IIb類に分類される。607は残核であり、正面及び両側縁に細石刃剥離と考えられる細長い剥離痕が観察される。608はプランクであり、剥離面を右側縁及び打面とする。左側縁と正面との接合部分に集中して小



第144図 エリア4 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)



第 145 図 エリア 4 接合資料出土状況(4)・接合資料(5)



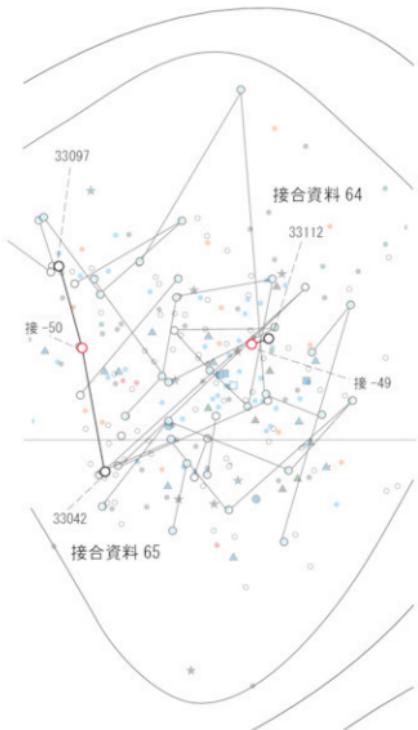
第146図 エリア4 接合資料出土状況(5)・接合資料(6)

剥離が行われ、角が潰れたようになっている。609・610は石核である。平坦な打面を有するが、詳細は不明である。610は剥離面を側縁としたブランクの可能性もある。  
エリア内出土遺物

27点を図化した。611～616は細石刃核である。611は両側縁及び下縁に自然面を残し、平坦打面から細石刃が剥離される。612は先行する細石刃剥離は下縁まで到達しているが、最終的には不純物に当たって階段状剥離を生じており、剥離が終了している。左側縁は風化している。611・612はIa類に分類される。613・614は分割面を打面とし、側縁調整を加えて整形される。613は船底形を呈し、側縁に沿って長めの細石刃が剥離されている。作業面右半には階段状剥離が生じている。614は剥離面を右側縁とし、背面にも調整剥離がみられる。下縁を

欠損する。613はIIa類、614はIIb類に分類される。615はやや凹む打面から側縁調整を行い、正面に向かって傾斜する打面が作出される。また、打面調整は左側縁から小剥離が加えられている。III類に分類される。616はやや厚めの剥片を素材とし、背縁に剥片素材製作時の打面である平坦な自然面が残る。打面には左側縁からの細かい調整剥離を行い、平坦な打面を作出している。しかし、打面調整を加えた範囲は正面に対し左側縁に偏っており、側縁側に作業面が広がる。このような資料は第3文化層中では他に例がない。V類に分類される。

617は板状の剥片を素材とする石核である。平坦な剥離面を打面とし、下縁・及び背面から側縁調整が行われる。618はブランクである。両側縁が剥離面であり、背面に調整剥離が加えられる。III類細石刃核のブランクと考えられる。

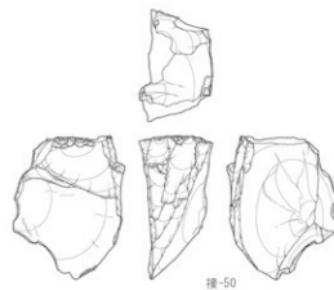
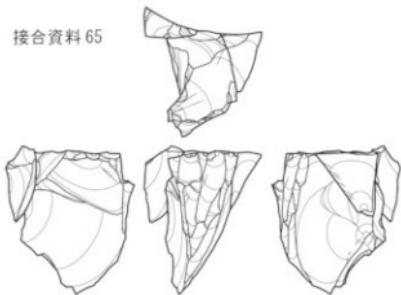


接合資料 64



接-49

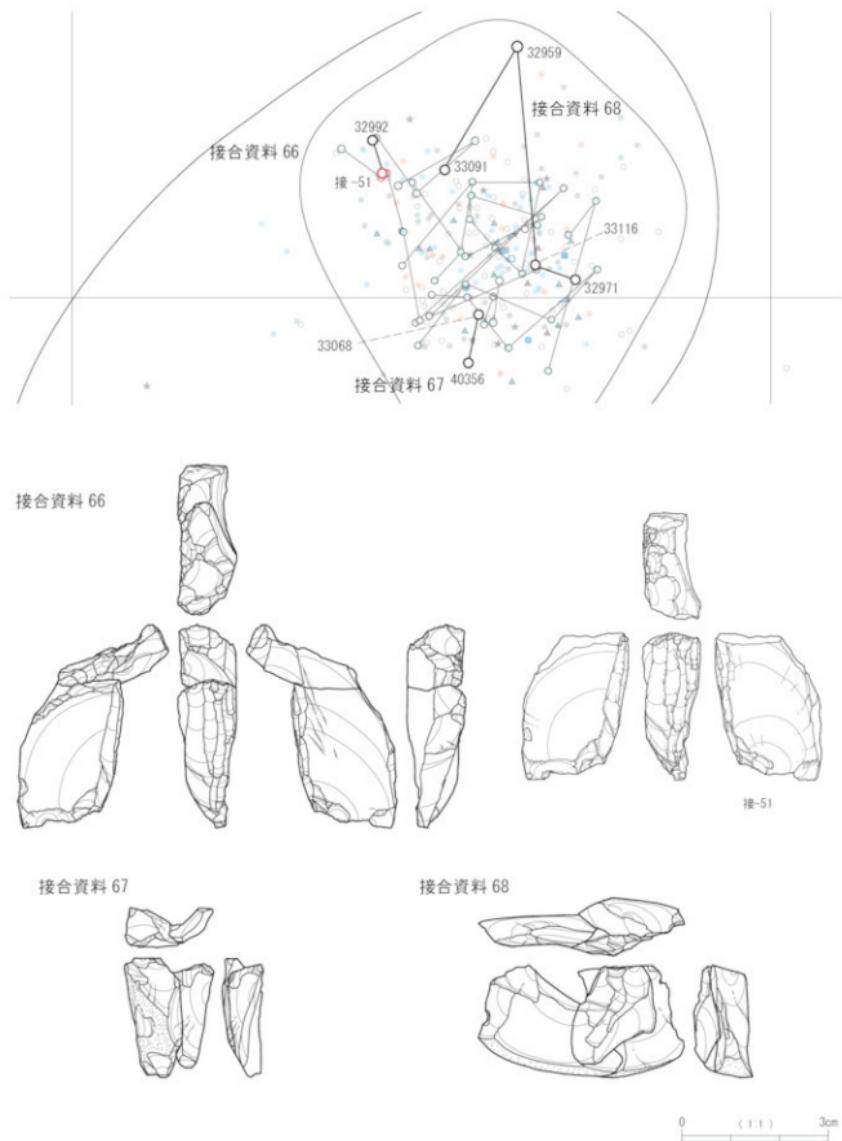
接合資料 65



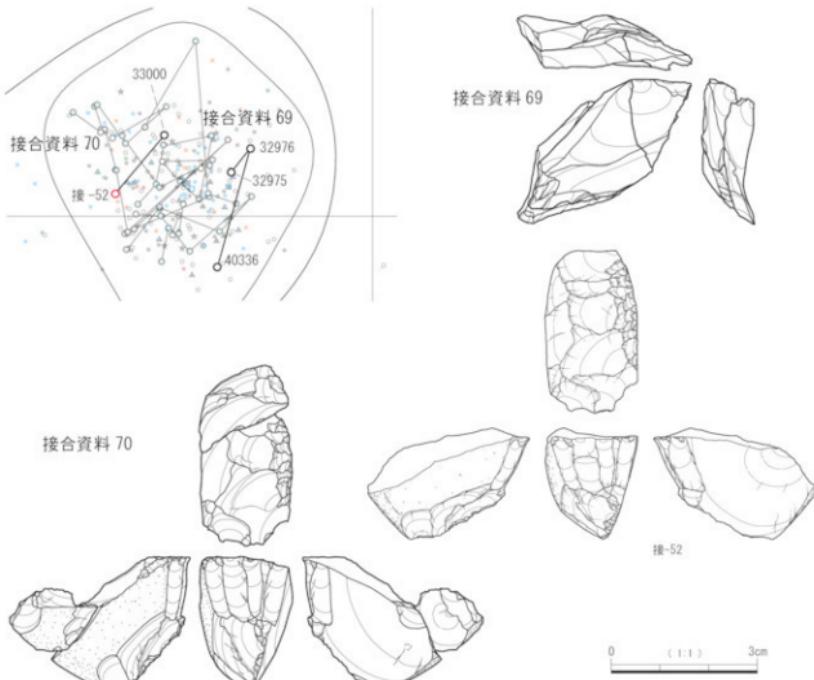
接-50



第 147 図 エリア 4 接合資料出土状況(6)・接合資料(7)



第148図 エリア4 接合資料出土状況(7)・接合資料(8)



第149図 エリア4接合資料出土状況(8)・接合資料(9)

619は器である。背面は自然面を残し、腹面は剥離面である。ドーム型の縱断面形状から、円碟を分割した剥片が素材と考えられ、周縁から急傾斜剥離を全縁に施して整形されている。

620～633は細石刃である。620は完形で、「ノ」の字状に湾曲する。621～629は頭部～中間部である。630～632は中間部、633は尾部である。

634・635は調整剥片である。634は細石刃剥離の作業面の作出に伴う調整剥片で下端を欠損する。635は作業面再生剥片で、細石刃剥離痕が観察される。

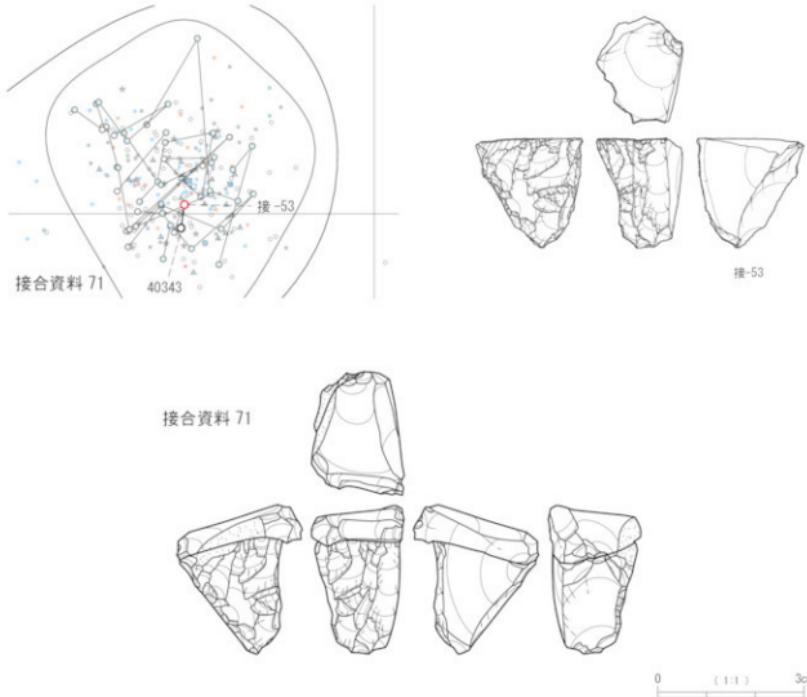
636・637は小型のハンマーである。いずれも砂岩の細長い礫を素材とし、上部が欠損する。636は下端に細かい敲打痕が集中し、637は下縁中央を中心に側縁に敲打痕が集中して平坦面をなすため、先端がやや尖る。

#### エリア周辺の出土石器

6点を図化した。638・639は細石刃核であり、石材は

638が黒曜石A、639が頁岩Fである。638は剥片を素材とし、やや傾斜する上縁に正面から打面調整を加えて一部平坦な打面を作出している。Ia類に分類される。639は左側縁に節理面を残し、剥離面を右側縁とする。右側縁から横位の打面調整が行われ、やや凹凸のある打面から細石刃が剥離されている。III類に分類される。640はブランクで、平坦打面から側縁調整を行い、正面には平坦な作業面を作出している。IIa類細石刃核のブランクと考えられる。

641は細石刃の頭部である。642は石核の調整剥片と考えられ、上面は自然面、左右側縁と背面には節理面が残存する。また、自然面をそのまま打面として利用し、正面の剥離が行われる。実測後、正面に調整剥片が1点接合した。643は扁平なホルンフェルスの亜角礫を素材とした石核で、素材剥片の獲得が目的と考えられる。



第150図 エリア4 接合資料出土状況(9)・接合資料(10)

#### (4) エリア4（第140～153図）

エリア4は、G・H-11・12区に位置する。北側に遺物の集中部を認定した。比較的エリアの範囲は狭いが、14点と多数の接合資料が得られた。また、接合資料は全て集中部内で出土した石器で構成される。

石材は頁岩と黒曜石を中心であり、接合資料及びエリア内から出土したツール類の石材とも対応する。

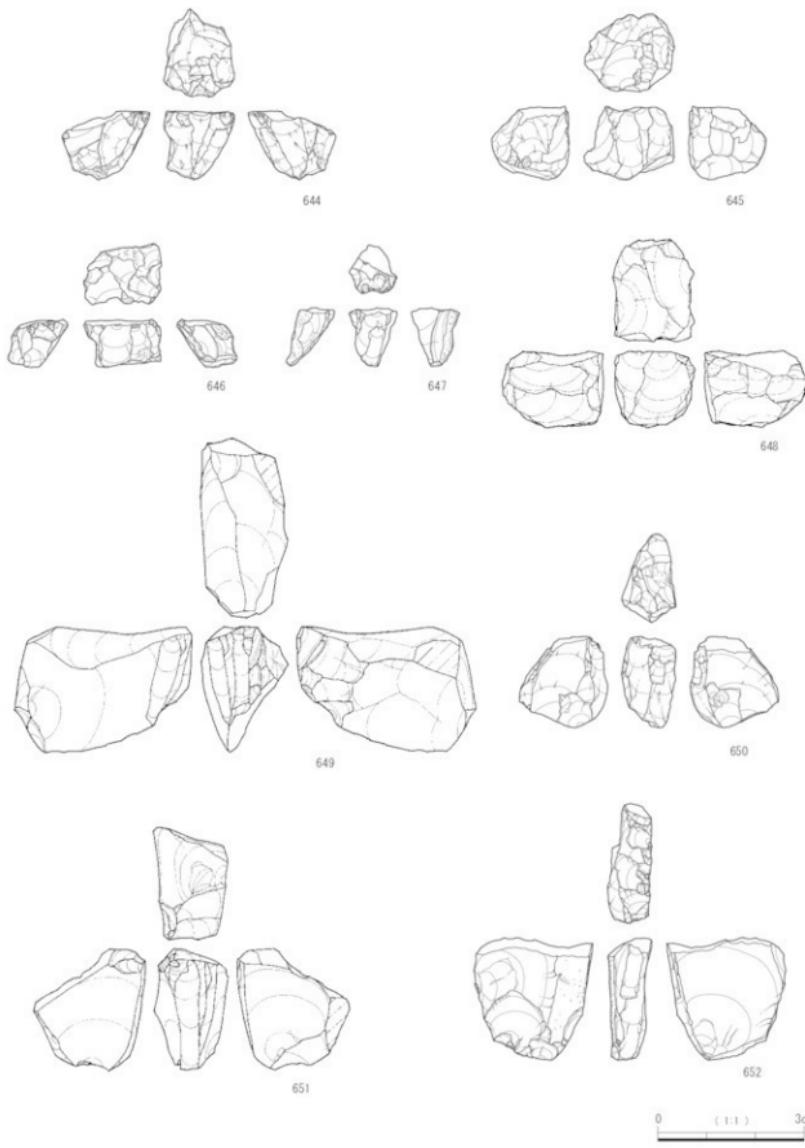
##### **接合資料**

**接合資料58 (SG024)** 細石刃核と剥片の計10点の接合資料である。石材は頁岩Aで、一部に平坦面を有する5cm程の円錐を素材とし、自然面からの剥離過程が明瞭にとらえられる資料である。まず、正面からの剥離で自然面を一部剥出し、その剥離面を打面として次の剥離が続けられ、剥離の過程で接-43の素材となる厚手の剥片が剥出される。接-43は正面面を右側縁、主要剥離面を左側縁とし、主要剥離面側から横位の調整剥離によって

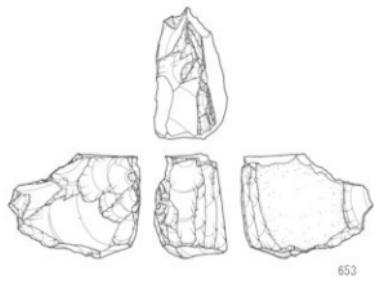
打面が作出される。III類に分類される。

**接合資料59 (SG025)** 細石刃核と打面調整剥片3点の計4点の接合資料である。石材は頁岩Dアである。素材剥片のネガ面を左側縁、ポジ面を右側縁とし、背面は節理面をそのまま利用する。接合した打面調整剥片の端部には先行する細石刃剥離の痕跡がみられ、本来は打面調整剥片の端部までの大きさの細石刃核であったことが分かる。細石刃剥離をある程度行った段階で、右側縁から横位の剥離が3回にわたって行われ、その後同じく右側縁から横位の細かい打面調整を加え、接-44が作出される。接-44の作業面には連続した階段状剥離が生じており、その段階で剥離を終了している。接-44はIII類に分類される。

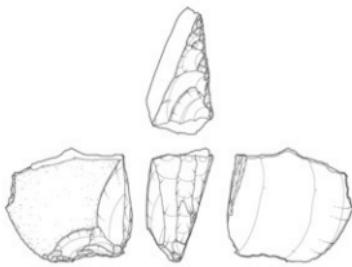
**接合資料60 (SG034)** ブランクと剥片6点の計7点の接合資料である。石材は頁岩Cである。剥片B1に細石刃剥離痕が残存しており、接合状況から、細石刃核とし



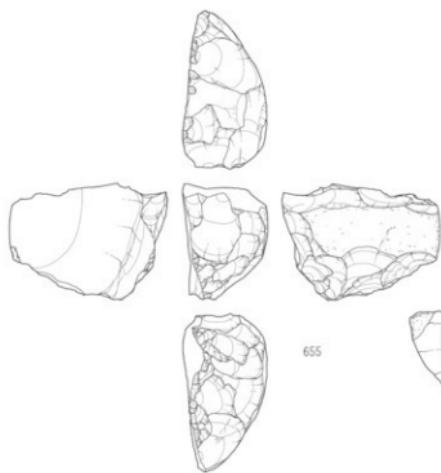
第 151 図 エリア 4 関連出土遺物(1)



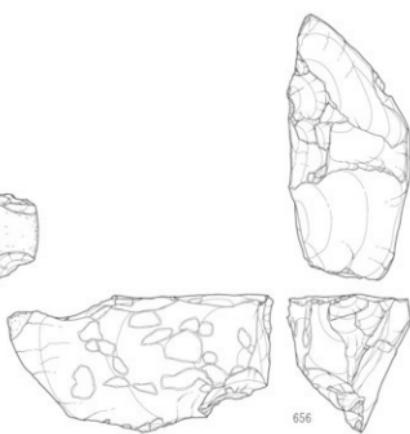
653



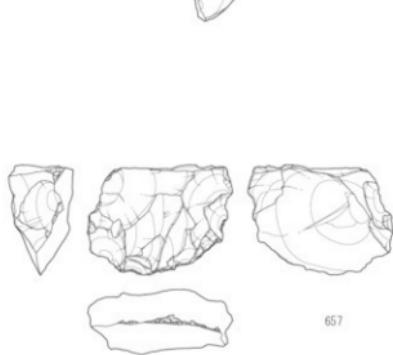
654



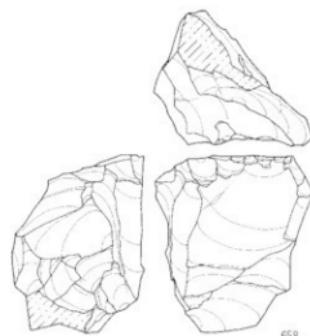
655



656



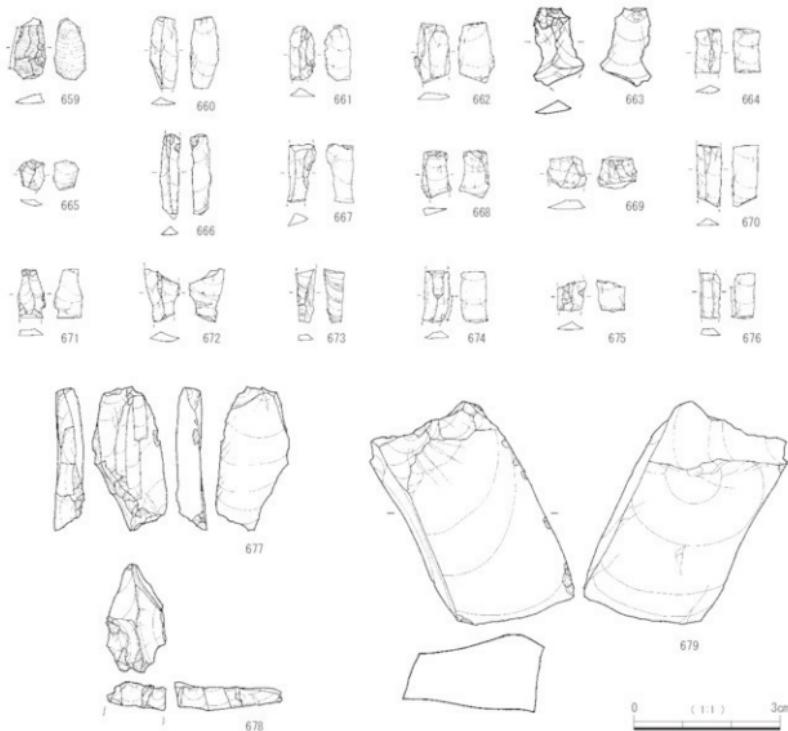
657



658

0 (1:1) 3cm

第152図 エリア4関連出土遺物(2)



第153図 エリア4関連出土遺物(3)

て機能したものを最終的にブランクとして再加工した過程が明らかになった。

接合資料の剥片B1で確認できる細石刃核は、剥片素材の主要剥離面を右側縁として打面Aから打面調整を行い、正面から細石刃剥離を行っている。剥片B1の正面には階段状剥離が確認でき、その段階で作業を終了したと考えられる。その後、打面B・Cからの剥離が行われ、接-45が整形される。接-45の打面調整に伴う剥片は接合していないが、右側縁からの横位の打面調整が確認できるため、Ⅲ類細石刃核のブランクと考えられる。

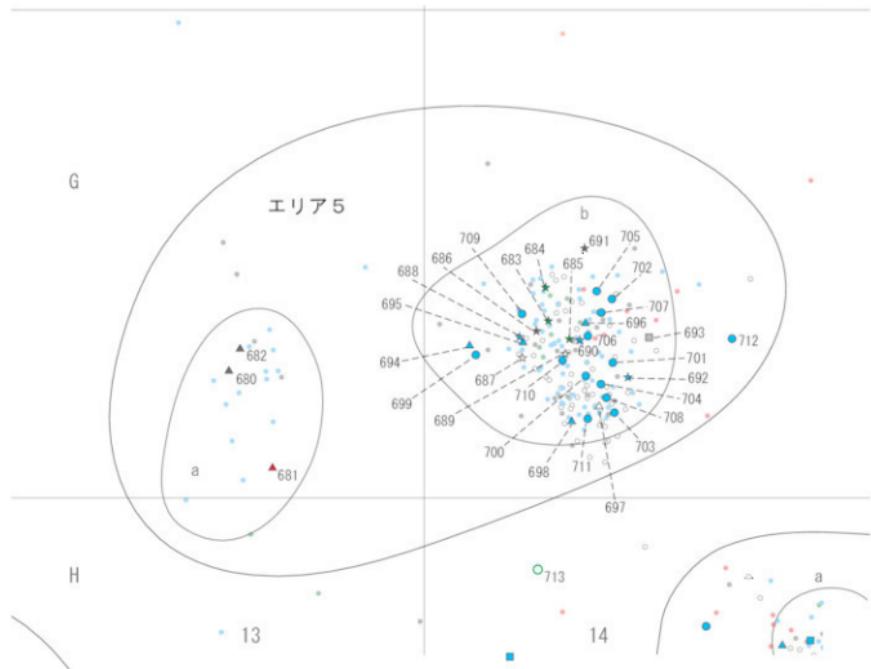
接合資料61 (SG030) 細石刃核と調整剥片3点の計4点の接合資料である。石材は頁岩Aであるが、数条の節理がみられる。主要剥離面である左側縁側から下縁調整が行われており、その際の調整剥片が接合する。接-46は左側縁からの横位の剥離と、作業面からの数回の剥離

が打面調整として観察される。下縁調整及び横位の打面調整からⅢ類に分類される。

接合資料62 (SG191) ブランクと調整剥片の計2点の接合資料である。石材は黒曜石Aである。下縁には自然面が残存する。接-47は側縁からの剥離を主体とした打面調整により、平坦な打面が作出される。その後、打面から側縁調整、さらに下縁調整を加えており、その際の下縁調整剥片が接合する。

接合資料63 (SG154) 細石刃核と調整剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Bである。主要剥離面を右側縁とし、下縁調整の後に打面調整剥片が右側縁から剥出される。打面調整剥片の背面には自然面が残る。接-48は主要剥離面から横位の打面調整が連続して加えられており、Ⅲ類に分類される。

接合資料64 (SG151) 細石刃核と打面再生剥片の計2



第154図 エリア5遺物出土状況

点の接合資料である。石材は頁岩Aであり、両側縁とも節理面である。打面再生剥片の端部には、先行する細石刃剥離面が残存する。打面再生及び打面調整剥離はいずれも左側縁から行われている。そのため、接-49はⅢ類に分類される。

**接合資料65 (SG094)** 細石刃核と調整剥片 2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。はじめに背面側が剥離され、その後背面を打面として両側縁に調整剥離を加えて細石刃核の素材剥片を作出する。接-50の作業面には階段状剥離が生じている。接-50はⅢ類に分類される。

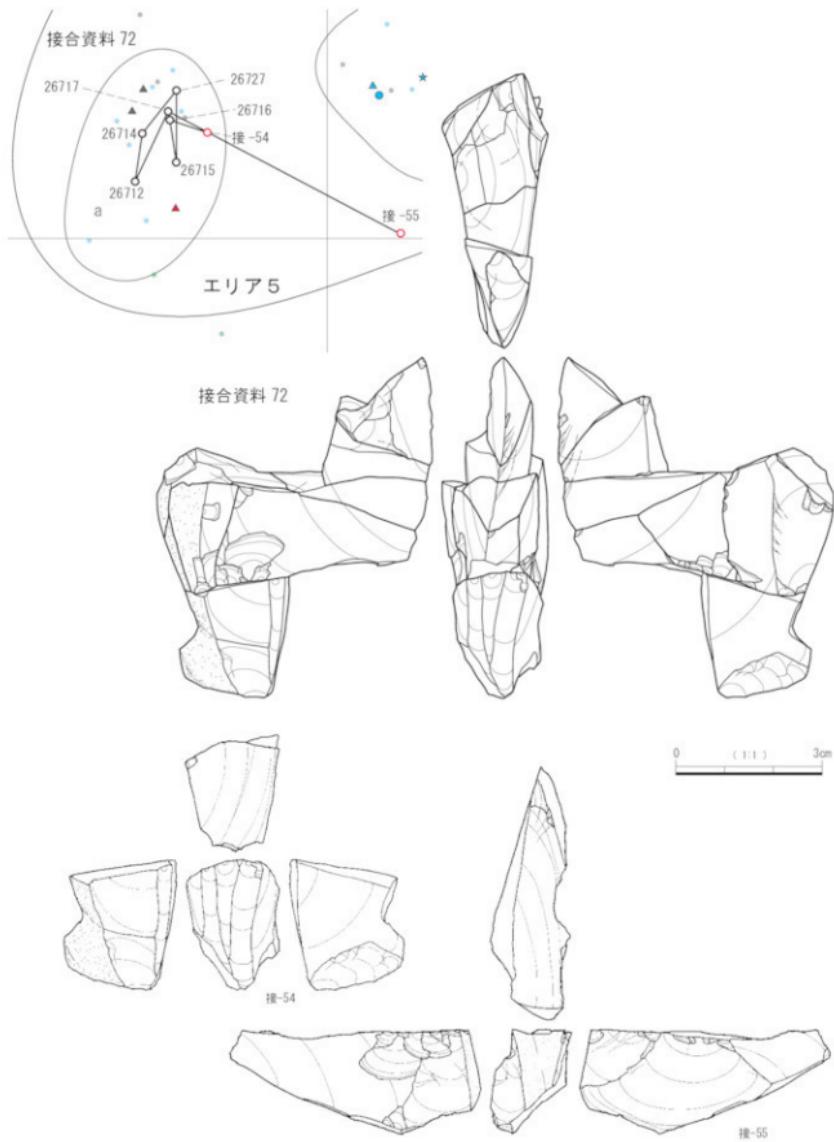
**接合資料66 (SG150)** 細石刃核と打面再生剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Bである。両側縁とも剥離面である。下縁調整が加えられ、下端は脱利に仕上げられている。接合した打面再生剥片の正面には細石刃

剥離痕が残り、先行する打面には左側縁側からの連続した打面調整が行われている。打面再生も同じく左側縁側から行われ、接-51にみるようさらに左側縁から連続した打面調整を加えている。作業面の観察から、比較的長い細石刃が剥出されていたと考えられる。接-51はⅢ類に分類される。

**接合資料67 (SG318)** 調整剥片 2点の接合資料で、石材は頁岩Gである。左側の剥片が先に剥出されており、背面には自然面が残存する。

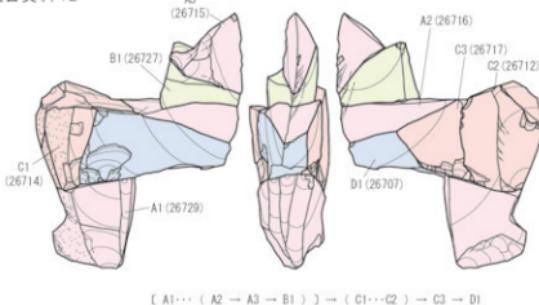
**接合資料68 (SG216)** 剥片 4点の接合資料で、石材は頁岩Aである。下縁には自然面が残存しており、剥片の形状から素材は円錐状であったと推定される。剥片剥離は、分割面と考えられる平坦な打面から連続して行われている。

**接合資料69 (SG038)** 剥片 3点の接合資料で、石材は

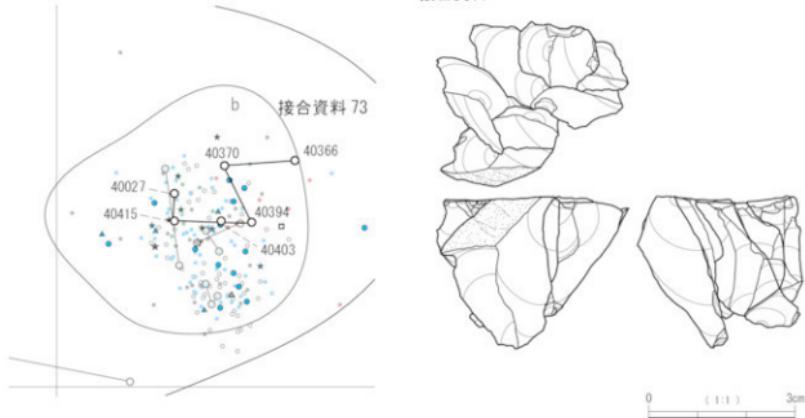


第 155 図 エリア 5 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

接合資料 72



接合資料 73



第 156 図 エリア 5 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)

頁岩 A である。同一の平坦打面から大きく 2 枚の剥片が剥出されており、先行する剥片はアシデントに伴う剥離によって 2 つに分割している。

接合資料70 (SG153) 細石刃核と調整剥片の計 2 点の接合資料である。石材は頁岩 A である。背面及び左側縁に自然面が残存しており、右側縁が分割面と考えられる。打面調整及び下縁調整は右側縁側から行われ、下縁には微細な剥離痕が観察される。接合した 2 点の剥片は、背縁調整と打面調整に伴うものである。接-52はⅢ類に分類される。

接合資料71 (SG152) 細石刃核 2 点の接合資料である。

石材は頁岩 A で、左側縁に自然面を一部残す。素材を背面方向から分割し、接-53側の三角錐状の厚みのある剥片（剥片ア）と、接-53の打面に接合した薄い剥片（剥片イ）を剥出し、それぞれを細石刃核として利用している。剥片アを素材とする接-53は、剥片イとの分割面を打面とし、主要剥離面を右側縁とする。一方、剥片イを素材とする細石刃核は、剥片アとの分割面を右側縁とし、主要剥離面を打面とする。いずれの細石刃核も最終的には階段状剥離が生じており、その段階で細石刃剥離を終了している。なお、剥片アは正面からの剥離が終了後に背面側を打面として側縁調整を行い、一枚細石刃を剥離

接合資料 74

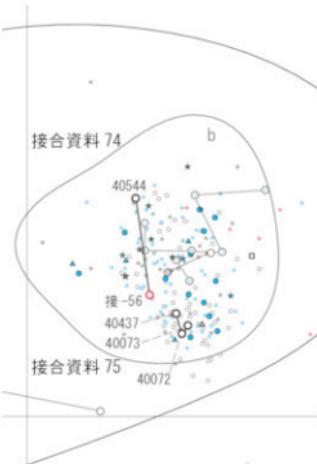


接合資料 74

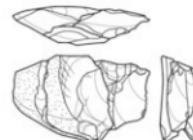
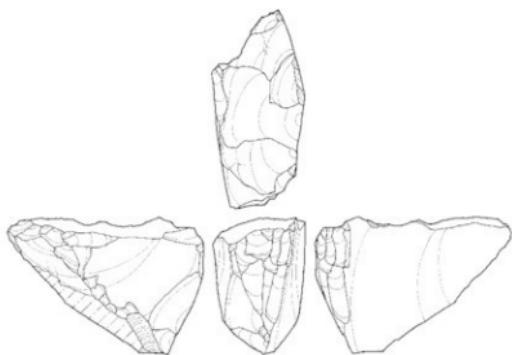
b

接合資料 75

40072



接合資料 75



0 (11) 3cm

接合資料 76

第 157 図 エリア 5 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

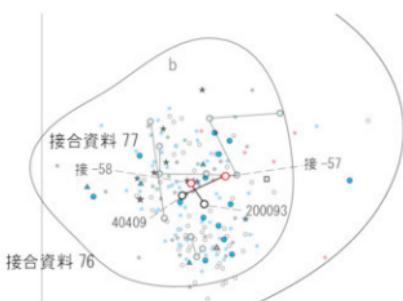
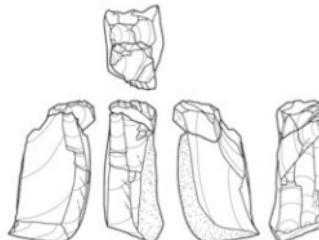
している。いずれの細石刃核も II b 類に分類される。

**[集中部及びエリア内出土遺物]**

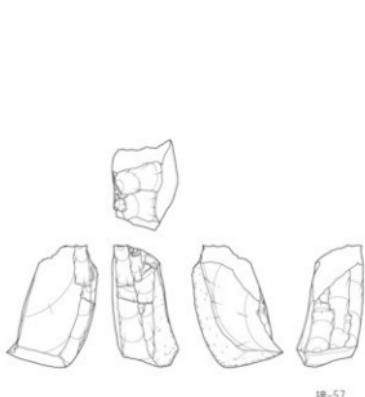
36 点を図化した。644～654は細石刃核である。なお、651のみ、集中部から外れたエリア内で出土した。644は右側縁に先行する剥離痕があり、打面調整を行った後に正面から細石刃剥離が行われる。645は小型の縦を用い、背面には自然面が残る。打面は正面からを中心で調整剥離が行われ、やや狭い平坦面を作りして細石刃剥離が行われる。646は打面と作業面の角度が鋭角である。打面調整は正面から行われ、平坦面が作出されている。

647は側縁に自然面を残す小剥片を素材とし、正面から打面再生を行っている。作業面は鋭角に傾斜する。644～647は I a 類に分類される。648は剥離面を左側縁とし、平坦な打面から右側縁の調整剥離が行われる。細石刃は幅が広く、作業面の半分以上を占める。II b 類に分類される。649は素材剥片の剥離面を左側縁とし、打面は中央が稜状に盛り上がり、平坦面は打面周辺のみである。打面はスポールが剥出された可能性がある。細石刃剥離痕は正面に対しやや左寄りに残存する。右側縁に側縁調整が観察される点や、打面調整が行われないことから、

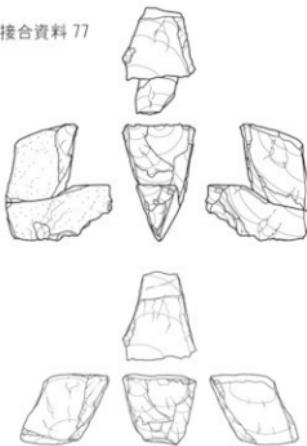
接合資料 76



接合資料 77



接-57



接-58



第 158 図 エリア 5 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)

II b 類に分類した。650 はやや小型の細石刃核で、打面や作業面に不純物が露出する。右側縁からを中心に横位の打面調整が行われ、ややいびつな打面から細石刃剥離が行われる。651 ～ 654 はいずれも剥片を素材とする。652 の下縁と背面は分割面であり、左側縁には自然面を残す。653 の右側縁及び 654 左側縁は自然面を残す。また、654 の背縁は素材剥片の端部にあたる。いずれも、側縁部から横位の打面調整が行われており、651 の打面は平坦部分が少ない。653・654 には下縁調整も加えられる。650 ～ 654 は III 類に分類される。

655 ～ 657 はプランクである。655・656 は左側縁から横位の打面調整が行われる。また、655 は下縁調整も加えられる。655・656 はいずれも左側縁が剥離面であり、右側縁には自然面が残る。III 類細石刃核のプランクと考えられる。657 は剥離面を右側縁として舟形状をなし、下縁に小剥離が行われる。打面は平坦な剥離面である。658 は石核である。剥片素材であり、節理面を薄く剥離した平坦面を打面とする。実測後、正面左側に剥片が 1 点接合した。

659 ～ 676 は細石刃である。石材は、約 8 割が頁岩で



680



681



682



683



685



686



687



687



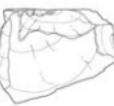
688



688



689



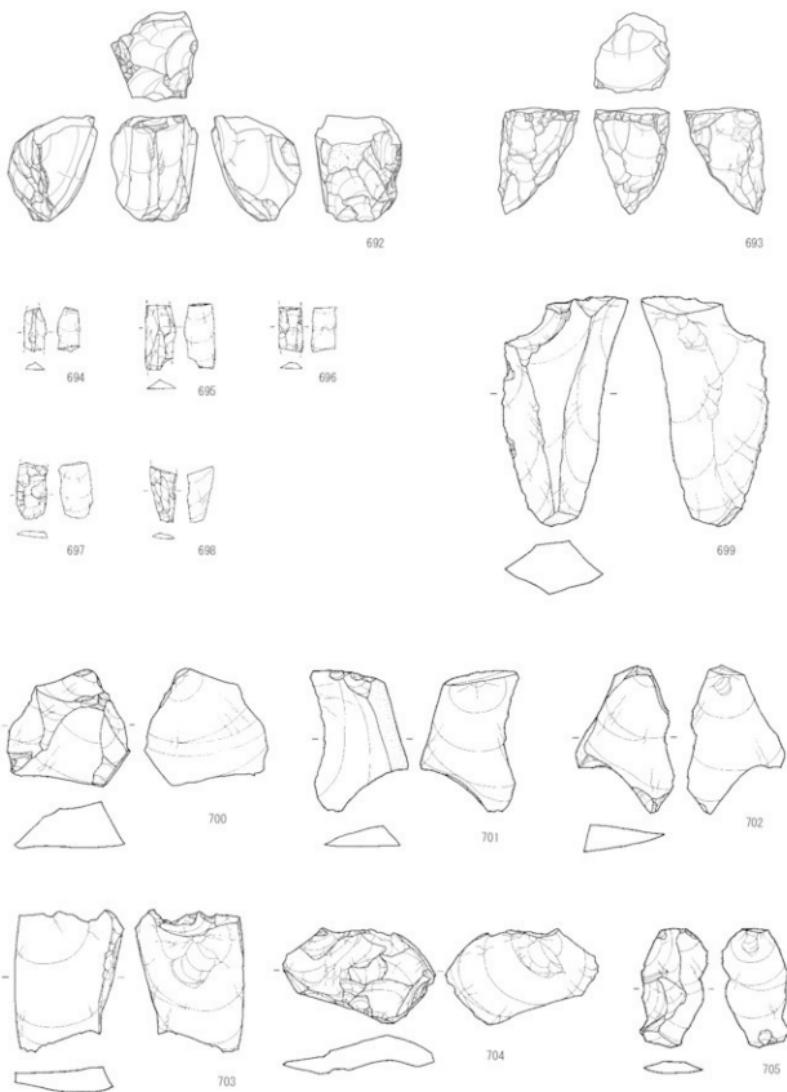
690



691

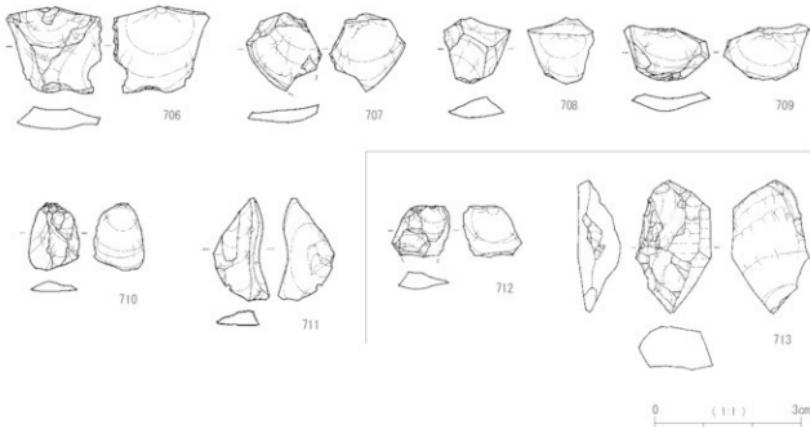


第159図 エリア5関連出土遺物(1)



第160図 エリア5関連出土遺物[2]

0 (1:1) 3cm



第161図 エリア5関連出土遺物(3)

あり、黒曜石が少量含まれる。659は完形、660～665は頭部または頭部～中間部である。660は下端が欠損するのみで、ほぼ完形である。666～676は中間部である。

677は作業面再生剥片であり、細石刃剥離痕が残る。下縁には二次加工が加えられており、何らかの石器に転用しようとした可能性がある。678は打面再生剥片である。左側縁からの加擊で打面再生が行われている。679は厚みのある剥片であり、右側縁の微少剥離は使用痕と考えられる。

#### (5) エリア5（第154図～第161図）

エリア5は、G・H-13・14区に位置する。エリアの両端にそれぞれ集中部が認められた。なお、集中部aの遺物密度は他のエリアと比べると低いが、エリア内の両端に遺物が偏る傾向や、接合資料に關わる資料が含まれる点を考慮し、集中部として認定した。接合資料は6点である。

石材は集中部aは頁岩が大半であり、集中部bは頁岩を主体に黒曜石が含まれる。エリア内の接合資料及びツール類は頁岩を素材としたものが多く、石材組成とともに同様の傾向である。

**接合資料**  
接合資料72（SG044） 集中部aを主体とし1点のみエリア内で出土した細石刃核とブランク、剥片6点の計8点の接合資料である。石材は頁岩Aであり、左側縁から背面には自然面が残る。素材となる扁平な剥片を分割し、分割面を打面として細石刃核（接-54）の素材核を剥出している。素材剥片と接-54の分割面には両側縁とも

打撃痕が観察され、両極打法によって分割されたと考えられる。残りの剥片は分割面を打面として剥片剥離が行われ、ブランク（接-55）が作出される。接-54はIIb類に分類され、接-55もIIb類細石刃核のブランクと考えられる。接-55のみ、集中部aから離れて出土している。

**接合資料73（SG016）** 集中部bで出土した剥片6点の接合資料である。石材は頁岩Eであり、白い斑文が目立つ。また、左側縁には自然面が残る。平坦打面から連続して剥離された不定形剥片あるいは調整剥片が、重なるように接合する。

**接合資料74（SG163）** 集中部bで出土した細石刃核と調整剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Gである。素材剥片の主要剥離面を右側縁とし、打面調整は右側縁から行われる。下縁には自然面が残り、パイプ状の空洞構造が露出する。接-56はIII類に分類される。

**接合資料75（SG192）** 集中部bで出土した調整剥片3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。正面には自然面が残り、平坦な打面から連続して調整剥片が剥離されている。

**接合資料76（SG159）** 集中部b内で出土した細石刃核と打面再生剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Aで、右側縁に自然面が残存する。背面に先行する細石刃剥離面があり、素材剥片を分割した際の分割面である下縁側を打面としている。また、先行する細石刃剥離面は階段状剥離が生じ、剥離が終了している。この段階での細石刃核はIIb類である。その後、上下反対に打面を転移し、左側縁からの横位の打面調整で整形した打面から細石刃剥離が行われる。ある程度作業が進行した段階

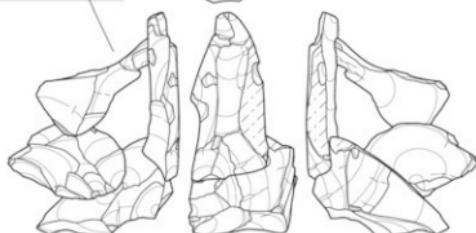


接合資料 78

32065  
32066  
32670  
32686

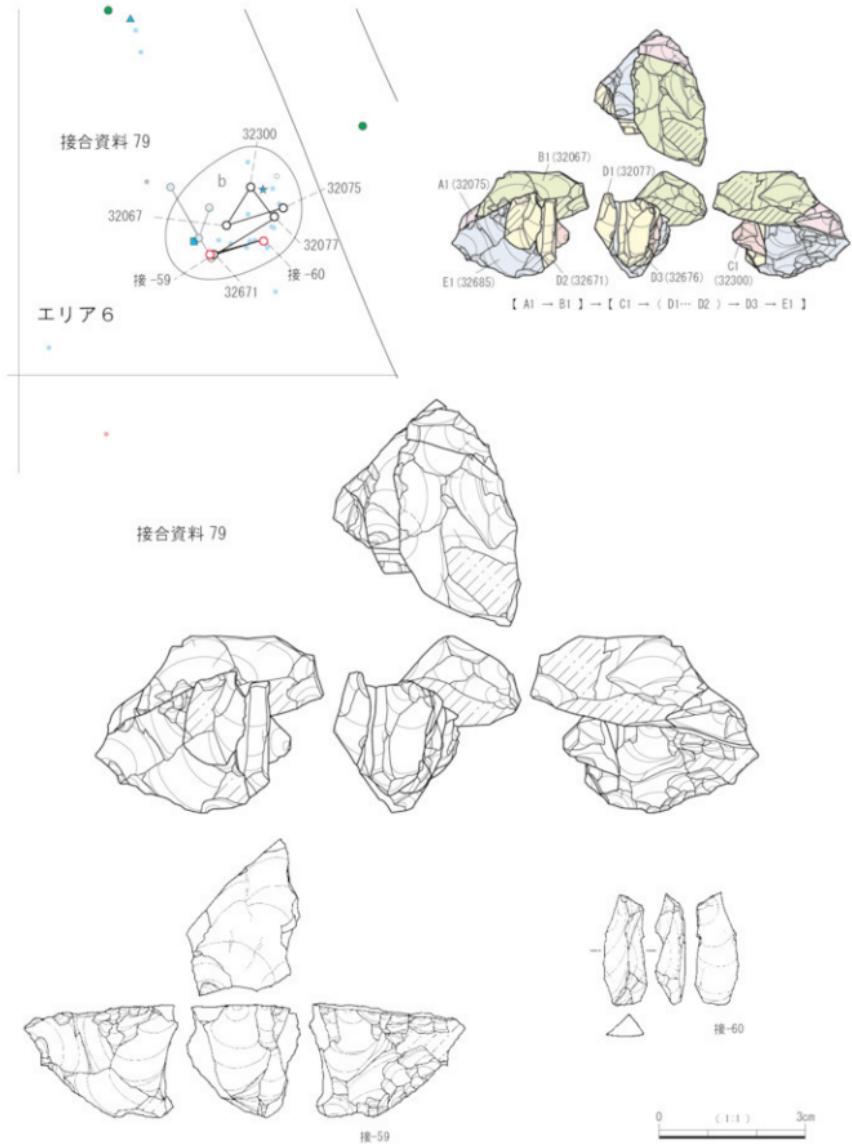
エリア 6

接合資料 78

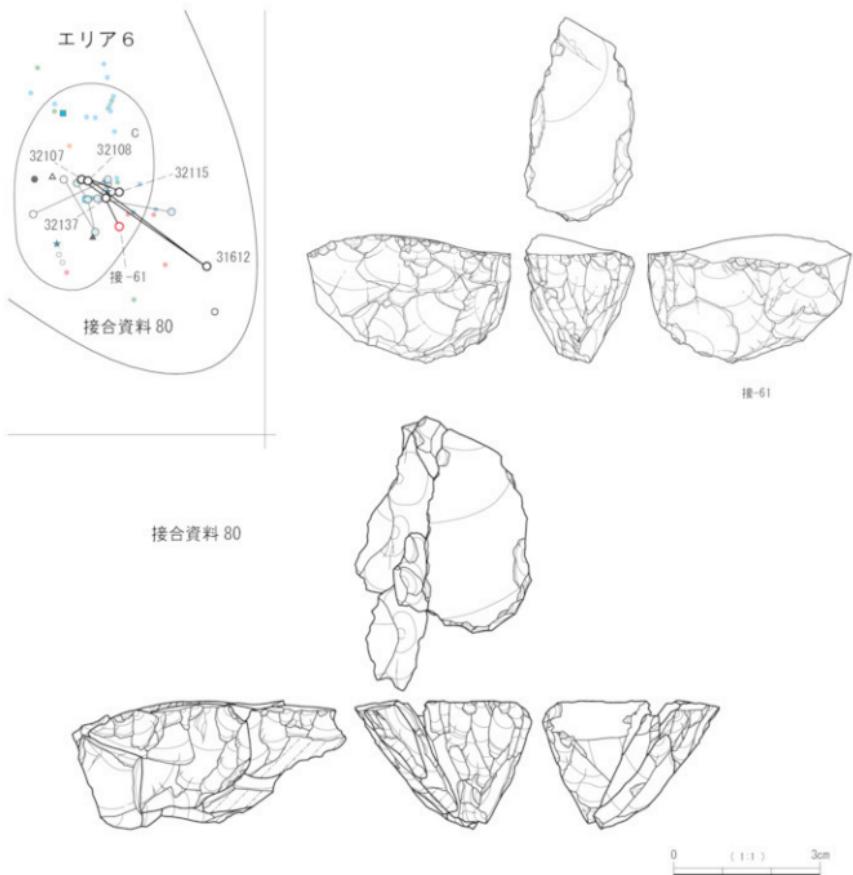


0 (1:1) 3cm

第 162 図 エリア 6 遺物出土状況(1)・接合資料出土状況(1)・接合資料(1)



第 163 図 エリア 6 接合資料出土状況(2)・接合資料(2)



第164図 エリア6 接合資料出土状況(3)・接合資料(3)

で、さらに左側縁から打面再生剥離を行い、再び細石刃を剥離する。最終的には作業面上に階段状剥離が生じております。この段階で剥離が終了している。打面転移後の細石刃核（接-57）は横位の打面調整が顕著であり、III類に分類される。

**接合資料77 (SG178)** 集中部 b で出土したブランクと剥片の計2点の接合資料である。石材は多孔質安山岩であり、細石刃核の素材としては粒子が粗く、同一の石材を用いた細石刃核や細石刃は少ない。左側縁は自然面、右側縁は主要剥離面である。接-58はサイコロ状を呈し、

平坦な剥離面を打面とする。IIa類細石刃核のブランクと考えられる。

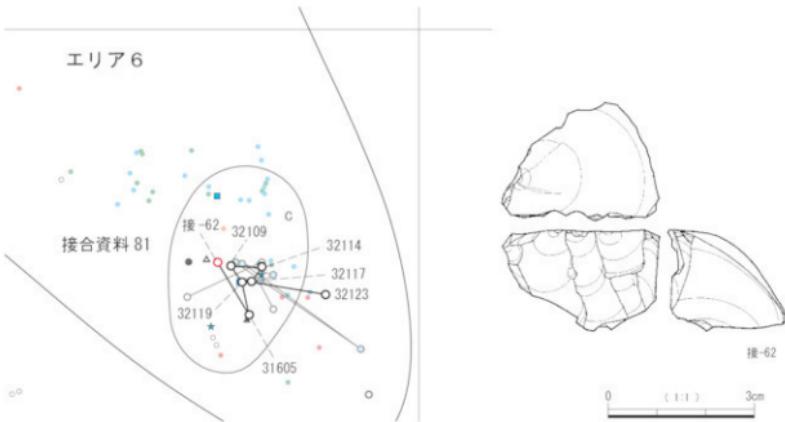
#### 集中部 a

3点を国化した。いずれも細石刃であり、石材は681が砂岩A、その他は黒曜石Dである。680は頭部、681は中间部、682は尾部であり、682は側縁が欠損する。

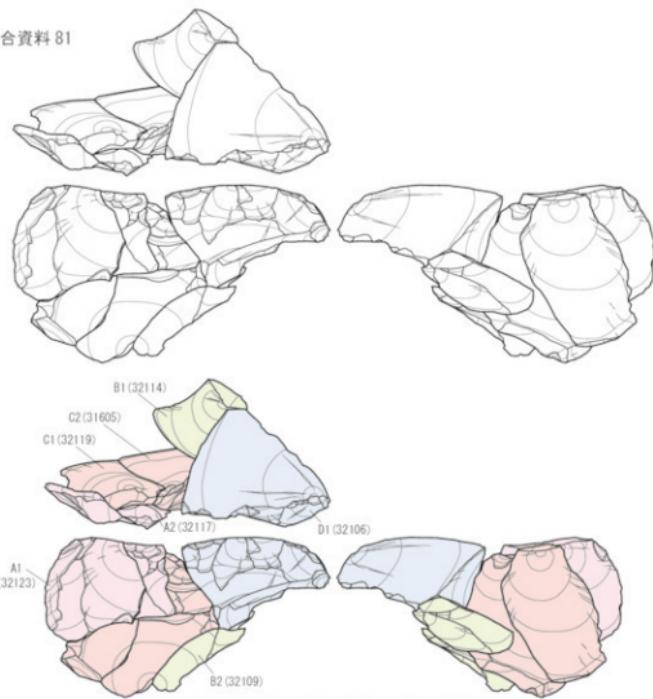
#### 集中部 b

29点を国化した。683～692は細石刃核である。683～685はいずれも小型で、水晶を素材とする。683は右側縁に劈開面を残し、打面は抉れたように左側へ傾斜してお

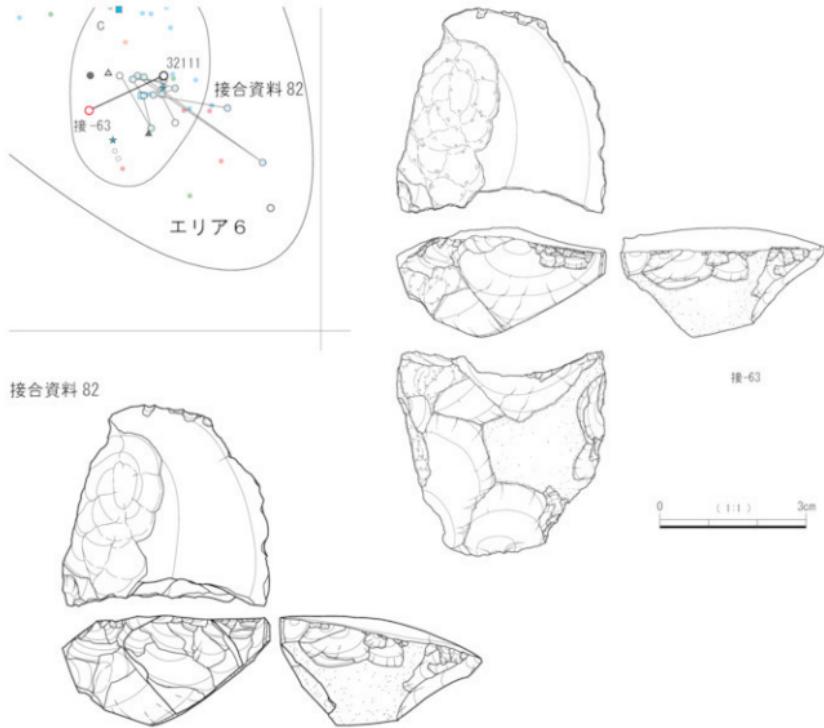
エリア 6



接合資料 81



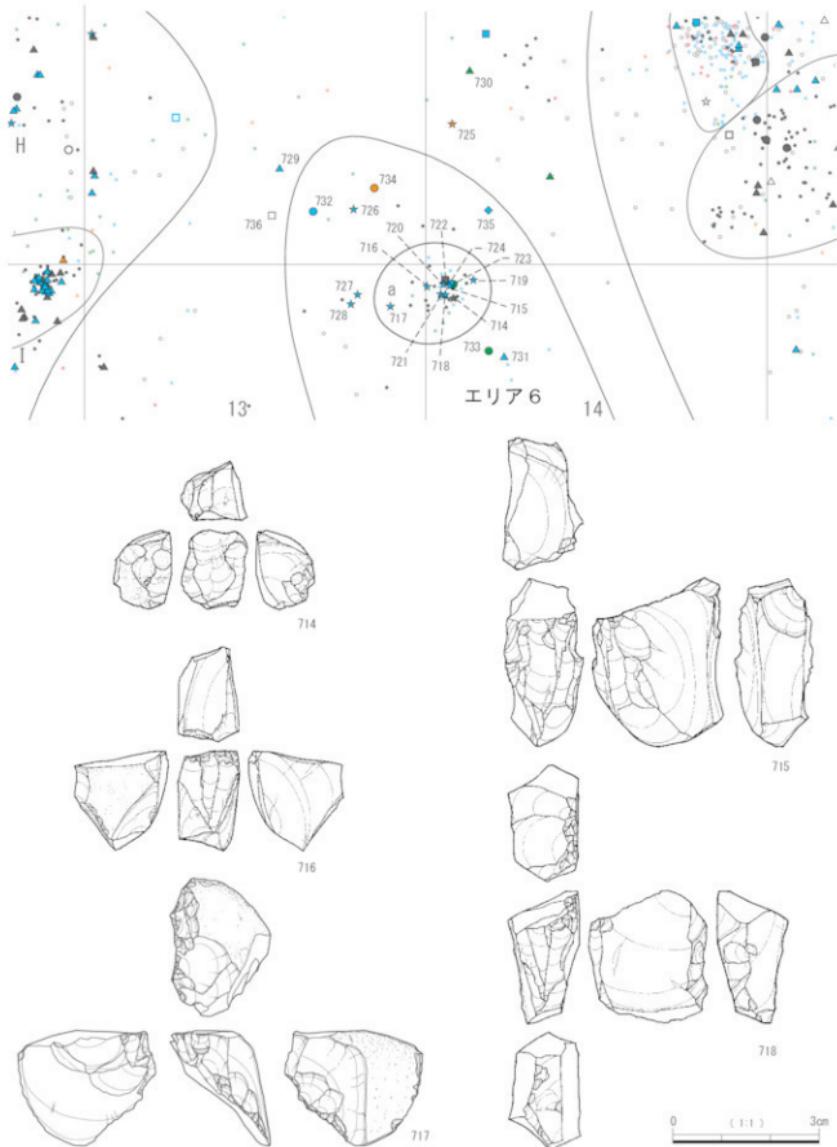
第 165 図 エリア 6 接合資料出土状況(4)・接合資料(4)



第166図 エリア6接合資料出土状況(5)・接合資料(5)

り、正面は打点付近がわずかに平坦面をなしている。下縁には微少な剥離が集中してみられる。694は剥片を素材とし、右側縁を剥離面として小口面から細石刃剥離が行われる。打面は平坦であるが幅が狭く、剥離直から推定すると剥出された細石刃の幅も2mm程度である。695は右側縁に一部自然面を残し、背面及び下縁は欠損していると考えられる。打面は平坦である。696は右側縁に縫面が残り、左側縁からの剥離で平坦打面が作出される。683～686はIa類に分類される。687は多孔質安山岩を素材とし、表面の質感も粗い。剥片素材の剥離面を両側縁とし、右側縁及び正面側から打面調整を行う。作業面には階段状剥離が生じている。Ib類に分類される。688は剥離面を両側縁とし、平坦な打面から側縁調整及び細石刃剥離が行われる。右側縁には下縁調整が加えられ、楔形を呈する。作業面には階段状剥離が生じており、その段階で細石刃剥離が終了している。689は両側縁が

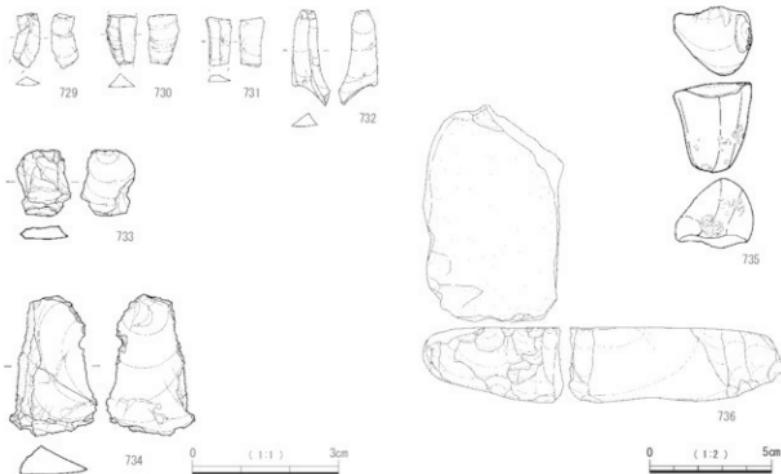
剥離面で、平坦な打面から右側縁に調整剥離が行われる。正面は打面からの作業面再生剥離によってやや抉れでおり、その後の細石刃剥離は行われていない。688・689はIIb類に分類される。690は剥片素材の剥離面を右側縁とし、平坦打面から細石刃剥離が行われる。作業面には階段状剥離が生じている。691は板状の剥片を素材とし、下縁にわずかに自然面が残る。剥離面を両側縁とし、正面からの打面調整の後、右側縁からも調整剥離が加えられる。692は剥離面を両側縁とし、背面には一部自然面が残る。作業面には下縁側を打面とした先行する作業面が残存しており、同一面を上下に打面転移したことが分かる。最終の打面は両側縁から剥離調整を行い、平坦面が作出される。690～692はIII類に分類される。693はブランクである。打面に対し、作業面がやや鋭角に傾斜する。正面及び左側縁には平坦な打面からの微細な剥離が観察される。



第167図 エリア6遺物出土状況(2)・関連出土遺物(1)



第 168 図 エリア 6 関連出土遺物[2]



第169図 エリア6関連出土遺物(3)

694～698は細石刃である。694～696が中間部、697・698が尾部である。697は安山岩であり、接合資料77及び687・689・693と同一の石材であるが、作業面には接合しなかった。

699～709は剥片である。いずれも調整剥片と考えられ、699・701・702・705は平坦な打面から剥出されている。頁岩の剥片類がまとまって出土している点も集中部bの特徴である。710・711は作業面再生剥片であり、いずれも細石刃剥離痕がみられ、711は階段状剥離が生じた作業面を左側縁から剥離している。

#### エリア周辺の出土遺物

2点を図化した。712は剥片である。平坦な打面から剥出されており、下端は欠損する。713は楔形石器である。非常に質の良い水晶を素材とし、右側縁は劈開面、腹面は剥離面を広く利用する。左側縁からの広い剥離の後、プランディング状の細かい剥離を施し整形される。下端部は欠損する。

#### (6) エリア6 (第162～171図)

エリア6は、H～J-13・14区に位置する。帶状のエリア内に遺物の集中域が点在し、3つの集中部を認定した。接合資料は5点である。

出土したツール類のうち、細石刃核の割合が高いことが特徴である。石材は頁岩が主であり、集中部aでは黒曜石及び水晶の割合も高い。

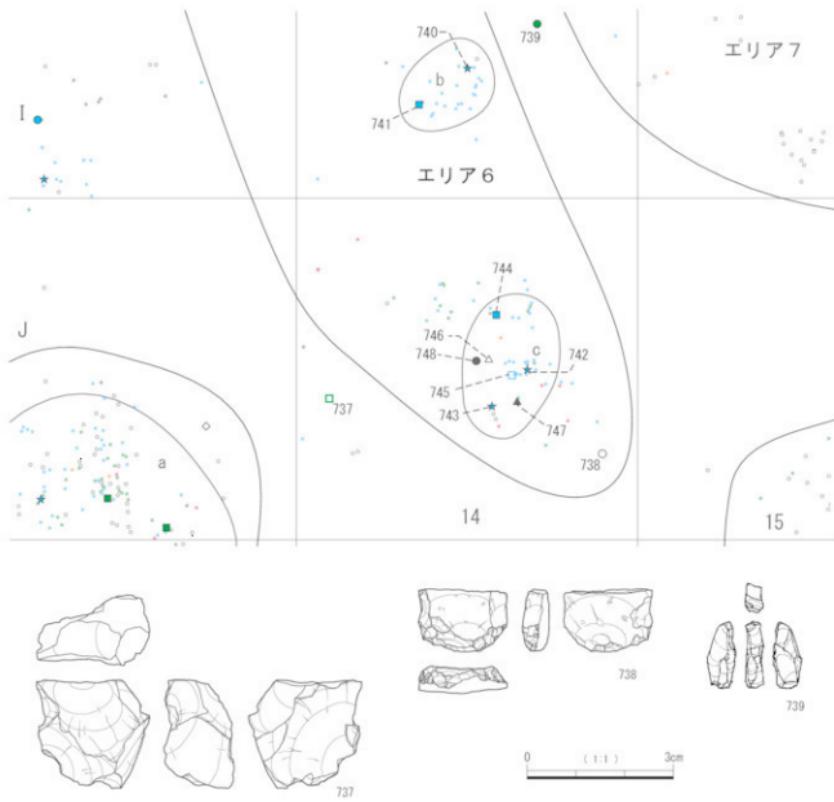
#### 接合資料

**接合資料78 (SG235)** 集中部b及びエリア内で出土した剥片4点の接合資料である。石材は頁岩Fである。正面には節理面を残し、中央部に空間を残して4方向からそれぞれ剥片が接合する。中央の空間がサイコロ状の形態であるため、細石刃核の製作を目的とした石核を作出したものと考えられる。

**接合資料79 (SG161)** 集中部bで出土した石核と調整剥片6点の計7点の接合資料である。石材は頁岩Fである。節理面を分割面として、2つの剥離単位が接合する。接-59は側縁部に平坦な打面から調整剥離が行われ、正面からは幅1.4cm、長さ2.5cm程の縦長の剥片(接-60)が剥出されている。

**接合資料80 (SG059)** 集中部cを主体にエリア内で出土した細石刃核と調整剥片5点の計6点の接合資料である。石材は頁岩Aである。素材剥片の主要剥離面を打面とし、側縁部の調整剥片は全て打面から剥離されたものである。左側縁に集中して剥片が接合しているが、右側縁に残る剥離痕から、右側縁も同様の剥離が行われていたと考えられる。接-61は正面から細石刃剥離が行われ、この接合資料はIIa類細石刃核の製作工程を示す典型的な例である。

**接合資料81 (SG058)** 集中部c及びエリア内で出土したプランクト剥片6点の計7点の接合資料である。石材は頁岩Gである。本来は接-62を含む、打面が緩やかに



第170図 エリア6遺物出土状況(3)・関連出土遺物(4)

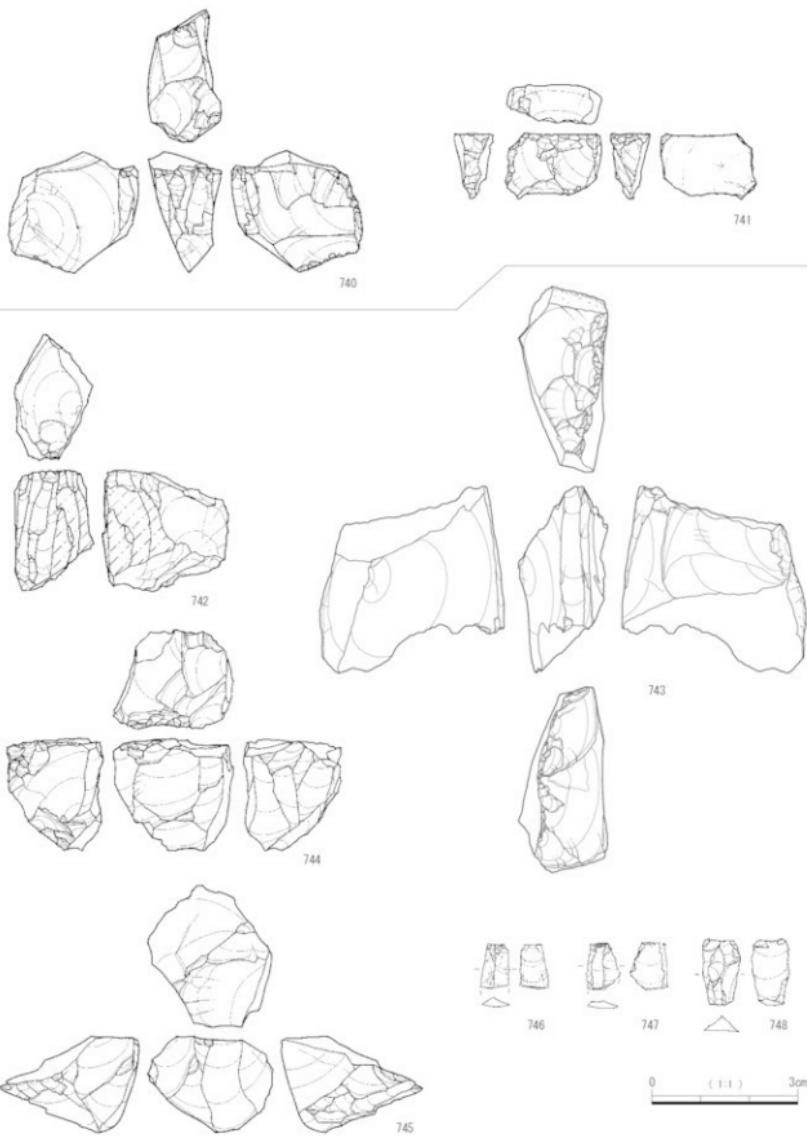
膨らんだ船底状の石核であったと考えられ、同一打面からは縦長の不定形剥片も剥出されている。接-62はIIb類と考えられる。

接合資料82(SG145) 集中部cで出土した石核と剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Cである。下縁には自然面が残り、分割面をそのまま打面としている。打面からは正面側から右側縁にかけて調整剥離が行われ、その後、正面に広い剥離と小剥離を加えて接-63となる。

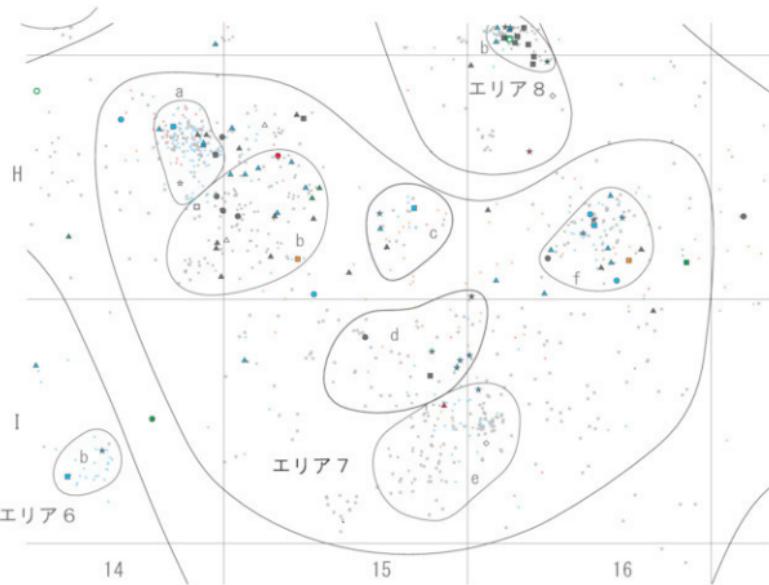
#### [集中部a]

11点を図化した。そのうち10点が細石刃核及び石核である。714～721は細石刃核である。714は小型で、左側縁に自然面を残す。また、球状の不純物が剥離面に露出

する。打面には先行する作業面が残存し、その際の打面は正面側である。Ia類に分類される。715は剥片を素材とし、剥離面を両側縁及び打面とする。716は左側縁が自然面、右側縁が剥離面である。715・716とも打面は剥離面であり、IIb類に分類される。717は自然面を右側縁、剥離面を左側縁とし、打面調整は左側縁から連続して行われる。下縁及び背縁には小剥離が加えられる。剥離の単位が細かいのが特徴である。718は剥片素材の主要剥離面を右側縁とし、右側縁から打面調整を行って平坦打面を作出する。左側縁は節理面である。719・720は左側縁に自然面を残し、主要剥離面を右側縁とする。いずれも下縁調整により楔形の断面形を呈し、右側縁からの横



第171図 エリア6関連出土遺物(5)



第172図 エリア7遺物出土状況(1)

位の打面調整によって平坦打面が作出される。721は円錐素材であり、自然面を右側縁、主要剥離面を左側縁として左側縁から打面調整が行われる。719・721の作業面には階段状剥離が生じておき、その段階で細石刃剥離が終了している。717～721はIII類に分類される。

722はブランクである。背面には縦面を残し、右前方からの剥離で平坦な打面が作出される。正面が作業面と考えられ、打面からの剥離が観察されるが、細石刃剥離痕は不明である。723は打面再生剥片であり、正面には細石刃剥離痕が残存する。打面の左側縁側から行われている。724は平坦な打面から剥出された調整剥片と考えられる。

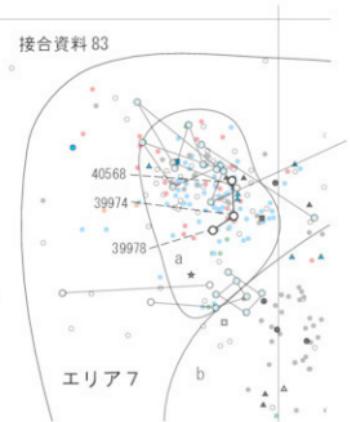
#### エリア内及びエリア周辺出土遺物 1

集中部と周辺のエリア内、及びエリアに隣接して出土した12点を図化した。725～728は細石刃核である。725は小型で薄手の剥片を素材とし、背面には先行する作業面と考えられる剥離痕が残存する。Ib類と考えられる。726は自然面を左側縁、剥離面を右側縁とする。左側縁からの分割剥離面を打面として側縁調整及び細石刃剥離が行われる。III類に分類される。727は剥離面を両側縁とし、正面右側には自然面が残る。背面には打面が上下逆の先行する作業面が残っており、その際の打面は素材

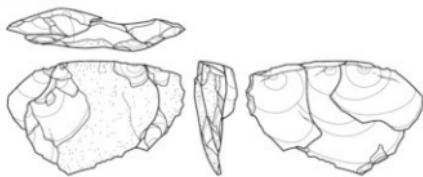
剥片を剥出した際の平坦面を打面としている。なお、先行する作業面には階段状剥離が生じておき、打面転移の要因と考えられる。打面転移に伴い、上面の打面には左側縁からの打面調整を加え、細石刃剥離が行われる。先行する作業面の段階は打面調整が行われない点はIIb類の特徴であるが、最終的な形態ではIII類に分類される。本資料は同一個体において、打面転移の前後で異なる打面調整を観察できる資料である。728は剥離面を右側縁とし、左側縁は自然面を一部残す。また、左側縁には下縁調整が加えられる。打面には右側縁からの横位の調整剥離が行われ、細石刃剥離が進行するが、階段状剥離が生じている。III類に分類される。

729～731は細石刃である。石材は水晶または頁岩である。729は頭部～中間部、730・731は中間部である。732～734は剥片で、732・733は作業面再生剥片である。734は右側縁に微少剥離がみられる使用剥片である。735はハンマーである。細長い楕円形の原礫が分割され、側縁及び下縁に細かい敲打痕が集中する。ハンマー類は砂岩を素材としたものが多いが、本例は頁岩である。736は石核である。扁平な亜円礫が素材と推定され、平坦な自然面を打面として剥離が行われる。

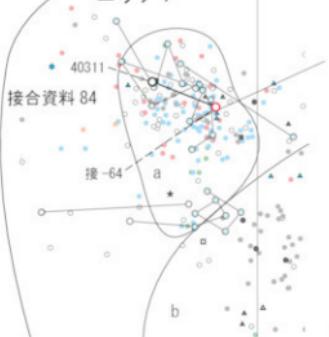
接合資料 83



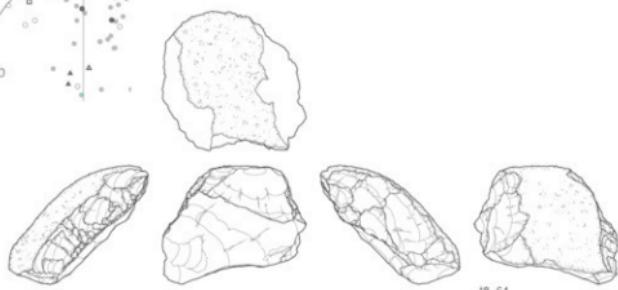
接合資料 83



エリア 7

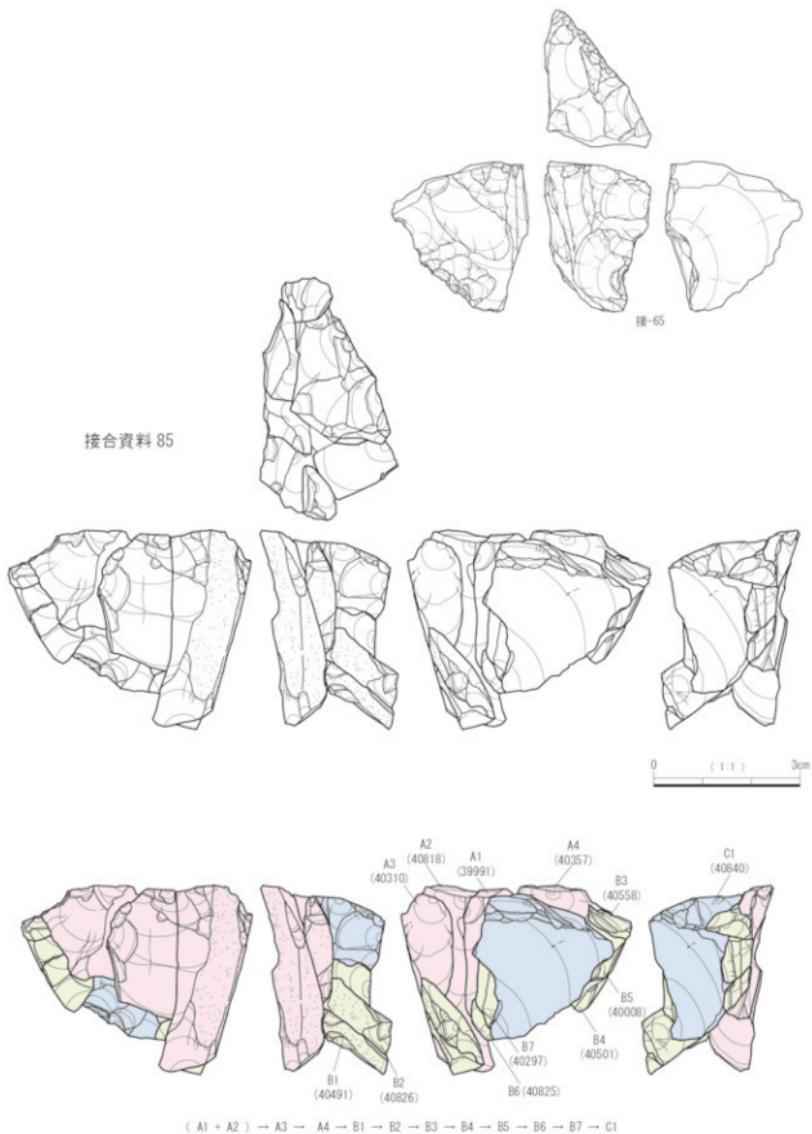


接合資料 84



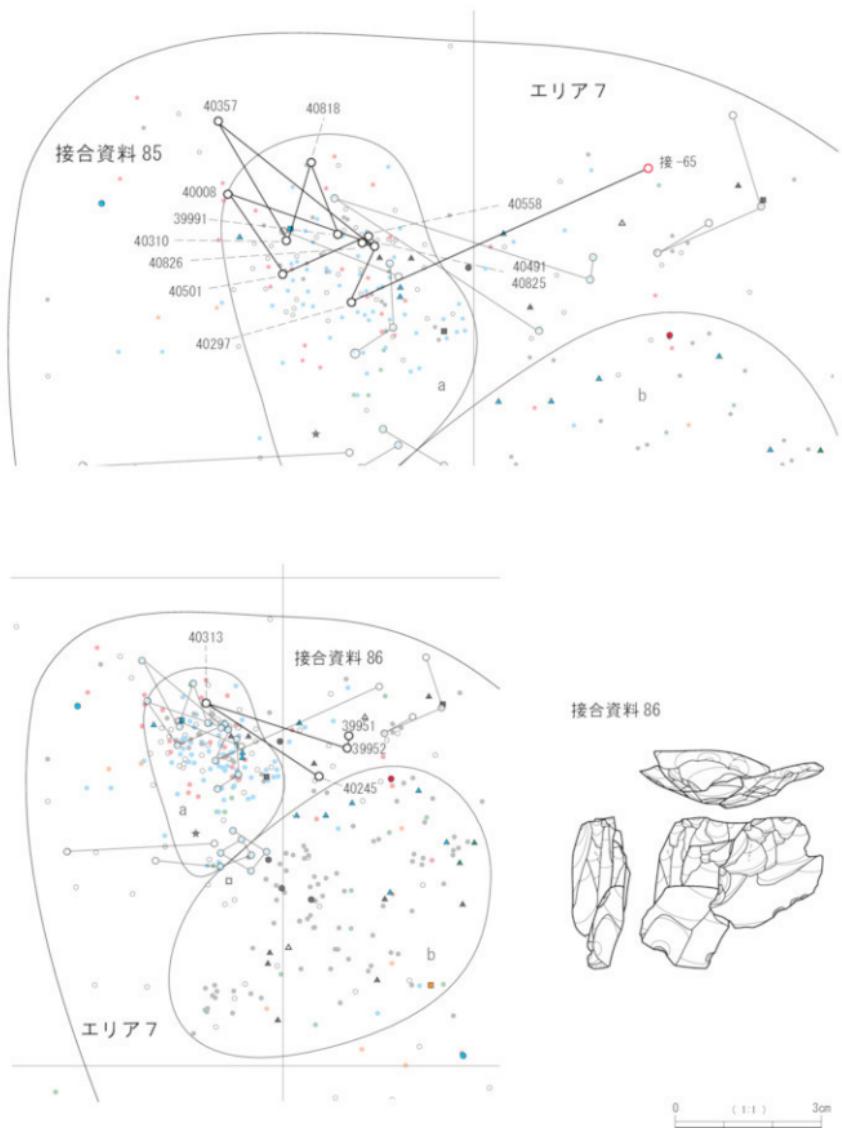
0 ( 1 : 1 ) 3cm

第 173 図 エリア 7 接合資料出土状況(1)・接合資料(1)

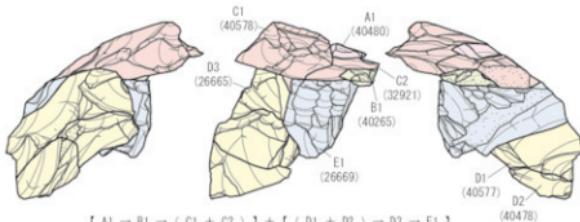
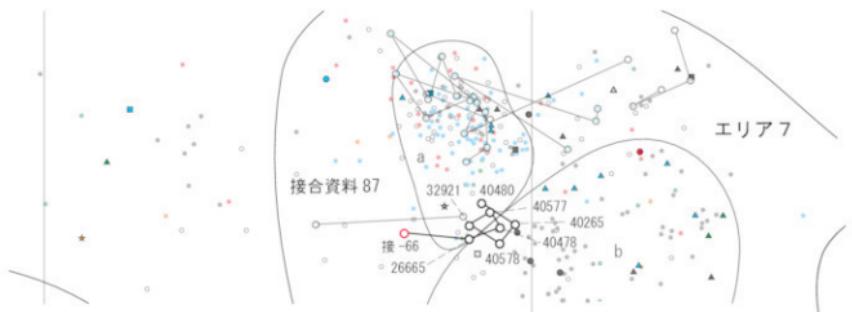


( A1 + A2 ) → A3 → A4 → B1 → B2 → B3 → B4 → B5 → B6 → B7 → C1

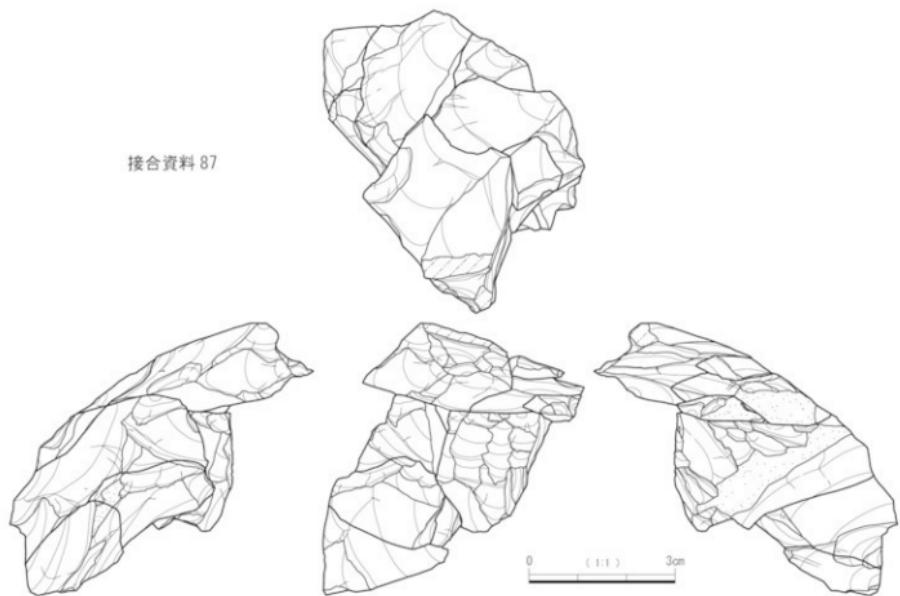
第 174 図 エリア 7 接合資料(2)



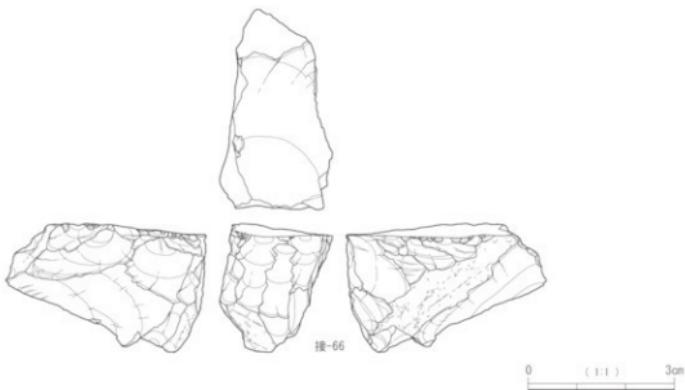
第 175 図 エリア 7 接合資料出土状況(2)・接合資料(3)



接合資料 87



第176図 エリア7 接合資料出土状況(3)・接合資料(4)



第177図 エリア7接合資料(5)

**[エリア内及びエリア周辺出土遺物2]**

集中部b・c周辺のエリア内、及びエリアに隣接して出土した3点を図化した。738のみエリア内から出土した。737は石核である。剥離面を側縁及び打面とし、打面は粗い結晶質が露出し、ややいびつである。738は搔器である。剥片を素材とし、下縁部には背面側からの剥離を加えている。上部は欠損している可能性がある。739は作業面再生剥片と考えられ、細石刃剥離面には階段状剥離が観察される。

**[集中部b]**

2点を図化した。740は細石刃核である。剥片素材で、背面に節理面が残る。打面は横位からの剥離によって平坦面が作出され、そこから細石刃剥離が行われる。作業面の観察から、細かい節理の影響により、長く均質な細石刃は剥離できていないと考えられる。最終の打面調整が横位という点から、III類に含めた。741はブランクである。小型の板状剥片を素材とし、剥離面を右側縁及び打面とする。左側縁側には背面側からの小剥離が加えられ、打面側にも数回左側縁側から剥離が行われる。

**[集中部c]**

7点を図化した。742・743は細石刃核である。石材はいずれも頁岩である。742は右側縁に節理面を残し、横位からの剥離の後に正面から打面調整を行う。作業面には階段状剥離が生じている。743は背面に自然面を残し、剥離面を両側縁とする。打面は右側縁からの細かい、調整剥離によって平坦打面が作出され、細石刃剥離が行われる。一部正面からの打面調整も確認される。正面か

らの打面調整はI類の特徴であるが、横位の打面調整が主体となる点からIII類に分類した。744はブランクである。厚めの分割素材を加工し、平坦面を作出している。打面には正面から、左側縁には打面側から剥離が加えられている。745は石核である。左側縁に連続した小剥離が行われており、細石刃剥離痕の可能性もある。

746・747は細石刃で、いずれも頭部である。748は作業面調整に伴う剥片である。

(7) エリア7 (第172~192図)

エリア7は、H～J-14～16区に位置する。広域に遺物がやや密集して広がっており、6つの集中部を認定した。集中部dは比較的密度は低いが、遺物のまとまりが認められる点で集中部と判断した。接合資料は14点である。

石材は集中部ごとに特徴がある。集中部aは砂岩及び頁岩の割合が高く、次いで黒曜石が多くみられる。集中部bは黒曜石が主体をなし、集中部cは玉鶴の割合がやや高い。集中部eは黒曜石及び頁岩を主体とし、集中部fは頁岩が主体をなす。

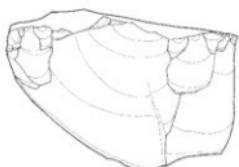
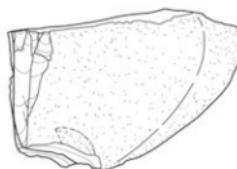
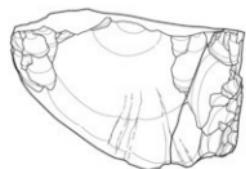
**[接合資料]**

**接合資料83 (SG027)** 集中部aで出土した調整剥片3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。背面は鏡面であり、分割面と考えられる平坦な打面から、不定形剥片が連続して剥離される。接合資料75と類似する。

**接合資料84 (SG165)** 集中部aで出土した二次加工剥片とその破損部の計2点の接合資料である。石材は黒曜



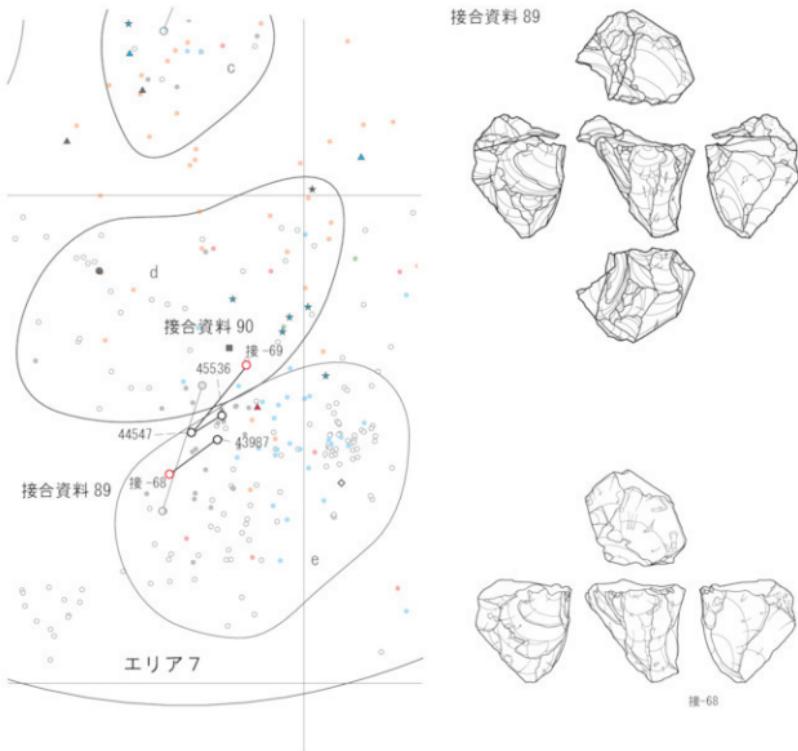
接合資料 88



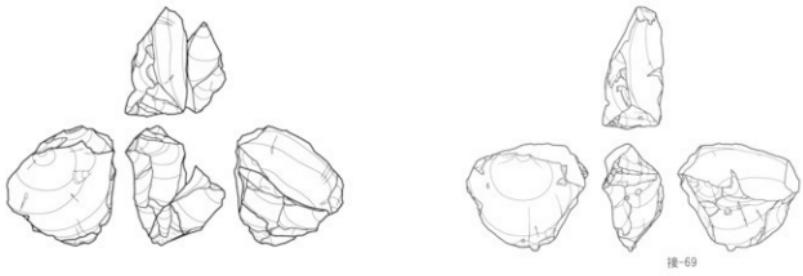
接-67



第178図 エリア7 接合資料出土状況(4)・接合資料(6)

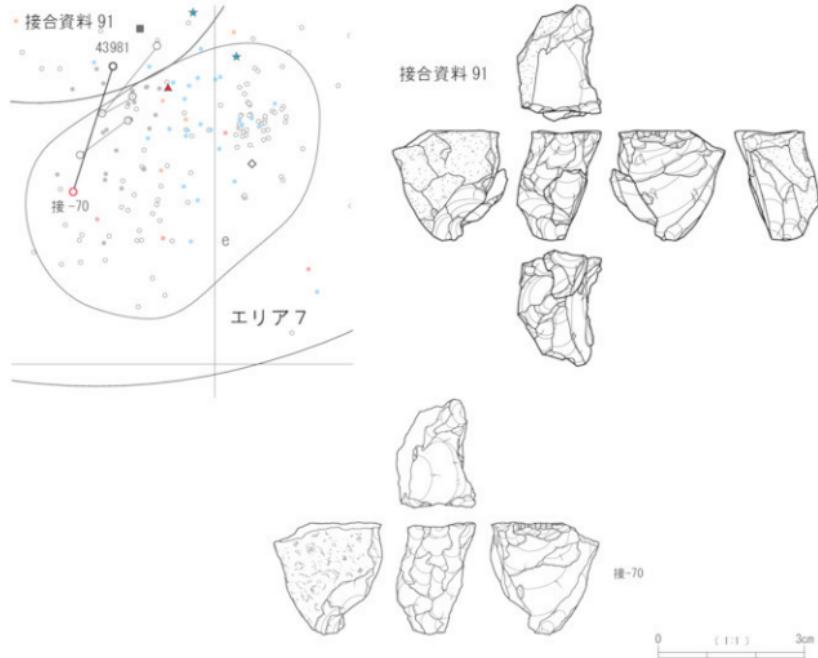


接合資料 90



0 (1:1) 3cm

第 179 図 エリア 7 接合資料出土状況(5)・接合資料(7)



第180図 エリア7 接合資料出土状況(6)・接合資料(8)

石Bである。接-64の背面は自然面が残り、側縁部には腹面からの細かい二次加工が施される。接-64は搔器の可能性がある。

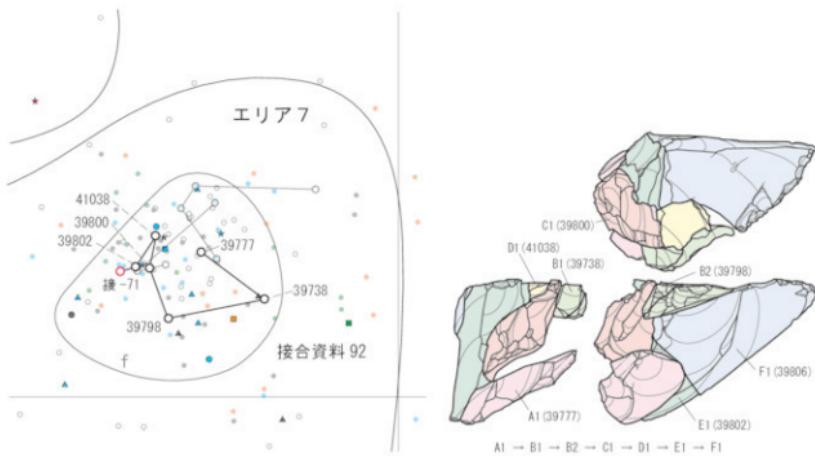
**接合資料85 (SG013)** 集中部 a 内及びエリア内で出土した細石刃核と調整剥片11点の計12点の接合資料である。石材は頁岩Aである。正面に自然面が残り、右側縁が主要剥離面である。平坦な打面から左側縁の自然面付近を剥離し、細石刃核が作出され、先に背面側で細石刃剥離が数回行われる。この作業面は打面Bの剥片に残存する。その後、さらに左側縁が打面から剥離され、右側縁から打面調整が行われる。接-65をみると、正面から数回細石刃剥離を行った後、正面に右側縁からの小剥離が加えられ、細石刃剥離面が切られている。同様に、背面側の先行する作業面も右側縁から剥離されている。このことから、細石刃剥離までの過程は上面（打面A）を打面とするが、細石刃核の再加工にあたって打面Bへと転移されたと考えられる。接-65はⅢ類に分類される。

**接合資料86 (SG092)** 集中部 a 及びエリア内で出土し

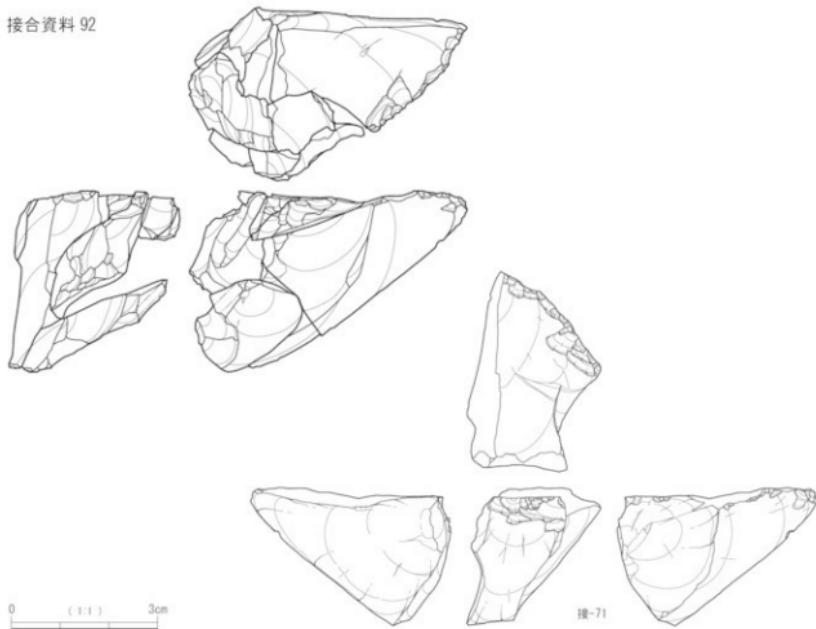
た調整剥片4点の接合資料である。石材は頁岩Cである。平坦な打面から外側の1点を剥離した後、下縁側からの加撃で1点剥出する。残りの2点は、初めの上縁側の打面から剥離が行われる。いずれも短い不定形剥片が剥出されており、最後に剥離された剥片には細石刃状の細長い剥片剥離の痕跡がみられるが、細石刃剥離を行ったものかは不明である。

**接合資料87 (SG050)** 集中部 a・b を主体としてエリア内で出土した細石刃核と調整剥片7点の計8点の接合資料である。石材は頁岩Gで、剥離面に一部自然面が露出する。また、右側縁は一部自然面を残す。打面A～Cの剥離で素材剥片から平坦面が作出され、その平坦面を打面として調整剥離が加えられて接-66の左側縁が作出される。接-66は打面A～Cの剥離によって得られた剥離面を打面とする。Ⅱa類に分類される。

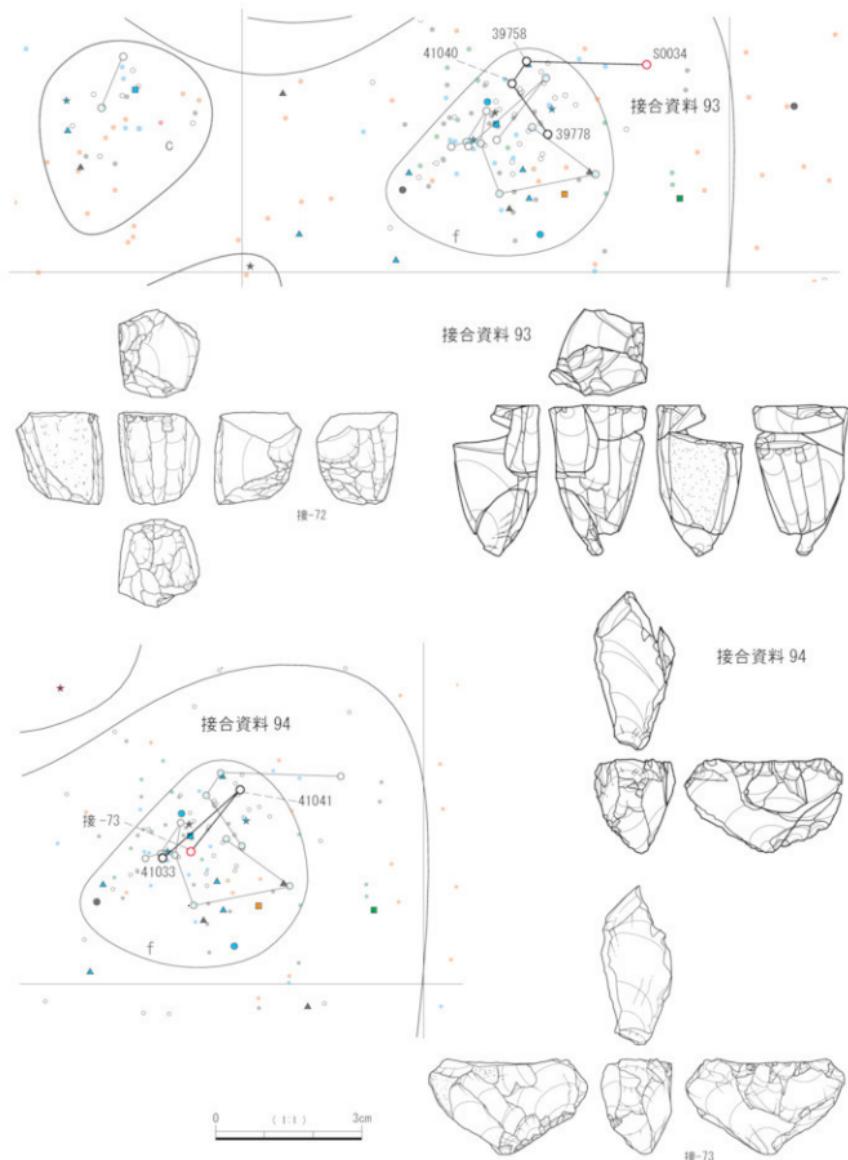
**接合資料88 (SG169)** 集中部 c で出土した細石刃核と調整剥片の計2点の接合資料である。石材は頁岩Aである。右側縁は原縁の形状を留めている。素材となる円錐



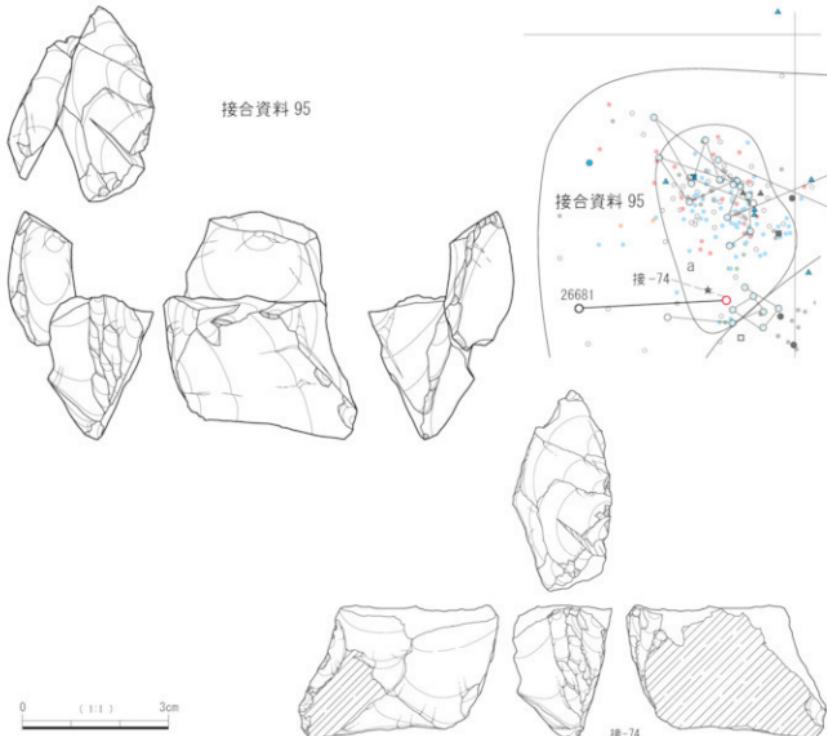
接合資料 92



第 181 図 エリア7 接合資料出土状況(7)・接合資料(9)



第182図 エリア7接合資料出土状況(8)・接合資料(9)



第183図 エリア7 接合資料出土状況(9)・接合資料(11)

を分割し、更に分割面から二分したものを細石刃核の素材としている。打面調整は左側縁から横位の剥離を加えている。細石刃剥離がある程度行われた段階で階段状剥離が生じており、その部分に作業面再生剥離を加えている。また、背縁部分も細石刃剥離を試みた痕跡がある。接-67は作業面再生後も左側縁から打面調整が加えられており、Ⅲ類に分類される。

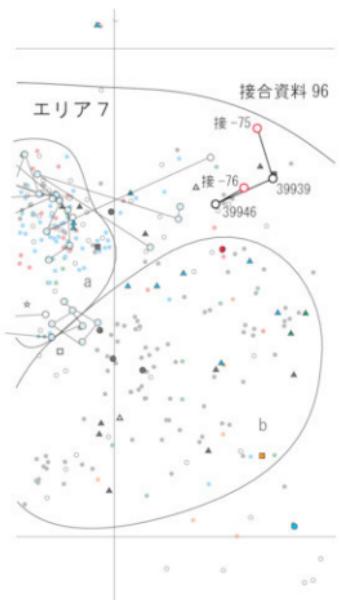
**接合資料89 (SG167)** 集中部 e で出土した細石刃核と打面調整剥片の計 2 点の接合資料である。石材は黒曜石 C である。背面には自然面を残し、正面と左側縁との境界付近から打面調整剥離が行われる。接-68は Ia 類に分類される。

**接合資料90 (SG109)** 集中部 d 及び e で出土した石核と調整剥片 2 点の計 3 点の接合資料である。石材は黒曜

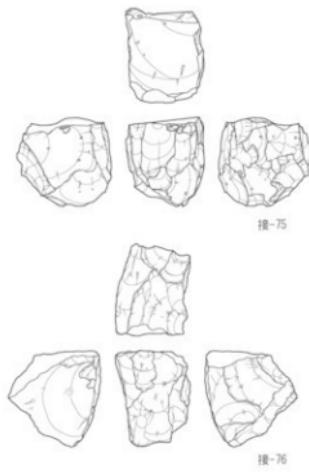
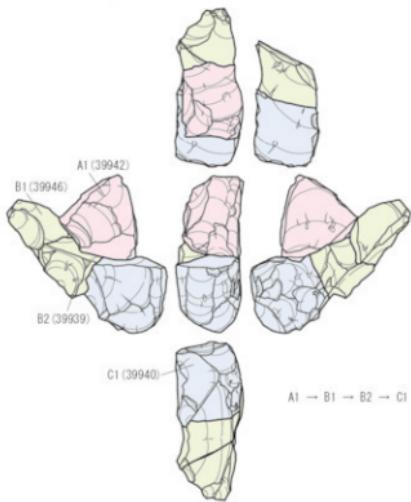
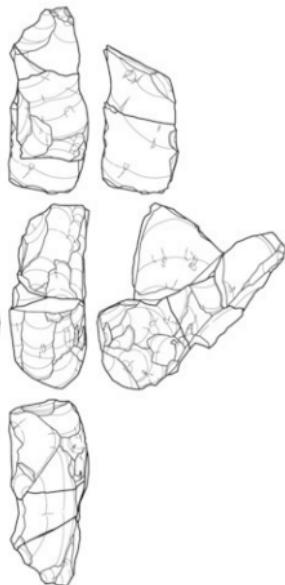
石 C である。調整剥片 2 点はアクシデント剥離により割られているが、一度の剥離によると考えられる。接-69は主要剥離面を左側縁とするプランクの可能性もある。

**接合資料91 (SG168)** 集中部 d 及び e で出土した細石刃核と細石刃の 2 点の接合資料である。石材は黒曜石 C で、左側縁は自然面である。小型の様を素材としたと考えられる。背面には先行する作業面が残存し、下縁側を打面とする。また、その打面調整は側縁側から行われる。その後、打面を上面側に転移し、正面の細石刃剥離を行っている。接合する細石刃は尾部にあたり、細石刃を分割使用したもの一部と考えられる。接-70はⅢ類に分類される。

**接合資料92 (SG029)** 集中部 f で出土したプランクと剥片 6 点の計 7 点の接合資料である。石材は頁岩 G であ



接合資料 96



0 (1:1) 3cm

第184図 エリア7 接合資料出土状況⑩・接合資料⑪

る。接合資料の右側縁が主要剥離面で、接-71では左側縁に相当する。剥片B2及びC1には細石刃剥離痕が認められ、剥離順からB2が先行することが分かる。接-71は打面B～Eからの剥離によってプランクへと加工される。なお、先行する細石刃剥離の打面は、接-71の打面と同一である。

**接合資料93 (SG041)** 集中部 f 及び隣接部で出土した細石刃、打面再生剥片、下縁調整剥片、及び細石刃核の計4点の接合資料である。石材は頁岩Aである。右側縁及び下縁に自然面が残る。打面再生剥離が行われる前の先行する細石刃剥離面からは、3cmを超える細石刃が剥出されている。しかし、接合した細石刃の剥出の際に階段状剥離が生じており、それが要因で打面再生を行つたと考えられる。接-72には下縁調整も加えられ、作業面は最初の作業面の背面側にあたる。作業面再生後に剥出された細石刃は2cm弱である。接-72はIa類に分類され、集中部からやや離れて出土している。

**接合資料94 (SG040)** 集中部 f で出土したプランクと調整剥片2点の計3点の接合資料である。石材は頁岩Aである。調整剥離は平坦な剥離面を利用した打面から側縁部に2枚連続で加えられ、接-73は船底形に整形される。IIb類細石刃核のプランクと考えられる。

**接合資料95 (SG166)** 集中部 a とエリア内で出土した細石刃核と剥片の計2点の接合資料である。石材はチャートである。両側縁は節理面で剥離している。接-74に接合する剥片の打面は、接-74の打面とは段差が大きい。そのため、細石刃核の素材となる石核製作に伴つて剥出された剥片と考えられる。接-74の打面調整は主要剥離面である右側縁から連続して行われることから、III類に分類される。

**接合資料96 (SG090)** 集中部 b に隣接して出土した細石刃核、プランク、調整剥片2点の計4点の接合資料である。石材は黒曜石Bである。接合資料の右側縁が素材剥片の主要剥離面であり、接-75の右側縁と接-76の左側縁にあたる。主要剥離面からの打撃による剥離面が両者の打面となっている。接-75の背面には2点の剥片が接合しており、本来は船底形の石核であった可能性も考えられる。接-75は打面が平坦であり、IIb類に分類される。接-76は横位からの打面調整が行われる点で、III類的な特徴を持つプランクである。

#### [集中部 a]

8点を図化した。749は細石刃核である。右側縁に先行する作業面が残存する。打面は平坦であり、正面は打面からの剥離によって平坦に仕上げられている。IIb類に分類される。750・751はプランクである。750は下縁に自然面が残り、左側縁側からの連続した下縁調整が加えられる。打面及び左側縁は剥離面である。751は正面及び下縁に自然面を広く残し、素材分割面である平坦な打面から側縁調整が加えられる。実測後、打面に1点、

左側縁に3点、下縁に1点の計5点の剥片が接合した。

752～756は細石刃である。752は頭部～中間部、753・754は頭部で752は尾部を欠損するのみでほぼ完形である。755・756は中間部である。なお、756は実測後、背面側に作業面調整剥片2点が接合した。

#### [集中部 b]

21点を図化した。757は厚みのある剥片を素材とする小型の石核である。758は平坦な剥離面を打面とし、側縁調整を加えたプランクである。

759～773は細石刃である。759～769は頭部または頭部～中間部、770～772は中間部、773は尾部である。頁岩と黒曜石を素材としたものが大半である。また、759～764のように、頁岩素材のものは細石刃の幅が均質である。774は調整剥片と考えられるが、表面とも複数方向から的小剥離が観察され、細石刃剥離に伴う残核の可能性もある。775は表面とも下縁部からの加工痕がみられ、上面の打点部は潰れたような形状である。楔形石器の可能性もある。776・777は剥片で、776の背面及び側縁は自然面である。776は作業面の作出に伴う剥片、777は石核調整剥片と考えられる。

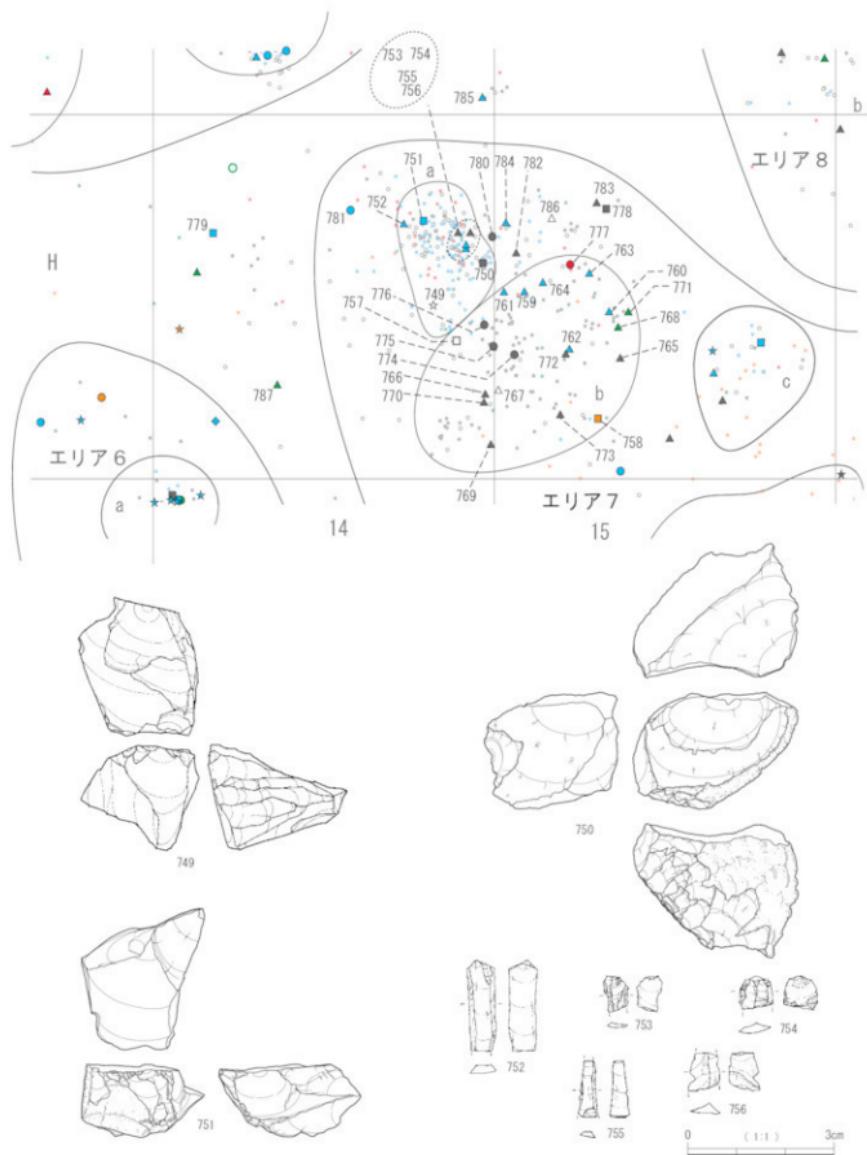
#### [エリア内及びエリア周辺出土遺物]

集中部 a・b 周辺のエリア内、及びエリアに隣接して出土した10点を図化した。778・779はプランクである。778は左側縁にわずかに自然面を残し、平坦な打面から正面及び背面に剥離が加えられる。779は剥片を素材とし、自然面を左側縁、剥離面を右側縁とする。打面は平坦な分割面を利用していている。左側縁には正面からの調整剥離が加えられる。

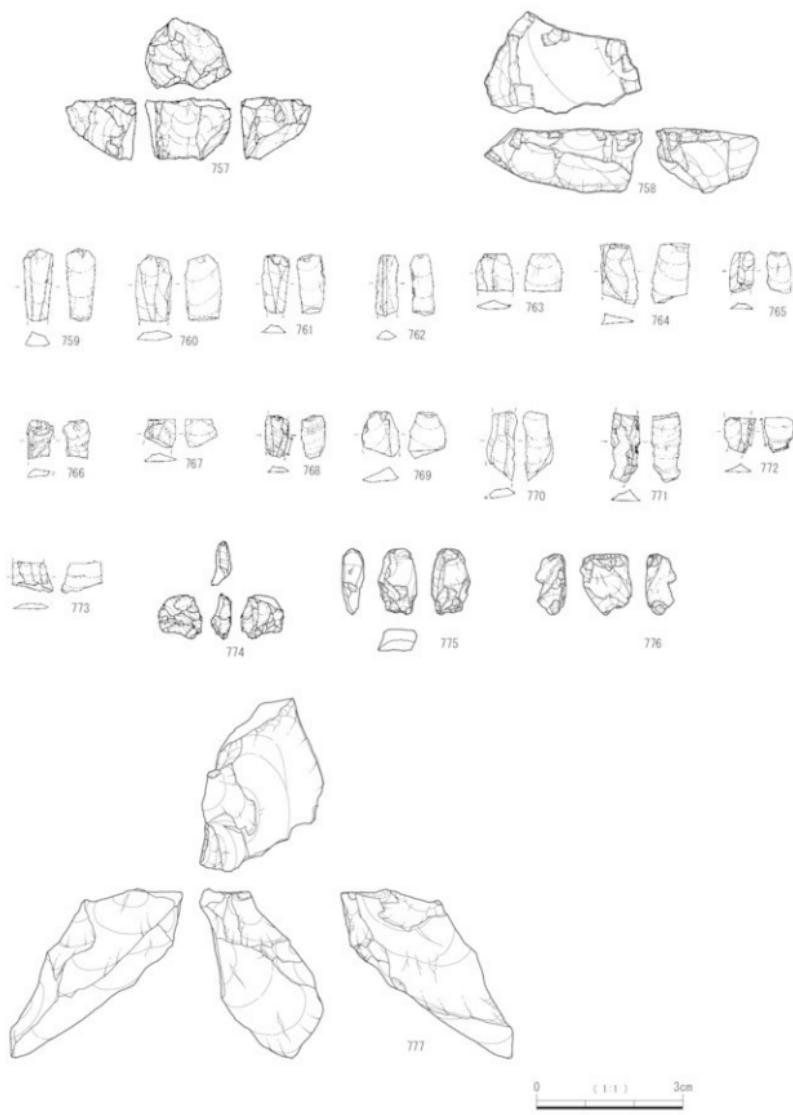
780・781は剥片である。780は加工痕のある剥片で、両側縁に小剥離が観察される。781は形状から、作業面の作出に伴う調整剥片と考えられる。782～787は細石刃である。782は完形、783は頭部～中間部、784は頭部、785～787は中間部である。

#### [集中部 c]

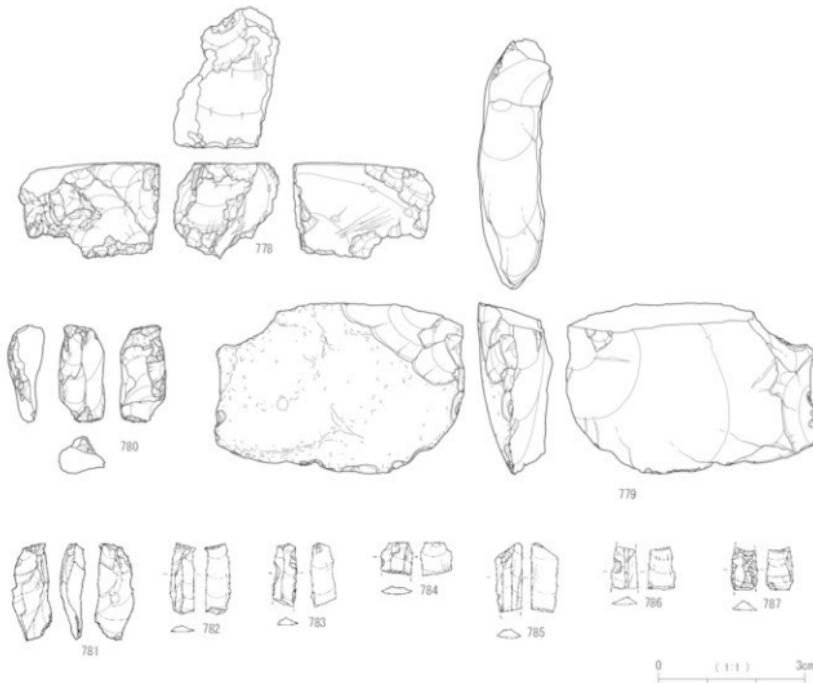
4点を図化した。788・789は細石刃で、いずれも頭部～中間部である。790は細石刃核である。両側縁は自然面であり、扁平で丸みを帯びた穂が素材と推定される。素材穂を分割し、その分割面を打面として2つの細石刃剥離面が残存する。下縁には背面を打面とした先行する作業面が残り、3cmないし細石刃が剥離された後に階段状剥離が生じている。その後、正面に作業面を移して剥離が続けられる。いずれの作業面においても、打面調整は行われていない。IV類に分類される。791は扁平な円盤を背面側から分割し、その分割面を打面して側縁調整を行つたプランクである。IV類に近いが、穂分割の方法が異なり、側縁調整を施す点で II類細石刃核に関連するものと考えられる。



第185図 エリア7遺物出土状況(2)・関連出土遺物(1)



第186図 エリア7関連出土遺物(2)



第187図 エリア7関連出土遺物(3)

**[集中部 d]**

7点を図化した。792～796は細石刃核である。792は厚めの剥片を素材として、平坦な剥離面を打面とする。背面には、右側縁を打面とした先行する作業面が残存する。上面に打面転移した際に、正面から打面調整を加え、細石刃剥離を行っている。I a類に分類される。793は剥離面を両側縁とし、下縁調整を加えて断面を長方形状に整形する。打面調整は正面から行われる。細石刃剥離面は階段状剥離が生じ、その段階で剥離を終了している。

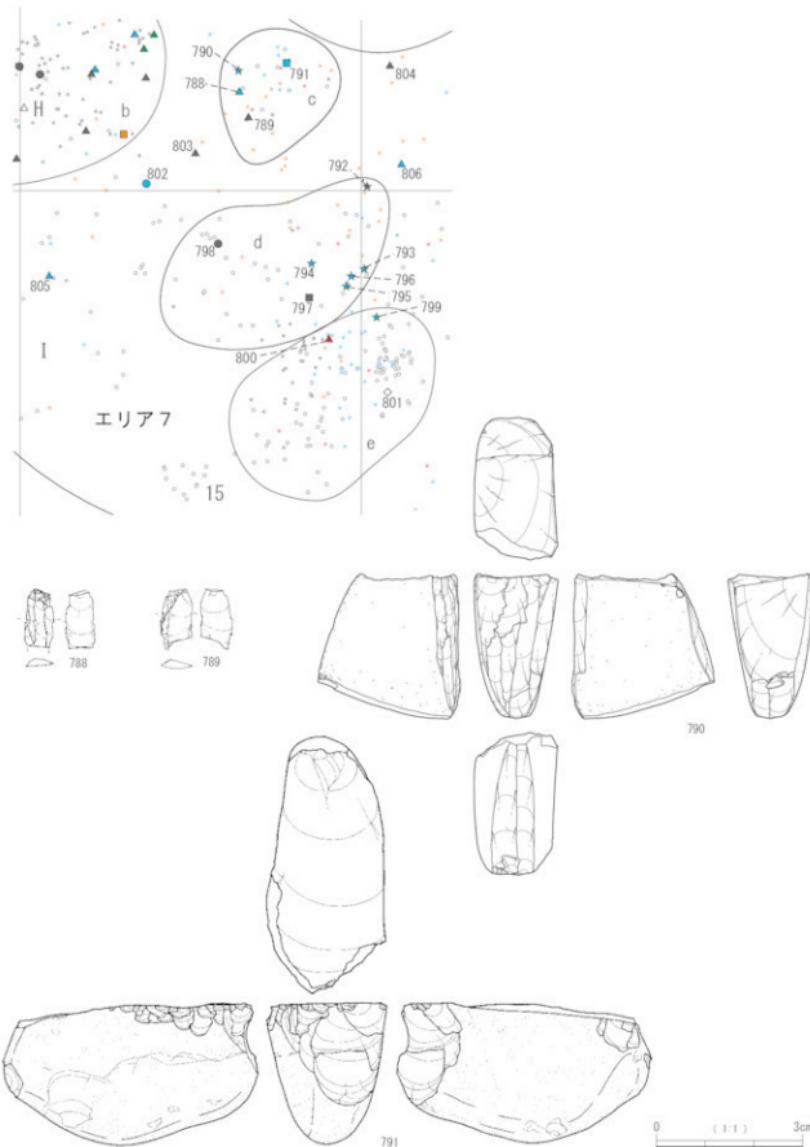
I b類に分類される。794は平坦な節理面を両側縁および打面とし、打面調整は加えていない。作業面には階段状剥離が生じている。II b類に分類される。795は素材剥片の剥離面を両側縁とし、下縁調整を加えて楔形に近く幅が細い細石刃核に仕上げている。打面調整は左側縁から行われる。背面には先行する剥離面が残存し、打面に横位からの小剥離が観察される。III類に分類される。796は自然面を左側縁、剥離面を右側縁とする。打面は平坦

で、背面にかけて緩やかに傾斜する。下縁に先行する作業面が残存し、背面が打面となる。先行する作業面の打面調整は横位の剥離を主体とする。その後、打面転移を行った際には正面及び右側縁から打面調整を加えて細石刃剥離を行っている。III類に分類される。

797はブランクである。剥片素材で先行する分割面を打面、剥離面を右側縁とし、左側縁には下縁調整が加えられる。798は使用痕剥片で、両側縁に微細な剥離痕が観察される。

**[集中部 e]**

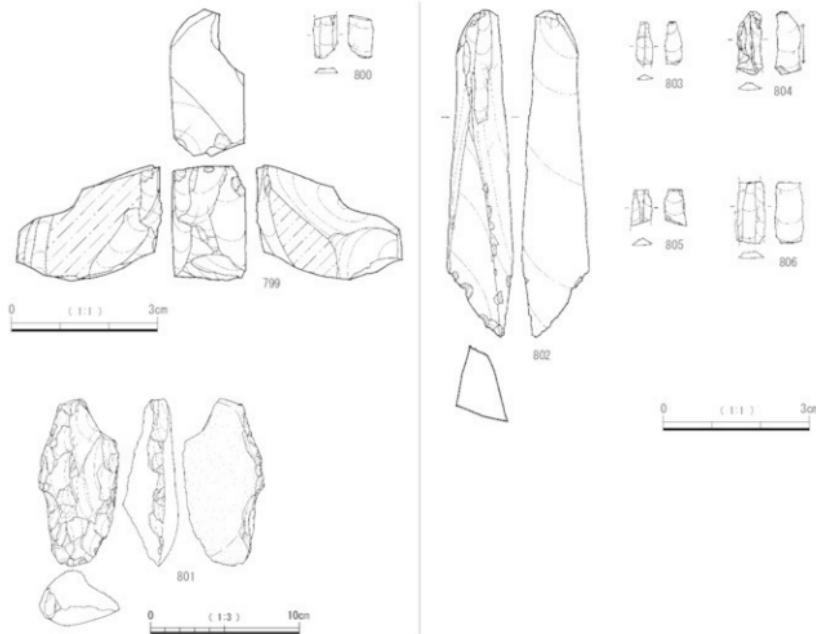
3点を図化した。799は頁岩Fを素材とした細石刃核である。節理面を両側縁に残す。背面には先行する作業面が残り、下縁側を打面としている。正面の細石刃剥離に伴う下縁調整により、先行する作業面は一部しか残存しない。上面は左側縁からの横位の剥離で凹んでいるが、正面側にわずかに残る平坦面を打面として細石刃剥離が行われる。II b類に分類される。



第188図 エリア7遺物出土状況(3)・関連出土遺物(4)



第189図 エリア7関連出土遺物(5)



第190図 エリア7関連出土遺物(6)

800は細石刃の尾部である。801は縫器で、腹面は自然面である。背面は両側縁から剥離が加えられ、斧状を呈する。

**[エリア内及びエリア周辺出土遺物]**

集中部c～e周辺のエリア内、及びエリアに隣接して出土した5点を図化した。802は頁岩Bを素材とする使用痕剥片である。平坦打面から剥出された紙長の剥片の棱部及び下縁に微少剥離がまばらに観察される。また、打面付近の棱上には棒状剥離が加えられる。

803～806は細石刃である。803～805は頭部、806は中間部である。石材は頁岩2点、黒曜石2点である。

**[集中部f]**

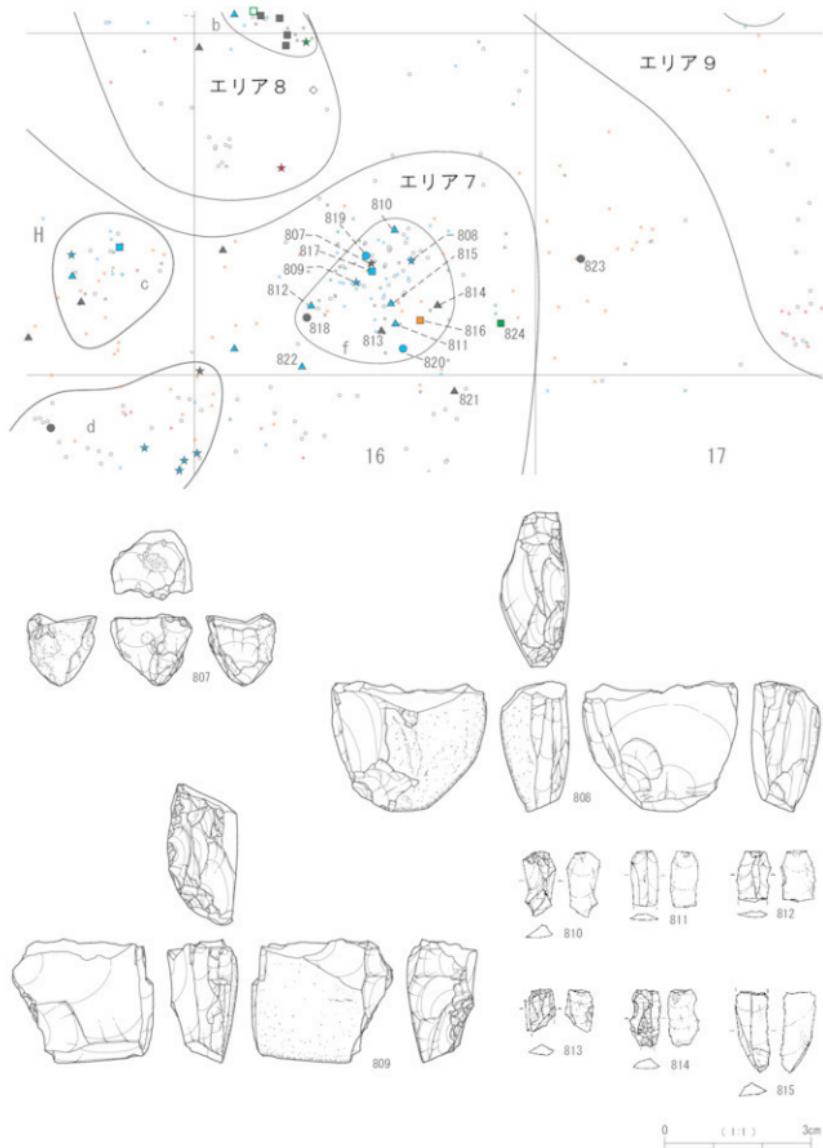
14点を図化した。807～809は細石刃核である。807は左側縁に自然面を残し、剥離面を利用した打面には球状の不純物が露出する。打面は平坦であり、正面からの打面調整が行われる。Ia類に分類される。808・809は自然面及び剥離面を側縁とし、打面調整が側縁から行われる。808は打面と下縁が素材の分割面にあたり、背面に

は同一打面からの先行する作業面が残存する。809は下縁が分割面であり、背面には左側縁からの剥離が加えられる。いずれもIII類に分類される。810～815は細石刃である。810は完形、811～814は頭部～中間部、815は中間部～尾部である。

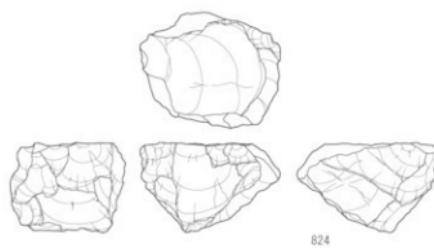
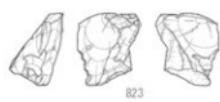
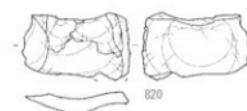
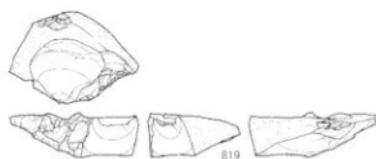
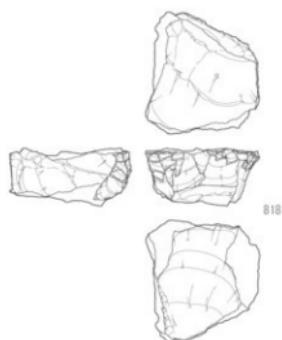
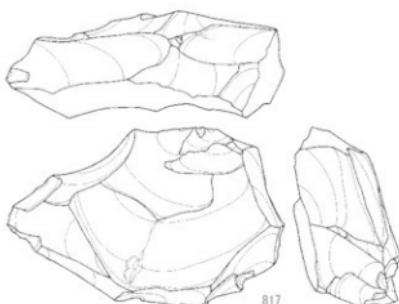
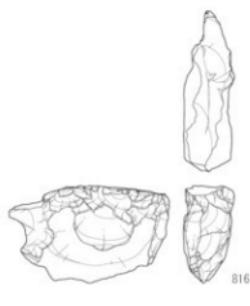
816・817はプランクである。816は平坦な打面から側縁調整が行われており、II類細石刃核のプランクと考えられる。817は実測後に正面に4点、右側縁に1点、上面に1点の剥片が接合した。818・819は打面再生剥片である。818は実測後、背面と下面に剥片が接合した。820は平坦打面から剥出された調整剥片と考えられる。

**[エリア内及びエリア周辺出土遺物]**

集中部f周辺のエリア内、及びエリアに隣接して出土した4点を図化した。821・822は細石刃で、いずれも中間部である。823は上下縁及び左側縁に自然面を残す調整剥片と考えられる。824はプランクであり、平坦打面から側縁調整が行われる。



第191図 エリア7遺物出土状況[4]・関連出土遺物[7]



0 ( 1 : 1 ) 3cm

第 192 図 エリア 7 関連出土遺物(8)



公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（19）  
東九州自動車道建設（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 天神段遺跡4

（旧石器時代～縄文時代草創期編 第1分冊）

発行年月 2018年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷所 有限会社 国分新生社印刷

〒 899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 620-1

TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

